

FUJITSU Software

Systemwalker Desktop Keeper

導入ガイド

Windows

B1WD-3253-12Z0(00)
2020年2月

まえがき

本書の目的

本書は、以下の製品を導入するために必要な設定方法について説明しています。

- Systemwalker Desktop Keeper V15.3.1

本書の読者

本書は、Systemwalker Desktop Keeperを使用して情報漏洩対策システムを構築/運用する方を対象に書かれています。また、本書を読むためには、以下の知識が必要です。

- パーソナルコンピュータに関する一般的な知識
- Microsoft Windowsに関する一般的な知識
- インターネットに関する一般的な知識
- Microsoft SQL Serverに関する一般的な知識(V12から移行を行う場合)
- VMware Viewに関する一般的な知識(VMware View環境にクライアント(CT)を導入する場合)
- Citrix XenDesktopに関する一般的な知識(Citrix XenDesktop環境にクライアント(CT)を導入する場合)
- Citrix XenAppに関する一般的な知識(Citrix XenApp監視機能を使用する場合)
- Google Androidに関する一般的な知識(スマートデバイス(エージェント)(Android)を導入する場合)
- iOSに関する一般的な知識(スマートデバイス(エージェント)(iOS)を導入する場合)

本書の構成

本書の構成は、以下のとおりです。

第1章 設計

Systemwalker Desktop Keeperの設計に必要な運用形態について説明します。

第2章 導入

Systemwalker Desktop Keeperの導入手順について説明します。

第3章 保守

Systemwalker Desktop Keeperの保守について説明します。

第4章 バージョンアップ

Systemwalker Desktop Keeperの旧版からSystemwalker Desktop Keeper V15.1.0以降にバージョンアップする方法について説明します。

第5章 アンインストール

Systemwalker Desktop Keeperのアンインストールについて説明します。

付録A サーバのサイレントインストール

Systemwalker Desktop Keeperのサーバのサイレントインストールで利用するファイル、コマンドおよびメッセージについて説明します。

本書の位置づけ

Systemwalker Desktop Keeperのマニュアルにおける本書の位置づけは、以下のとおりです。

マニュアル名称	内容
リリース情報	Systemwalker Desktop Keeperの追加機能および非互換情報について説明します。
解説書	Systemwalker Desktop Keeperの概要および動作環境について説明します。

マニュアル名称	内容
導入ガイド(本書)	Systemwalker Desktop Keeperの導入設定および保守/管理方法について説明します。
運用ガイド 管理者編	Systemwalker Desktop Keeperの運用方法について説明します。
運用ガイド クライアント編(注)	Systemwalker Desktop Keeperの持出しユーティリティの機能概要や操作方法について説明します。
リファレンスマニュアル	Systemwalker Desktop Keeperで使用するコマンド、ファイル、メッセージ、およびポート番号について説明します。
一元管理ガイド	日本国内および海外の拠点に展開しているSystemwalker Desktop Keeperを一元管理する方法について説明します。
トラブルシューティングガイド	Systemwalker Desktop Keeperで想定される異常事象に対する、原因と対処方法を説明します。

注) 運用ガイド クライアント編は、持出しユーティリティのヘルプから参照できます。

ソフトウェア技術情報ホームページでは、最新のマニュアルを公開しています。
最初に、ソフトウェア技術情報ホームページを参照することをお勧めします。

ソフトウェア技術情報 URL :

<https://www.fujitsu.com/jp/products/software/resources/technical/>

Systemwalker Desktop Keeper 技術情報 URL :

<https://www.fujitsu.com/jp/products/software/resources/technical/systemwalker/desktopkeeper/>

本書の表記について

本書では、説明のために、以下に示す名称、記号および略称を使用しています。

コマンドで使用する記号について

コマンドで使用している記号について以下に説明します。

記号の意味

記号	意味
[]	この記号で囲まれた項目を省略できることを示します。
	この記号を区切りとして並べられた項目の中から、どれか1つを選択することを示します。

略称について

本書では、以下のように製品表示名を略して表記しています。

製品表示名	略称
Systemwalker Desktop Keeper Base Edition V12.0L10	BEV12.0L10
Systemwalker Desktop Keeper Base Edition V12.0L20	BEV12.0L20
Systemwalker Desktop Keeper Base Edition V13.0.0	BEV13.0.0
Systemwalker Desktop Keeper Base Edition V13.2.0	BEV13.2.0
Systemwalker Desktop Keeper Base Edition V13.3.0	BEV13.3.0
Systemwalker Desktop Keeper Standard Edition V12.0L20	SEV12.0L20
Systemwalker Desktop Keeper Standard Edition V13.0.0	SEV13.0.0
Systemwalker Desktop Keeper Standard Edition V13.2.0 Systemwalker Desktop Keeper Standard Edition V13.2.1	SEV13.2.0

製品表示名	略称
Systemwalker Desktop Keeper Standard Edition V13.3.0	SEV13.3.0
Systemwalker Desktop Keeper V14g (14.0.0)	V14.0.0
Systemwalker Desktop Keeper V14g (14.0.1)	V14.0.1
Systemwalker Desktop Keeper V14g (14.1.0)	V14.1.0
Systemwalker Desktop Keeper V14g (14.2.0)	V14.2.0
Systemwalker Desktop Keeper V14g (14.3.0) Systemwalker Desktop Keeper V14g (14.3.1)	V14.3.0
Systemwalker Desktop Keeper V15.0.0 Systemwalker Desktop Keeper V15.0.1	V15.0.0
Systemwalker Desktop Keeper V15.1.0 Systemwalker Desktop Keeper V15.1.1 Systemwalker Desktop Keeper V15.1.2 Systemwalker Desktop Keeper V15.1.3	V15.1.0
Systemwalker Desktop Keeper V15.2.0	V15.2.0
Systemwalker Desktop Keeper V15.3.0 Systemwalker Desktop Keeper V15.3.1	V15.3.0
Windows® Internet Explorer® 9 Windows® Internet Explorer® 10 Windows® Internet Explorer® 11	Internet Explorer
Sense YOU Technology Biz	SYTBiz

本書では、以下のようにオペレーティングシステム名を略して表記しています。

オペレーティングシステム名	略称
Microsoft® Windows Server® 2019 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2019 Standard Microsoft® Windows Server® 2019 Essentials	Windows Server 2019
Microsoft® Windows Server® 2016 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2016 Standard Microsoft® Windows Server® 2016 Essentials	Windows Server 2016
Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Foundation Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Standard Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Essentials	Windows Server 2012 R2
Microsoft® Windows Server® 2012 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2012 Foundation Microsoft® Windows Server® 2012 Standard Microsoft® Windows Server® 2012 Essentials Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Foundation Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Standard Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Essentials	Windows Server 2012
Microsoft® Windows Server® 2008 Foundation Microsoft® Windows Server® 2008 Standard Microsoft® Windows Server® 2008 Enterprise Microsoft® Windows Server® 2008 Standard without Hyper-V™ Microsoft® Windows Server® 2008 Enterprise without Hyper-V™ Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Foundation Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Standard	Windows Server 2008(注)

オペレーティングシステム名	略称
Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Enterprise Microsoft® Windows® Small Business Server 2011 Essentials	
Windows® 10 Home Windows® 10 Pro Windows® 10 Enterprise Windows® 10 Education	Windows 10 (注)
Windows® 8.1 Enterprise Windows® 8.1 Pro Windows® 8.1	Windows 8.1(注)
Windows® 7 Ultimate Windows® 7 Enterprise Windows® 7 Professional Windows® 7 Home Premium	Windows 7(注)
Microsoft® Windows Server® 2019 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2019 Standard Microsoft® Windows Server® 2019 Essentials Microsoft® Windows Server® 2016 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2016 Standard Microsoft® Windows Server® 2016 Essentials Microsoft® Windows Server® 2012 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2012 Foundation Microsoft® Windows Server® 2012 Standard Microsoft® Windows Server® 2012 Essentials Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Foundation Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Standard Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Essentials Microsoft® Windows Server® 2008 Foundation Microsoft® Windows Server® 2008 Standard Microsoft® Windows Server® 2008 Enterprise Microsoft® Windows Server® 2008 Standard without Hyper-V™ Microsoft® Windows Server® 2008 Enterprise without Hyper-V™ Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Foundation Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Standard Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Enterprise Microsoft® Windows® Small Business Server 2011 Essentials Windows® 7 Ultimate Windows® 7 Enterprise Windows® 7 Professional Windows® 7 Home Premium Windows® 8.1 Enterprise Windows® 8.1 Pro Windows® 8.1 Windows® 10 Home Windows® 10 Pro Windows® 10 Enterprise Windows® 10 Education	Windows
Android™ 4.4 ~ Android™ 10.0	Android
iOS 7.0 ~ iOS 13.2	iOS

注) コマンドやファイルの格納場所など、特に64ビット版の場合を区別して記述する場合は、略称として以下のように表記します。

- Windows Server 2008 64ビット版
- Windows Server 2008 R2

- Windows 7 64ビット版
- Windows 8.1 64ビット版
- Windows 10 64ビット版

輸出管理規制について

本ドキュメントを輸出または第三者へ提供する場合は、お客様が居住する国および米国輸出管理関連法規等の規制をご確認のうえ、必要な手続きをおとりください。

商標について

Microsoft、Windows、Windows NT、Windows Vista、およびWindows Serverまたはその他のマイクロソフト製品の名称および製品名は、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Citrix、Xen、Citrix XenApp、Citrix XenServer、Citrix XenDesktopおよびCitrix Presentation Serverは、Citrix Systems, Inc.の米国またはその他の国における登録商標または商標です。

VMwareは、VMware, Inc.の米国及びその他の国における登録商標または商標です。

Android、Google、Google Chrome、Google DriveおよびGmailは、Google Inc.の商標または登録商標です。

Bluetoothは、Bluetooth SIGの登録商標で、富士通へライセンスされています。

Wi-FiおよびWi-Fiロゴは、Wi-Fi Allianceの登録商標です。

IOSの商標は、Ciscoの米国およびその他の国のライセンスに基づき使用されています。

Apple、Appleのロゴ、Mac OSは、米国および他の国々で登録されたApple Inc.の商標です。

Mozilla、Firefoxは、米国Mozilla Foundationの米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Dropboxは、Dropbox, Inc.の商標または登録商標です。

iNetSecは、PFUの登録商標です。

その他の製品名は、各社の商標または登録商標です。

Microsoft Corporationのガイドラインに従って画面写真を使用しています。

2020年 2月

改版履歴
2013年 8月 初版
2013年11月 第2版
2014年 2月 第3版
2014年 3月 第4版
2014年 5月 第5版
2015年 2月 第6版
2015年11月 第7版
2016年 7月 第8版
2017年 2月 第9版
2017年12月 第10版
2018年12月 第11版
2020年 2月 第12版

Copyright 2005 - 2020 FUJITSU LIMITED

目次

第1章 設計	1
1.1 導入に関する留意事項	1
1.2 運用形態を決定する	6
1.2.1 システム構成を決定する	6
1.2.1.1 管理サーバの設置基準を決定する	6
1.2.1.2 統合管理サーバの設置基準、管理サーバの増設基準	7
1.2.1.3 ログアナライザサーバの設置基準	8
1.2.1.4 中継サーバの設置基準	10
1.2.2 管理者の構成を決定する	12
1.2.3 構成情報の作成方法を決定する	19
1.2.3.1 Active Directoryと連携する	22
1.2.3.2 Systemwalker Desktop Patrolと連携する	25
1.2.3.3 管理コンソール画面で入力する	26
1.2.4 ユーザーポリシー管理方法を決定する	26
1.2.5 クライアント(CT)導入方法を決定する	28
1.2.6 スマートデバイス(エージェント)の導入方法を決定する	30
1.2.7 ログの運用方法を決定する	31
1.2.8 ログアナライザの分析条件を決定する	34
1.2.9 状況画面の集計条件を決定する	34
1.2.10 ポート番号を確認する	35
第2章 導入	36
2.1 導入手順	36
2.2 事前準備	38
2.3 管理サーバ/統合管理サーバを構築する	39
2.3.1 IISのインストールと設定	39
2.3.2 管理サーバ/統合管理サーバをインストールする	43
2.3.2.1 インストール前の確認事項	43
2.3.2.2 ウィザード形式でインストールする	44
2.3.2.3 サイレントインストールを実施する	46
2.3.3 IISの設定	47
2.3.4 管理サーバ/統合管理サーバの環境を設定する	47
2.3.4.1 サーバ環境設定手順	50
2.3.4.2 セキュア通信のための設定を行う	52
2.3.4.2.1 証明書を設定する	52
2.3.4.2.2 通信方式を設定する	53
2.3.4.3 データベースを構築する	53
2.3.4.4 システム設定を行う	61
2.3.4.5 Active Directory連携の設定を行う	66
2.3.4.6 サーバ情報を設定する	68
2.3.4.7 他システムとの連携を設定する	70
2.3.4.8 管理者情報を設定する	72
2.3.4.9 管理者情報を出力する	77
2.3.4.10 管理者通知を設定する	78
2.3.4.11 保存先フォルダを設定する	91
2.4 管理コンソールをインストールする	94
2.5 Webブラウザを使用するPCでの準備	96
2.6 クライアント(CT)をインストールする	97
2.6.1 単体インストール	98
2.6.1.1 ウィザード形式でインストールする	98
2.6.1.2 サイレントインストールを実施する	104
2.6.2 マスタPC/仮想マスタPCを使用した導入	111
2.6.3 Systemwalker Desktop Patrolを使用した導入	112
2.6.4 Active Directoryのグループポリシーを使用した導入	113
2.6.4.1 インストール設定ファイルの作成	113

2.6.4.2 インストールスクリプトの編集.....	114
2.6.4.3 グループポリシーの登録.....	114
2.6.4.4 インストール結果の確認.....	115
2.6.4.5 グループポリシーの解除.....	115
2.6.5 インターネット経由で管理サーバ/統合管理サーバに接続するクライアント(CT)をインストールする.....	116
2.7 Citrix XenApp監視機能をインストールする.....	117
2.7.1 インストール前の確認事項.....	118
2.7.2 ウィザード形式でインストールする.....	118
2.7.3 サイレントインストールを実施する.....	120
2.8 ログアナライザサーバを構築する.....	121
2.8.1 ログアナライザサーバをインストールする.....	121
2.8.1.1 インストール前の確認事項.....	121
2.8.1.2 ウィザード形式でインストールする.....	122
2.8.1.3 サイレントインストールを実施する.....	124
2.8.2 データベースを構築する.....	124
2.8.3 ログアナライザサーバの環境を設定する.....	127
2.8.3.1 管理サーバ/統合管理サーバ上で、ログアナライザ環境を設定する.....	128
2.8.3.2 ログアナライザサーバ上で、ログアナライザ環境を設定する.....	132
2.9 レポート出力の環境を構築する.....	133
2.9.1 レポート出力ツールをインストールする.....	133
2.9.2 レポート出力の環境を設定する.....	135
2.10 中継サーバ環境を構築する.....	138
2.10.1 データベースの公開設定を行う(統合管理サーバ/管理サーバ).....	138
2.10.2 中継サーバをインストールする.....	139
2.10.2.1 ウィザード形式でインストールする.....	139
2.10.2.2 サイレントインストールを実施する.....	140
2.10.3 中継サーバの動作環境を設定する.....	140
2.10.3.1 スマートデバイス/PCの情報を設定する.....	140
2.10.3.2 HTTPS通信を設定する.....	143
2.11 スマートデバイス(エージェント)(Android)をインストールする.....	145
2.11.1 スマートデバイス(エージェント)(Android)のインストール.....	145
2.11.2 中継サーバとの同期用URLの設定.....	149
2.12 スマートデバイス(エージェント)(iOS)をインストールする.....	156
2.12.1 スマートデバイス(エージェント)(iOS)のインストール.....	156
第3章 保守.....	159
3.1 管理サーバ/統合管理サーバの保守.....	159
3.1.1 資産の退避対象および退避方法.....	159
3.1.1.1 製品資産.....	160
3.1.1.2 ユーザー資産.....	162
3.1.2 ユーザー資産を退避する.....	166
3.1.2.1 バックアップツール(GUI)を利用する.....	167
3.1.2.2 バックアップ・削除を自動化する.....	177
3.1.2.3 バックアップコマンドを利用する.....	182
3.1.3 ユーザー資産を復元する.....	190
3.1.3.1 リストアツールを利用する.....	191
3.2 中継サーバの保守.....	198
3.2.1 資産の退避方法.....	198
3.2.2 資産の復元方法.....	198
3.3 ログアナライザサーバの保守.....	198
3.3.1 概要および退避対象資産.....	199
3.3.2 資産を退避する.....	200
3.3.2.1 バックアップコマンドを使用する.....	200
3.3.3 資産を復元する.....	201
3.3.3.1 リストア手順.....	201
3.3.3.2 リストアコマンドを使用する.....	203
第4章 バージョンアップ.....	204

4.1 異なるバージョン間の注意事項	204
4.2 バージョンアップの流れ	210
4.2.1 管理サーバ/統合管理サーバを同一サーバでバージョンアップする	210
4.2.2 管理サーバ/統合管理サーバを別サーバでバージョンアップする	214
4.3 管理サーバ/統合管理サーバをバージョンアップする	215
4.3.1 同一サーバ上でバージョンアップする	215
4.3.2 別サーバ上でバージョンアップする	223
4.4 管理コンソールをバージョンアップする	224
4.5 ログビューアをアンインストールする	225
4.6 端末初期設定・端末動作設定を行う	225
4.7 クライアント(CT)をバージョンアップする	226
4.7.1 ウィザード形式でバージョンアップする	227
4.7.2 サイレントバージョンアップを実施する	229
4.7.3 自己版数管理機能を使用してバージョンアップする	229
4.8 Citrix XenApp監視機能をバージョンアップする	235
4.9 Systemwalker Desktop Log Analyzerから移行する	235
4.9.1 Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバからログアナライザサーバに移行する	235
4.9.2 レポート出力ツールを移行する	236
4.10 中継サーバをバージョンアップする	236
4.10.1 V15.0.0A以前のバージョンからのバージョンアップ	237
4.10.1.1 スマートデバイスの情報を設定する	237
4.10.1.2 HTTPS通信を設定する	238
4.10.2 V15.0.0B以降のバージョンからのバージョンアップ	239
4.11 スマートデバイス(エージェント)をバージョンアップする	239
第5章 アンインストール	241
5.1 アンインストールの手順	241
5.2 クライアント(CT)をアンインストールする	242
5.2.1 ウィザード形式でアンインストールする	242
5.2.2 サイレントアンインストールを実施する	243
5.3 スマートデバイス(エージェント)(Andriod)をアンインストールする	244
5.4 スマートデバイス(エージェント)(iOS)をアンインストールする	247
5.5 Citrix XenApp監視機能をアンインストールする	247
5.6 管理コンソールをアンインストールする	248
5.7 ログアナライザサーバをアンインストールする	248
5.8 中継サーバをアンインストールする	250
5.9 管理サーバ/統合管理サーバをアンインストールする	251
5.9.1 管理サーバ/統合管理サーバのデータベースの削除	251
5.9.2 管理サーバ/統合管理サーバのアンインストール	253
5.10 レポート出力ツールをアンインストールする	253
付録A サーバのサイレントインストール	255
A.1 管理サーバ/統合管理サーバのサイレントインストール	255
A.1.1 インストールパラメーターCSVファイル	255
A.1.2 パラメーター設定コマンド	256
A.1.3 パラメーター設定コマンドの出力メッセージ	257
A.1.4 サイレントインストール用スクリプト	259
A.1.5 サイレントインストール用スクリプトの出力メッセージ	259
A.2 Citrix XenApp監視機能のサイレントインストール	260
A.2.1 インストールパラメーターCSVファイル	260
A.2.2 パラメーター設定コマンド	263
A.2.3 パラメーター設定コマンドの出力メッセージ	263
A.2.4 サイレントインストール用スクリプト	265
A.2.5 サイレントインストール用スクリプトの出力メッセージ	266
A.3 ログアナライザサーバのサイレントインストール	266
A.3.1 インストールパラメーターCSVファイル	267
A.3.2 パラメーター設定コマンド	268
A.3.3 パラメーター設定コマンドの出力メッセージ	269

A.3.4 サイレントインストール用スクリプト.....	271
A.3.5 サイレントインストール用スクリプトの出力メッセージ.....	272
A.4 中継サーバのサイレントインストール.....	273
A.4.1 インストールパラメーターCSVファイル.....	273
A.4.2 パラメーター設定コマンド.....	274
A.4.3 パラメーター設定コマンドの出力メッセージ.....	274
A.4.4 サイレントインストール用スクリプト.....	276
A.4.5 サイレントインストール用スクリプトの出力メッセージ.....	276

第1章 設計

本章では、Systemwalker Desktop Keeperの設計について説明します。

1.1 導入に関する留意事項

Systemwalker Desktop Keeperを導入する場合の留意事項を示します。

なお、各機能に関する留意事項は“運用ガイド 管理者編”の“機能に関する留意事項”を参照してください。

ネットワーク環境

- 以下のプロトコルで通信可能であることが条件です。
 - [管理サーバ/統合管理サーバ]–[管理サーバ/統合管理サーバ]間:HTTP
 - [管理サーバ/統合管理サーバ]–[管理コンソール]間:HTTP
 - [管理サーバ/統合管理サーバ]–[クライアント(CT)]間:TCP/IPソケット通信
 - [管理サーバ/統合管理サーバ]–[ログアナライザサーバ]間:TCP/IPソケット通信
 - [管理サーバ/統合管理サーバ]–[Webコンソール]間:HTTP
通信はHTTPSで行うことを推奨します。
 - [ログアナライザサーバ]–[レポート出力ツール]間:TCP/IPソケット通信
- 管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間、または、管理サーバ/統合管理サーバと管理サーバ/統合管理サーバ間で、ファイアーウォールなどで通信パケットが制限される場合、クライアント(CT)から通信が可能な位置にサーバを配置する必要があります。この場合、通信が可能なドメインの範囲での閉じられた運用となり、独立し連携しないシステムが複数個稼働します。
- 管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間の通信は暗号化されます。
このため、V14.3.1以前の通信暗号化の修正を適用していないクライアント(CT)との通信など、暗号化されていない通信については制限されます。
 - V13.3.0～V14.3.1のクライアントは、2014年9月以降の緊急修正を適用するか、V15.1.0以降へのバージョンアップが必要です。
 - V13.2.1以前のクライアントは使用できません。V15.1.0以降へのバージョンアップが必要です。
 - 管理サーバをV15.1.0以降にバージョンアップした後は、新規インストールできるクライアントはV15.0.0以降です。ただし、管理サーバのバージョンより新しいバージョンのクライアントはインストールできません。
- VLANを使用することによってセグメント間で通信が制限される場合も、通信可能な範囲でサーバを設置する運用となるので、Systemwalker Desktop Keeperサーバが複数必要となる場合があります。
- 以下の通信を行う場合、ポート137番～139番、および445番を開ける必要があります。
プリンタサーバ経由の印刷について印刷ログを取得しない場合は、このポートを開放する必要はありません。
 - 統合管理サーバ–管理サーバ間の通信
 - 統合管理サーバ–クライアント(CT)間の通信
 - 管理サーバ–クライアント(CT)間の通信
- サーバとクライアント(CT)間が、NAT(Network Address Translation)で構成されている環境では、以下の通信は行えません。
 - 管理サーバ/統合管理サーバからクライアント(CT)に対するポリシーの即時送信
 - 管理サーバ/統合管理サーバからクライアント(CT)に対するリモート資料採取
 - 管理サーバ/統合管理サーバからクライアント(CT)に対するCTデバッグトレースの設定
 - 管理サーバ/統合管理サーバからクライアント(CT)に対するサービス一覧取得/サービス制御
 - 管理サーバ/統合管理サーバからクライアント(CT)に対するプロセス一覧取得/プロセス制御
 - V15.0以前のクライアント(CT)から管理サーバ/統合管理サーバに対する自己版数管理機能の通信
 - V12.0L20以前のクライアント(CT)から管理サーバ/統合管理サーバに対するクライアント(CT)登録

ー V12.0L20以前のクライアント(CT)から管理サーバ/統合管理サーバに対するポリシー取得要求

- VPN接続で管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)を接続した場合、メール送信ログが採取できないなど、Systemwalker Desktop Keeperの動作に影響を及ぼす可能性があります。このような環境で運用する場合は、事前に動作を確認してください。
- ログアナライザサーバでファイアーウォールを使用する場合、ログアナライザサーバが使用するポートを開ける必要があります。ログアナライザサーバが使用するポート番号は、“リファレンスマニュアル”の“ポート番号とサービス”を参照してください。
- IPv6アドレスが使用可能です。
- IPv6アドレスを利用した環境で、ログアナライザを利用する場合は、ホスト名の名前解決が必須です。
- リンクローカルアドレスは入力しないでください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。
- クライアント(CT)は、管理サーバ/統合管理サーバの名前解決(正引き、逆引き)ができていない必要があります。
- 管理サーバは統合管理サーバの、統合管理サーバは管理サーバの名前解決(正引き、逆引き)ができていない必要があります。
- クライアント(CT)に回線交換式(ダイヤルアップ)のアダプターが存在する場合は管理サーバとの通信を行わないため、利用できません。

仮想環境

- 非永続環境(ユーザがログオンするたびにマスタイメージに戻る環境など)でログ格納フォルダを仮想PC上のディスクに設定している場合、仮想PCをログオフすると、蓄積された操作ログ、禁止ログが破棄されます。このため、ログが破棄されないように以下のいずれかの対策を行ってください。

- ー 仮想化ソフトウェアの設定にて、仮想PC上のログ格納フォルダが破棄されないように設定する。
- ー 仮想化ソフトウェアの設定にて、ログ格納フォルダが破棄されない領域を設定し、ログ格納フォルダをその領域に設定する。

上記の対策が不可能な場合は、以下の運用を行うことで対処して下さい。

- ー クライアント(CT)のログ送信のポリシーを「操作ログ発生時点で即時に送信する(蓄積した操作ログは接続直後に即時に送信する)」と設定する。かつ、
- ー ログオフスクリプト等でログオフ時のWindows終了を2分程度遅延させる。

なお、上記運用はクライアント(CT)のシャットダウン時、ログ格納フォルダに大量のログが蓄積しておらず、管理サーバも正常に稼働していることが前提となります。

- 仮想PCをダークシャットダウンした場合(仮想PCを強制電源断するなど)や、仮想PCが動作している端末をダークシャットダウンした場合(物理PC、ハイパーバイザーを強制電源断するなど)は、操作ログ、禁止ログが蓄積できない可能性があります。仮想PC、物理PCとも、必ず正規の手順でシャットダウンしてください。
- クローンPCについては、管理サーバ上で管理していないため、CTポリシー、ユーザーポリシーを即時で適用することはできません。CTポリシーについては、端末を再起動して適用してください。ユーザーポリシーについては、1度ログオフし、再ログオンしてください。

インストーラ

- UNICODE文字使用時の注意
WindowsへのログオンIDがUNICODE固有文字を含むユーザーIDの場合(※1)、すべてのインストーラはインストール中にエラーが発生してインストールが中断することがあります。
※1:インストール時のユーザーIDに限らず、一度でもUNICODE固有文字を含むユーザーIDでログオンしたことのある端末が該当します。
- Windowsファイアウォールを有効と設定している場合、製品をインストールすると、製品で使用するポート番号をファイアウォールの「例外」として登録してポートを開放します。

管理サーバ/統合管理サーバ

- サーバ設定ツールで指定したIPアドレスが、実際のIPアドレスと違っていた場合には、管理サーバ/統合管理サーバのサービスが起動しません。正しいIPアドレスを指定してください。
- 管理サーバ/統合管理サーバのシステム時間を大きく変更しないでください。変更した場合、管理サーバ/統合管理サーバが正常に動作しなくなることがあります。
システム時間を大きく変更した場合は、管理サーバ/統合管理サーバを再起動してください。

- サーバ設定ツールでのログオン情報、およびActive Directory連携実行情報がイベントログ(アプリケーション)に出力されます。
- Systemwalker Desktop KeeperをV14.3.0以前からバージョンアップした場合、Webコンソールは32ビットのアプリケーションとして提供されています。管理サーバ/統合管理サーバインストール時には、32ビットのワーカープロセスを作成するようにIISを自動設定しているため、IISで64ビットアプリケーションを利用できなくなります。
- 64ビットOSに、V15.0.0以降を新規インストールした場合のWebコンソールは64ビットのアプリケーションとして提供されるため、IISでも64ビットアプリケーションを利用できます。
- クライアント(CT)をインターネット経由で管理サーバ/統合管理サーバにアクセスさせる場合は、管理サーバ/統合管理サーバにて、セキュア通信のための設定を行ってください。
- クライアント(CT)がプロキシサーバ経由でインターネットにアクセスする環境において、クライアント(CT)をインターネット経由で管理サーバ/統合管理サーバにアクセスさせる場合、管理サーバ/統合管理サーバにて、CT動作パラメーター情報ファイルを使用してプロキシサーバの設定を行ってください。詳細は“リファレンスマニュアル”の“CT動作パラメーター情報ファイル”を参照してください。

ログアナライザサーバ

- 集計の結果、対象の件数分のログデータ量が2GBを超えた場合や、空きディスク容量が不足した場合には、集計処理や結果表示または、レポート出力が正常に動作しない、またはエラーとなることがあります。
- 文字データについて
ログアナライザサーバで設定する文字列(インストールパスやフォルダパス、ユーザーID/パスワードなど)に、Shift JIS以外の文字(JIS2004を含めて、Shift JISに対応コードを持たないUNICODE文字など)は使用できません。また、ログアナライザユーザー(WindowsにログオンするWindowsアカウント)にも、Shift JIS以外の文字は使用できません。
Shift JIS以外の文字を使用した場合には、他の文字に変換される、またはエラーが発生するなど、正常に動作しません。
ただし、ログアナライザ(Webコンソール)における[目的別集計]画面の[キーワード]欄と[設定管理]画面の[絞込条件設定]の[キーワード]については、JIS2004を含むUNICODE文字を使用できます。

中継サーバ

- スマートデバイス(エージェント)に適用可能なポリシーはCTポリシーのみとなります。ユーザーポリシーは適用できません。
- スマートデバイス(エージェント)と中継サーバ間では、スマートデバイス(エージェント)を操作していない場合でも、データ通信が定期的には発生します(ポリシーの送信と受信および操作ログ送信を定期的に行っています)。スマートデバイス(エージェント)のデータ通信は、定額型の料金プランを推奨します。
- 中継サーバを再導入した場合、データベースへの接続情報が初期化されます。中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)を利用して、データベースへの接続情報を再設定してください。コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“SDSVSetMS.EXE(中継サーバの設定変更)”を参照してください。

管理コンソール

- 3階層のシステム構成において、管理サーバ/統合管理サーバそれぞれに管理コンソールを設置できます。複数の管理コンソールからポリシーの設定がされた場合、最後に設定したポリシーがクライアント(CT)に反映されます。

Citrix XenApp監視機能

- Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバとCitrix XenApp Serverは、別サーバに構築してください。
- Citrix XenApp Serverのアカウント管理は、Active Directoryで行ってください。
- Citrix XenApp クライアントの動作OSが、Systemwalker Desktop Keeperクライアントの動作OS以外の場合、Citrix XenApp監視機能により、操作ログは採取されますが、内容は保証されません。
- Citrix XenAppにて、公開アプリケーションから正常にログオフした後にアクティブ状態のセッションが残る場合があります。Citrix XenApp監視機能の導入時に、以下を参考に対処を行ってください。
<http://support.citrix.com/article/CTX102282>
なお、追加するプロセスのファイル名には以下を指定してください。
fsw11eja.exe,fsw21ej0.exe,fsw21ej6.exe

クライアント(CT)

- ・ デバイスに対する書き込みを制限するフィルタードライバ制御、フック方式(INSTANT COPYなどの製品導入時)など、Systemwalker Desktop Keeperの制御と類似した制御をしているアプリケーションが同居している場合の動作は保証しません。また、VMware ThinAppはSystemwalker Desktop Keeperのフック方式と競合し、正しく動作しないことがわかっています。
- ・ ローカルプロキシでWebアクセスを制御しているアプリケーションが同居している場合の動作は保証しません。
- ・ クライアント(CT)をインストールしたままOSのアップグレードを行うと、クライアント(CT)が正常に動作しなくなります。(例:Windows 7からWindows 8.1にOSのアップグレードを行う)
OSのアップグレードを行う場合は、クライアント(CT)をアンインストールしたあとに、OSのアップグレードを行い、再度クライアント(CT)をインストールしてください。再インストール時に、以前と同じCTに紐付けて登録するためには、サーバ設定ツールの[システム設定]画面でCT登録時の同一CT判断条件の[OS種別]に[使用しない]を設定してください。
また、Windows 10は、アップグレード前のOSに戻すことが可能です。(例:Windows 8.1からWindows 10にアップグレード後に再度Windows 8.1に戻す)。
この場合も、クライアント(CT)をインストールした状態だとクライアント(CT)が正常に動作しなくなります。OSのアップグレード時と同じ手順で実施してください。
- ・ 新規DVD/CDデバイスを初めて接続した場合には、再起動してください。再起動しないと新規に接続したDVD/CDデバイスが正常に使用できない場合があります。
- ・ DVD/CDへの持出し禁止を設定しているポリシーでDVD-ROM(DVD-Video)やCPRMのDVDを再生する場合、DVD再生ソフトによっては正常に再生できない場合があります。一時的にDVD/CDへの持出し禁止を解除するか、他のDVD再生ソフトを使用してください。
- ・ Juniper社の「Netscreen Remote」とは共存できません。「Netscreen Remote」のVirtual Adapter機能をアンインストールすることで動作可能です。
また、VPNソフトウェア(Netscreen Remoteなど)が共存する環境では、通信できない場合があります。
- ・ キャプチャ製品と共存した環境では、互いの機能が正常に動作しない可能性があります。
- ・ ウイルスバスター2007以降が導入されているマシンにクライアント(CT)をインストールした場合、ウイルスバスター2007以降の「ネットワーク接続環境が変わりました」というダイアログが表示される場合がありますが、問題はありません。
 - ー UACで権限昇格を許可し操作を続行した場合、以下のログが採取できません。
 - ー ネットワークプリンタへの印刷ログ
 - ー ネットワークドライブの構成変更ログ
- ・ TCPlinkを導入している環境で、PrintScreenキーを押すと、ネットワークプリンタに2枚印刷される場合があります。ネットワークプリンタに[Lan Manager プリンタポート]ではなく[Standard TCP/IPポート]を設定してください。

シャットダウンまたは再起動する場合

管理サーバ/統合管理サーバで、シャットダウン、または再起動する場合は、必ず以下の手順で行ってください。



注意

サーバの確実な停止方法について

データベースに格納される前のクライアント(CT)のログが失われることを防止するため、必ず以下の手順を実行してください。

1. 管理サーバ/統合管理サーバで、Windowsのサービス画面を表示し、以下の各サービスを選択して、[操作]メニューから[停止]を選択します。なお、停止するまでに30秒から1分程度かかる場合があります。また、SWServerServiceを起動した直後や日付が変更になったとき(午前0時)は、データベースの空き容量の確認が動作するため、確認動作が終了するまでの約15分間は、サービスが停止しないことがあります。時間をおいて、停止を確認してください。
 - ー SWLevelControlService
 - ー SWServerService
 - ー PostgreSQL RDB SWDTK
2. 管理サーバ/統合管理サーバを、シャットダウンまたは再起動します。

リモート操作の制限について

以下に該当する環境では、Windowsの「リモートデスクトップ接続」など、Windowsターミナルサービス経由の操作はできません。リモート接続のセッションが残っている場合も同様です。リモート接続した後は、必ずログオフしてください。

- Systemwalker Desktop Keeperとデータベースを共有する以下の製品のV13.2以前の製品がSystemwalker Desktop Keeperの導入より先に導入されている環境
 - Systemwalker Centric Manager
 - Systemwalker Desktop Patrol
 - Systemwalker Desktop Rights Master

システムバックアップを行う場合

管理サーバ/統合管理サーバ/ログアナライザサーバでシステムバックアップを行うソフトウェアを使用してシステムのバックアップを行う場合、以下の点に注意してください。

- 管理サーバ/統合管理サーバ/ログアナライザサーバをシステムドライブ以外にインストールした場合でも、システムドライブ上に一部Systemwalker Desktop Keeperのプログラムが導入されます。バックアップおよびリストアは、インストールしたドライブとシステムドライブの両方を対象としてください。
- バックアップ時は、サービスを停止する必要があります。必ず以下の手順でバックアップを行ってください。

【管理サーバ/統合管理サーバの場合】

1. 管理サーバ/統合管理サーバで、Windowsのサービス画面を表示し、以下の順に各サービスを選択して、[操作]メニューから[停止]を選択します。なお、停止するまでに30秒から1分程度かかる場合があります。また、SWServerServiceを起動した直後や日付が変更になったとき(午前0時)はデータベースの空き容量の確認が動作するため、確認動作が終了するまでの約15分間は、サービスが停止しないことがあります。時間をおいて、停止を確認してください。
 - a. SWLevelControlService
 - b. SWServerService
 - c. PostgreSQL RDB SWDTK
 - d. PostgreSQL RDB SWDTK2
2. システムバックアップが完了したら停止したサービスを以下の順で起動してください。
 - a. PostgreSQL RDB SWDTK2
 - b. PostgreSQL RDB SWDTK
 - c. SWServerService
 - d. SWLevelControlService

【ログアナライザサーバの場合】

1. ログアナライザ機能を使用していないことを確認してください。
2. ログアナライザサーバで、Windowsのサービス画面を表示し、以下の順に各サービスを選択して、[操作]メニューから[停止]を選択します。なお、停止するまでに30秒から1分程度かかる場合があります。
 - a. Interstage Navigator Serverサービス
 - b. SymfoWARE RDB SWDTLA
3. システムバックアップが完了したら停止したサービスを以下の順で起動してください。
 - a. SymfoWARE RDB SWDTLA
 - b. Interstage Navigator Serverサービス

64ビット対応について

- 64ビット版コンポーネントは、32ビット版OSへインストールできません。

- 32ビット版コンポーネントの環境に対して、64ビット版コンポーネントへのバージョンアップインストールはできません。なお、ログアナライザサーバは、バージョンアップインストール自体が未サポートです。
- 管理サーバとログアナライザサーバ間は、32ビット同士または64ビット同士の接続だけが可能です。
- 64ビット版WSUSサーバとの同居は、64ビット版でだけ可能です。また、32ビット版WSUSサーバとの同居は32ビット版だけで可能です。
- レポート出力ツールでは、64ビット版 Microsoft Officeは未サポートです。

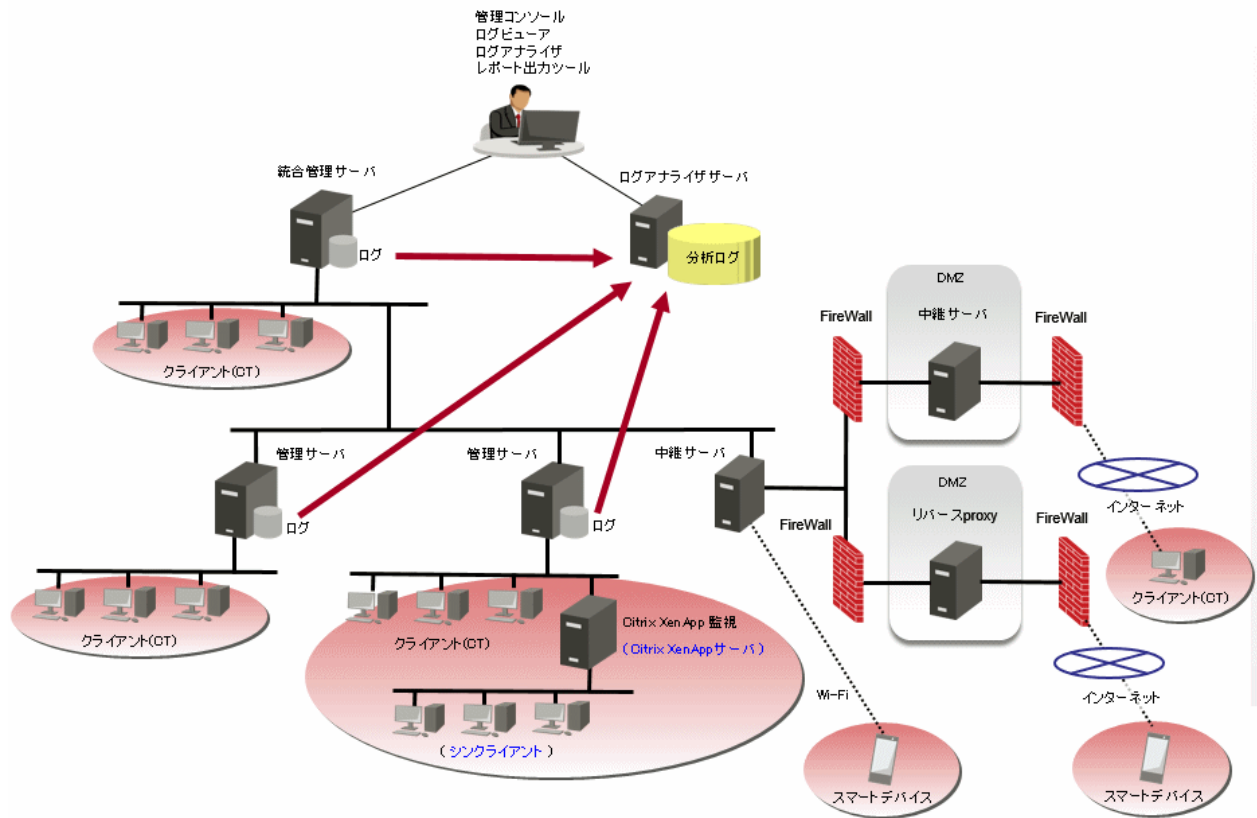
1.2 運用形態を決定する

管理するクライアントの規模、使用する機能、構成情報の取り込み方法、管理者の配置など、様々な要素により、いくつかの運用方法があります。ここでは、運用方法を決定するにあたり、設計に必要な要素とそれらをどのように組み合わせることができるのかを説明します

1.2.1 システム構成を決定する

Systemwalker Desktop Keeperを使用した場合の、推奨するシステム構成を説明します。

Systemwalker Desktop Keeperのシステム構成の全体イメージは以下のとおりです。



ここでは、管理サーバ、統合管理サーバ、ログアナライザサーバの設置、および中継サーバ、の基準について説明します。ログ分析機能、レポート出力機能を使用する場合は、管理サーバ/統合管理サーバ、ログアナライザサーバそれぞれの設置基準を総合的に判断して構成を決定してください。

1.2.1.1 管理サーバの設置基準を決定する

管理するクライアント(CT)およびスマートデバイス(エージェント)の台数、およびファイル操作ログ採取の有無により、何台の管理サーバが必要かを検討します。



1台の管理サーバで管理できるクライアント(CT)とスマートデバイス(エージェント)は、合わせて最大5000台です。目安は以下のとおりです。

【操作ログを採取しない場合】

クライアント(CT)とスマートデバイス(エージェント)、合わせて最大5000台を目安としてください。

【ファイル操作ログを採取する場合】

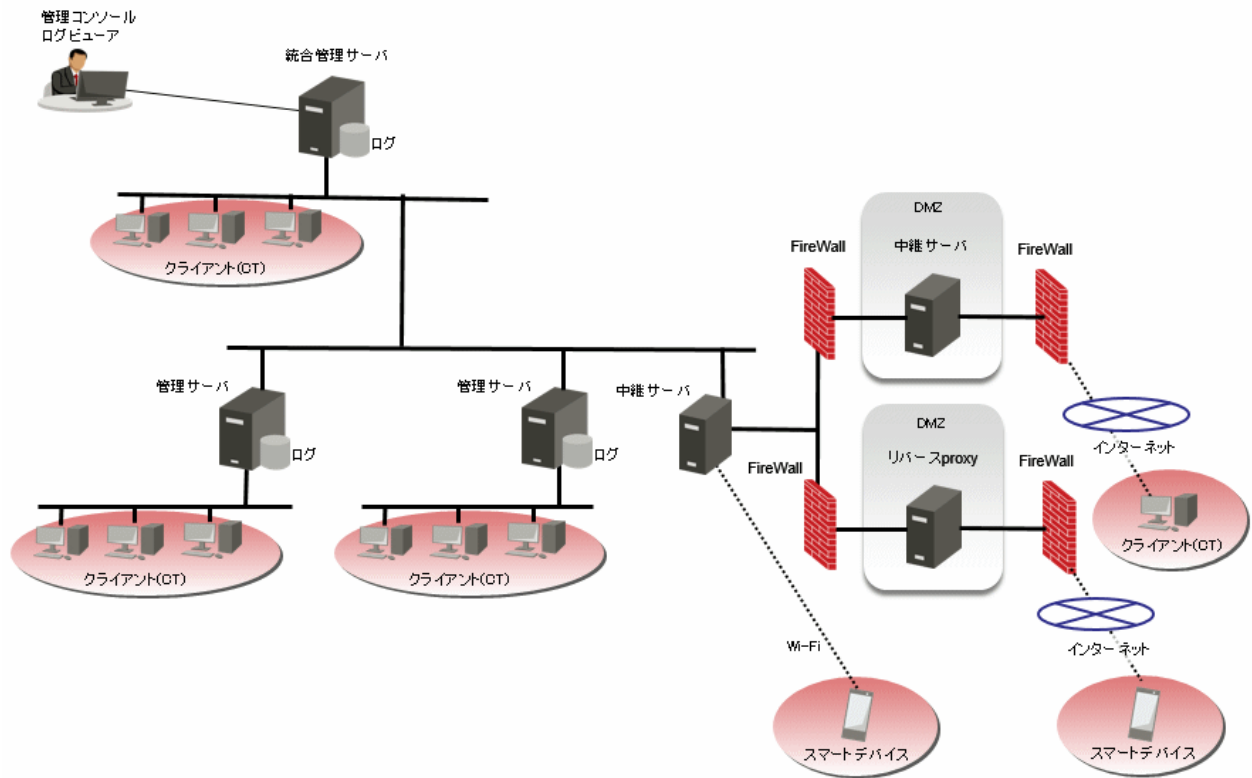
クライアント(CT)とスマートデバイス(エージェント)、合わせて最大1000台(1日あたり1000ログを想定)を目安としてください。

【ファイル操作ログを採取しない場合】

クライアント(CT)とスマートデバイス(エージェント)、合わせて最大2000台(1日あたり500ログを想定)を目安としてください。

1.2.1.2 統合管理サーバの設置基準、管理サーバの増設基準

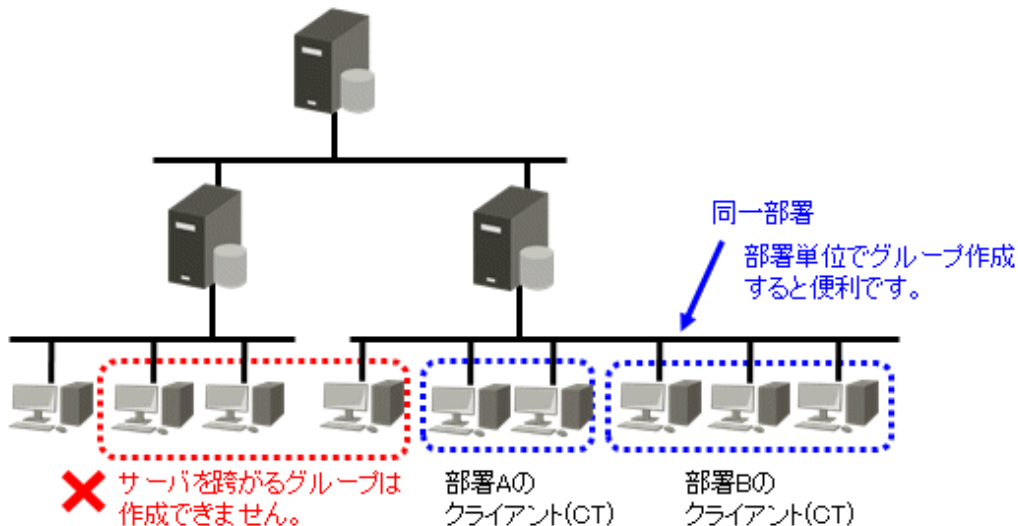
1台の管理サーバで管理できるクライアント(CT)の数が、目安の台数を超えた場合は、管理サーバを増設し、各管理サーバ配下にクライアント(CT)を均等に振り分けるのが理想です。そして、統合管理サーバを1台設置します。



P ポイント

部署ごとにクライアント(CT)グループ作成する

部署ごとにグループを作成すると、クライアント(CT)の管理に便利です。



ただし、クライアント(CT)のグループは、複数の管理サーバに跨って作成できません。クライアント(CT)のグループは、1つの管理サーバで管理されているクライアント(CT)で作成してください。

1.2.1.3 ログアナライザサーバの設置基準

ログ分析機能、レポート出力機能を使用する場合に、何台のログアナライザサーバを設置するかを検討します。

ログアナライザサーバの設置台数を検討する場合、以下の3つの観点で検討が必要です。

・ 組織構成

Systemwalker Desktop Keeperのログ分析、レポート出力は、ログアナライザサーバ単位に行います。

1つの部署(会社)が複数のログアナライザサーバで構成されている場合は、その部署(会社)全体の集計や、その部署(会社)全体を1つのレポートにまとめて出力することはできません。

組織構成を考慮して集計単位・レポートのとりまとめ単位を検討し、ログアナライザサーバを設置する必要があります。

・ 集計条件

ログを分析・集計するために、ログアナライザサーバ単位に、“絞込条件”、“除外条件”を設定できます。

“絞込条件”には、ログ集計のキーワードなどを設定できます。“除外条件”には、集計の対象外とするPCを設定できます。

部署によって条件が異なる場合に、ログアナライザサーバを同じにすると、条件の範囲が広がりすぎて、分析の精度が低くなるおそれがあります。ある程度条件が近い部署単位にログアナライザサーバを設置する必要があります。

なお、どのような条件にすべきかについては、“[1.2.8 ログアナライザの分析条件を決定する](#)”を参照してください。

・ ログの量

分析・集計を行うログの量が多すぎると、集計処理に時間がかかる、またはエラーが発生する場合があります。

ログアナライザサーバ1台が分析対象とするログ量は最大で1億8000万件程度(クライアント(CT)台数が500台あり、1台のPCで1日1000ログを採取し、1年間保管する量)を目安としてください。また1日に移入するログ量は最大で50万件程度を目安としてください。

この目安を超える場合には、ログアナライザサーバの増設を検討してください。

上記要因の検討のほか、管理サーバ/統合管理サーバとの関係を考慮する必要があります。

ログアナライザサーバは、管理サーバ/統合管理サーバが導入されているコンピュータに導入できます。また、管理サーバ/統合管理サーバとは別のコンピュータに導入することもできます。

複数の管理サーバ/統合管理サーバのログ情報を1台のログアナライザサーバで集計・分析することはできますが、1台の管理サーバ/統合管理サーバのログ情報を複数のログアナライザサーバに分散させて、集計・分析することはできません。

また、ログアナライザサーバと管理サーバ/統合管理サーバの間は、ネットワーク共有フォルダを設定できる必要があります。共有フォルダは、ログアナライザサーバ上に作成します。

この共有フォルダを使って、管理サーバ/統合管理サーバからログアナライザサーバに以下の情報が転送されます。

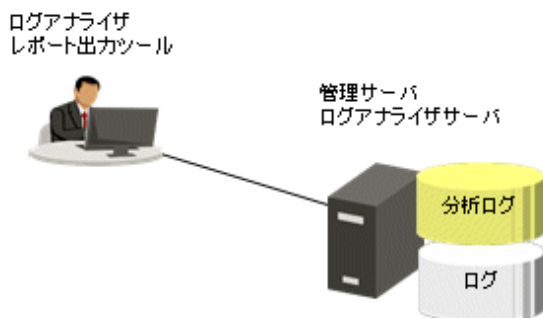
- ・ 管理サーバ/統合管理サーバで採取された操作ログ
- ・ 管理者情報

転送スケジュールは個々に指定できますが、業務が停止している深夜などに実行することを推奨します。ログの転送は1日1回となります。1日に複数回ログ転送することはできません。

管理サーバ/統合管理サーバとログアナライザサーバのシステム構成は以下の2パターンがあります。

【1台の管理サーバに対してログアナライザサーバを設置する場合】

1台の管理サーバで運用する場合、その管理サーバ上にログアナライザサーバを配置してください。ただし、ハードウェアの要件等を満たさない場合は、別サーバとしても問題ありません。



【複数の管理サーバに対してログアナライザサーバを設置する場合】

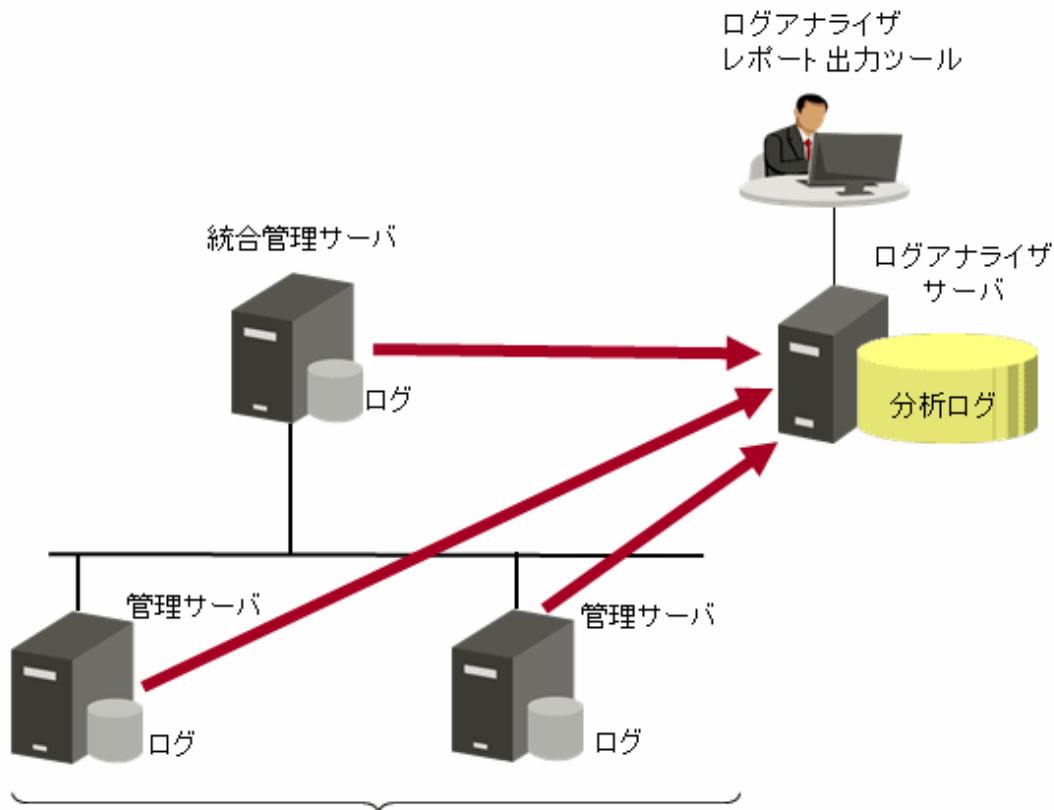
複数の管理サーバ/統合管理サーバで運用する場合、クライアント(CT)台数とログアナライザサーバ上のログ保存期間を基準にログアナライザサーバを設置する必要があります。

1台のログアナライザサーバの設置基準は以下のとおりです。(クライアント(CT)1台のログ量を1日1000ログとして算出しています)

ログ保存期間	ログアナライザサーバで管理するCT台数	平均管理サーバ台数(統合管理サーバを含む)(注)
1カ月	6000台	3台
2カ月	3000台	2台
3カ月	2000台	1台
6カ月	1000台	1台
12カ月(1年)	500台	1台

注)1管理サーバあたり2000台のクライアント(CT)を管理しているものとして算出しています。

ログ保存期間1カ月、統合管理サーバ1台、管理サーバ2台(各サーバ平均クライアント(CT)台数2000台)の構成例は以下のとおりです。



管理サーバ/統合管理サーバ: 計3台
 ※ サーバ1台あたり、平均2000台のCTを管理している場合

1.2.1.4 中継サーバの設置基準

スマートデバイス(エージェント)を管理する場合、または、インターネット経由でクライアント(CT)を接続する場合は、中継サーバの設置を検討します。中継サーバの設置基準は、以下のとおりです。

- 中継サーバは、1台の管理サーバにつき1台接続できます。
- 管理サーバに直接接続する中継サーバは社内ネットワーク内に設置します。

- インターネット経由でクライアント(CT)を接続する場合は、DMZにもう1台中継サーバを設置します。
クライアント(CT)はDMZの中継サーバに接続し、DMZに設置した中継サーバは社内ネットワーク内に設置した中継サーバに接続してください。
- インターネット経由でスマートデバイス(エージェント)を接続する場合は、DMZにリバースproxyを設置し、社内ネットワーク内に設置した中継サーバに接続することを推奨します。
- 1台中継サーバで管理できるクライアント(CT)、スマートデバイス(エージェント)は、1台の管理サーバで管理できるクライアント(CT)、スマートデバイス(エージェント)の台数と同じです。詳細は、“1.2.1.1 管理サーバの設置基準を決定する”を参照してください。

Systemwalker Desktop KeeperおよびSystemwalker Desktop Patrolの両方でiOS端末の管理を行う場合には、中継サーバとSystemwalker Desktop Patrol SSを同居させてください。

ポイント

管理サーバ/統合管理サーバと、中継サーバの配置関係について

2階層/3階層どちらのシステム構成においても、1台中継サーバは1台の管理サーバへ接続してください。

図1.1 【3階層システム構成】

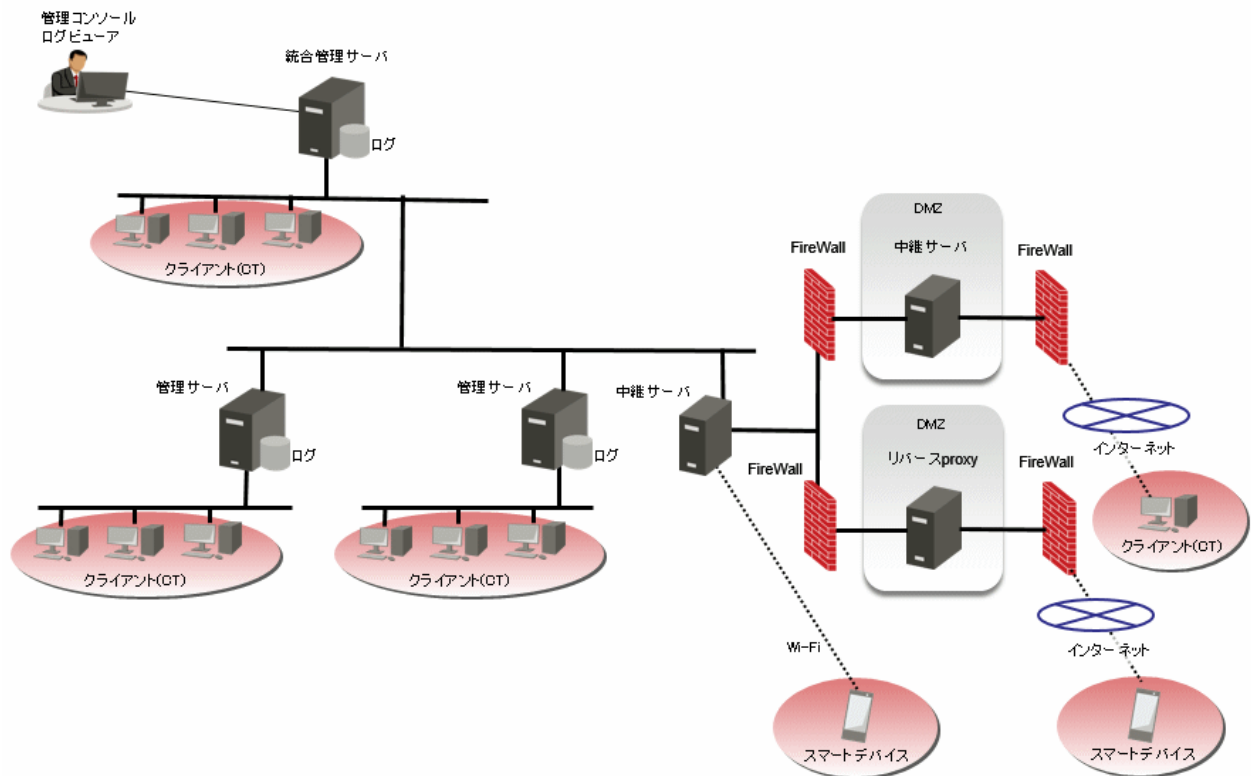
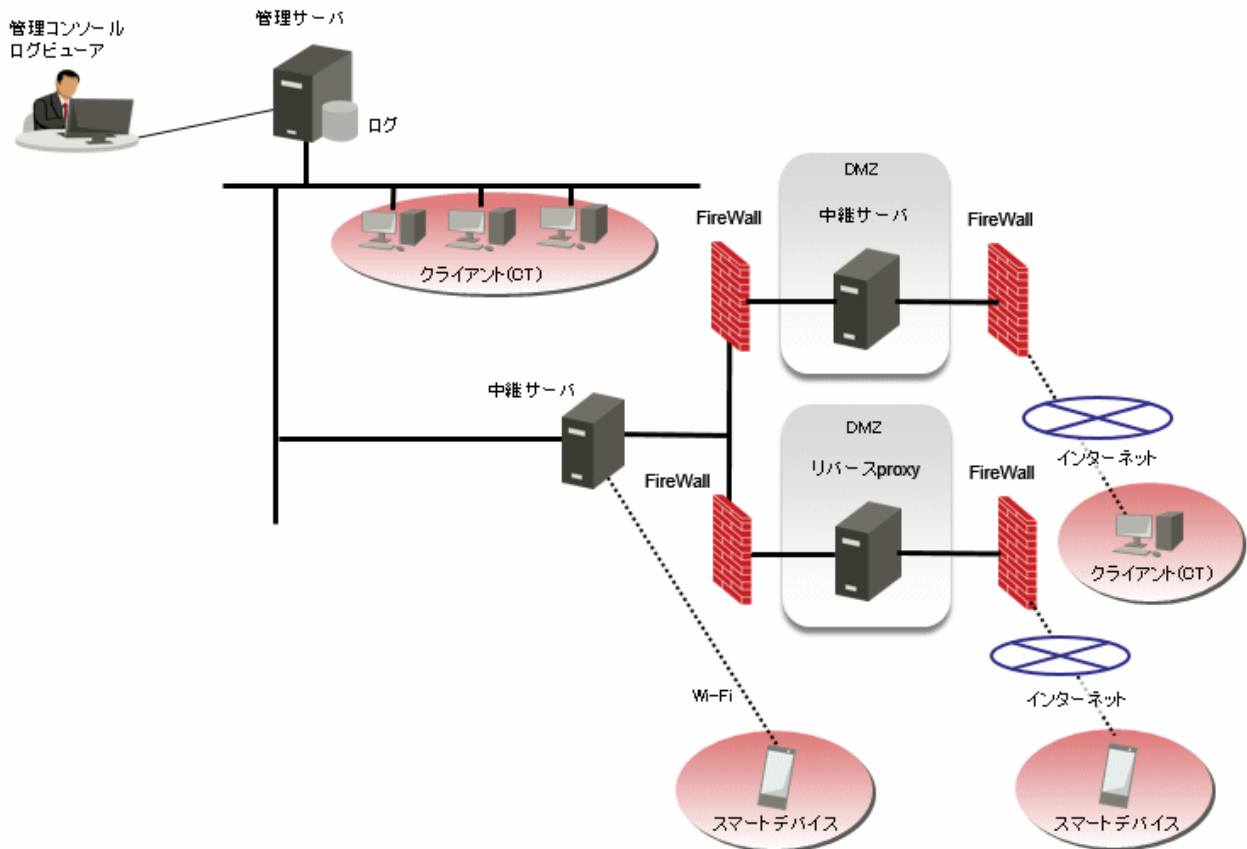


図1.2【2階層システム構成】



1.2.2 管理者の構成を決定する

Systemwalker Desktop Keeper管理者の形態およびその役割について説明します。

管理者は、以下の3つの形態があります。

システム管理者

本製品で定義されるシステム管理者とは、クライアント(CT)およびスマートデバイス操作の禁止や操作ログの採取などのポリシーを定義・管理する、システム全体のセキュリティの管理者として位置づけられます。システム管理者は、ポリシー設定のほか、システム全体のクライアント(CT)情報、スマートデバイス(エージェント)情報やユーザー情報、またログ情報を参照できます。

部門管理者

部門管理者とは、システム管理者とは異なり、特定の部門配下に対してだけ権限を持つ管理者です。部門管理者は目的に応じて必要な権限だけが与えられ、権限のない他部門の情報を参照・操作することはできません。部門管理者はクライアント(CT)グループおよびユーザーグループごとに設定できます。

システム管理者がシステム全体の状態を把握することは、大きな負担になります。システム管理者は部門管理者を設定し、その部門については、部門管理者に情報を管理する権限を委譲することで、自身の負荷を軽減できます。

部門管理者の設定は、運用開始後も可能です。部門管理者が使用できる機能の詳細は、“[管理者種別ごとの使用可能な機能](#)”を参照してください。

デバイス管理者

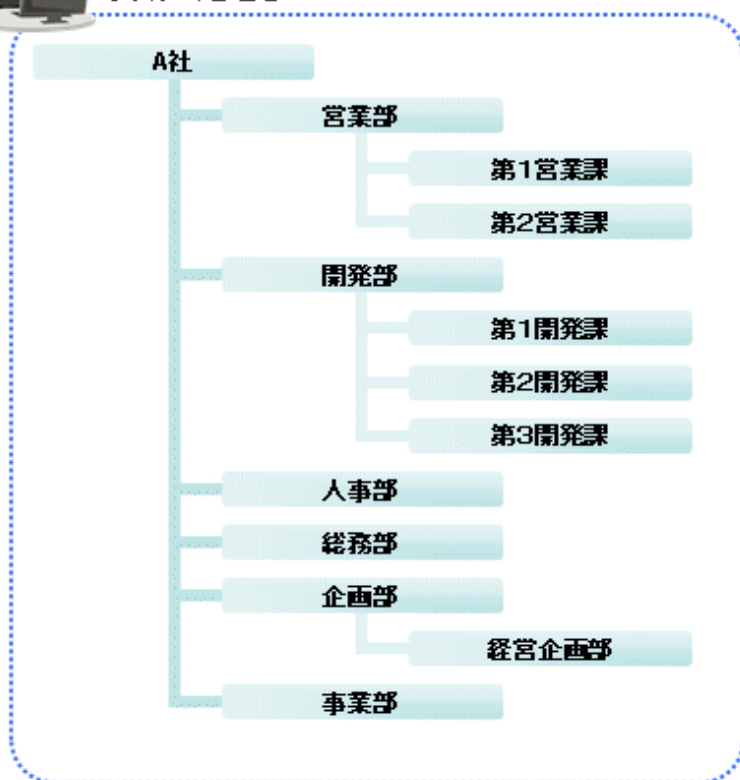
デバイス管理者とは、システム管理者、部門管理者とは異なり、デバイスの登録/変更/削除だけが行える管理者です。ポリシー設定などを行うことはできません。デバイス管理者を設定することで、システム管理者、部門管理者の負荷を軽減できます。

システム管理者による集中管理(部門管理者を配置しない運用)

システム管理者がすべてのポリシー設定やログの参照を行う形態です。すべてのクライアント(CT)およびスマートデバイス(エージェント)、すべてのユーザーのポリシー設定やログの参照が可能です。またすべての機能を使用できます。

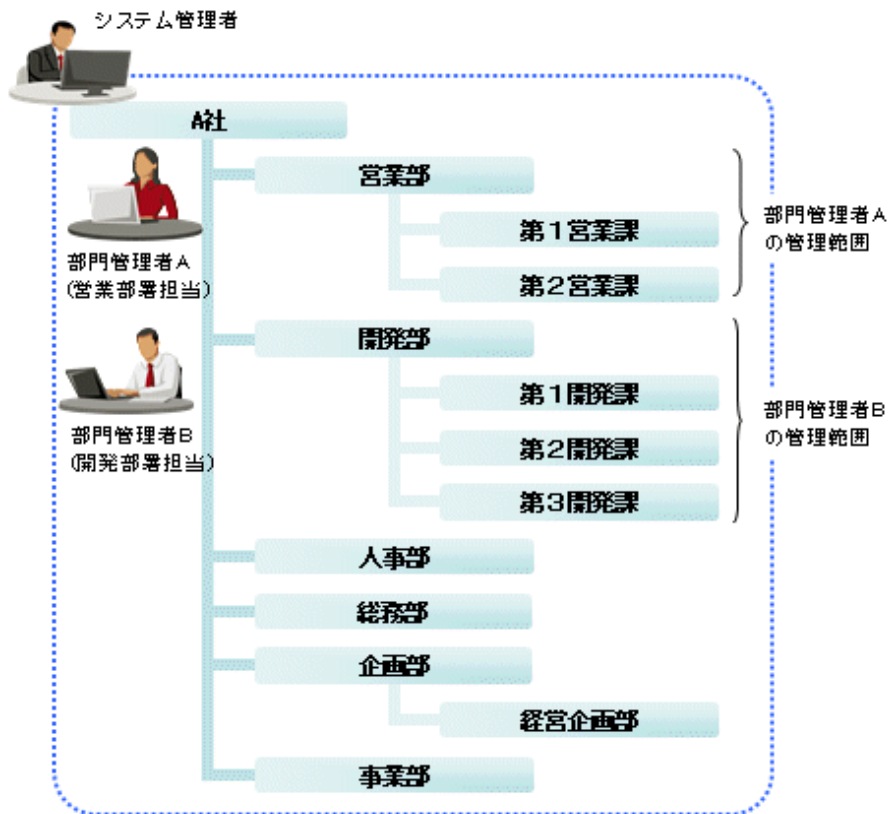


システム管理者



複数の管理者による分散管理(部門管理者を配置する運用)

部門ごとに部門管理者を設定し、部門内でポリシーの設定やログの参照を行う形態です。自部門内のポリシーの変更や、ログの参照が可能であり、内部統制としての管理が容易です。



システム管理者は、ルート配下にあるシステム全体のセキュリティを管理できますが、部門管理者は特定の部門に対してだけ権限をもちます。例えば、上記イメージ図で示すように、部門管理者Aさんは、“営業部”に対して、ポリシーを定義する、またはログを参照することはできますが、“開発部”に対してポリシーを定義する、またはログを参照することはできません。

主に部門管理者が使用できる機能は以下のとおりです。各操作画面における詳細な機能範囲については、“[管理者種別ごとの使用可能な機能](#)”を参照してください。

- ・ 部門管理者と設定されているクライアント(CT)グループでの以下の機能
 - ー クライアント(CT) およびスマートデバイス(エージェント)の管理情報の参照
 - ー クライアント(CT) およびスマートデバイス(エージェント)の移動(部門管理グループ内)、削除
 - ー CTポリシーの参照、変更
 - ー CTグループの作成、移動(部門管理グループ内)、および削除
 - ー ログの検索、参照
 - ー ログのCSV出力、付帯データの参照、および保存(制限することも可能)
- ・ 部門管理者と設定されているユーザーグループでの以下の機能
 - ー ユーザー情報の追加、参照、および変更
 - ー ユーザー情報の移動(部門管理グループ内)、削除
 - ー ユーザーポリシーの参照、変更
 - ー ユーザーグループの作成、移動(部門管理グループ内)、および削除
 - ー ログの検索、参照
 - ー ログのCSV出力、付帯データの参照、および保存(制限することも可能)

管理者種別ごとの使用可能な機能

Systemwalker Desktop Keeperの管理コンソール、ログビューアにおける管理者モードと部門管理モードでの機能の差異について説明します。

管理コンソールでの機能の差異

管理コンソールでのシステム管理者と部門管理者の機能の差異について説明します。

区分	機能	システム 管理者	部門管理 者	デバイス 管理者	備考	
メニュー バー	[ファイル]	[CT/CTグループ検索]	○	▲	×	
		[CTグループ作成]	○	▲	×	注5
		[CTグループ削除]	○	▲	×	注5
		[CTグループ部門管理者設定]	○	×	×	
		[CT情報CSV出力]	○	▲	×	注2
		[CTグループ情報CSV出力]	○	×	×	注2
		[CTグループ部門管理者情報CSV取り込み]	○	×	×	注1
		[CTグループ部門管理者情報CSV出力]	○	×	×	注2
		[リモート資料採取]	○	×	×	
		[CTデバッグトレース]	○	○	×	
		[配下CTのIPアドレス出力]	○	○	×	
		[パスワード変更]	○	○	○	
	[表示]	[端末情報参照/設定]	○	▲	×	
[サービス一覧取得/制御]		○	▲	×		
[プロセス一覧取得/制御]		○	▲	×		
[ツリー設定]	[ツリー最新表示(全サーバ)]	○	○	×		
	[ツリー最新表示(選択中サーバ)]	○	○	×		
	[ツリー全展開]	○	○	×		
	[ツリー全縮小]	○	○	×		
	[空のグループは表示しない]	○	○	×		
	[CTグループ構成反映]	○	○	×		
	[サーバ表示]	○	○	×	注3	
	[「削除したCT」グループを表示]	○	×	×		
[リスト設定]	[CTリスト表示列設定]	○	○	×		
[動作設定]	[端末初期設定]	○	×	×		
	[緊急対処設定]	○	×	×	注8	
	[端末動作設定]	○	×	×		
	[デバイス/メディア登録]	○	○	○	注6	
	[Wi-Fi接続先登録]	○	○	×	注7	
	[起動時の最新情報取得]	○	○	×		
	[デバッグトレース]	○	×	×		
	[管理コンソールトレース]	○	○	×		
[ユーザー設定]	[ユーザーポリシー設定]	○	▲	×		

区分		機能		システム 管理者	部門管理 者	デバイス 管理者	備考
	[他システム連 携]	[Systemwalker Desktop Patrol連携]	[構成情報取り込み]	○	×	×	注1, 注4
			[構成情報出力]	○	×	×	注2, 注4
[CTリスト]画面		[ポリシーコピー]		○	▲	×	
		[ポリシー貼り付け]		○	▲	×	
		[CT削除]		○	▲	×	注5
		[緊急対処]		○	○	×	注8
		[リモート資料採取]		○	×	×	
		[CTデバッグトレース]		○	○	×	
[ポリシー一覧]画面		[CTグループポリシー設定]		○	▲	×	
		[CTポリシー設定]		○	▲	×	
		[ポリシー最新表示]		○	▲	×	
		[次回起動時に反映する]		○	▲	×	
		[即時更新を行う]		○	▲	×	
ドラッグ&ドロップ操作		[CTグループの移動]		○	▲	×	注5
		[CTの移動]		○	▲	×	注5

凡例: ○=機能制限なし、×=使用不可、▲=部門管理者の管理範囲で使用可能

注1: CSVファイルの取り込み権が必要です。

注2: CSVファイル保存権が必要です。

注3: Active Directory連携時、サーバ表示は常に表示される設定にしてください。(変更不可)

注4: Active Directory連携時は、使用できません。

注5: Active Directory連携時は、Localグループ内のみ使用可能です。

注6: デバイス/メディア登録/更新/削除権が必要です。

注7: Wi-Fi接続先登録/更新/削除権が必要です。

注8: 緊急対処権が必要です。

【ユーザーポリシー画面】

区分		機能		システム 管理者	部門管理 者	備考	
メニュー バー	[ファイル]	[ユーザー/ユーザーグループ検索]		○	▲		
		[ユーザーグループ作成]		○	▲	注3	
		[ユーザーグループ削除]		○	▲	注3	
		[ユーザーグループ部門管理者設定]		○	×		
		[ユーザーグループ部門管理者情報CSV取り 込み]		○	×	注1, 注3	
		[ユーザーグループ部門管理者情報CSV出力]		○	×	注2	
	[ツリー設定]	[ツリー最新表示]			○	○	
		[ツリー全展開]			○	○	
		[ツリー全縮小]			○	○	
		[空のグループは表示しない]			○	○	
		[ユーザーグループ構成反映]			○	○	
[CSV連携]	[ユーザー情報CSV取り込み]			○	▲	注1, 注3	

区分	機能	システム管理者	部門管理者	備考
	[ユーザー情報CSV出力]	○	▲	注2
[ユーザー一覧]画面	[ポリシーコピー]	○	▲	
	[ポリシー貼り付け]	○	▲	
	[ユーザー削除]	○	▲	注3
[ユーザー属性]画面	[新しいユーザーの入力]	○	▲	注3
	[ユーザー情報更新]	○	▲	AD連携項目は変更不可
[ユーザーポリシー一覧]画面	[グループポリシーを適用]	○	▲	
	[ユーザーポリシー非適用]	○	▲	
	[端末初期設定値を設定]	○	▲	
ドラッグ&ドロップ操作	[ユーザーグループの移動]	○	▲	注3
	[ユーザーの移動]	○	▲	注3

凡例: ○=機能制限なし、×=使用不可、▲=部門管理者の管理範囲で使用可能

注1: CSVファイルの取り込み権が必要です。

注2: CSVファイル保存権が必要です。

注3: Active Directory連携時は、Localグループ内のみ使用可能です。

ログビューアでの機能の差異

ログビューアでのシステム管理者と部門管理者の機能の差異について説明します。

区分	機能	システム管理者	部門管理者	備考	
データベース	運用データベース	○	▲		
	ログ閲覧データベース	○	▲		
[CT操作ログ]/[ユーザー操作ログ]/ [設定変更ログ] 注3	部門選択	○	▲		
	最新表示	○	○		
	検索条件	○	▲		
	ログ一覧	○	▲		
	表示項目設定	表示項目設定	○	▲	
		部門表示設定	○	×	
		違反CT表示設定	○	▲	
	CT/CTグループ検索	○	▲		
	CSV出力	○	▲	注2	
[CT操作ログ]画面	問題PC一覧	○	▲		
	ファイル追跡	○	▲		
	付帯情報参照/保存	○	▲	注1、注4	
	緊急対処依頼	○	○	注5	

凡例: ○=機能制限なし、×=使用不可、▲=部門管理者の管理範囲で使用可能

注1: [付帯]情報参照時や[ファイル保存]実行時は、“付帯情報参照/保存権”が必要です。

注2: “CSVファイル保存権”が必要です。

- 注3: [設定変更ログ]画面参照時は、“設定変更ログ画面参照権”が必要です。
 注4: [付帯]情報でメール送信内容参照時は、“メール内容参照権”が必要です。
 注5: 緊急対処権が必要です。

状況画面での機能の差異

状況画面でのシステム管理者と部門管理者の機能の差異について説明します。

区分	機能	システム 管理者	部門管理者	備考
状況画面	状況画面の参照	○	▲	
環境設定画面	集計条件の設定	○	×	

凡例: ○=機能制限なし、×=使用不可、▲=部門管理者の管理範囲で使用可能

ログアナライザでの機能の差異

ログアナライザでのシステム管理者と部門管理者の機能の差異について説明します。

区分	機能	システム 管理者	部門管理者	備考
[情報漏洩予防診断]画面	情報漏洩予防診断	○	×	注
	ランキング	○	×	注
	グラフ表示	○	×	注
[目的別集計]画面	結果一覧(集計結果)	○	×	注
	結果一覧(詳細結果)	○	×	注
	CSVファイル	○	×	注
[ランキング設定]画面	ランキング表示の設定	○	×	注
[絞込条件設定]画面	絞込条件の登録/追加/削除	○	×	注
[除外条件設定]画面	除外条件の設定	○	×	注
[動作設定]画面	違反、エコ監査の設定	○	×	注
[サーバ設定]画面	ログアナライザサーバの選択	○	×	注

凡例: ○=機能制限なし、×=使用不可、▲=部門管理者の管理範囲で使用可能

注=3階層システムの場合は、統合管理サーバのシステム管理者だけ使用可能

レポート出力ツールでの機能の差異

レポート出力ツールでのシステム管理者と部門管理者の機能の差異について説明します。

区分	機能	システム 管理者	部門管理者	備考
[総合分析]レポート	総合分析レポートの出力	○	▲	
[情報漏洩分析]レポート	情報漏洩分析レポートの出力	○	▲	
[端末利用分析]レポート	端末利用分析レポートの出力	○	▲	
[違反操作分析]レポート	違反操作分析レポートの出力	○	▲	
[印刷量監査]レポート	印刷量監査レポートの出力	○	▲	
[複合機用紙使用状況]レポート	複合機用紙使用状況レポートの出力	○	×	

凡例: ○=機能制限なし、×=使用不可、▲=部門管理者の管理範囲で使用可能

1.2.3 構成情報の作成方法を決定する

Systemwalker Desktop Keeperにおいて、管理の対象となる構成情報について説明します。

構成情報とは、以下の3つの情報で構成されます。

- ・ 組織情報
- ・ ユーザー情報
- ・ クライアント(CT)情報(コンピュータ情報およびスマートデバイス情報)

初期導入時に構成情報を作成する方法として、以下の3つの方法があります。設計時に以下のどの方法で作成するかを決定してください。

- ・ Active Directoryと連携する。(スマートデバイス情報は含まれません。)
- ・ Systemwalker Desktop Patrolと連携する。(スマートデバイス情報は含まれません。)
- ・ 管理コンソール画面で入力する。

Active Directoryにて組織構造、ユーザー情報、コンピュータ情報を管理している場合、Active Directoryと連携しての構成情報の作成を推奨します。

すでにSystemwalker Desktop Patrolを導入している場合、Systemwalker Desktop Patrolと連携しての構成情報の作成を推奨します。

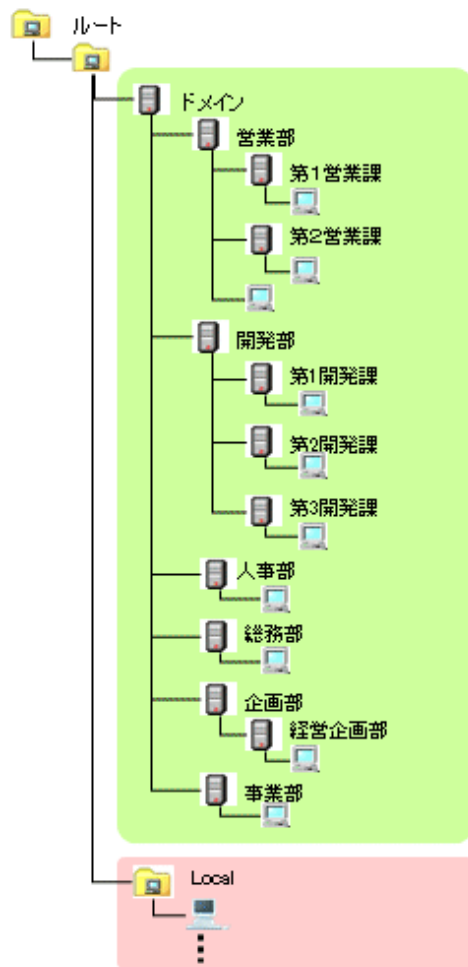
それぞれで構成情報を作成した場合のイメージは以下のとおりです。

Active Directory連携

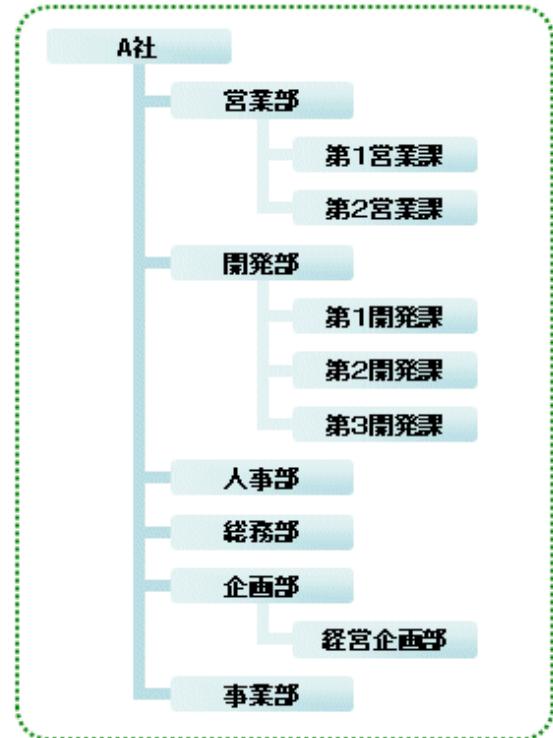
Active Directory連携で構成情報を取り込むと、取り込まれた情報は、ドメイングループ配下に入ります。Active Directoryで管理されていない組織構造、ユーザー情報、コンピュータ情報は、Localグループで管理されます。

スマートデバイス情報もLocalグループで管理されます。

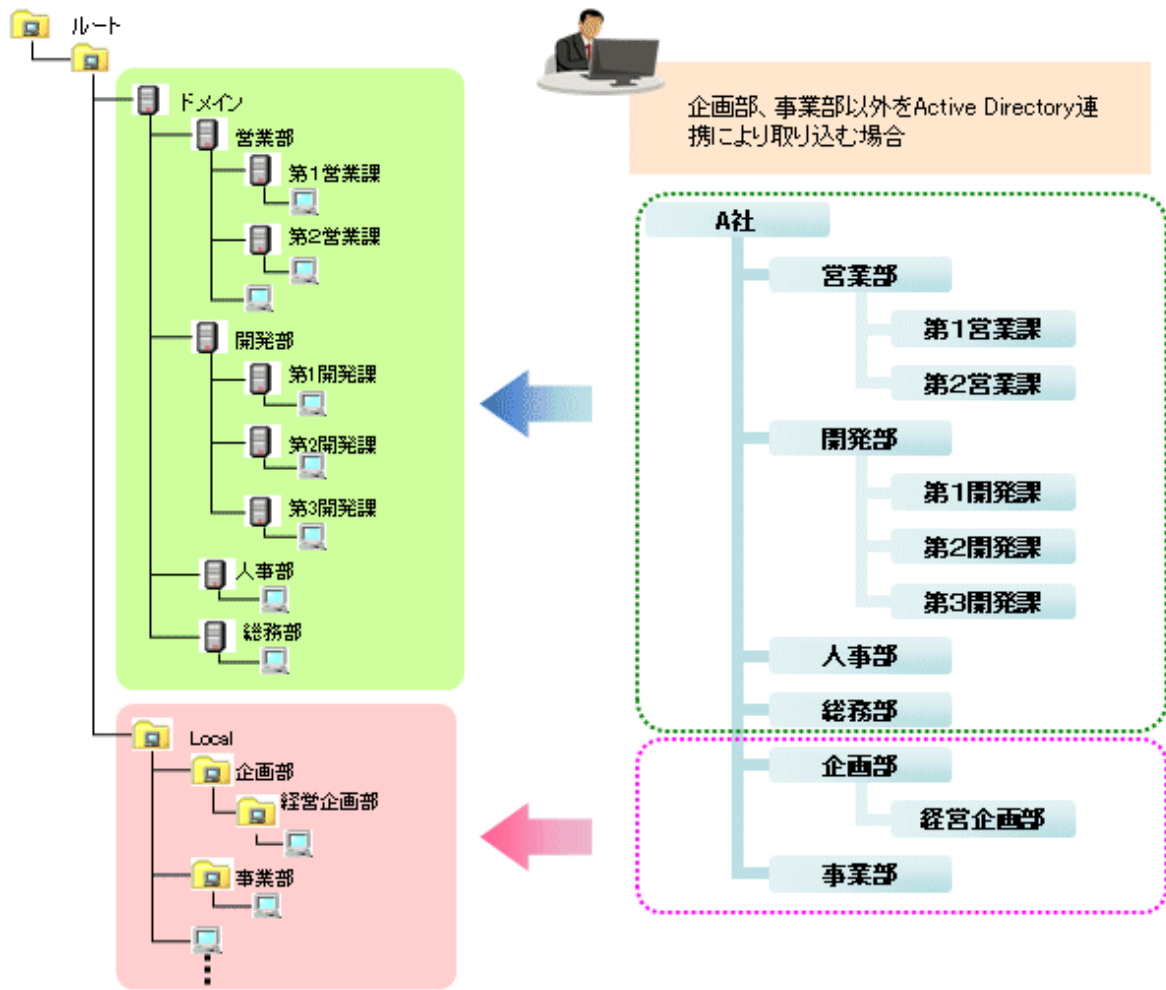
【全組織情報を取り込む場合】



すべての組織をActive Directory連携により取り込む場合



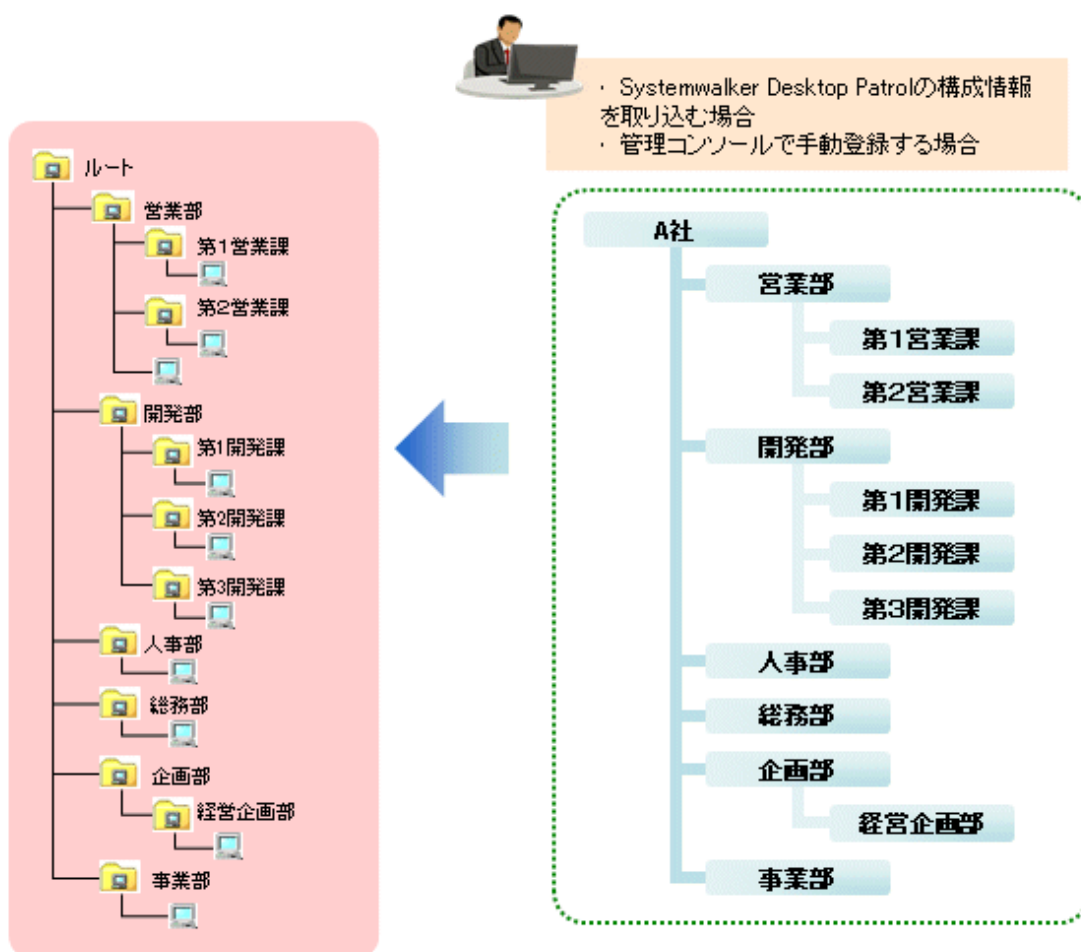
【一部組織情報を取り込み、取り込まない組織をLocal運用する場合】



ドメイン: Active Directory連携して管理するグループです。

Local: Active Directory連携しないで管理するグループです。

Systemwalker Desktop Patrol連携で入力、または管理コンソールで入力

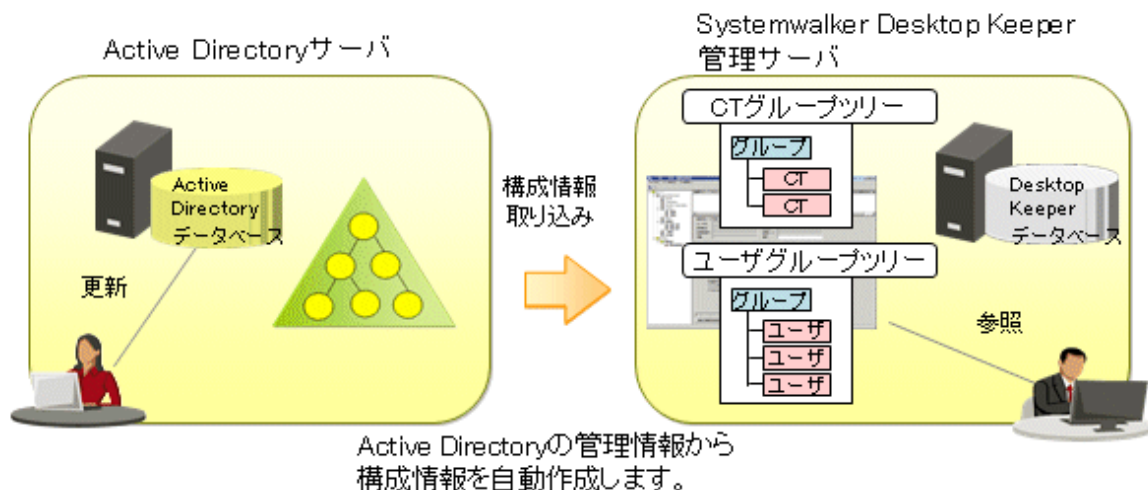


1.2.3.1 Active Directoryと連携する

組織構造、ユーザー情報、コンピュータ情報を管理しているActive Directoryのサーバと連携し、各情報をSystemwalker Desktop Keeperに取り込みます。

Active Directoryの組織構造やユーザー情報、コンピュータ情報を元に、クライアント(CT)グループツリー、ユーザーIDやユーザーグループツリーを自動作成するので、Systemwalker Desktop Keeper導入時の作業や、組織変更時の作業が軽減できます。

また、Active Directoryで組織構造、ユーザー情報、コンピュータ情報を一元管理するため、Systemwalker Desktop Keeperのシステム管理者は組織変更や人事異動などが発生しても、Active Directoryから情報を取り込むだけで構成情報を再構築する必要がありません。

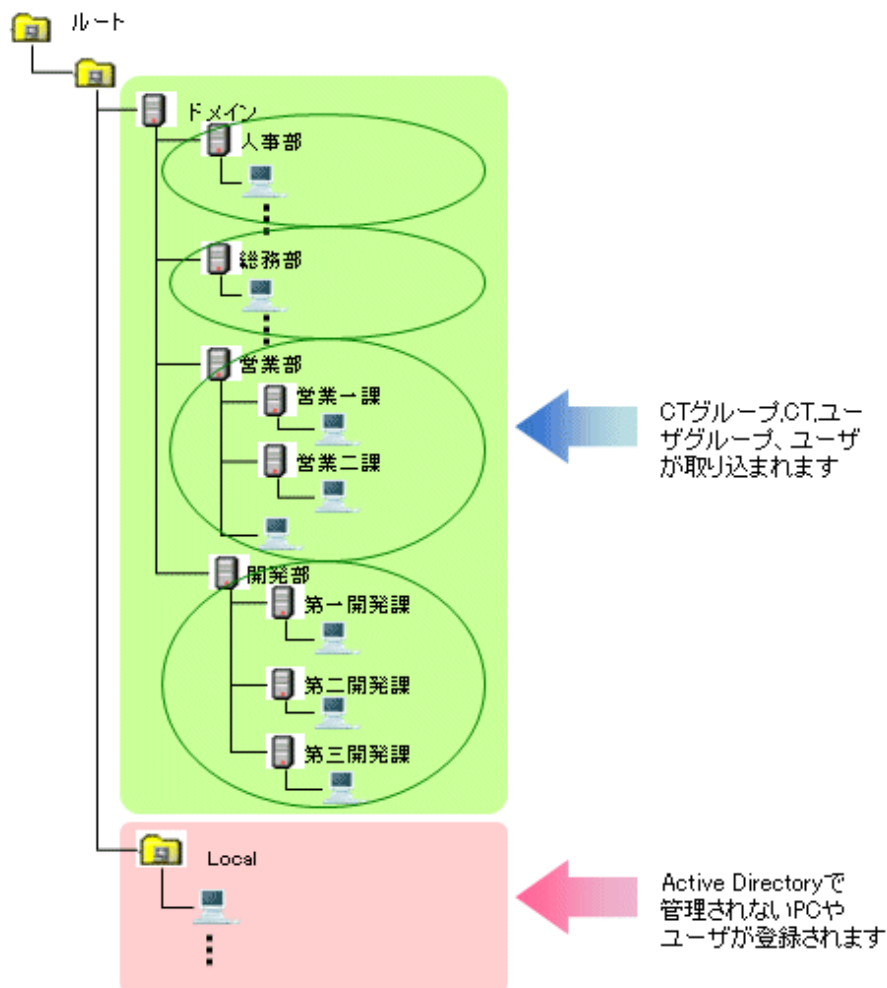


Active Directory連携機能を使用することで、以下のことが実現できます。

機能	機能説明
CTグループツリーの自動作成	Active Directoryの[組織構造(OU)]情報から、Systemwalker Desktop KeeperのCTグループツリーを自動作成できます。
クライアント(CT)の所属CTグループへの自動登録	Active Directoryの[コンピュータ]と所属している[組織構造(OU)]情報から、クライアント(CT)を自動的に所属するCTグループツリー上に登録できます。Active Directory連携で連携しない[コンテナ]等に[コンピュータ]が所属しているクライアント(CT)は、Local上に登録します。
ユーザー情報の自動作成とユーザーグループツリーの自動作成	Active Directoryの[ユーザー]情報と所属している[組織構造(OU)]情報から、Systemwalker Desktop KeeperのユーザーIDと、ユーザーグループツリーを自動作成できます。Active Directory連携で連携しない[コンテナ]等に[ユーザー]が所属している場合は、その[ユーザー]のユーザーIDは作成されません。

Active Directoryとの連携を行うかどうかは、Systemwalker Desktop Keeperの導入時に設定します。なお、Active Directoryと連携する情報については、“リファレンスマニュアル”の“DTKADCON.EXE(Active Directoryとの連携)”を参照してください。

Active Directory連携を実施すると、以下のような構成情報が取り込まれます。



Active Directory連携で運用しても、Localに同じ名前のユーザーIDが存在する場合は、Localのユーザーポリシーが適用されます。また、OSにドメイン参加機能がない場合は、Active Directory連携を行っても、Localで管理されます。

P ポイント

Active Directoryと連携しない部署は、Localで管理できます

Active Directoryと連携し自動作成されたCTグループツリー、ユーザーグループツリー、クライアント(CT)の所属グループ、およびユーザー情報の所属グループはSystemwalker Desktop Keeper側では変更できませんが、Systemwalker Desktop Keeper側で新規にlocal上にCTグループ、ユーザーグループまたはユーザー情報を作成することは可能です。このActive Directoryと連携していないCTグループ、ユーザーグループおよびユーザー情報は、ドメイン認証ではなくLocal認証時に適用され、再度、Active Directoryとの連携を行っても、削除、変更されることはありません。

連携方法

Active Directoryの情報を取り込むには以下の方法があります。

「サーバ設定ツール」で取り込む

Active Directory連携機能を使用して運用を開始したあとに、サーバ設定ツール画面よりActive Directoryサーバで変更された新たな運用管理情報を取り込みます。

組織変更により、人やPCが移動した場合、組織の新設がある場合、削除された組織がある場合など、必要に応じて連携し、情報を更新します。

連携の実行は、サーバ設定ソールの[設定]メニューから[Active Directory連携実施]を選択します。詳細は、“運用ガイド 管理者編”の“Active Directoryから情報を取り込む”を参照してください。

「Active Directory連携コマンド」で取り込む

Active Directory連携機能を使用して運用を開始したあとに、「Active Directory連携コマンド」の実行により、Active Directoryサーバで変更された新たな運用管理情報を取り込みます。

タスクスケジューラなどに、「Active Directory連携コマンド」を登録し、定期的にActive Directory連携を実施して構成情報を更新します。構成情報の変更の有無を意識することなく、常に最新の情報を維持できます。

Active Directory連携コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“DTKADCON.EXE(Active Directoryとの連携)”を参照してください。

CT情報(コンピュータ情報)だけ外部データから取り込む

Active Directoryでの階層構成で管理している情報はユーザー情報だけで、コンピュータ情報は階層管理していない運用場合があります。

このような場合に、Active Directoryで保持しているユーザー情報とCT情報(コンピュータ情報)を関連づけるリスト(CSV形式)を作成し取り込むことでCT情報(コンピュータ情報)の階層構成を構築できます。

取り込み方法の詳細は、“2.3.4.4 システム設定を行う”を参照してください。

連携の仕組み

管理サーバが3階層の場合には、ユーザーポリシー(ユーザー情報)は、統合管理サーバで一元管理されます。このため、Active Directory連携を行う運用の場合は管理コンソールは統合管理サーバに接続する必要があります。(管理サーバに接続した場合は統合管理サーバの設定値で上書きされます)

管理コンソールでActive Directoryと連携して得たグループ構成や、ユーザーの情報については、移動、登録、更新、および削除はできません。ただし、備考や一部のデータ項目については変更できます。

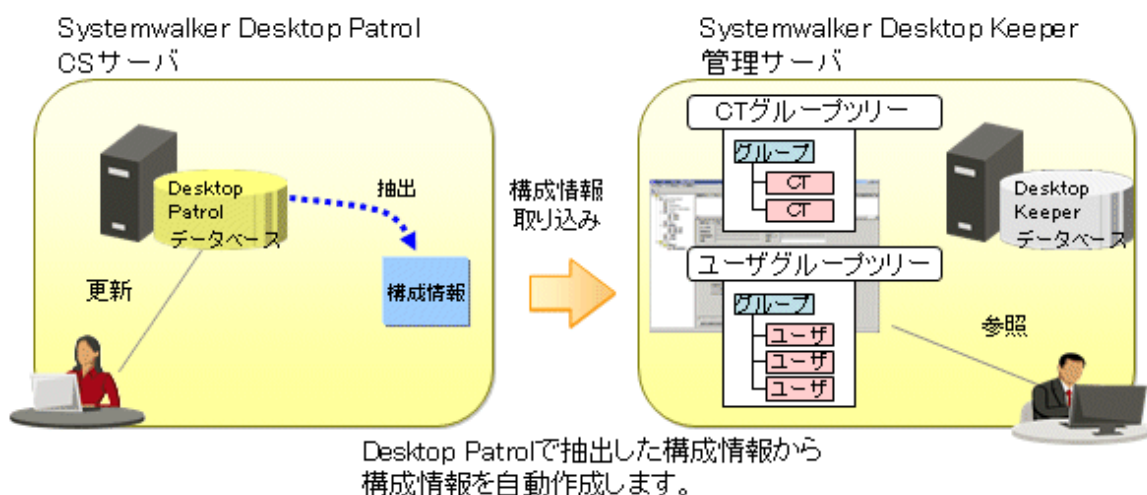
3階層のシステムの場合、CT情報は管理サーバごと、ユーザー情報は統合管理サーバで一括に取り込みを実施します。

1.2.3.2 Systemwalker Desktop Patrolと連携する

Systemwalker Desktop Patrolが保持しているCTグループおよびクライアント(CT)の構成情報をCSVファイルの形式で、Systemwalker Desktop Keeperに取り込むことができます。

ただし、Active Directory連携を行っている場合には、Systemwalker Desktop Patrolとの構成情報連携はできません。

連携できるSystemwalker Desktop Patrol製品の詳細は、“解説書”の“関連ソフトウェア”を参照してください。



連携方法

Systemwalker Desktop Patrol構成情報を自動で取り込む

Systemwalker Desktop Patrol構成情報を自動で取り込む設定を行うことで、毎日1回、Systemwalker Desktop Patrolの構成情報を取り込みます。構成情報の変更の有無を意識することなく、常に最新の情報を維持できます。設定方法の詳細は、“[2.3.4.7 他システムとの連携を設定する](#)”を参照してください。

「Systemwalker Desktop Patrol構成情報取り込みコマンド」で取り込む

「Systemwalker Desktop Patrol構成情報取り込みコマンド」の実行により、Systemwalker Desktop Patrolから出力された構成情報を取り込みます。

タスクスケジューラなどに、「Systemwalker Desktop Patrol構成情報取り込みコマンド」を登録し、定期的にSystemwalker Desktop Patrolの構成情報を取り込みます。構成情報の変更の有無を意識することなく、常に最新の情報を維持できます。

Systemwalker Desktop Patrol構成情報取り込みコマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“DTKIMPDP.EXE(Systemwalker Desktop Patrol構成情報取り込み)”を参照してください。

管理コンソールで取り込む

管理コンソールの[他システム連携]-[Systemwalker Desktop Patrol連携]-[構成情報取り込み]の実行により、Systemwalker Desktop Patrolから出力された構成情報を取り込みます。

管理コンソールでの取り込みは、すべてのグループが削除されて再作成されるため、導入時にだけ使用してください。

また、管理コンソールで取り込んだ後に「Systemwalker Desktop Patrol構成情報取り込みコマンド」を実行した場合は、すべてのグループが削除され再作成されますので注意してください。何度も構成情報を取り込む場合は、最初から「Systemwalker Desktop Patrol構成情報取り込みコマンド」で取り込んでください。

1.2.3.3 管理コンソール画面で入力する

構成情報は、管理コンソール画面で構築できます。組織情報およびユーザー情報については、それぞれ画面上で作成してください。

クライアント(CT)情報およびスマートデバイス(エージェント)情報については、ルートの下に自動的に登録されるため、所属組織に移動させることで作成できます。ただし、Active Directory連携を行っている場合は、ルート直下ではなく、Localグループ直下に登録されます。

1.2.4 ユーザーポリシー管理方法を決定する

Active Directory連携を行わない場合においても、ユーザーポリシー(ユーザー情報)を統合管理サーバで一元管理できます。ユーザーポリシー(ユーザー情報)を一元管理する場合は、管理コンソールは、必ず統合管理サーバに接続してください。

ユーザー情報の一元管理は、3階層のシステム構成で実現できます。

3階層でのシステム構成の場合、ユーザーポリシーおよび、ユーザー情報を統合管理サーバで一元管理するか、各管理サーバで管理するかを決定する必要があります。(Active Directoryと連携する場合は自動的に統合管理サーバで一元管理する設定となります)

ユーザーポリシーおよびユーザー情報を、統合管理サーバで一元管理する方法を推奨します。

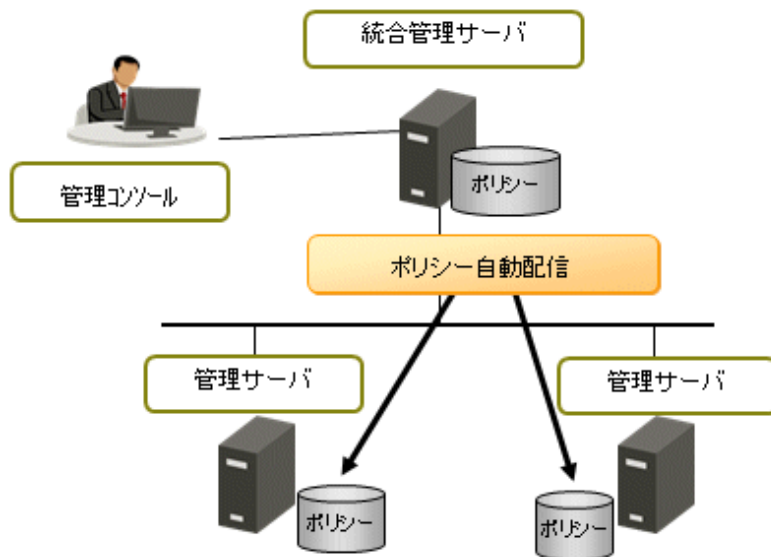
それぞれの管理方法の特徴は以下のとおりです

設定	特徴
統合管理サーバで一元管理(推奨)	<ul style="list-style-type: none">新規のユーザー情報の登録やユーザーポリシーの設定作業を各管理サーバで行う必要がないため、運用が容易となります。すべての管理サーバでユーザーポリシーが同じ設定となるため、管理サーバごとに設定を変更できません。統合管理サーバとの通信ができない場合、管理サーバは統合管理サーバの最新のユーザーポリシー、ユーザー情報を使用できません。このため、管理サーバが保持しているポリシーが適用されます。また、統合管理サーバと通信ができない状態で、管理サーバで設定した情報は、統合管理サーバとの通信が再開した時点で、統合管理サーバでの設定値に戻ります。ログ閲覧データベースのユーザー操作ログ検索機能を使用する場合、ユーザー情報が一元管理されていると、検索対象のユーザーを選択しやすくなります。

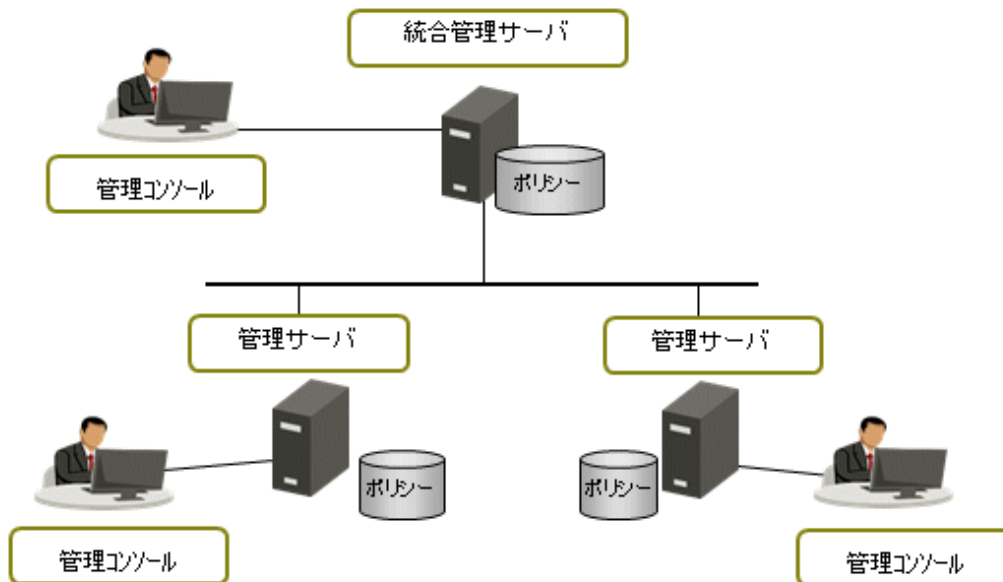
設定	特徴
各管理サーバで管理	<ul style="list-style-type: none"> 各管理サーバで設定が変更できます。 新規のユーザー情報の登録やユーザーポリシーの設定作業を各管理サーバで行う必要があります、運用が煩雑となります。

ユーザーポリシーの管理方法は、Systemwalker Desktop Keeperの導入時に設定します。

統合管理サーバで一元管理



各管理サーバで管理



注意

運用開始後にユーザーポリシーを一元管理に変更する場合の注意点について

Systemwalker Desktop Keeperの運用開始後に統合管理サーバで一元管理する設定に変更することは可能です。

各管理サーバで設定した情報を統合管理サーバに移行する機能(ユーザー定義移行コマンド)を用意していますが、各管理サーバで、同階層で同名のユーザーグループが存在する場合、一元化後、ユーザーグループツリー上で同名のグループが作成されます。このため、移行後、ユーザーの移動、ユーザーグループの削除等の整理を行う必要があります。

1.2.5 クライアント(CT)導入方法を決定する

Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)の導入方法には、以下の4つの方法があります。

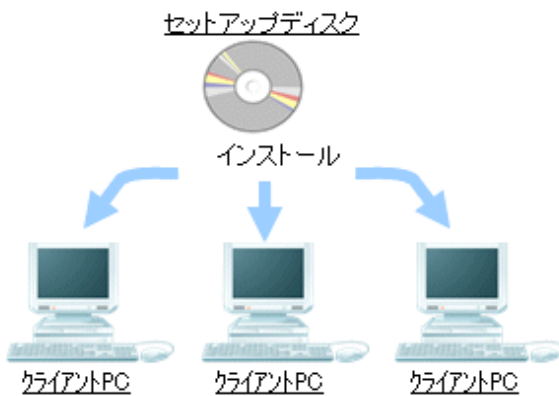
- 単体インストールによる導入
- マスタPC/マスタ仮想PCを使用した導入
- Systemwalker Desktop Patrolのソフトウェア配信機能を使用した導入
- Active Directoryのグループポリシーを使用した導入

展開するクライアントの数や、Systemwalker Desktop Patrolの導入の有無などを考慮して導入方法を決定してください。

単体インストールによる導入

Systemwalker Desktop Keeperのセットアップディスクを使用して、以下の2つの方法によりPC1台ずつインストールします。

- ウィザード形式によるインストール
- サイレントインストール



注意

クライアント(CT)端末登録時認証について

管理コンソールの端末動作設定画面にて、クライアント管理パスワードを設定してください。詳細は、“運用ガイド管理者編”の“端末動作設定を行う”を参照してください。

なお、インストール完了後は、クライアント管理パスワードを変更することを推奨します。

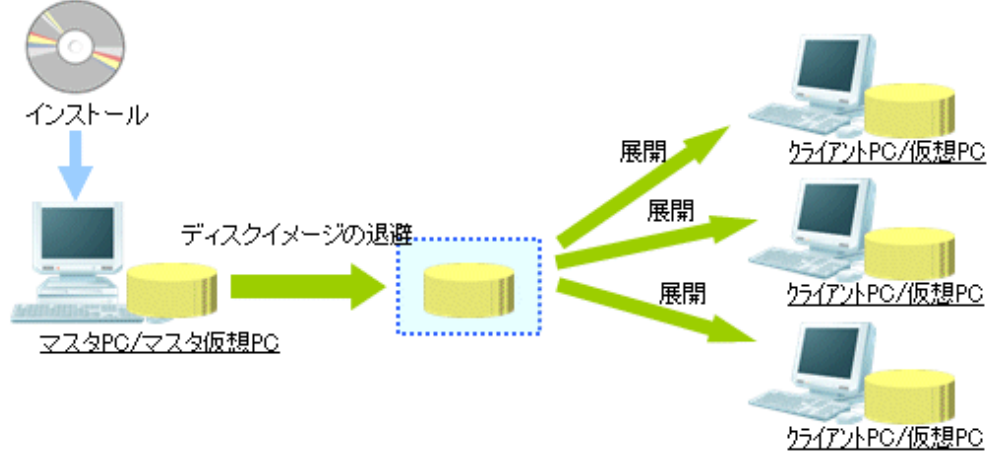
注意

インストール完了後、配付したセットアップディスクは回収してください。クライアントのインストーラを配付した場合は、インストーラを削除するようにしてください

マスタPC/マスタ仮想PCを使用した導入

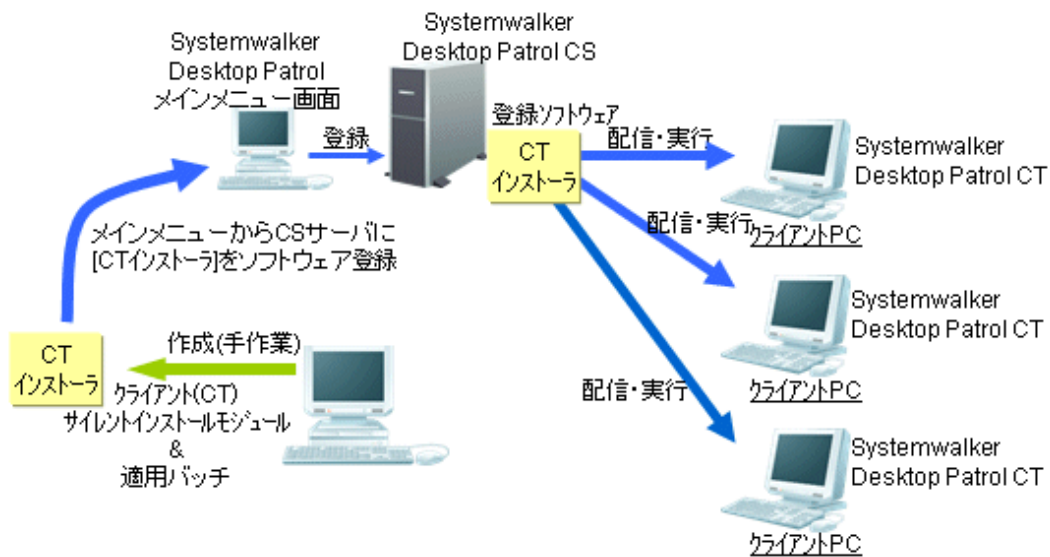
マスタとなるPC/仮想PCにクライアント(CT)をインストールし、マスタイメージを作成し、インストールするすべてのPC/仮想PCにマスタイメージを展開します。

セットアップディスク



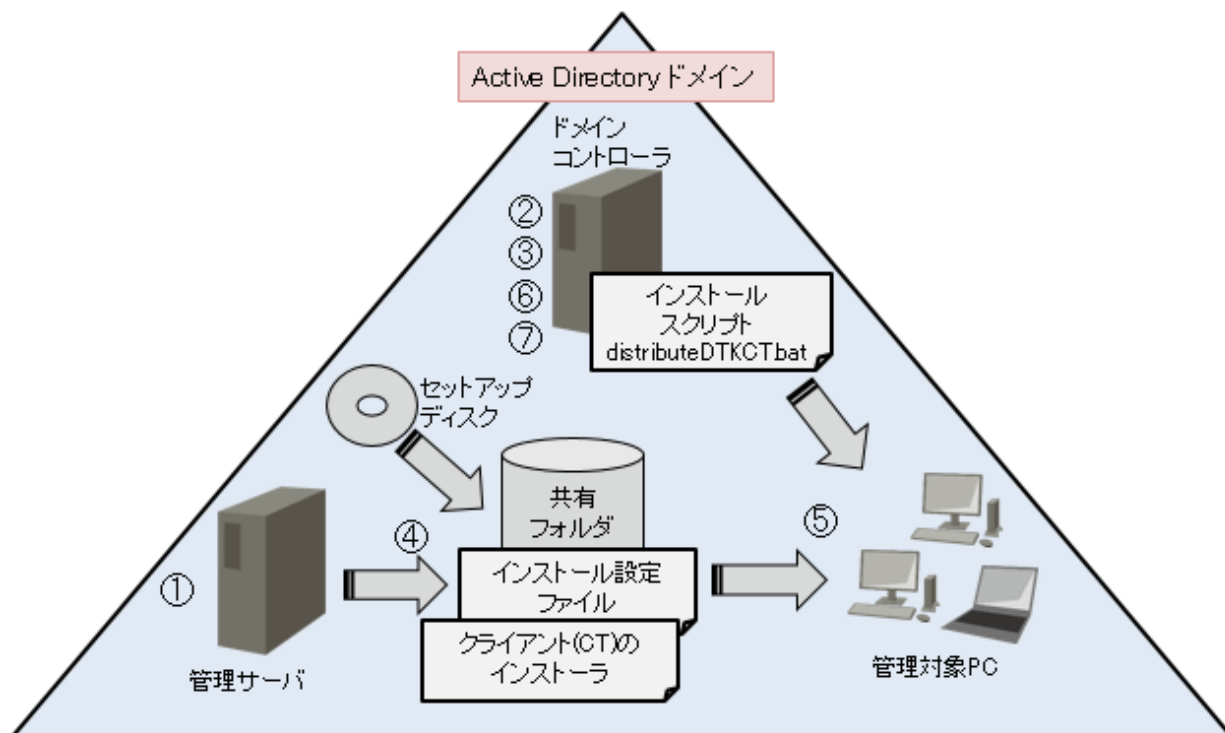
Systemwalker Desktop Patrolのソフトウェア配信機能を使用した導入

Systemwalker Desktop Patrolのソフトウェア配信機能を利用して、Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)を管理対象マシンに配付し、インストールできます。



Active Directoryのグループポリシーを使用した導入

Active Directoryのグループポリシーを使用して、Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)を管理対象マシンにインストールできます。



【手順の説明】

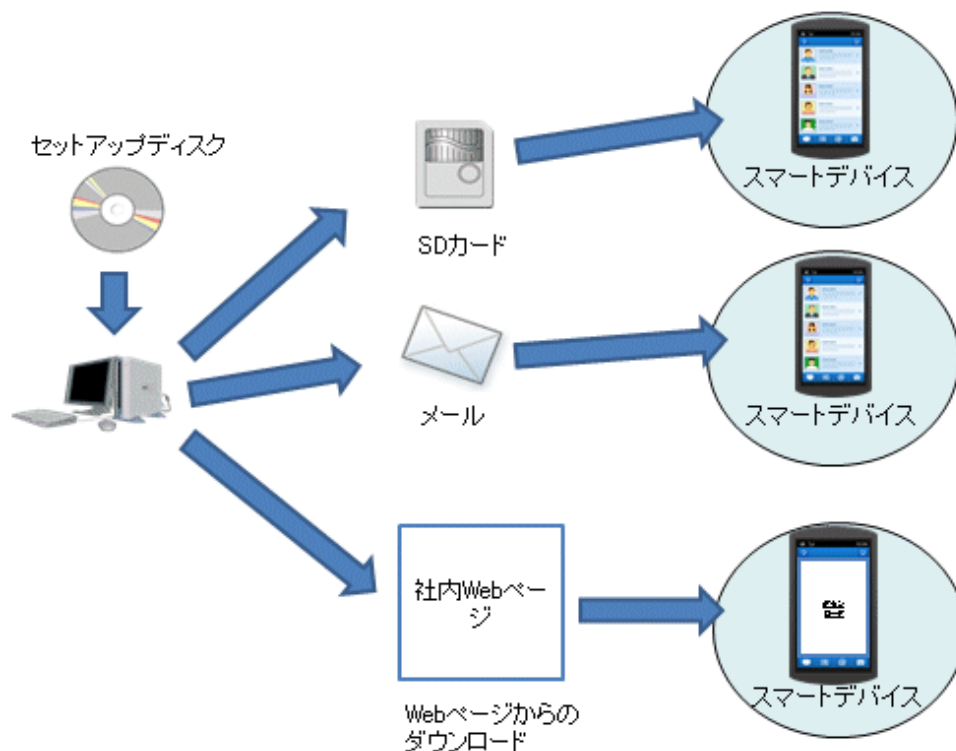
1. インストール設定ファイルを作成します。
2. インストールスクリプト"distributeDTKCT.bat"を編集します。
3. グループポリシーを準備します。
4. 1.で作成した資材とクライアント(CT)のインストーラを共有フォルダに配置します。
5. グループポリシーが適用されたPCにクライアント(CT)を自動インストールします。
6. クライアント(CT)が正常にインストールされたことを確認します。
7. グループポリシーを解除します。

1.2.6 スマートデバイス(エージェント)の導入方法を決定する

Systemwalker Desktop Keeperのスマートデバイス(エージェント)の導入方法には、以下の4つの方法があります。

- スマートデバイスの利用者がGoogle playから「Desktop Keeper Client」をダウンロード(インストール)します。
- SDカードにコピーして、スマートデバイスに配付します。(注)
- 電子メールで、スマートデバイス利用者に配付します。(注)
- 社内のWebサーバで公開し、各スマートデバイスでダウンロードします。

注) 管理するスマートデバイスがAndroid端末の場合にだけ有効です。



1.2.7 ログの運用方法を決定する

ここでは、ログの運用方法について、設計時に検討しておくべきことについて説明します。

管理サーバ/統合管理サーバでの検討項目

Systemwalker Desktop Keeperを運用し、ログを収集し続けると、保存領域が足りなくなります。このため、管理サーバ/統合管理サーバ上のログを定期的に退避し、データベース領域を削除していくことにより、データベース領域を枯渇させることなく、安定した運用を行うことができます。

管理サーバ/統合管理サーバで決定しておく項目は以下の3つです。

- ・ データベース容量(運用データベース、ログ閲覧データベース)
- ・ ログの退避方法・削除方法
- ・ 付帯データの退避方法

データベースの容量を決定する

- ー 運用データベースの容量を決定します

運用データベースは、日々の運用情報(管理情報、操作ログ情報)を管理するデータベースです。

以下の情報を設計時に検討し、運用データベース構築時の容量試算の要素を決定してください。

- 管理するクライアント(CT)の台数
- ファイル操作ログ件数
- ファイル操作以外のログ件数
- 保存月数

特に、保存月数については、ログの退避や削除の期間と連動する情報になるので、常にどれだけの期間のログを参照するかの決定が必要です。

- ー ログ閲覧データベースの容量を決定します

ログ閲覧データベースは、過去の操作ログを移入して参照するためのデータベースです。

以下の情報を設計時に検討し、ログ閲覧データベース構築時の容量試算の要素を決定してください。

- 管理するクライアント(CT)の台数
- 保存月数

ファイル操作ログ件数、ファイル操作以外のログ件数については、運用データベースの値を元に容量試算を行います。3階層でのシステム構成で、ログ閲覧データベースで下位の管理サーバも含め1度に検索を行いたい場合には、管理するクライアント(CT)の台数には下位管理サーバのクライアント(CT)台数も含めた台数を設定してください。

ログの退避方法・削除方法を決定する

ログの退避／削除は、GUI、およびコマンドによるタスク実行などにより行います。定常的な運用を行う場合は、退避コマンドを実行するバッチを作成し、定期的に行うようにしてください。GUI、コマンド、およびバッチ作成例は“[3.1.2 ユーザー資産を退避する](#)”を参照してください。また、設定変更ログについても、退避／削除を行う必要があります。設定変更ログの退避／削除は、コマンドによるタスク実行などにより行います。使用するコマンドおよび使用方法については“[3.1.2 ユーザー資産を退避する](#)”を参照してください。

ログの退避の考え方

ログの退避するタイミングは、以下の2つの考え方があります。

- 保存期間を過ぎたログを退避し、退避したログを削除します
- 直近のログを退避し、保存期間を過ぎたログを削除します

データベース容量はログ量が一時的に多くなる場合を想定して、保存月数に余裕をもって構築しておく必要があります。

付帯データの退避方法を決定する

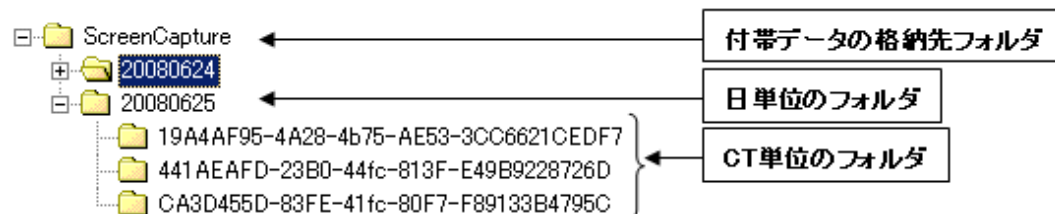
付帯データはデータベースには保存されていません。またバックアップツールでの退避対象でないため、設定によってはサーバ(またはクライアント(CT))に画面キャプチャデータ、原本保管データが大量に蓄積され、ディスク容量が枯渇する可能性があります。このため上記のログ運用とは別に、定期的な容量確認とバックアップおよび削除を行ってください。

付帯データである画面キャプチャデータ、原本保管データの格納先フォルダの構成は、以下のとおりです。付帯データの格納先については、“[2.3.4.11 保存先フォルダを設定する](#)”を参照してください。

【構成】

付帯データの格納先フォルダ
+ 日単位のフォルダ
+ CT単位のフォルダ

【例】



メール内容データの退避方法を決定する

メール内容データはデータベースには保存されていません。またバックアップツールでの退避対象ではないため、設定によってはサーバ(またはクライアント(CT))にメール本文、添付ファイルが大量に蓄積され、ディスク容量が枯渇する可能性があります。このため上記のログ運用とは別に、定期的な容量確認とバックアップおよび削除を行ってください。

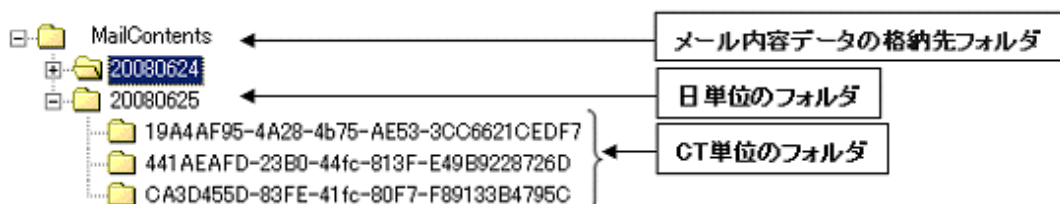
削除する場合は、DTKMLDL.BAT(メール内容削除)コマンドを使用してください。使用方法の詳細は、“リファレンスマニュアル”の“DTKMLDL.BAT(メール内容削除)”を参照してください。

メール本文、添付ファイルの格納先フォルダの構成は、以下のとおりです。メール内容データの格納先については、“[2.3.4.11 保存先フォルダを設定する](#)”を参照してください。

【構成】

メール内容データの格納先フォルダ
+ 日単位のフォルダ
+ CT単位のフォルダ

【例】



ログアナライザサーバでの検討項目

ログアナライザサーバを構築し、ログの分析機能やレポート出力機能を使用する場合、管理サーバ/統合管理サーバが収集したログは、ログアナライザサーバの共有フォルダに転送されます。

共有フォルダに格納されたログは、分析・集計され、ログアナライザサーバのデータベースに格納されますが、共有フォルダ上のログはそのまま保持されています。

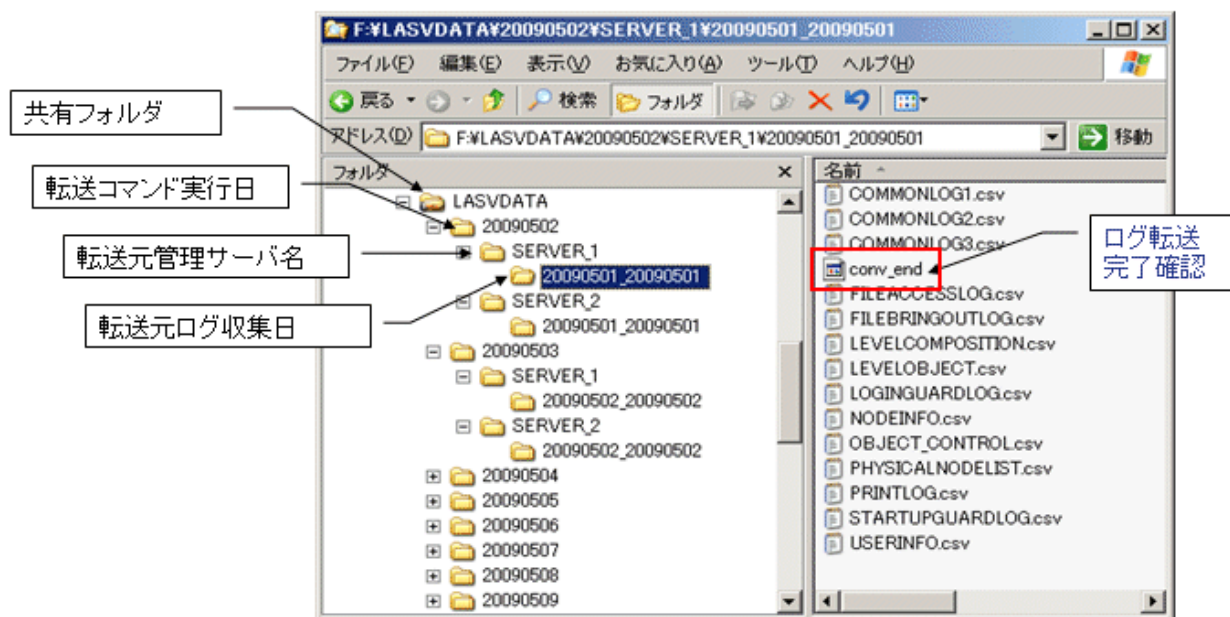
このため、ログアナライザサーバ上の共有フォルダ上に格納されたログを定期的に退避し、退避済みのログを削除していくことにより、共有フォルダ領域を枯渇させることなく、安定した運用を行うことができます。

また、共有フォルダへの転送(データ転送)、ログアナライザサーバのデータベースへの格納(データ移入)は、1日1回行われる必要があるため、それぞれのコマンドをタスク登録して運用します。このタスク登録の際、タスクが実行される時刻についても検討しておく必要があります(移入は転送完了後に行う必要があるため十分な時間を空ける、転送/移入処理は負荷がかかるため夜間に行うなど)。

ログアナライザサーバの共有フォルダの退避方法を決定する

共有フォルダが枯渇した場合、管理サーバ/統合管理サーバからログの転送に失敗します。このため定期的に共有フォルダの容量確認を行い、分析・集計済みのログについては退避した上で、削除を行ってください。

ログアナライザサーバの共有フォルダは以下のような構成になっています。



ログアナライザサーバでの分析・集計が完了していないログは、退避・削除しないでください。

転送元ログ収集日のフォルダの配下で“ログ転送完了確認用ファイル(conv_end)”が作成されているフォルダは、ログ分析・集計が完了し、ログアナライザサーバ上のデータベースに格納済みです。

上図の“転送コマンド実行日”フォルダ配下の“転送元管理サーバ名”フォルダに存在するすべての“転送元ログ収集日”フォルダに“ログ転送完了確認用ファイル(conv_end)”が作成されている場合は退避・削除ができます。“転送コマンド実行日”フォルダ単位で、退避および削除を実施してください。

1.2.8 ログアナライザの分析条件を決定する

収集したログをログアナライザサーバで分析・集計する場合、事前に設定した絞込条件および除外条件を設定します。

この条件設定が適切に行われなかった場合、分析・集計結果の精度が低くなります。このため、設計段階でどのような条件を設定すべきかを検討し、決定しておいてください。

設定する内容は以下のとおりです。

絞込条件

以下の項目を指定して、分析条件を決定します。

- キーワード：ファイルまたはファイルパスに含まれる文字列(部分一致)
- ドメイン：メールアドレスに含まれる文字列(後方一致)
- URL：URLに含まれる文字列(部分一致)
- アプリケーション：拡張子を除く実行ファイル名(完全一致)

除外条件

以下のようなPCを集計の対象外とするために、除外条件を決定します。

- 業務上の重要なファイルへのアクセスが必要なPC
- 日常的に大量のファイルアクセスを行うPC

より精度の高い分析を行うためには、以下の考慮が必要です。

- ・ 絞込条件は、ログアナライザサーバごとに設定します。このため、複数の部署が対象となる場合に、ある特定の部署に限定されるキーワードが多く設定されるとその部署以外の分析が妥当でなくなる可能性があります。キーワードは、できるだけ共通のキーワードを抽出し、部門に閉じたキーワードを細かく設定しないように配慮してください。または、同じ機密情報を扱う部署を1台のログアナライザサーバで管理できるような構成にしてください。構成の観点については、“[1.2.1 システム構成を決定する](#)”の“[1.2.1.3 ログアナライザサーバの設置基準](#)”も参照してください。
- ・ 除外条件は、上述のような例外PCを見極めておくことが重要です。集計結果の精度が低くなるような特別なPCはできるだけ集計対象とならないよう検討してください。

1.2.9 状況画面の集計条件を決定する

管理サーバ/統合管理サーバが収集したログを集計し問題PCや問題スマートデバイスの台数を確認するために、事前に環境設定で集計条件を設定します。この条件設定が適切に行われなかった場合、集計結果の精度が低くなります。このため、設計段階でどのような条件を設定すべきかを検討し、決定しておいてください。

設定する内容は以下のとおりです。

- ・ 全体に関する設定
以下の項目を設定して、集計および表示条件を決定します。
 - 集計スケジュール
 - グラフ色
 - Systemwalker Desktop PatrolのURL
 - 部門管理者へのメール通知する/しない
- ・ 集計項目ごとの設定
以下の項目を設定して、集計条件を決定します。
 - 集計する/しない
 - 監査期間
 - 項目ごとの設定項目(時間帯や曜日、持出し先ドライブ種別など)

1.2.10 ポート番号を確認する

Systemwalker Desktop Keeperで使用するポート番号が問題なく使用できるかを設計段階で確認してください。

Systemwalker Desktop Keeperで使用するポート番号は“リファレンスマニュアル”の“ポート番号とサービス”を参照し、確認してください。

Systemwalker Desktop Keeperで使用するポート番号がすでにシステムで使用されている場合は、ポート番号の変更を行ってください。

また、Systemwalker Desktop Keeperでは、Webブラウザを使用して管理を行います。IISを利用して管理するため、IISのポート番号を「80」に設定してください。

ポート番号「80」がすでにシステムで使用されている場合、ポート番号の変更を行ってください。

ポート番号の変更方法については、“リファレンスマニュアル”の“ポート番号とサービス”を参照してください。

第2章 導入

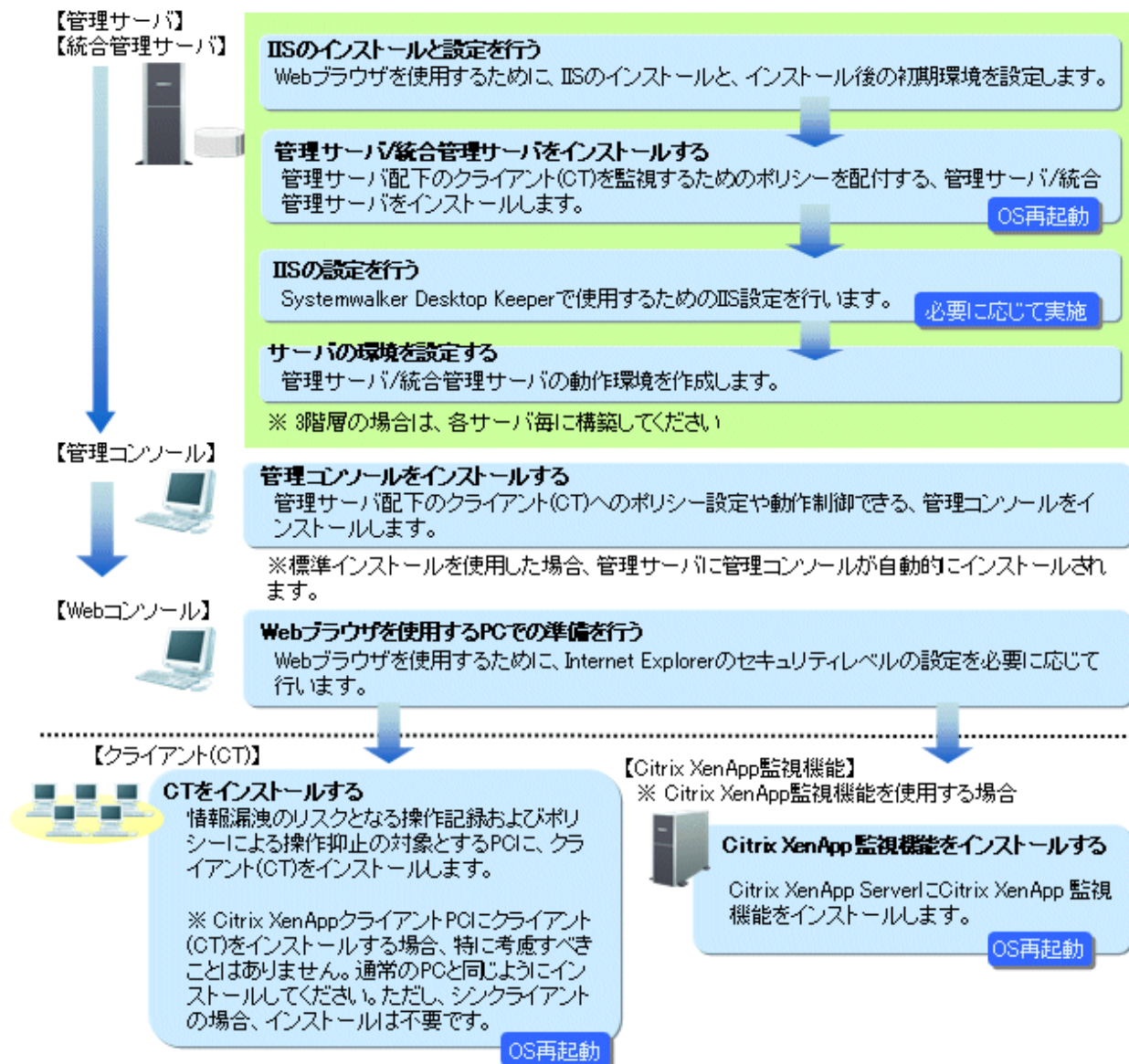
本章では、Systemwalker Desktop Keeperの導入方法について説明します。

2.1 導入手順

Systemwalker Desktop Keeperの導入手順について説明します。

ログ分析機能、レポート出力機能を使用しない場合

Systemwalker Desktop Keeperの基本構成(ログアナライザサーバなし)での導入手順は以下のとおりです。

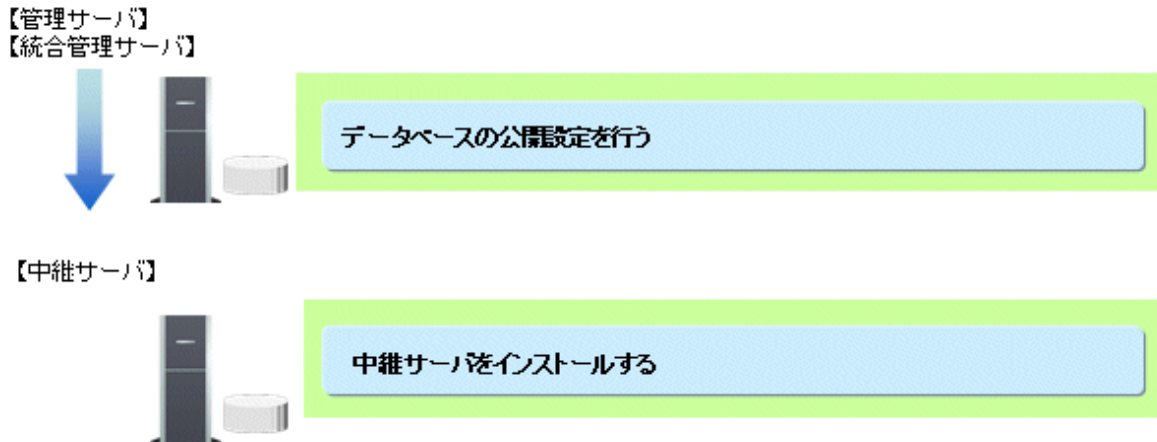


スマートデバイスの管理機能を使用する場合、またはクライアント(CT)をインターネット経由で管理サーバ/統合管理サーバにアクセスさせる場合

スマートデバイスを管理する場合、または、クライアント(CT)をインターネット経由で管理サーバ/統合管理サーバにアクセスさせる場合は、上記の手順に加え、中継サーバの構築が必要です。なお、以下の手順は、スマートデバイス(エージェント)またはクライアント(CT)を展開する前に行ってください。

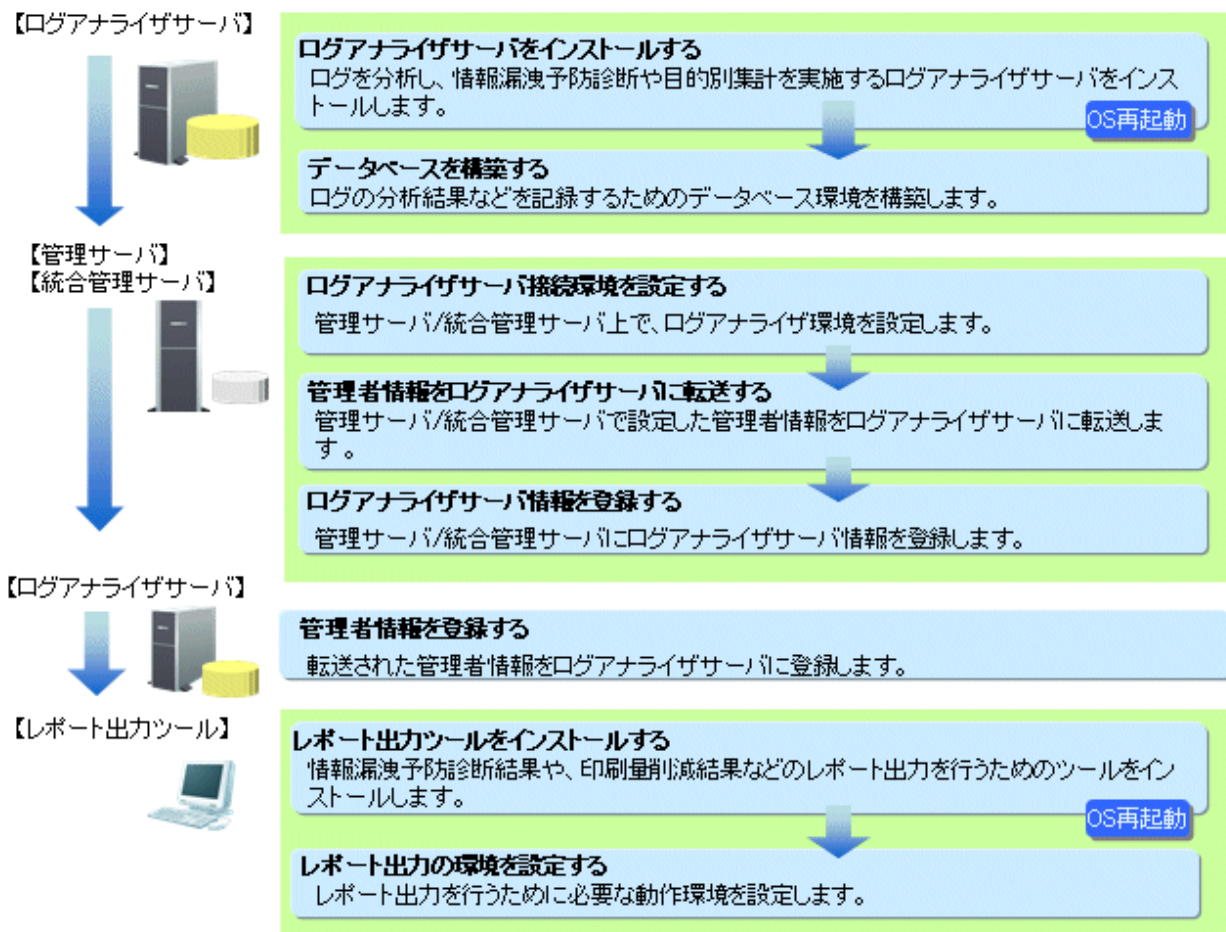
中継サーバの構築は、管理サーバ/統合管理サーバの構築が終了してから実施してください。

さらに、クライアント(CT)をインターネット経由で管理サーバ/統合管理サーバにアクセスさせる場合は、管理サーバ/統合管理サーバにて、セキュア通信を行うための設定が必要です。



ログ分析機能、レポート出力機能を使用する場合

ログアナライザサーバを構築し、ログ分析機能およびレポート出力機能を使用する場合は、上記の手順に加え、以下の手順が必要です。
なお、下記手順は、クライアント(CT)およびスマートデバイス(エージェント)を展開する前に行っても問題ありません。



管理サーバ/統合管理サーバにクライアント(CT)をインストールする場合

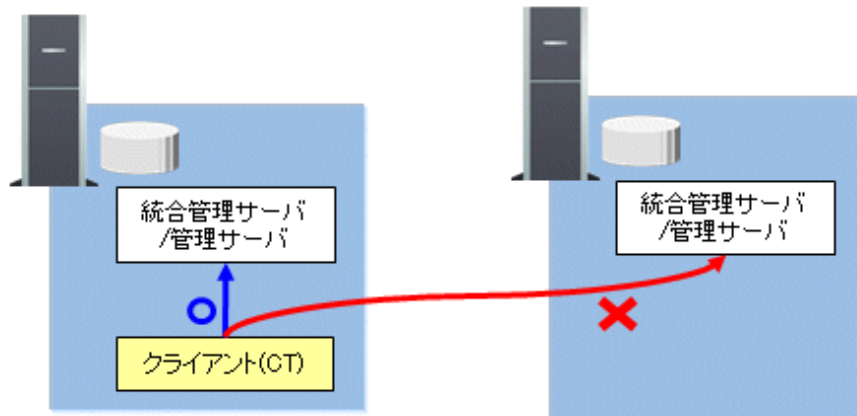
管理サーバ/統合管理サーバにクライアント(CT)をインストールする手順は以下のとおりです。

1. 管理サーバ/統合管理サーバのインストール
2. クライアント(CT)のインストール

必ず管理サーバ/統合管理サーバを先にインストールしてください。逆の場合は管理サーバ/統合管理サーバがインストールできません。

接続するサーバについて

管理サーバ/統合管理サーバにクライアント(CT)をインストールする場合、そのクライアント(CT)は自サーバの管理サーバ/統合管理サーバにしか登録できません(下図を参照してください)。



2.2 事前準備

iOS端末を管理するための事前準備

iOS端末の管理を行う場合に実施します。iOS端末の管理を行うために、Apple社の提供する Apple Push Notification Service を使用します。

以下の手順で Apple社の発行する「MDM 証明書」を取得します。MDM証明書は、導入時に中継サーバに設定します。



注意

Mac OS で実施してください。

1. iOS Developer Enterprise Programへの登録
以下のURLにアクセスし、「Apple Developer Enterprise Program」への登録を行ってください。
<https://developer.apple.com/programs/enterprise/> (2020年2月現在)
2. 署名証明書(MDM Signing Certificate)の取得
Apple社に連絡し、MDMベンダーの登録を依頼します。連絡方法は、Apple社窓口への電話、またはメールで可能です。MDMベンダーとして登録したい旨を伝えると、Apple社が登録作業を行います。
Apple社の指示に従い、署名証明書を作成します。
この手順で作成する秘密鍵は、手順3で必要になります。
3. 秘密鍵の書き出し
署名証明書を作成した際に使用した秘密鍵をPKCS#12形式で出力します。「キーチェーンアクセス」を使用して書き出しを行うことができます。書き出しの際に必要なパスフレーズは、手順6で必要となります。
4. Apple社中間証明書の取得
以下のサイトから中間証明書(Worldwide Developer Relations)を取得します。
<http://www.apple.com/certificateauthority/> (2020年2月現在)
5. Apple社ルート証明書の取得
以下のサイトからルート証明書(Apple Inc. Root Certificate)を取得します。
<http://www.apple.com/certificateauthority/> (2020年2月現在)

6. MDM証明書の申請ファイルの作成

手順2から手順5で取得した証明書および秘密鍵を使用して、MDM証明書の秘密鍵とMDM証明書の申請ファイルを作成します。以下のコマンドをMac OS上で実行することで作成できます。コマンドの使用方法については、“リファレンスマニュアル”の“sign_csr.sh(MDM証明書申請ファイルの作成)”を参照してください。

```
<Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをセットしているドライブ>:¥  
win32¥SmartDevice¥x86¥Server¥unified¥Tool¥sign_csr.sh
```

7. MDM証明書の取得

手順6で作成した申請ファイルを以下のApple社のサイトへアップロードすることで、MDM証明書をダウンロードできます。

<https://identity.apple.com/pushcert/> (2020年2月現在)

8. MDM証明書の形式変換

ダウンロードしたMDM証明書の形式を変換します。

「ターミナル」を開き、以下のコマンドを実行します。MDM証明書がPKCS#12形式に変換されます。変換後のファイルを中継サーバに登録する必要があります。

```
openssl pkcs12 -export -in MDM証明書 -inkey MDM証明書の秘密鍵 -out 任意のファイル名
```

[MDM証明書]には、ダウンロードしたMDM証明書を指定します。(必須)

[MDM証明書の秘密鍵]には、手順6で作成された秘密鍵を指定します。(必須)

[任意のファイル名]には、変換後の証明書のファイル名を指定します。拡張子には、p12を指定してください。(必須)

2.3 管理サーバ/統合管理サーバを構築する

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバのインストール、および環境構築について説明します。

2.3.1 IISのインストールと設定



注意

通信はHTTPSで行うことを推奨します。

Systemwalker Desktop Keeperでは、Webブラウザを使用してログの参照や分析を行います。IISを利用して管理するため、管理サーバ/統合管理サーバをインストールする前に、IISのインストールと設定が必要です。

■ Windows Server 2008(IIS 7.0/IIS 7.5)の場合

Windows Server 2008の場合、事前にISAPI拡張の導入を行う必要があります。

ISAPI拡張の導入手順は以下のとおりです。

IISを新規インストールする場合のISAPI拡張の導入手順

1. [コントロールパネル]-[管理ツール]-[サーバー マネージャ]を選択します。

2. [サーバー マネージャ]画面が表示されるので、[役割の追加]をクリックします。



3. [役割の追加ウィザード]の[開始する前に]画面が表示されるので、[次へ]をクリックします。
4. [役割の追加ウィザード]の[サーバーの役割の選択]画面が表示されるので、[Webサーバー(IIS)]をチェックし、[次へ]をクリックします。
5. [役割の追加ウィザード]の[Webサーバー(IIS)]画面が表示されるので、[次へ]をクリックします。
6. [役割の追加ウィザード]の[役割サービスの選択]画面が表示されるので、以下の項目をチェックし、[次へ]をクリックします。

- [アプリケーション開発]-[ISAPI拡張]
- [管理ツール]-[IIS6管理互換]

なお、以下の項目がチェックされていない場合は、チェックしてください。

- [HTTP基本機能]-[静的なコンテンツ]
- [HTTP基本機能]-[既定のドキュメント]
- [HTTP基本機能]-[ディレクトリの参照]
- [HTTP基本機能]-[HTTPエラー]

7. [役割の追加ウィザード]の[インストールオプションの確認]画面が表示されるので、[インストール]をクリックします。
8. インストールが完了したら、[閉じる]をクリックして終了します。

IISがインストールされている場合のISAPI拡張の導入手順

1. [コントロールパネル]-[管理ツール]-[サーバー マネージャ]を選択します。

2. [サーバー マネージャ]画面が表示されるので、ツリービューで、[役割]-[Webサーバー(IIS)]を選択します。



3. [Webサーバー(IIS)]画面表示されるので、[役割サービスの追加]をクリックします。
4. [役割サービスの追加]の[役割サービスの選択]画面が表示されるので、以下の項目がチェックされていない場合はチェックし、[次へ]をクリックします。
 - [アプリケーション開発]-[ISAPI拡張]
 - [管理ツール]-[IIS6管理互換]なお、以下の項目がチェックされていない場合は、チェックしてください。
 - [HTTP基本機能]-[静的なコンテンツ]
 - [HTTP基本機能]-[既定のドキュメント]
 - [HTTP基本機能]-[ディレクトリの参照]
 - [HTTP基本機能]-[HTTPエラー]
5. [インストールオプションの確認]画面が表示されるので、[インストール]をクリックします。
6. インストールが完了したら、[閉じる]をクリックし終了します。

■ Windows Server 2012(IIS 8.0/IIS 8.5)、Windows Server 2016(IIS 10.0)、Windows Server 2019(IIS 10.0)の場合

Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019の場合、事前にISAPI拡張の導入を行う必要があります。
ISAPI拡張の導入手順は以下のとおりです。

IISを新規インストールする場合のISAPI拡張の導入手順

1. スタート画面から[サーバーマネージャ]をクリックします。
2. [サーバーマネージャ]画面が表示されるので、[役割と機能の追加]をクリックします。
3. [役割と機能の追加ウィザード]の[開始する前に]画面が表示されるので、[次へ]をクリックします。
4. [役割と機能の追加ウィザード]の[インストールの種類を選択]画面が表示されるので、[役割ベースまたは機能ベースのインストール]を選択して[次へ]をクリックします。

5. [役割と機能の追加ウィザード]の[対象サーバーの選択]画面が表示されるので、[サーバープールからサーバーを選択]を選択して[次へ]をクリックします。
6. [役割と機能の追加ウィザード]の[サーバーの役割の選択]画面が表示されるので、[Webサーバー(IIS)]をチェックし、[次へ]をクリックします。
[Webサーバ(IIS)]に必要な機能を追加しますか?の確認画面が表示された場合は、[機能の追加]をクリックします。
再度、[役割と機能の追加ウィザード]の[サーバーの役割の選択]画面が表示されるので、[Webサーバー(IIS)]がチェックされているかを確認し、[次へ]をクリックします。
7. [役割と機能の追加ウィザード]の[機能の選択]画面が表示されるので、[次へ]をクリックします。
8. [役割と機能の追加ウィザード]の[Webサーバーの役割(IIS)]画面が表示されるので、[次へ]をクリックします。
9. [役割と機能の追加ウィザード]の[役割サービスの選択]画面が表示されるので、以下の項目をチェックし、[次へ]をクリックします。

- [アプリケーション開発]-[ISAPI拡張]
- [管理ツール]-[IIS6管理互換]
- [管理ツール]-[IIS6管理互換]-[IIS6 メタベース互換]
- [管理ツール]-[IIS6管理互換]-[IIS6 WMI互換]
- [管理ツール]-[IIS6管理互換]-[IIS6 スクリプトツール]
- [管理ツール]-[IIS6管理互換]-[IIS6 管理コンソール]

なお、以下の項目がチェックされていない場合は、チェックしてください。

- [HTTP共通機能]-[静的なコンテンツ]
- [HTTP共通機能]-[既定のドキュメント]
- [HTTP共通機能]-[ディレクトリの参照]
- [HTTP共通機能]-[HTTPエラー]

項目のチェック時に[Webサーバー(IIS)]に必要な機能を追加しますか?や[IIS6 WMI互換に必要な機能を追加しますか?]の確認画面が表示された場合は[機能の追加]をクリックします。

10. [役割と機能の追加ウィザード]の[インストールオプションの確認]画面が表示されるので、[インストール]をクリックします。
11. インストールが完了したら[閉じる]をクリックします。

IISがインストールされている場合のISAPI拡張の導入手順

1. IISを新規インストールする場合のISAPI拡張の導入手順の1～5を行います。
2. [役割と機能の追加ウィザード]の[サーバーの役割の選択]画面が表示されるので、[Webサーバー(IIS)(インストール済み)]をクリックします。

ツリー構造になっていますので、以下の項目をチェックし、[次へ]をクリックします。

- [Webサーバー(インストール済み)]-[アプリケーション開発]-[ISAPI拡張]
- [管理ツール(インストール済み)]-[IIS6管理互換]
- [管理ツール(インストール済み)]-[IIS6管理互換]-[IIS6 メタベース互換]
- [管理ツール(インストール済み)]-[IIS6管理互換]-[IIS6 WMI互換]
- [管理ツール(インストール済み)]-[IIS6管理互換]-[IIS6 スクリプトツール]
- [管理ツール(インストール済み)]-[IIS6管理互換]-[IIS6 管理コンソール]

項目のチェック時に[Webサーバー(IIS)]に必要な機能を追加しますか?や[IIS6 WMI互換に必要な機能を追加しますか?]の確認画面が表示された場合は[機能の追加]をクリックします。

3. [役割と機能の追加ウィザード]の[インストールオプションの確認]画面が表示されるので、[インストール]をクリックします。
4. インストールが完了したら[閉じる]をクリックします。

2.3.2 管理サーバ/統合管理サーバをインストールする

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバおよび統合管理サーバを、新規にインストールする方法について説明します。
新規インストール時には、管理コンソールもインストールされます。

管理サーバ/統合管理サーバの新規インストール方法には、以下の2つがあります。

- ・ ウィザード形式のインストール
- ・ サイレントインストール

旧版の管理サーバ/統合管理サーバがインストールされた状態で、V15.3.0の管理サーバ/統合管理サーバをインストールする場合は“[第4章バージョンアップ](#)”を参照してください。



注意

インストール完了後、サーバ設定ツール、バックアップツール、リストアツールにおける初期管理者(secureadmin)のパスワードには、以下が設定されています。

secureadminの初期パスワード:secureadmin

また、インストール時にデータベースを構築した場合には、管理コンソール/ログビューアのユーザーID/パスワードが設定されます。

管理コンソール/ログビューアのユーザーID:systemadmin

管理コンソール/ログビューアのパスワード:systemadmin

これらのパスワードはインストール完了後、初期パスワードでログインすると変更手順が表示されるので、表示に従い速やかに変更してください。

パスワードは、8文字以上で英数字と記号を組み合わせ、定期的に変更することを推奨します。



ポイント

インストール時にイベントログに以下のメッセージが出力される場合があります。

イベントログの内容

ソース名: Service Control Manager Eventlog Provider

イベントID: 7030

レベル: エラー

内容: SWServerService サービスは、対話型サービスとしてマークされています。
しかし、システムは対話型サービスを許可しないように構成されています。
このサービスは正常に機能しない可能性があります。

イベントログの内容

ソース名: Service Control Manager Eventlog Provider

イベントID: 7030

レベル: エラー

内容: SWLevelControlService サービスは、対話型サービスとしてマークされています。
しかし、システムは対話型サービスを許可しないように構成されています。
このサービスは正常に機能しない可能性があります。

このメッセージは、OSが対話型サービスを推奨しないために表示されるメッセージで、動作上の問題はありません。

2.3.2.1 インストール前の確認事項

- ・ “解説書”の“動作環境”を参照して、データベース関連ファイルのインストール先に指定するドライブに必要なディスク容量が確保できているか確認してください。
- ・ “解説書”の“動作環境”を参照して、“混在運用できない製品”を確認してください。
- ・ “リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照して、使用するポート番号を確認してください。

- Systemwalker Desktop KeeperのインストーラをDVD-ROMからローカルディスクへコピーしてインストールする場合、コピー先のパスに全角文字などの2バイト文字を含まないようにしてください。
- 以下のどちらかのデータベースが残っている場合は、インストールできません。

- Symfoware RDB SWDTK
- Symfoware RDB SWDTK2

データベースが残っているかの確認は、[コントロールパネル]-[管理ツール]-[サービス]で、上記データベースが存在しているかをご確認ください。

- すでにSystemwalker Desktop Patrolがインストールされている環境にSystemwalker Desktop Keeperをインストールする場合、iOS端末を管理するためのサービスが自動的に停止します。
この場合、iOS端末を管理するためのサービスはOSを再起動するまで使用できなくなります。

2.3.2.2 ウィザード形式でインストールする

管理サーバ/統合管理サーバのインストール手順は、以下のとおりです。なお、動作環境については“解説書”の“動作環境”を参照してください。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。
他のアプリケーションを使用している場合は、終了してください。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。
[管理サーバ/管理コンソール インストール]を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。
3. [Systemwalker Desktop Keeper サーバ セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. [インストール先の選択]画面が表示されます。
表示されているインストール先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。
表示されているインストール先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。
各コンポーネントのインストール先は以下のとおりです。
 - 管理サーバ/統合管理サーバ: インストール先のフォルダ¥Server
 - 管理コンソール: インストール先のフォルダ¥MngConsole
 - データベース関連ファイル: インストール先のフォルダ¥DB
 - ログアナライザ連携コマンド類: インストール先のフォルダ¥LogAnalyzer

注意

サーバ機能のインストール先フォルダや下記のデータベース関連ファイルのインストール先フォルダを圧縮または暗号化の対象とした場合、プログラム動作に影響がでる可能性があります。圧縮や暗号の設定を行わないでください。

[インストール先のフォルダ]で指定できる最大パス長は半角85文字です。

[インストール先のフォルダ]には、空白、ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字は指定できません。

また、以下のドライブは指定できません。

- ネットワークドライブ
- フォーマット形式がNTFS以外のドライブ

フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。半角カナも使用しないでください。

5. [インストールパラメーターの設定]画面が表示されます。
必要な情報を入力し、[次へ]ボタンをクリックします。

項目名	説明
[運用データベース]の [作成先]	データベースの作成先を指定します。 データベース作成先フォルダは以下の条件を満たす必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> ・ドライブのルートは指定できません。 ・全角文字を含まないように指定してください。 ・パス長は96文字以内の半角文字で指定してください。 ・ネットワークドライブは指定できません。 ・NTFSでフォーマットされているフォルダを指定してください。 ・フォルダ名に「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」「&」「^」は指定できません。
[自動バックアップ]の[作 成先]	自動バックアップ先を指定します。 自動バックアップ先フォルダは以下の条件を満たす必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> ・ドライブのルートは指定できません。 ・ネットワークドライブは指定できません。 ・指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)まで入力できます。 ・フォルダ名に「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」は指定できません。
[運用データベース]の [ディスク空き容量]	指定された運用データベース作成先の空きディスク容量が表示されます。
[自動バックアップ]の [ディスク空き容量]	指定された自動バックアップ作成先の空きディスク容量が表示されます。

注意

[運用データベース]の[作成先]、[自動バックアップ]の[作成先]には、あらかじめデータベース容量試算ツールに必要なデータベースの容量を見積もっておき、ディスク空き容量に余裕のあるドライブを指定してください。

注意

自動バックアップ/削除の初期値は以下のように設定されます。

- 自動バックアップ:行う
- タスク名:DTK_Auto_Backup_Command
- バックアップ先フォルダ:インストール時に指定したフォルダ
- スケジュールの種類:1回/日
- 実行開始時刻:0時0分
- バックアップ対象:前日1日分
- 保存期日:30日

※本設定では30日までのデータを保存しそれ以降(31日以前)のデータを削除します。

※各項目の詳細・設定の変更については“[3.1.2.2 バックアップ・削除を自動化する](#)”を参照してください。

6. [インストール準備の完了]画面が表示されます。
インストールを開始する場合は、[インストール]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。
設定した内容を確認または、変更したい場合は、[戻る]ボタンをクリックし、再度設定をやりなおしてください。
7. 以下のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックして、インストール処理を続行します。

サーバ設定ツールのログイン情報として以下を登録します。

ユーザーID : secureadmin
パスワード : secureadmin

管理コンソール/メインメニューのログイン情報として以下を登録します。

ユーザーID : systemadmin
パスワード : systemadmin

8. 以下のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックして、インストール処理を続行します。

インストールの最後に「正常にインストールしました」という画面が表示されます。
画面が表示されるまでインストールが継続していますのでお待ちください。

9. 以下のメッセージが表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

Systemwalker Desktop Keeper管理サーバを正常にインストールしました。

10. 処理が正常に完了すると、[確認]画面が表示されます。
プログラムを使用するには、[はい]ボタンをクリックして、OSを再起動します。

2.3.2.3 サイレントインストールを実施する

注意

- 管理サーバ/統合管理サーバのサイレントインストールは、新規インストールだけに対応しています。
- ログアナライザサーバと同居する環境にサイレントインストールする場合、管理サーバ/統合管理サーバを先にインストールしてください。
- サイレントインストール中は処理を中断しないでください。

管理サーバ/統合管理サーバのサイレントインストールの手順は、以下のとおりです。

1. インストールパラメーターCSVファイルを作成します。
すべてのパラメーターをデフォルト値でインストールする場合は、本手順は不要です。
インストールパラメーターCSVファイルの詳細は、“[A.1.1 インストールパラメーターCSVファイル](#)”を参照してください。

2. パラメーター設定コマンドを利用して、応答ファイルを作成します。
 1. でインストールパラメーターCSVファイルを作成していない場合は、本手順は不要です。パラメーター設定コマンドの詳細は、“[A.1.2 パラメーター設定コマンド](#)”を参照してください。
3. サイレントインストール用スクリプトを利用して、インストールを実行します。サイレントインストール用スクリプトの詳細は、“[A.1.4 サイレントインストール用スクリプト](#)”を参照してください。
4. インストール結果を確認します。サイレントインストール用スクリプトの復帰値およびメッセージを確認してください。

サイレントインストールで使用するファイル、コマンドおよびメッセージの詳細については、“[A.1 管理サーバ/統合管理サーバのサイレントインストール](#)”を参照してください。

2.3.3 IISの設定

Systemwalker Desktop Keeperでは、Webブラウザを使用して管理を行うため、WebサーバとしてIISを利用します。管理サーバ/統合管理サーバのインストール時にIISの設定は自動で行われます。



Systemwalker Desktop Keeperで利用するアプリケーションプール([DTK])の詳細設定で[ユーザープロファイルの読み込み]を[True]にしないでください。

[True]にした場合、Webコンソールが正常に動作しない場合があります。

2.3.4 管理サーバ/統合管理サーバの環境を設定する



通信セキュリティ設定について

V14.3.1以前のクライアント(CT)の自己版数管理要求を受け付ける場合、通信セキュリティ設定を切り替えてください。セキュリティ強化コマンドを使用することで通信セキュリティ設定を切り替えることが可能です。セキュリティ強化コマンドの使用方法については、“リファレンスマニュアル”の“DTKSETCN.exe (セキュリティ強化コマンド)”を参照してください。



クライアント(CT)端末登録時認証について

クライアント(CT)端末登録時認証を行う場合、管理コンソールの端末動作設定画面にて、クライアント管理パスワードを設定してください。詳細は、“運用ガイド管理者編”の“端末動作設定を行う”を参照してください。

管理サーバ/統合管理サーバをインストールした後、サーバの環境を設定します。サーバの環境設定には、コマンドおよびサーバ設定ツールを使用します。なお、クライアント(CT)との通信方式は、独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)に加えて、セキュア通信方式を選択することもできます。

サーバ設定ツールの機能

サーバ設定ツールには、以下の機能があります。

【導入時設定】

管理サーバ/統合管理サーバの初期環境構築時に設定する機能です。

- データベース構築・削除・情報表示
- システム設定
- Active Directory連携設定

- ー サーバ情報設定
- ー 他システム連携設定

【運用情報設定】

管理者の登録機能、および運用時に管理者に通知する内容や動作について設定する機能です。初期環境構築時に設定してください。

- ー 管理者情報設定
- ー 管理者通知設定

管理者情報設定については、導入時にアクセス権が“管理コンソール・ログビューア”のユーザーは必ず登録してください。

【環境設定】

管理サーバの通信環境設定や、保守で使用する機能です。

- ー 管理サーバ設定
- ー トレース設定
- ー フォルダ/CT自己版数アップ設定

フォルダ/CT自己版数アップ設定のうち、保存先フォルダの設定については、初期値で問題ないか必ず導入時に確認してください。

【ツール】

クライアント(CT)のサイレントインストール時に使用する機能です。

- ー CTサイレントインストールファイル生成

CTサイレントインストールファイル生成機能は”[2.6.1.2 サイレントインストールを実施する](#)”を参照してください。

サーバ設定ツールの起動方法

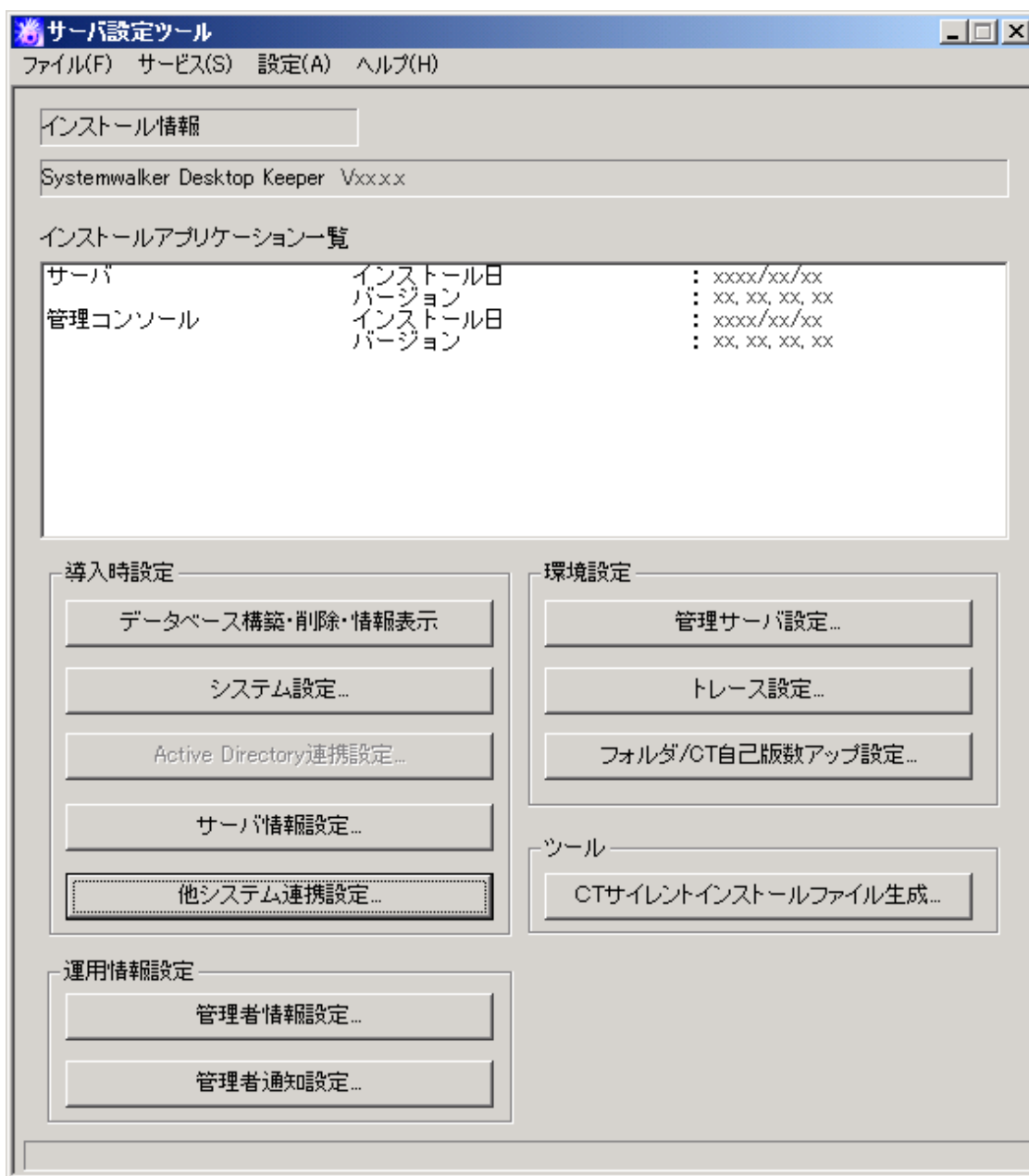
サーバ設定ツールの起動方法は以下のとおりです。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。
2. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[サーバ設定ツール]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ設定ツール]を選択すると、ログイン画面が表示されます。
3. 初期管理者のアカウントでログインします。初期管理者のアカウントは以下のとおりです。
 - ー ユーザーID:secureadmin
 - ー パスワード:管理サーバ/統合管理サーバインストール後に変更されたパスワード

なお、サーバ設定ツールで登録したユーザー(管理コンソールが実行できるアクセス権が必要)でログインすることもできますが、使用できる機能は“管理者通知設定”だけです。

パスワードは管理サーバをインストールした直後は" secureadmin"が設定されています。

4. [OK]ボタンをクリックすると、以下の画面が表示されます。



[サーバ設定ツール]画面のメニューバーについて説明します。

メニューバー		機能概要
[ファイル]	[終了]	サーバ設定ツールを終了します。
[サービス]	[サービス状況確認]	接続している管理サーバ上の[階層化サービス]、[サーバサービス]の動作状況を表示します。
	[サービス起動]	接続している管理サーバ上の[階層化サービス]、[サーバサービス]を起動します。
	[サービス停止]	接続している管理サーバ上の[階層化サービス]、[サーバサービス]を停止します。
[設定]	[Active Directory連携実施]	Active Directoryとの連携処理を実行します。

メニューバー		機能概要
	[Systemwalker Desktop Patrol連携実施]	Systemwalker Desktop Patrolとの連携処理を実行します。
	[パスワード変更]	初期管理者のパスワードを変更します。 パスワードは半角の英数字と記号32文字以内で指定してください。 使用できない記号は、「&」「<」「>」「 」「¥」「"」「~」「'」「?」「:」「^」です。 全角および半角の空白は入力できません。
	[サーバ設定ツールトレース]	[しない]
		[概要]
		[詳細]
[ヘルプ]	[オンラインヘルプ]	Systemwalker Desktop Keeperのオンラインマニュアルを表示します。
	[バージョン情報]	著作権情報およびバージョン情報を表示します。

サーバ設定ツールを終了する場合は、[ファイル]メニューの[終了]を選択してください。

2.3.4.1 サーバ環境設定手順

管理サーバ/統合管理サーバをインストールした後のサーバの環境設定手順は以下のとおりです。



注意

運用開始後に使用する場合は、サービスの停止が必要です

サーバ設定ツールで設定を行う場合は、管理サーバ/統合管理サーバのサービスを停止する必要があります。ただし、以下の設定を行う場合は特にサービス停止の必要はありません。

- 管理者情報設定
- 管理者通知設定
- CTサイレントインストールファイル生成

サービスを停止する場合は、必ず、全ての管理コンソールを終了してください

管理サーバ/統合管理サーバは管理コンソールの接続時に接続元アドレスが正しいかどうか判定します。

そのため、管理サーバ/統合管理サーバのサービスを再起動する場合は、必ず接続している全ての管理コンソールを終了させ、サービス起動後に再度接続してください。

管理コンソールを終了させずに管理サーバに接続しようとしても接続できません。

接続できない状態となった場合は、管理コンソールを終了させ、再度接続してください。

なお、管理コンソールの終了には、以下の時間を要します。

[サーバ設定ツール]-[管理サーバ設定]の[サーバ間通信タイムアウト値]

【管理サーバ】
【統合管理サーバ】



OSのインストールと設定を行う

管理サーバ/統合管理サーバをインストールする

OS再起動

OSの設定を行う

必要に応じて実施

サーバの環境を設定する

サーバ設定ツールを使用して管理サーバ/統合管理サーバの動作環境を作成します。

セキュア通信のための設定 ※セキュア通信を行う場合のみ
クライアント(CT)とのセキュア通信のための設定を行います。

データベースを構築する

過去の操作ログを参照するため、またはOS端末を管理するためのデータベース環境を構築します。

システム設定

管理サーバのデータ連携方式など、システム全体の動作に関する設定を行います。

Active Directory連携設定

連携するActive Directoryサーバの情報を設定します。
※ Active Directoryと連携を行う場合にだけ設定してください。

サーバ情報設定

自サーバの情報、また3階層の場合は、関連する他サーバの情報を設定します。

他システム連携設定

他システムとの連携設定を行います。
※ 他システムと連携する場合だけ設定してください。

管理者情報設定

管理コンソール、ログビューア、および保守ツールの認証ユーザを登録します。
※ ユーザー情報の一元管理を行う場合は、統合管理サーバでだけ設定してください。

管理者通知設定

クライアント(CT)や、データベースで発生した事象を、管理者に通知(メール通知/イベントログへの書き込み)する設定を行います。

保存先フォルダ設定

コマンドプロンプト操作ログ、付帯データ、一括ログの保存先フォルダの設定を行います。

サービス起動

管理サーバのサービス(階層化サービス、サーバサービス)を起動します。

サービス起動方法

管理サーバのサービス起動方法は以下のとおりです。

1. [サーバ設定ツール]画面の[サービス]メニューから[サービス起動]を選択します。
2. サービス起動確認の画面が表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。

サービスが起動しているかは、[サーバ設定ツール]画面の[サービス]メニューから[サービス状態確認]を選択すると、確認できます。



注意

サービス起動後は、Webコンソールにログインしてください

管理サーバのサービスを起動後は、“2.5 Webブラウザを使用するPCでの準備”を実施した上で、Webコンソールにログインして状況画面を表示してください。ログインしていない間は、イベントログに以下のエラーが出力される場合があります。

イベントID : 3403

種類 : エラー

ソース : SWDTK_LC

メッセージ:「状況に関する設定が未初期化または壊れています。事前にWebコンソールに1度ログインしてください。あるいは状況に関する設定を再度実施してください。」

Webコンソールへのログイン方法は、“運用ガイド 管理者編”の“状況画面を表示する”を参照してください。

2.3.4.2 セキュア通信のための設定を行う

Systemwalker Desktop Keeper管理サーバにて、クライアント(CT)とのセキュア通信を行うための設定を行います。本設定は、セキュア通信を行う場合だけ必要です。

2.3.4.2.1 証明書を設定する

クライアント(CT)とのセキュア通信で使用する証明書環境を構築します。



注意

- 3階層のシステム構成の場合は、すべての統合管理サーバ/管理サーバで同じ設定にしてください。
- 証明書の導入、更新の際には管理サーバのサービスを停止しておいてください。

証明書導入時の設定

以下の手順で設定します。

1. DTKSVMakeCSR.exeコマンドで、-certfileオプションを指定してサーバ証明書を生成します。

例:

```
DTKSVMakeCSR.exe -file c:%temp%\dtk.csr -validity 36500 -CN SV1.dtk.co.jp -OU "Sales department" -O "DTK K.K." -L Chuo-Ku -ST Tokyo -C JP -certfile c:%temp%\dtk.cer
```

2. DTKSVImportCert.exeコマンドで、手順1で生成したサーバ証明書を登録します。

例:

```
DTKSVImportCert.exe -file c:%temp%\dtk.cer
```

3. DTKSVConfig.exeコマンドで、手順2で登録したサーバ証明書の利用を「有効」にします。

例:

```
DTKSVConfig.exe -usercert enable
```

4. DTKSVSetMS.exeコマンドで、セキュア通信サービスを有効にします。

例:

```
DTKSVSetMS.exe -Windows.enabled true
```

証明書更新時の設定

“証明書導入時の設定”の手順1.～手順3.を実施します。手順4.は不要です。

各コマンドの詳細については、“リファレンスマニュアル”の“コマンドリファレンス”を参照してください。

2.3.4.2.2 通信方式を設定する

クライアント(CT)と管理サーバ間の通信方式を設定します。

設定手順は、以下のとおりです。

1. 移行対象情報ファイル(DTKServerChange.txt)を作成し、管理サーバに保存します。
移行対象情報ファイルの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“移行対象情報ファイル”を参照してください。

格納場所

C:\ProgramData\Fujitsu\Systemwalker Desktop Keeper

セキュア通信を行う場合は、移行対象情報ファイルの11番目の項目に“3”(セキュア通信方式を使用)を設定してください。

設定する値	動作
0または空文字列	クライアント(CT)にすでに設定されている値を変更しません
2	独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)を使用
3	セキュア通信方式を使用



- 管理サーバの変更がない場合、移行対象情報ファイルの3番目の項目(サーバIPアドレス)は空欄を設定してください。クライアント(CT)に設定されている管理サーバのアドレスと同じサーバIPアドレス、または、ホスト名を設定した場合、通信方式、ポート番号が変更されません。
- 管理サーバ上にCT機能が同居している場合、そのCT機能については通信方式は変更できません。
- セキュア通信方式とインターネット経由で管理サーバ/統合管理サーバに接続する場合は、クライアント(CT)に設定するポート番号が異なります。“リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照し、通信方式に合わせたポート番号を設定してください。

→クライアント(CT)起動時または管理コンソールからの即時更新時に、設定内容がCTポリシーとしてクライアント(CT)に情報通知されます。

通知結果は、移行対象情報ファイル・実行ログ(DTKServerChange.log)として、管理サーバの以下に出力されます。

C:\ProgramData\Fujitsu\Systemwalker Desktop Keeper

2. クライアント(CT)にポリシーが適用された後に、クライアント(CT)を再起動してください。ポリシーが適用されたかどうかは、管理コンソールの「クライアントポリシー更新日時」が更新されたかどうかでご確認ください。
3. 通信方式が設定されたことを確認した後、移行対象情報ファイルを削除するか、格納場所以外の場所へ移動します。

2.3.4.3 データベースを構築する

Systemwalker Desktop Keeper 管理サーバ/統合管理サーバのデータベースを、新規に構築する方法について説明します。

データベースは、運用情報(管理情報、操作ログ情報)を格納する運用データベースと過去の操作ログを移入して参照するためのログ閲覧データベースがあります。

運用データベースは必須です。管理サーバ/統合管理サーバを新規にインストールした場合は自動で構築されます。ログ閲覧データベースは、必要に応じて構築してください。また、iOS端末の管理を行う場合には、別途、iOS管理データベースを構築する必要があります。旧版で使用していたデータベースは一度削除する必要があります。

管理サーバ/統合管理サーバインストールの際のデータベース構築にて、データベースに格納されるデータの自動バックアップ、削除が設定されています。設定を変更するには、“3.1.2.2 バックアップ・削除を自動化する”をご参照ください。

また、データベースが枯渇することを未然に防ぐため、データベース領域枯渇時の通知設定を行ってください。データベース領域枯渇時の通知設定については、“2.3.4.10 管理者通知を設定する”を参照してください。データベース領域枯渇が通知された場合は速やかにデータベースの再構築を行ってください。データベースの再構築については、“運用ガイド 管理者編”の“管理サーバのデータベースを再構築する”を参照してください。

注意

データベース領域枯渇が通知された場合、データベースを再構築するまで領域が確保されないため、通知が出続けます。通知のしきい値を低くするか、速やかにデータベースの再構築を行ってください。

注意

データベースを構築する場合、以下の制限・注意があります

【データベース作成先の圧縮・暗号化について】

データベースを構築するドライブやフォルダは、圧縮や暗号の設定を行わないでください。

【データベース作成先のウイルススキャンについて】

データベースを構築するフォルダは、ウイルススキャンソフトウェアの対象から外してください。

【データベース作成時のユーザーについて】

Windowsへのログオンユーザー名は、Administrator権限を持つ18文字以内の先頭が英字で始まる英数字を指定してください。

【イベントビューアの設定について】

事前にイベントビューア(アプリケーションログ)の最大ログサイズ、最大になったときの動作の設定を確認し、新規のイベントログが問題なく記録されるようにしてください。イベントログが記録されない状態ではデータベースの構築作業が中断する場合があります。

データベース構築前の確認事項

管理サーバ/統合管理サーバでは以下のポートをデータベースアクセス時に使用します。

- ・ 運用データベース:42050番
すでに上記ポート番号が使用されている場合は、運用データベースを構築する前に“リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照し、Systemwalker Desktop Keeperの環境を変更してください。
- ・ ログ閲覧データベース:42051番
すでに上記ポート番号が使用されている場合は、ログ閲覧データベースを構築する前に“リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照し、Systemwalker Desktop Keeperの環境を変更してください。

データベース構築時間の目安についてデータベース構築時間:1分
注)サーバ性能、RAID構成によってはこれ以上時間がかかる場合があります。

運用データベースを構築する

運用データベースは、管理サーバ/統合管理サーバを新規にインストールした場合は自動で構築されます。運用データベースを手動で構築する場合の手順は、以下のとおりです。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了してください。
ユーザー名には条件があるので、上記注意事項を参照してください。
2. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[サーバ設定ツール]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ設定ツール]を選択すると、ログイン画面が表示されます。
3. 初期管理者のアカウントでログインします。初期管理者のアカウントは以下のとおりです。
 - ー ユーザーID:secureadmin
 - ー パスワード:管理サーバ/統合管理サーバインストール後に変更されたパスワード(デフォルトはsecureadminです。)

- サーバ設定ツールのメニューから[データベース構築・削除・情報表示]ボタンをクリックします。
→[データベース構築・削除・情報表示]画面が表示されます。

項目名	説明
[データベース作成先]	<p>データベースの作成先を入力します。初期値は、“C:\YDTK\%OPEDB”です。表示されている作成先から変更する場合は、[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更してください。</p> <p>データベース作成先のフォルダ名として指定できる文字数は、半角文字で96文字までです。</p> <p>以下のドライブは指定できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ネットワークドライブ ・ フォーマット形式がNTFS以外のファイルシステムのドライブ <p>フォルダ名に以下の文字は使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 記号(「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」「&」「^」) ・ ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字 ・ 半角カナ ・ 制御文字
[データベース使用量]	作成したデータベースの容量が表示されます。構築されていない場合は、空白となります。
[ディスク空き容量]	作成先ディスクの空き容量が表示されます。

- [設定内容の確認]画面が表示されるので、画面に表示されている内容に誤りがないか確認し、[構築]ボタンをクリックします。
[処理の実行]画面が表示され、データベースの作成を開始します。
- 処理が正常に完了すると、[処理完了]画面が表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

7. [自動バックアップ設定]画面が表示されます。

対象	退避画面
自動バックアップ・削除	<p>自動バックアップ・削除を行うかを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行う: 自動バックアップ・削除を行います。 ・ 行わない: 自動バックアップ・削除を行いません。 <p>初期値: 行う</p>
自動バックアップ・削除設定	<p>自動バックアップ・削除の設定を行います。</p>
タスク名	<p>タスクスケジュールに登録されるタスク名です。</p> <p>固定値(DTK_Auto_Backup_Command)です。</p>
バックアップ先フォルダ	<p>自動バックアップでデータを保存するフォルダを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 絶対パスでフォルダ名を入力する 出力する管理情報格納フォルダまでのパスを絶対パスで入力します。 ・ [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、出力する管理情報を格納するフォルダを選択したあとに、[開く]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)まで入力できます。ただし、以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p> <p>バックアップした管理情報は指定したフォルダのサブフォルダ名MSyyyyymmdd配下に格納されます。(yyyyymmddはバックアップ処理を実行した日)</p> <p>なお、同じ日に同じフォルダへ2度以上バックアップを実行した場合はサブフォルダの末尾に(1)という名前が自動的に付加されます。</p> <p>2度目 MSyyyyymmdd(1)</p>

対象	退避画面
	3度目 MSyyyyymmdd(2) 4度目 MSyyyyymmdd(3) (以降、同様に番号が付加されます。) 初期値: インストール時に指定したフォルダ
スケジュールの種類	自動バックアップ・削除を行う間隔の設定を行います。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 日: 毎日行います ・ 週: 週1回行います ・ 月: 月1回行います 初期値: 日
実行曜日	[スケジュールの種類]で[週]を選択した場合に実行する曜日を選択します。 月～日を選択できます。 初期値: 月
実行日	[スケジュールの種類]で[月]を選択した場合に実行する日を入力します。 1～31を入力できます。 初期値: 1
実行開始時刻	自動バックアップ・削除を実行する時間を設定します。 0時0分～23時59分で指定できます。 初期値: 0時0分
範囲指定	自動バックアップ・削除の範囲を指定します。
前日1日分のバックアップを行い、保存期日以前のデータを削除します。	操作ログを保存する期間を1～365日で指定します。 指定した期間外の操作ログのデータは削除されます。 例) 30日とした場合は31日以前の操作ログのデータを削除 初期値: 30 本設定は、[スケジュールの種類]で[日]を選択した場合だけ指定可能です。
保存期日分のデータをデータベースに残し、それ以前のデータをバックアップ・削除します。	操作ログを保存する期間を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 日: 1～365で指定できます。手入力も可能です。 ・ 週: 1～52で指定できます。 ・ 月: 1～12で指定できます。 [スケジュールの種類]で[日]を選択した場合は、[日]だけ選択できます。 [スケジュールの種類]で[週]を選択した場合は、[日]と[週]が選択できます。 [スケジュールの種類]で[月]を選択した場合は、[日]と[月]が選択できます。 初期値: <ul style="list-style-type: none"> ・ 日: 30 ・ 週: 4 ・ 月: 1 指定した期間外の操作ログのデータは削除されます。 例) 30日とした場合は31日以前の操作ログのデータを削除

各項目の詳細・設定の変更については、“[3.1.2.2 バックアップ・削除を自動化する](#)”を参照してください。

注意

運用中に範囲指定を変更する場合は、事前にバックアップツールを利用してバックアップを行ってください。以下のように一部期間のデータがバックアップされない場合があります。

例:「保存期日分のデータをデータベースに残し、それ以前のデータをバックアップ・削除します。」で保存期日を2日以上に設定した運用中に「前日1日分のバックアップを行い、保存期日以前のデータを削除します。」に設定変更した場合。例えば、設定変更前の保存期日に10日が設定されていた場合、前々日以前の10日分のバックアップが採取されません。

8. [自動バックアップ・削除]の[行う]をチェックし、[設定]ボタンをクリックします。

注意

[実行日]に29日以降を指定すると、指定された日が存在しない月には実行されない旨のメッセージが表示されます。

実行月によって、指定された日が存在しない場合、自動バックアップ・削除は動作しません。毎月確実に実行させるためには、28日以前を指定してください。

注意

自動バックアップしたデータは自動的に削除されませんので、放置しておく、バックアップ先ドライブが枯渇する可能性があります。このため定期的に削除(移動)して下さい。

「[BKCI-INF001]自動バックアップのスケジュールを設定しました。」のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。または、[自動バックアップ・削除]の[行わない]をチェックし、[設定]ボタンをクリックします。

「[BKCI-INF002]自動バックアップのスケジュールを解除しました。」のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。

注意

自動バックアップ・削除にかかる時間について

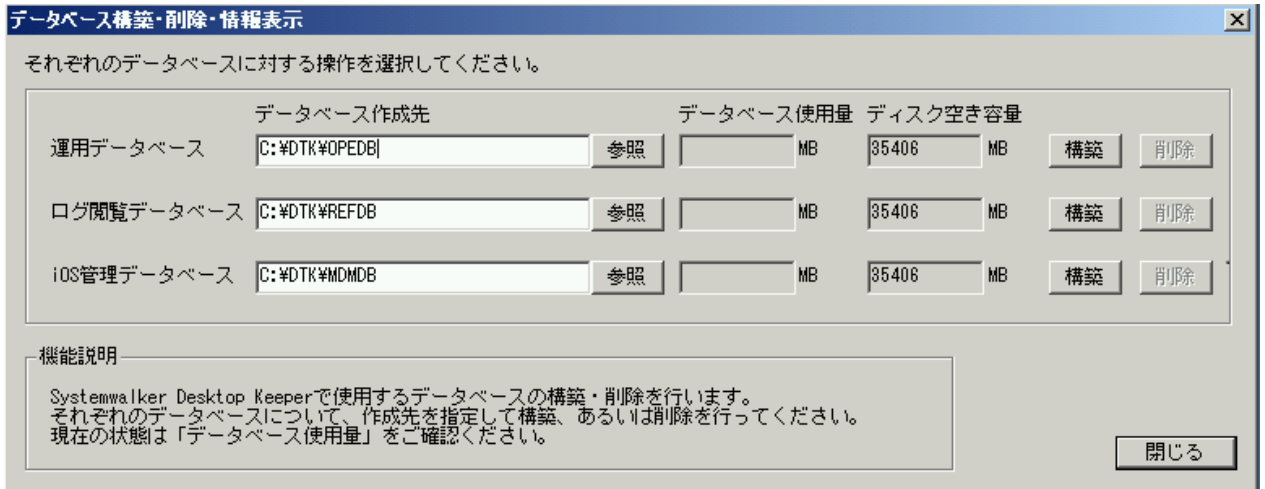
自動バックアップ・削除は、管理情報のバックアップ、ログビューア形式のログ情報のバックアップ、ログ情報のバックアップ、ログ情報の削除を行うため、時間がかかる場合があります。

ログ閲覧データベースを構築する

ログ閲覧データベースの構築方法を以下に説明します。なお、ログ閲覧データベースは、運用データベースが構築されている必要があります。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了してください。
ユーザー名には条件があるので、上記注意事項を参照してください。
2. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[サーバ設定ツール]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ設定ツール]を選択すると、ログイン画面が表示されます。
3. 初期管理者のアカウントでログインします。初期管理者のアカウントは以下のとおりです。
 - ユーザーID:secureadmin
 - パスワード:管理サーバ/統合管理サーバインストール後に変更されたパスワード(デフォルトはsecureadminです。)

4. サーバ設定ツールのメニューから[データベース構築・削除・情報表示]ボタンをクリックします。
→[データベース構築・削除・情報表示]画面が表示されます。



項目名	説明
[データベース作成先]	データベースの作成先を入力します。初期値は、“C:\%DTK%\REFDB”です。表示されている作成先から変更する場合は、[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更してください。 データベース作成先のフォルダ名として指定できる文字数は、半角文字で96文字までです。 以下のドライブは指定できません。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ネットワークドライブ ・ フォーマット形式がNTFS以外のファイルシステムのドライブ フォルダ名に以下の文字は使用できません。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 記号(「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」「&」「^」) ・ ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字 ・ 半角カナ ・ 制御文字
[データベース使用量]	作成したデータベースの容量が表示されます。構築されていない場合は、空白となります。
[ディスク空き容量]	作成先ディスクの空き容量が表示されます。

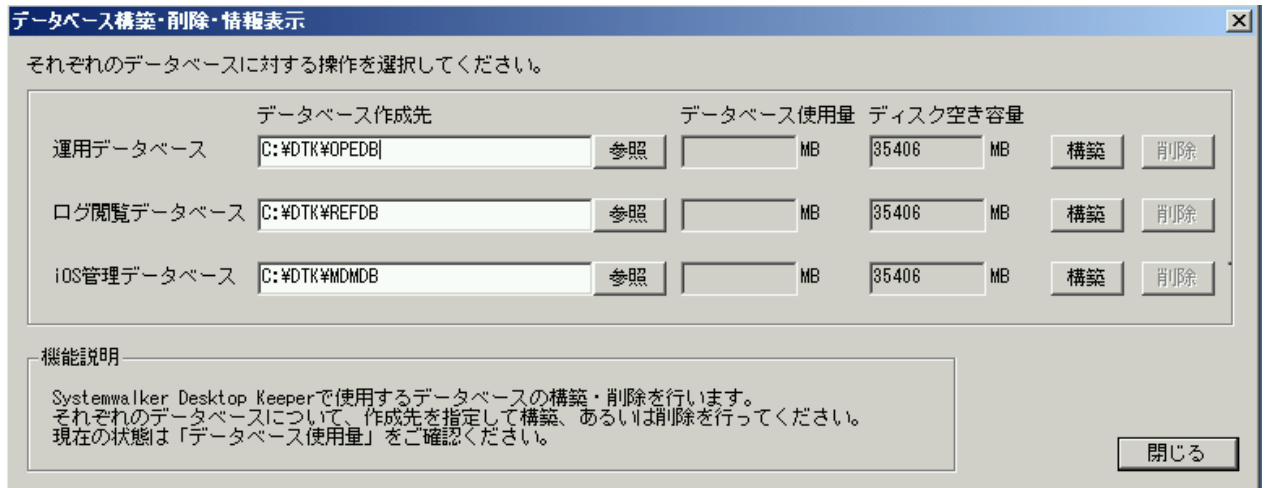
5. [設定内容の確認]画面が表示されるので、画面に表示されている内容に誤りがないか確認し、[構築]ボタンをクリックします。
[処理の実行]画面が表示され、データベースの作成を開始します。
6. 処理が正常に完了すると、[処理完了]画面が表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

iOS管理データベースを構築する

iOS端末を管理する場合は、iOS管理データベースを構築する必要があります。iOS管理データベースの作成方法を以下に説明します。

- Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了してください。
ユーザー名には条件があるので、上記注意事項を参照してください。
- [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[サーバ設定ツール]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ設定ツール]を選択すると、ログイン画面が表示されます。

- 初期管理者のアカウントでログインします。初期管理者のアカウントは以下のとおりです。
 - ユーザーID:secureadmin
 - パスワード:管理サーバ/統合管理サーバインストール後に変更されたパスワード(デフォルトはsecureadminです。)
- サーバ設定ツールのメニューから[データベース構築・削除・情報表示]ボタンをクリックします。
 - [データベース構築・削除・情報表示]画面が表示されます。



項目名	説明
[データベース作成先]	<p>データベースの作成先を入力します。初期値は、“C:\YDTK\YMDMDB”です。表示されている作成先から変更する場合は、[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更してください。</p> <p>データベース作成先のフォルダ名として指定できる文字数は、半角文字で96文字までです。</p> <p>以下のドライブは指定できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ネットワークドライブ フォーマット形式がNTFS以外のファイルシステムのドライブ <p>フォルダ名に以下の文字は使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> 記号(「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」「&」「^」) ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字 半角カナ 制御文字
[データベース使用量]	作成したデータベースの容量が表示されます。構築されていない場合は、空白となります。
[ディスク空き容量]	作成先ディスクの空き容量が表示されます。

- [設定内容の確認]画面が表示されるので、画面に表示されている内容に誤りがないか確認し、[構築]ボタンをクリックします。[処理の実行]画面が表示され、データベースの作成を開始します。
- 処理が正常に完了すると、[処理完了]画面が表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

iOS管理データベースが待ち受けをするポートは初期値(55432)で設定されます。変更が必要な場合は、“リファレンスマニュアル”の“使用するポート番号の変更方法”を参照して、変更してください。

注意

- Systemwalker Desktop KeeperとSystemwalker Desktop Patrolの両製品でiOS端末を管理する場合、両製品でiOS管理データベース構築を行う必要があります。
- iOS管理データベースを構築後にOSを再起動する場合には、OSを再起動する前にWindowsのサービス画面を表示し、「PostgreSQL_swtdmdm」サービスを選択して、[操作]メニューから[停止]を選択し、サービスを停止してください。停止せずにOS再起動を行った場合、イベントログに以下のメッセージが出力される場合があります。

```
ERROR: canceling statement due to user request
```

このメッセージは、OSがサービスを停止させた際に表示されるメッセージで、動作上の問題はありません。

2.3.4.4 システム設定を行う

Systemwalker Desktop Keeper 管理サーバのシステム全体動作に関する設定を行います。

注意

3階層のシステム構成の場合は、全管理サーバで同じ設定にしてください。

システム設定の手順は以下のとおりです。

- サーバ設定ツールのメニューから[システム設定]ボタンをクリックします。
→[システム設定]画面が表示されます。


[データ連携方式の設定]

項目名	説明
[Active Directory連携]	<p>Active Directoryとの連携を行うかを設定します。 この設定は管理サーバのインストール時に指定しているため、管理サーバのインストール時の設定から変更する場合に設定してください。</p> <p>Active Directory連携を行う</p> <p>Active Directoryとの連携を行う場合に選択します。この設定では以下の情報がActive Directoryの情報から作成されるので、Systemwalker Desktop Keeper側での設定が不要となります。Active Directoryとの連携を行う場合も、連携しないlocal管理としての情報を設定することは可能です。</p> <p>— CTグループおよびツリー情報</p>

項目名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> － クライアント(CT)のCTグループ所属情報 － ユーザーグループおよびツリー情報 － ユーザー名 － ユーザー名のユーザーグループ所属情報 <p>Active Directory連携を行わない</p> <p>Active Directoryとの連携を行わない場合に選択します。</p> <p>“Active Directory連携を行う”を選択した場合、Systemwalker Desktop Patrolの構成情報を取り込むことはできません。また、本製品の情報をSystemwalker Desktop Patrolに出力することもできません。</p> <p>なお、Systemwalker Desktop Keeperの運用開始後に、Active Directoryと連携設定を変更する場合は、“運用ガイド 管理者編”の“構成情報の取り込み方を変更する”を参照してください。</p>
[ユーザー作成時の状態]	<p>Active Directoryからの新規ユーザーについては、[ユーザーポリシー非適用]状態で取り込む場合、[ユーザーポリシー非適用]をチェックします。</p>
[Active Directoryに未登録のCT/ユーザーに対する操作]	<p>Active Directoryに未登録のクライアント(CT)やユーザーIDの対応を設定します。(local管理されているクライアント(CT)やユーザーIDの対応)この設定は管理サーバのインストール時に指定しているので、管理サーバのインストール時の設定から変更する場合に設定してください。</p> <p>全部門管理者に許可する</p> <p>Active Directoryに未登録のクライアント(CT)やユーザーIDをすべての部門管理者が扱うことを許可する場合に選択します。</p> <p>指定の部門管理者に限定する</p> <p>Active Directoryに未登録のクライアント(CT)やユーザーIDを、管理コンソールで指定した部門管理者だけ扱うことを許可する場合に選択します。Active Directoryと連携を行わない設定の場合は、無条件で、指定の部門管理者に限定する設定となります。</p> <p>“指定の部門管理者に限定する”と指定した場合、localグループ直下は部門管理者が設定できないため、localグループ直下のCTやユーザーが表示されません。この場合は、システム管理者が、部門管理者の扱えるグループにCTやユーザーを移動させてください。</p>
[CTの登録位置の参照]	<p>クライアント(CT)の位置情報をActive Directoryより取得するか対応ファイルより取得するかを設定します。</p> <p>Active Directoryのコンピュータの位置に合わせる</p> <p>CTの位置情報をActive Directoryから取得する場合に選択します。</p> <p>コンピュータ名とユーザー名の対応をファイルで指示する</p> <p>クライアント(CT)の位置情報を「コンピュータとユーザーの対応リスト」により取得する場合に選択します。(Active Directoryにおいて、コンピュータ情報を階層構造にて管理していない場合に独自の関連付けが可能です。)</p> <p>本項目を選択した場合、[参照]ボタンをクリックして、作成済みの対応ファイル(CSV形式)を取り込んでください。指定できる絶対パスの長さは、半角で255文字(全角で127文字)まで入力できます。ただし、以下の記号はファイル名として使用できません。</p> <p>使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p> <p>対応ファイルの作成方法については、“リファレンスマニュアル”の“Active Directory連携対応ファイル”を参照してください。</p>

項目名	説明
[ユーザー情報の管理]	<p>3階層のシステム構成の場合に、ユーザーポリシー情報を統合管理サーバで一元管理するかを設定します。</p> <p>この設定は管理サーバのインストール時に指定しているため、管理サーバのインストール時の設定から変更する場合に設定してください。</p> <p>統合管理サーバで集中管理する(推奨)</p> <p>ユーザーポリシー情報を統合管理サーバで一元管理する場合に選択します。Active Directoryと連携を行う設定の場合は、無条件で、一元管理する設定となります。</p> <p>管理サーバごとに管理する(V13.0.0以前と互換)</p> <p>各管理サーバでユーザーポリシー情報を管理する場合に選択します。</p>


[CT登録時の同一CT判断条件]

項目名	説明
[MACアドレス]	<p>クライアント(CT)の登録(再登録)時のクライアント(CT)の一致判断項目としてコンピュータ名だけではなく、MACアドレスも使用するかを設定します。</p> <p>使用する</p> <p>MACアドレスも一致判断項目として使用する場合に選択します。</p> <p>使用しない</p> <p>MACアドレスは一致判断項目として使用しない場合に選択します。</p> <p> 注意</p> <p>マザーボードの交換等でクライアント(CT)のMACアドレスが変更になっても、管理情報のMACアドレス情報が更新されるだけで影響はありませんが、MACアドレスも一致判断項目として使用すると設定し、以下の操作を行った場合は、新規にクライアント(CT)が登録されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ クライアント(CT)でCTの再登録コマンドを実行した場合 ・ クライアント(CT)をアンインストールし、再度インストールした場合
[所有者]	<p>クライアント(CT)の登録(再登録)時のクライアント(CT)の一致判断項目としてコンピュータ名だけではなく、所有者の情報(OSインストール時に指定)も使用するかを設定します。</p> <p>使用する</p> <p>所有者の情報も一致判断項目として使用する場合に選択します。</p> <p>使用しない</p> <p>所有者の情報は一致判断項目として使用しない場合に選択します。</p>
[OS種別]	<p>クライアント(CT)の登録(再登録)時のクライアント(CT)の一致判断項目としてコンピュータ名だけではなく、OS種別も使用するかを設定します。Service Packやエディション種別は一致判断条件には入りません。</p> <p>使用する</p> <p>OS種別も一致判断項目として使用する場合に選択します。</p> <p>使用しない</p> <p>OS種別は一致判断項目として使用しない場合に選択します。</p>

部門管理者のツリー表示設定

項目名	説明
[全グループを表示する(従来互換表示)]	管理コンソール、ログビューアを起動した際に表示されるグループツリーを表示します。
[管理権限のあるグループのみ表示する]	管理コンソール、ログビューアを起動した際に表示されるグループは、管理権限があるグループだけ表示されます。

未配置グループ設定

項目名	説明
[ルート直下で管理する(従来互換表示)]	新規に管理サーバに登録されたクライアント(CT)やどのグループにも属さないクライアント(CT)をルートグループ直下で管理します。
[未配置グループで管理する]	<p>新規に管理サーバに登録されたクライアント(CT)やどのグループにも属さないクライアント(CT)を未配置グループで管理します。</p> <p>以下のような運用を行う場合に設定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新規に管理サーバに登録されたクライアント(CT)の配置を部門管理者に任せたい場合。 ・ どのグループにも属さないクライアント(CT)のポリシーの管理を部門管理者に任せたい場合。 <p> 注意</p> <p>.....</p> <p>状況画面、ログビューアについて</p> <p>部門管理者では、未配置グループを参照できません。未配置グループを参照できるのは、システム管理者だけです。</p> <p>ログアナライザまたは、レポート出力ツールについて</p> <p>ログアナライザまたは、レポート出力ツールでは、本設定にした場合でも[未配置]グループでクライアント(CT)を管理せず、[ルート]グループでクライアント(CT)を管理します。</p> <p>.....</p>

端末間接続情報


項目名	説明
[管理する]	物理PCや仮想PCへリモート接続した情報を管理します。
[管理しない]	物理PCや仮想PCへリモート接続した情報を管理しません。

入出力ファイルのエンコード

項目名	説明
[Shift-JIS]	入出力ファイルのエンコード形式をShift-JISに指定します。
[UTF-8]	入出力ファイルのエンコード形式をUTF-8に指定します。

CT情報詳細

項目名	説明
[名称を自動更新する]	<p>チェックする場合:</p> <p>CT/スマートデバイスのOSにより以下の動作となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> － Windows: クライアント(CT)から通知されたコンピュータ名に変更がある場合は、通知されたコンピュータ名を管理コンソールで設定する

項目名	説明
	<p>[名称]に再設定します。管理コンソールでは[名称]を再設定できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> — Android: スマートデバイス(エージェント)から通知された電話番号、モデル名、ユーザーIDに変更がある場合は、「[電話番号 or モデル名]_[ユーザーID]_[連番]」を管理コンソールで設定する[名称]に再設定します。管理コンソールでは[名称]を再設定できません。 — iOS: スマートデバイス(エージェント)から通知された電話番号、モデル名に変更がある場合は、「[電話番号 or モデル名]_[連番]」を管理コンソールで設定する[名称]に再設定します。管理コンソールでは[名称]を再設定できません。 <p>チェックしない場合:</p> <p>CT/スマートデバイスのOSにより以下の動作となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> — Windows: クライアント(CT)から通知されたコンピュータ名に変更がある場合でも、管理コンソールで設定する[名称]の再設定は行いません。 — Android: スマートデバイス(エージェント)から通知された電話番号、モデル名、ユーザーIDに変更がある場合でも、管理コンソールで設定する[名称]の再設定は行いません。 — iOS: スマートデバイス(エージェント)から通知された電話番号、モデル名に変更がある場合でも、管理コンソールで設定する[名称]の再設定は行いません。 <p> 注意</p> <p>3階層のシステムの場合、それぞれの管理サーバ/統合管理サーバで[名称を自動更新する]の設定を行う必要があります。</p>

2. 設定内容を確認、および必要に応じて変更し、[設定]ボタンをクリックします。

2.3.4.5 Active Directory連携の設定を行う

Active Directoryと連携を行う場合に、連携するActive Directoryサーバの情報を設定します。

Active Directory連携設定の手順は以下のとおりです。

1. サーバ設定ツールのメニューから[Active Directory連携設定]ボタンをクリックします。
→[Active Directory連携設定]画面が表示されます。

項目名	説明
[コンピュータ名]	<p>連携するActive Directoryのコンピュータ名を入力します。</p> <p>半角で15文字まで入力できます。入力できる文字は半角英数字およびハイフン“-”だけです(ただし、先頭および末尾のハイフン“-”は指定できません)。</p> <p>コンピュータ名を省略した場合は、ドメインアドレスをもとにNetBIOS名を取得しデータベースに登録されます。なお画面上は、“(自動判断)”と表示されます。</p>
[ドメイン名](必須)	<p>連携するActive Directoryのドメイン名を入力します。半角で155文字まで入力できます。入力できる文字は半角英数字、ピリオド“.”およびハイフン“-”だけです(ただし、先頭および末尾のピリオド“.”、ハイフン“-”は指定できません)。IPアドレスやNetBIOSドメイン名での入力はありません。</p> <p>指定例: desktopkeeper.domain.com</p> <p>連携できるActive Directoryサーバ(ドメイン)は1つだけです。</p>
[NetBIOS名](必須)	<p>NetBIOS名を入力します。未入力の状態で[追加]ボタンまたは[更新]ボタンをクリックした場合、[ドメイン名]を元にDNSに照会しNetBIOS名を取得します。NetBIOS名を取得できない場合はNetBIOS名を手動で入力します。半角で16文字まで入力できます。入力可能な文字は、半角英数字、および以下の記号だけです。</p> <p>(~ ! @ # \$ % ^ & () _ - { } [] ' . /)</p>
[連携実施](必須)	<p>Active Directory連携を実施するか停止するかを設定します。</p> <p>実施</p> <p>Active Directory連携を実施します。</p>

項目名	説明
	<p>停止</p> <p>Active Directory連携を停止します。 Active Directory連携をスケジューラなどを使用して実施している際に、一時的に停止する場合に使用します。</p>
[ユーザー名](必須)	<p>Active Directoryの情報を参照するために使用する、Active Directoryに登録されたユーザー名(Active Directoryでのユーザーログオン名の@より前)を入力します。半角で40文字まで入力できます。入力可能な文字は、半角英数字、半角空白、および以下の記号だけです。(! # \$ % & ' () - . ^ _ ` { })</p> <p>Active Directoryに登録されているユーザーであれば、どのユーザーを指定しても、Active Directory連携は可能です。</p>
[パスワード(1回目)](追加時必須)	<p>上記ユーザー名のパスワードを入力します。半角で32文字まで入力できます。入力可能な文字は、半角英数字、半角空白、および以下の記号だけです。 (~ ! @ # \$ % ^ & * () _ + - = { } [] ¥ : " ; ' < > ? , . /)</p>
[パスワード(再入力)](追加時必須)	<p>誤登録を防ぐため、パスワードを再入力します。</p>

- 必要な設定項目を入力し、[追加]ボタンをクリックします。
- [閉じる]ボタンをクリックします。

2.3.4.6 サーバ情報を設定する

初期導入時は、自サーバの情報が登録されています。3階層の場合は、関連する他サーバの情報を設定します。

サーバ情報設定の手順は以下のとおりです。

- サーバ設定ツールのメニューから[サーバ情報設定]ボタンをクリックします。

→[サーバ情報設定]画面が表示されます。

サーバに関する設定を行います。
 統合管理サーバは、自ノード(rootサーバ)のみ登録してください。他ノードの情報は自動的に登録されます。
 管理サーバは、自ノード(下位サーバ)と、統合管理サーバの他ノード(rootサーバ)を登録してください。
 ノード名の英小文字は英大文字に変換して登録されます。
 なお画面を閉じるとき、ノード情報の整合性を確認し不要な管理データを削除するため、画面が閉じるまでに時間がかかる場合があります。

ノード区分	ノード名	コンピュータ名	サーバIPアドレスまたはサーバ名	サーバ区分	更新日時	登録日時
自ノード	DTK-SV001	DTK-SV001	192.168.0.100	rootサーバ	2017/10/11 12:24:05	2017/10/11 11:50:24

ノード区分: ノード名: サーバIPアドレスまたはサーバ名:
 コンピュータ名: サーバ区分:

登録数 1 件 (最大 255 件)

項目名	説明
[ノード区分]	<p>設定するサーバのノードの区分を選択します。</p> <p>自ノード</p> <p>自サーバの設定の場合、選択します。</p>

項目名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> － 2階層の管理サーバを設定する場合 － 3階層の統合管理サーバで自サーバを設定する場合 － 3階層の管理サーバで自サーバを設定する場合 <p>自ノード情報は、初期状態で登録されています。更新する場合に選択してください。</p> <p>他ノード</p> <p>他サーバの設定の場合、選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> － 3階層の管理サーバで統合管理サーバを設定する場合 <p>3階層の統合管理サーバの場合：</p> <p>管理サーバと通信を開始した時点で他ノードの情報が自動的に登録されるので、他ノードの情報を設定する必要はありません。</p> <p>3階層の管理サーバの場合：</p> <p>自ノードと、統合管理サーバのノードだけ登録してください。他の管理サーバのノードは設定しないでください。</p>
[ノード名]	<p>設定するサーバのノード名を入力します。半角で36文字まで入力できます。入力できる文字は半角英数字およびハイフン“-”だけです(先頭および末尾のハイフン“-”は指定できません)。半角英小文字は自動的に半角英大文字に変換します。</p> <p>自ノードの場合、自動的に自コンピュータ名が設定されますが、システムから取得できなかった場合、またはコンピュータ名が16文字以上の場合は「NODE」と設定されています。この場合は必要に応じて設定し直してください。</p>
[コンピュータ名]	<p>ノード区分が自ノードの場合は、自サーバのコンピュータ名を入力します。ノード区分が他ノードの場合は、統合管理サーバのコンピュータ名を入力します。半角で15文字まで入力できます。入力できる文字は半角英数字およびハイフン“-”だけです。(先頭および末尾のハイフン“-”は指定できません)</p> <p>自ノードの場合、自動的に自コンピュータ名が設定されますが、システムから取得できなかった場合、またはコンピュータ名が16文字以上の場合は「COMPUTER」と設定されています。この場合は必要に応じて設定し直してください。</p> <p>管理コンソールのCTグループツリーには、ここで設定したコンピュータ名が表示されます。</p>
[IPアドレスまたはサーバ名]	<p>ノード区分が自ノードの場合は、自サーバのIPアドレスを入力します。ノード区分が他ノードの場合は、統合管理サーバのIPアドレスを入力します。</p> <p>なお、自ノードの場合、データベース構築時に自動的に自コンピュータのIPアドレスが設定されますが、システムから取得できなかった場合、またはIPアドレスが登録時に設定されていない場合はループバックアドレスが設定されています。この場合は、設定し直してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ サーバ名を入力する場合半角15文字まで入力できます。 <ul style="list-style-type: none"> － サーバ名として使用できる文字は、半角英数字(A-Z、a-z、0-9)および半角記号のハイフン(-)です。 － 数字のみのコンピュータ名は入力できません。 ・ IPv4アドレスを入力する場合 <ul style="list-style-type: none"> － 半角15文字まで入力できます。 － 使用できる文字は、半角数字(0-9)および半角記号のピリオド(.)です。 ・ IPv6アドレスを入力する場合 <ul style="list-style-type: none"> － 半角39文字まで入力できます。

項目名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> 使用できる文字は、半角英数字(A - F, a - f, 0 - 9)および半角記号のコロン(:)です。 リンクローカルアドレスは入力しないでください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。 <p>注)各マシンにおいて、管理サーバ/統合管理サーバのホスト名を名前解決できている必要があります。</p> <p>名前解決できない場合、統合管理サーバと管理サーバ間は通信できません。また管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間も通信できません。</p> <p>注)IPv6アドレスの場合、RFC 5952に準拠した省略形も使用できます。</p>
[サーバ区分]	<p>サーバの区分を入力します。</p> <p>rootサーバ:</p> <p>上位サーバの場合に選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2階層の管理サーバの場合 3階層の統合管理サーバの場合 <p>下位サーバ:</p> <p>下位サーバの場合に選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 3階層の管理サーバの場合 <p>初期状態では、[rootサーバ]が設定されています(構築オプションに依存しません)。</p>
[更新日時]	<p>サーバ情報を更新した日時が表示されます。</p> <p>3階層の統合管理サーバで他ノード(管理サーバ)の更新日時は、他ノード側(管理サーバ)で階層化サービスが起動した日時に更新されます。</p> <p>3階層の管理サーバで他ノード(統合管理サーバ)の更新日時は、空白のままです。</p> <p>初期状態では、データベースを構築した日時が一覧に表示されています。</p>
[登録日時]	<p>サーバ情報を登録した日時が表示されます。</p> <p>3階層の統合管理サーバで他ノード(管理サーバ)の登録日時は他ノード側(管理サーバ)で最初に階層化サービスが起動した日時に登録されます。</p> <p>初期状態では、データベースを構築した日時が一覧に表示されています。</p>

- 必要な設定項目を入力し、[追加]ボタンをクリックします。
- [閉じる]ボタンをクリックします。

2.3.4.7 他システムとの連携を設定する

他システムとの連携設定を行います。

Systemwalker Desktop Patrolまたはマルウェア検知製品と連携する

Systemwalker Desktop Patrolまたはマルウェア検知製品と連携する場合の設定を行います。



注意

Systemwalker Desktop Patrolの構成情報を自動で取込む場合は、Webコンソールのグローバルナビゲーションの[環境設定]で[Desktop PatrolのURL]にSystemwalker Desktop PatrolのURLを指定する必要があります。

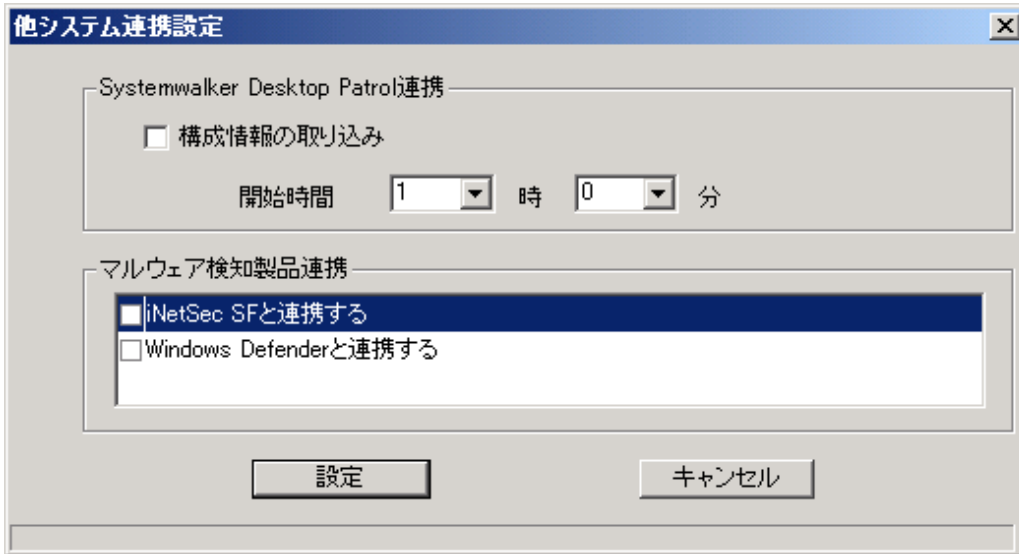
 **注意**

iNetSec SFによりマルウェア検知を行う場合は、事前にiNetSec SFでマルウェア検知時のイベントをSNMPトラップでSystemwalker Desktop Keeperの管理サーバに通知する設定を行う必要があります。

3階層のシステムの場合は、統合管理サーバへ通知設定を行ってください。

設定方法については、iNetSec SFのマニュアルを参照してください。

1. サーバ設定ツールのメニューから[他システム連携設定]ボタンをクリックします。
→[他システム連携設定]画面が表示されます。



項目名	説明
[構成情報の取り込み]	Systemwalker Desktop Patrolの構成情報を自動で取り込む場合、チェックします。
[開始時間]	[構成情報の取り込み]をチェックしている場合に何時に自動取り込みを行うかを設定します。  注意 管理サーバサービスが停止する時間帯を設定しないでください。
[iNetSec SFと連携する]	iNetSec SFと連携する場合、チェックします。  注意 3階層のシステムの場合、統合管理サーバだけ設定を行ってください。
[Windows Defenderと連携する]	Windows Defenderと連携する場合、チェックします。  注意 3階層のシステムの場合、統合管理サーバだけ設定を行ってください。

2. 設定内容を確認、および必要に応じて変更し、[設定]ボタンをクリックします。
3. Windows Defenderと連携する場合は、クライアント(CT)の再起動を行ってください。

Sense YOU Technology Bizと連携する

Sense YOU Technology Bizと連携する場合は、CT動作パラメーター情報ファイルを変更します。

CT動作パラメーター情報ファイルの詳細については、“運用ガイド 管理者編”の“クライアント(CT)の動作設定を変更する”を参照してください。

2.3.4.8 管理者情報を設定する

管理コンソール、ログビューア、ログアナライザ、状況画面、環境設定、レポート出力ツール、バックアップツール、リストアツールでの認証ユーザーを登録します。また、部門管理モードを使用する場合は、部門管理者も登録します。導入時にはアクセス権が“管理コンソール・ログビューア”の管理者は必ず登録してください。

ただし、3階層構成で、かつユーザーポリシー(ユーザー情報)を統合管理サーバで一元管理する場合、統合管理サーバで設定すれば各管理サーバで設定する必要はありません。運用開始後、自動的に各管理サーバに反映されます。

管理者情報設定の手順は以下の2通りの方法があります。

- ・ 管理者を1人ずつ登録する。
- ・ CSVファイルを使用して管理者を一括登録する。

管理者を1人ずつ登録する

1. サーバ設定ツールのメニューから[管理者情報設定]ボタンをクリックします。

→[管理者情報設定]画面が表示されます。

管理コンソール、ログビューア、バックアップ・リストア機能の利用者を登録します。
ユーザー情報を更新する時、パスワード変更が不要な場合はパスワード入力欄を空欄にしてください。

ユーザーID	ユーザー名	アクセス権	詳細権限	メールアドレス	備考	パスワード変更日時	更新日時
AUTOBACKUPUSER	自動バックアップユーザ	バックアップ・リストア					2
dtkadmin	管理者	管理コンソール・ログビューア	有り				2
dtkbackup	バックアップユーザ	バックアップ・リストア					2
systemadmin	systemadmin	管理コンソール・ログビューア	有り				2

ユーザーID:

ユーザー名:

アクセス権:

パスワード(1回目):

パスワード(再入力):

メールアドレス:

備考:

管理者情報の出力/取り込み ファイル出力 ファイル取り込み

登録数 4件 (最大 1,000件) 追加 更新 削除 閉じる

詳細権限
使用を許可する機能を選択してください。

管理コンソール CSVファイル取り込み
 CSVファイル保存
 デバイス/メディア登録/更新/削除
 他の機能は使用不可能
 Wi-Fi接続先登録/更新/削除
 緊急対処

ログビューア CSVファイル保存
 付帯情報参照/保存
 メール内容保存
 設定変更ログ画面参照
 バックアップログ閲覧
 緊急対処

全てチェック 全てクリア

項目名	説明
[ユーザーID]	半角で40文字(全角で20文字)まで入力できます。

項目名	説明
	<p>半角カタカナ、半角/全角空白、および以下の記号は入力できません。</p> <p>入力できない記号:「&」「<」「>」「 」「¥」「"」「~」「'」「?」「:」「^」</p> <p>全角および半角の空白は入力できません。大文字と小文字は区別されません。</p>
[ユーザー名]	半角で40文字(全角で20文字)までの英数字、漢字、ひらがな、カタカナおよび記号が入力できます。
[アクセス権]	<p>以下の権限を選択します。</p> <p>参照権なし</p> <p>管理コンソール、ログビューア、ログアナライザ、状況画面、環境設定、レポート出力ツール、バックアップツール、バックアップコマンド、リストアツール、およびサーバ設定ツール(一部機能)が実行できないユーザー(一時的に実行権限をなくす場合に使用)</p> <p>ログビューア</p> <p>ログビューア、ログアナライザ、状況画面、環境設定、レポート出力ツールだけ実行できるユーザー</p> <p>管理コンソール・ログビューア</p> <p>管理コンソール、ログビューア、ログアナライザ、状況画面、環境設定、レポート出力ツール、およびサーバ設定ツール(一部の機能)が実行できるユーザー</p> <p>管理コンソール</p> <p>管理コンソールとサーバ設定ツールの管理者通知設定が実行できるユーザー</p> <p>(部門管理者)ログビューア</p> <p>ログビューア、状況画面、レポート出力ツールだけ実行できる部門管理ユーザー</p> <p>(部門管理者)ログビューア・管理コンソール</p> <p>管理コンソール、ログビューア、状況画面、レポート出力ツールが実行できる部門管理ユーザー</p> <p>(部門管理者)管理コンソール</p> <p>管理コンソールだけ実行できる部門管理ユーザー</p> <p>バックアップ・リストア</p> <p>バックアップツール、バックアップコマンド、リストアツールを実行できるユーザー</p>
[パスワード(1回目)]	<p>半角で32文字までの英数字および以下の記号以外が入力できます。</p> <p>入力できない記号:「&」「<」「>」「 」「¥」「"」「~」「'」「?」「:」「^」</p> <p>全角および半角の空白は入力できません。</p>
[パスワード(再入力)]	誤登録を防ぐため、パスワードを再入力します。
[メールアドレス]	<p>登録するユーザーのメールアドレスを入力します。</p> <p>半角で255文字(全角で127文字)まで入力できます。</p> <p>以下の記号は入力できません。</p> <p>「<」「>」「(」」「)」「 」「¥」「:」「;」「"」</p>

項目名		説明	
[備考]		半角で256文字(全角で128文字)までの英数字、漢字、ひらがな、カタカナおよび記号が入力できます。	
[詳細権限]	[管理コンソール]	[CSVファイル取り込み]	登録するユーザーに、管理コンソールでの以下の実行権を与える場合に指定(チェック)します。 <ul style="list-style-type: none"> ユーザーポリシーのユーザー情報取り込み Systemwalker Desktop Patrol連携での構成情報取り込み
		[CSVファイル保存]	登録するユーザーに、管理コンソールでの以下の実行権を与える場合に指定(チェック)します。 <ul style="list-style-type: none"> ユーザーポリシーのユーザー情報出力 Systemwalker Desktop Patrol連携での構成情報出力
		[デバイス/メディア登録/更新/削除]	登録するユーザーに、管理コンソールでのデバイス个体識別機能の操作権を与える場合に指定(チェック)します。
		[他の機能は使用不可能]	管理コンソールでデバイスの登録/変更/削除が行える権限を与える場合に指定(チェック)します。 [アクセス権]の設定が[(部門管理者)管理コンソール]のときのみ設定できます。
		[Wi-Fi接続先登録/更新/削除]	登録するユーザーに、管理コンソールでのWi-Fi接続先登録の操作権を与える場合に指定(チェック)します。
		[緊急対処]	登録するユーザーに、管理コンソールでの以下の実行権を与える場合に指定(チェック)します。 <ul style="list-style-type: none"> 緊急対処の状況表示 緊急対処の解除コード生成
	[ログビューア]	[CSVファイル保存]	登録するユーザーに、ログビューアでのログCSV出力の実行権を与える場合に指定(チェック)します。
		[付帯情報参照/保存]	登録するユーザーに、ログビューアでの以下の実行権を与える場合に指定(チェック)します。 <ul style="list-style-type: none"> 画面キャプチャデータの画像表示 原本保管ファイルの保存
		[メール内容保存]	登録するユーザーに、ログビューアでの以下の実行権を与える場合に指定(チェック)します。 <ul style="list-style-type: none"> 送信したメールの内容参照 添付ファイルの内容参照
		[設定変更ログ画面参照]	登録するユーザーに、ログビューアでの設定変更ログの参照権を与える場合に指定(チェック)します。
		[バックアップログ閲覧]	登録するユーザーに、ログビューアでのバックアップログの参照権を与える場合に指定(チェック)します。
		[緊急対処]	登録するユーザーに、ログビューアでの緊急対処依頼の実行権を与える場合に指定(チェック)します。
	[全てチェック]		グレーアウトされていないチェックボックスすべてにチェックします。 ただし、[アクセス権]の設定が[(部門管理者)管理コンソール]の場合、[他の機能は使用不可能]のチェックボックスはチェックされません。
	[全てクリア]		グレーアウトされていないチェックボックスについて、すべてのチェックを外します。

項目名	説明
[パスワード変更日時]	最後にパスワードを更新した日時が表示されます。
[更新日時]	ユーザー情報を更新した日時が表示されます。
[登録日時]	ユーザー情報を登録した日時が表示されます。

- 必要な設定項目を入力し、[追加]ボタンをクリックします。
管理者を連続して設定する場合は手順2.を繰り返します。
- [閉じる]ボタンをクリックします。

ポイント

管理者情報を変更する場合について

- 管理者情報を更新する場合に、パスワード変更が不要なときは、パスワード入力欄(パスワード(1回目)、パスワード(再入力))を空欄にしてください。
- ユーザー名や権限など、他の条件を変更せずに、ユーザーIDだけを変更したい場合は、管理者を新規に追加してください。他の入力項目には、同じ条件を設定してください。

自動バックアップ・削除ユーザーについて

自動バックアップ・削除の自動化を行うための管理者をデータベース構築時、データベース移行時、リストア時に以下の情報で登録します。

- [ユーザーID]: AUTOBACKUPUSER
- [ユーザー名]: 自動バックアップユーザー
- [アクセス権]: バックアップ・リストア

自動バックアップ・削除ユーザーは、パスワードのみが変更できます。パスワードを初期値から変更した場合は、パスワードの変更を行ってください。

注意

管理者情報を削除する場合について

- 部門管理者を削除すると、部門に設定していた部門管理者情報も同時に削除されます。
- システム管理者、部門管理者を削除した場合、同じ名前で作成しても別人として管理されます。部門管理者がログ閲覧データベースを使用する場合には、ログ閲覧データベースへ最新の管理情報をリストアしなおしてください。

管理者を一括登録する方法

管理者情報ファイルを利用して管理者を一括登録する方法を説明します。

管理者情報ファイルについては、“リファレンスマニュアル”の“管理者情報ファイル”を参照してください。

- サーバ設定ツールのメニューから[管理者情報設定]ボタンをクリックします。

2. [ファイル取り込み]を選択します。以下の画面が表示されます。

項目名	説明
取り込みファイル(必須)	<p>作成したCSVファイルを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> フルパスでファイル名を入力する 入力欄に取り込むCSVファイルまでのパスをフルパスで入力します。 [参照]ボタンから入力する [取り込みファイルの指定]画面が表示されるので、取り込むCSVファイルを指定したあとに、[開く]ボタンをクリックします。 <p>指定できるフルパスの長さは、半角で218文字(全角で109文字)まで入力できます。以下の記号はファイル名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>
実行ログファイル(必須)	<p>CSVファイルを取り込む際の実行結果を出力するファイルを指定します。このファイルには、取り込み時のエラーも出力されます。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> フルパスでファイル名を入力する 入力欄に出力するログファイルまでのパスをフルパスで入力します。 [参照]ボタンから入力する [実行ログファイルの指定]画面が表示されるので、出力するログファイルを指定したあとに、[開く]ボタンをクリックします。 <p>指定できるフルパスの長さは、半角で218文字(全角で109文字)まで入力できます。以下の記号はファイル名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>
実行ログが存在する場合(必須)	<p>[実行ログファイル]で、すでにログが出力されているファイルを指定した場合の出力方法について選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> [追記する] 前回の情報を残した状態で、実行ログを追記します。 [上書きする] 前回の情報は残さずに、実行ログを出力します。

3. すべての項目を入力し、[取り込み開始]ボタンをクリックします。[管理者情報取り込み状態表示]画面が表示され処理が開始されます。

4. 実施状況に表示されている情報を確認し、[OK]ボタンをクリックします。

2.3.4.9 管理者情報を出力する

管理者情報を出力する方法について説明します。

管理者情報ファイルについては、“リファレンスマニュアル”の“管理者情報ファイル”を参照してください。

1. サーバ設定ツールのメニューから[管理者情報設定]ボタンをクリックします。
2. [ファイル出力]を選択します。以下の画面が表示されます。

項目名	説明
出力ファイル(必須)	<p>出力するCSVファイルを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> フルパスでファイル名を入力する 入力欄に取り込むCSVファイルまでのパスをフルパスで入力します。 [参照]ボタンから入力する [出力ファイルの指定]画面が表示されるので、取り込むCSVファイルを指定したあとに、[開く]ボタンをクリックします。 <p>指定できるフルパスの長さは、半角で218文字(全角で109文字)まで入力できます。以下の記号はファイル名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>
実行ログファイル(必須)	<p>CSVファイルを取り込む際の実行結果を出力するファイルを指定します。このファイルには、取り込み時のエラーも出力されます。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> フルパスでファイル名を入力する 入力欄に出力するログファイルまでのパスをフルパスで入力します。 [参照]ボタンから入力する [実行ログファイルの指定]画面が表示されるので、出力するログファイルを指定したあとに、[開く]ボタンをクリックします。 <p>指定できるフルパスの長さは、半角で218文字(全角で109文字)まで入力できます。以下の記号はファイル名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>

項目名	説明
実行ログが存在する場合(必須)	<p>[実行ログファイル]で、すでにログが出力されているファイルを指定した場合の出力方法について選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [追記する] 前回の情報を残した状態で、実行ログを追記します。 • [上書きする] 前回の情報は残さずに、実行ログを出力します。

3. すべての項目を入力し、[出力開始]ボタンをクリックします。

2.3.4.10 管理者通知を設定する

クライアント(CT)や、データベースで発生した事象を、管理者に通知(メール通知、イベントログへの書き込み)できます。

通知できる事象と通知タイミングは、以下のとおりです。

- クライアント(CT)での禁止操作や違反操作の通知
禁止ログが採取されたら即時に通知します。
システム管理者、部門管理者へメール通知できます。
- データベースの異常の通知
データベース領域やディスク領域のしきい値に達したら通知します。
データベースの空き領域がなくなり、データベースに情報が書き込めなくなったら即時に通知します。
システム管理者だけにメール通知できます。
- クライアント(CT)情報の通知
クライアント(CT)起動時に、管理サーバがクライアント(CT)情報の変更を感知したら即時に通知します。
システム管理者、CTグループ部門管理者へメール通知できます。
- クライアント(CT)への緊急対処依頼・解除完了時
クライアント(CT)への緊急対処依頼が成功または失敗したら、即時に通知します。また、緊急対処解除が成功したら、即時に通知します。
システム管理者、CTグループ部門管理者へメール通知できます。

部門管理者へ通知を行う場合は、“運用ガイド管理者編”の“部門管理者を割り当てる”を参照してください。



- スマートデバイス(エージェント)で発生した事象の通知について
スマートデバイス(エージェント)で禁止操作を検知した場合や、スマートデバイス(エージェント)情報の変更を感知した場合の管理者への通知は行われません。
- 3階層構成の場合、メールタイトル設定は各サーバで設定してください。

管理者通知設定の手順は以下のとおりです。

1. サーバ設定ツールのメニューから[管理者通知設定]ボタンをクリックします。
→[管理者通知設定]画面が表示されます。

[禁止ログ・検知時の動作]

各禁止ログが検知された場合の管理者へのメール通知、イベントログへの書き込みの有無を設定します。
設定可能なログの種別は以下のとおりです。

- [アプリケーション起動禁止]
- [印刷禁止]
- [ログオン禁止]
- [PrintScreen禁止]
- [メール添付ファイル禁止]
- [FTP操作禁止]
FTPサーバ接続禁止ログが検知された場合
- [Web操作禁止]
URLアクセス禁止ログ、Webアップロード禁止ログ、Webダウンロード禁止ログが検知された場合
- [クリップボード操作禁止]
クリップボード操作禁止ログが検知された場合
- [連携アプリケーションログ違反] 注)連携アプリケーションログ(区分が違反)の場合

- [デバイス構成変更ログ違反]

 注意

スマートデバイス(エージェント)の管理者へのメール通知およびイベントログへの書き込みについて

スマートデバイス(エージェント)で記録される以下の禁止ログは、[デバイス構成変更ログ]に属しますが、管理者へのメール通知およびイベントログへの書き込みは行われません。

- Wi-Fi接続禁止ログ
- Bluetooth接続禁止ログ
- アプリケーション使用禁止ログ

各ログの検知時の動作として設定できる内容は以下のとおりです。

項目名	説明
[管理者へのメール通知]	<p>する 検知時に通知メールを送信します。</p> <p>しない 検知しても通知メールを送信しません。</p>
[イベントログへの書き込み]	<p>する 検知時にイベントログに禁止ログ情報を書き込みます。</p> <p>しない 検知してもイベントログに禁止ログ情報を書き込みません。</p>

[領域枯渇時の動作]

採取したログ等を書き込むディスクが枯渇した場合の管理者へのメール通知、イベントログへの書き込みの有無を設定します。設定可能な領域の種別は以下のとおりです。

- [データベース領域枯渇時の通知]
 - 1.運用データベースを作成したドライブの空き領域がなくなり、運用データベースに情報が書き込めなくなった場合です。
 - 2.運用データベースを作成したドライブの空き領域が、[枯渇時に通知するしきい値]に設定した値を下回った場合です。
 - 3.運用データベースを作成したドライブの空き領域のチェックは、日付が変更になったとき(午前0時)に行います(サーバサービス起動時)
- [ディスク領域枯渇時の通知]
 - 1.ディスク領域枯渇時とは、以下の指定フォルダがあるドライブの空き領域が、[枯渇時に通知するしきい値]に設定した値を下回った場合です。
 - 付帯データ蓄積フォルダ
 - メール内容フォルダ
 - コマンドプロンプトログフォルダ
 - 一括送信ログフォルダ
 - トレースログフォルダ
 - 障害調査データ保存先フォルダ
 - 自動バックアップ先フォルダ
 - 2.ディスク領域枯渇のチェックは約5分間隔で行います(サーバサービス起動時)。
 - 3.ディスク領域枯渇の通知が行われた場合、ディスク領域枯渇状態が継続していても同日中は再通知しません。

注意

クライアント(CT)から送信されたログファイルを一括ログ受信フォルダに格納する処理時にもディスク領域枯渇のチェックを行います。もし、枯渇と判定された場合は、ログファイルは一括ログ受信フォルダに保存されず、ログファイルはクライアント(CT)側に保持された状態になります。

領域枯渇時の動作として設定できる内容は以下のとおりです。

項目名	説明
[管理者へのメール通知]	<p>する</p> <p>検知時に通知メールを送信します。</p> <p>しない</p> <p>検知しても通知メールを送信しません。</p>
[イベントログへの書き込み]	<p>する</p> <p>検知時にイベントログにログ情報を書き込みます。</p> <p>しない</p> <p>検知してもイベントログにログ情報を書き込みません。</p>
[枯渇時に通知するしきい値] 注)データベース領域枯渇時	<p>枯渇時に通知するしきい値を%指定(単位:%未満)で設定します。設定できるのは、5～20の正の整数です。</p> <p>[管理者へのメール通知]と[イベントログへの書き込み]の少なくとも一方に[する]を設定した場合に入力できます。</p> <p>初期値は、5%です。</p>
[枯渇時に通知するしきい値] 注)ディスク領域枯渇時	<p>枯渇時に通知するしきい値を%指定(単位:%未満)、または容量指定(単位:MB未満)で設定します。</p> <p>[管理者へのメール通知]と[イベントログへの書き込み]の少なくとも一方に[する]を設定した場合に入力できます。</p> <p>枯渇時に通知するしきい値は、%指定と容量指定の両方設定した場合は、少ない容量がしきい値として有効となります。</p> <p>%指定で設定できるのは、1～20の正の整数です。初期値は3%未満です。</p> <p>容量指定で設定できるのは、100～99999の正の整数です。初期値はありません。なお、100MBと入力した場合は、以下の計算式により算出した値が設定されます。</p> <p>$100 \times 1024 \times 1024 = 104,857,600$バイト</p>

[CTの監視動作]

クライアント(CT)起動時に、クライアント(CT)情報が変更されていた場合の管理者へのメール通知、イベントログへの書き込みの有無を設定します。

設定可能な通知内容は以下のとおりです。

- [時刻に基準時間以上の差がある時]

クライアント(CT)のシステム時刻が、管理サーバのシステム時刻と基準時間以上の差があった場合です。

クライアント登録時、または、クライアントのOS起動後、管理サーバと通信したタイミングで差を確認します。
- [クライアント情報異常時の通知]

クライアント(CT)固有情報である“CTID”の重複を検出した場合です。

管理者やイベントログへは、“MACアドレスが変更された”という事象で通知されます。

“CTID”の重複は、マスタPCを使用してクライアント(CT)を展開するときに発生する可能性があります。
- [トレース採取中のCTの通知]

トレースを採取中のクライアント(CT)を検出した場合です。

トレース採取する状態になったままのクライアント(CT)を管理者に通知することで、管理者がトレースを採らない設定に変更できます。


トレースを採取中のクライアント(CT)のチェックは、以下のタイミングで行われます。

- Systemwalker Desktop Keeperのサービスの起動時(サーバ起動時含む)

- 日付が変更になったとき(午前0時)

この設定は、最終ログオン日時から1カ月の間有効になります。このためファイルサーバ等によりログオフしない環境では1カ月を過ぎると通知しなくなります。

クライアント(CT)の監視動作として設定できる内容は以下のとおりです。

項目名	説明
[管理者へのメール通知]	<p>する</p> <p>検知時に通知メールを送信します。</p> <p>しない</p> <p>検知しても通知メールを送信しません。</p>
[イベントログへの書き込み]	<p>する</p> <p>検知時にイベントログにログ情報を書き込みます。</p> <p>しない</p> <p>検知してもイベントログにログ情報を書き込みません。</p>
[通知基準時間(分)](注)	<p>クライアント(CT)のシステム時刻と管理サーバのシステム時刻の時間差を分指定で設定します。設定できるのは、30～999の正の整数です。[管理者へのメール通知]と[イベントログへの書き込み]の少なくとも一方に[する]を設定した場合に入力できます。初期値は60分です。</p> <p> 注意</p> <p>.....</p> <p>管理サーバに登録されているすべてのUSBデバイスを許可するポリシーの場合、クライアント(CT)と管理サーバのシステム時刻が[通知基準時間(分)]以上に時間差がある場合は、管理サーバに接続したUSBデバイスが登録されていても利用できません。</p> <p>.....</p>

注)[時刻に基準時間以上の差がある時]に対する設定項目です。

注意

スマートデバイス(エージェント)の管理者へのメール通知およびイベントログへの書き込みについて

スマートデバイス(エージェント)で以下の通知項目に対して、管理者へのメール通知およびイベントログへの書き込みは行われません。

- [時刻に基準時間以上の差がある時]
- [クライアント情報異常時の通知]
- [トレース採取中のCTの通知]

[緊急対処依頼・解除完了時の動作]

クライアント(CT)への緊急対処依頼および緊急対処解除が完了した場合の管理者へのメール通知、イベントログへの書き込みの有無を設定します。

項目名	説明
[管理者へのメール通知]	<p>する</p> <p>緊急対処依頼・解除完了時に通知メールを送信します。</p>

項目名	説明
	しない 緊急対処依頼・解除完了しても通知メールを送信しません。
[イベントログへの書き込み]	する 緊急対処依頼・解除完了時にイベントログにログ情報を書き込みます。 しない 緊急対処依頼・解除完了してもイベントログにログ情報を書き込みません。

[その他設定] [メール送信先設定]

[メール送信先設定]ボタンをクリックすると、[メール送信先設定]画面が表示されます。

管理者へのメール通知に必要な情報を設定します。

項目名	説明
[送信メールサーバ・アドレスまたはサーバ名]	<p>管理者へのメール通知を行う場合に、SMTPサーバ名を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> サーバ名を入力する場合 <ul style="list-style-type: none"> 半角255文字まで入力できます。 サーバ名として使用できる文字は、半角英数字(A-Z, a-z, 0-9)および半角記号のハイフン(-)です。半角ピリオド(.)はラベルの区切り文字としてのみ使用可能です。 “-”以外の記号は指定できません。この制限にSMTPサーバ名の場合は、IPアドレスで指定してください。 各ラベルの先頭および末尾に“-”の記号は指定できません。 数字のみのサーバ名は入力できません。 IPv4アドレスを入力する場合 <ul style="list-style-type: none"> 半角15文字まで入力できます。 使用できる文字は、半角数字(0-9)および半角記号のピリオド(.)です。 ループバックアドレス(127.0.0.1)は指定できません。 IPv6アドレスを入力する場合 <ul style="list-style-type: none"> 半角39文字まで入力できます。

項目名	説明
	<p>— 使用できる文字は、半角英数字(A - F、a - f、0 - 9)および半角記号のコロン(:)です。</p> <p>— ループバックアドレス(::1)は指定できません。</p> <p>・リンクローカルアドレスは入力しないでください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。</p> <p>注)IPv6アドレスの場合、RFC 5952に準拠した省略形も使用できます。</p>
[ポート番号]	<p>メール送信用のポート番号を入力します。</p> <p>初期値は25です。</p>
[SMTP認証を行う]	<p>送信メールサーバとの通信でSMTP認証を行うかを設定します。</p> <p>する</p> <p>SMTP認証を行う場合に選択します。</p> <p>しない</p> <p>SMTP認証を行わない場合に選択します。</p>
[認証方式]	<p>[SMTP認証を行う]を“する”とした場合、認証方式を選択します。選択可能な方式は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ CRAM-MD5 ・ LOGIN ・ PLAIN ・ AUTO <p>AUTOを選択した場合は、認証方式を以下の順で自動判定します。初期値はAUTOです。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) CRAM-MD5 2) PLAIN 3) LOGIN
[認証ユーザーID]	<p>送信メールサーバとの通信でSMTP認証を行う場合のユーザーIDを入力します。</p> <p>半角で40文字まで入力できます。</p> <p>以下の文字を含む認証ユーザーIDまたはピリオドのみで構成された認証ユーザーIDは入力できません。</p> <p>入力できない記号:「¥」「/」「[」「]」「:」「 」「<」「>」「+」「=」「;」「,」「?」「*」「@」「"」</p>
[認証パスワード(1回目)]	<p>SMTP認証ユーザーIDのパスワードを入力します。</p> <p>半角で32文字までの半角のカナ以外が入力できます。</p>
[認証パスワード(再入力)]	<p>誤登録を防ぐため、パスワードを再入力します。</p>
[送信先のメールアドレス(TO)]	<p>システム管理者へのメール通知を行う場合に、メール送信先(To)のアドレスを入力します。半角で255文字までの以下の記号以外が入力できます。</p> <p>メールアドレスとして入力できない記号:「¥」「"」「(」「)」「[」「]」「<」「>」「,」「;」「:」</p> <p>5件までのメールアドレスが入力できます。</p> <p>複数のメールアドレスを入力する場合は、メールアドレスの間にセミコロン「;」を入力します。</p>
[送信先のメールアドレス(CC)]	<p>システム管理者へのメール通知を行う場合に、メール送信先(CC)のアドレスを入力します。CCに送信しない場合は入力しません。半角で255文字までの以下の記号以外が入力できます。</p>

項目名	説明
	メールアドレスとして入力できない記号:「¥」「"」「(」「)」「[」「]」「<」「>」「,」「;」「:」 5件までのメールアドレスが入力できます。 複数のメールアドレスを入力する場合は、メールアドレスの間にセミコロン「;」を入力します。
[送信者のメールアドレス (FROM)]	管理者へのメール通知を行う場合に、メール送信者のアドレスを入力します。 半角で255文字までの以下の記号以外が入力できます。 メールアドレスとして入力できない記号:「¥」「"」「(」「)」「[」「]」「<」「>」「,」「;」「:」

[その他設定] [メールタイトル設定]

[メールタイトル設定]ボタンをクリックすると、[メールタイトル設定]画面が表示されます。

管理者へ通知されるメールのタイトルを設定します。

項目名	説明
[禁止ログ・検知] (必須)	禁止ログを検知した場合に管理者へ通知されるメールのタイトルを設定します。 半角で255文字(全角で127文字)まで入力できます。 初期値は、「Systemwalker Desktop Keeper WARNING Report at {@DATE} {@TIME}」です。[初期値に戻す]ボタンをクリックすることで、初期値に戻すことができます。 ・設定できるパラメーターは、「設定できるパラメーター」を参照してください。
[領域枯渇時の動作] (必須)	領域枯渇を検知した場合に管理者へ通知されるメールのタイトルを設定します。 半角で255文字(全角で127文字)まで入力できます。 初期値は、「Systemwalker Desktop Keeper WARNING Report at {@DATE} {@TIME}」です。[初期値に戻す]ボタンをクリックすることで、初期値に戻すことができます。

項目名	説明
	設定できるパラメーターは、「設定できるパラメーター」を参照してください。
[CTの監視動作] (必須)	クライアント(CT)情報が変更されていた場合に管理者へ通知されるメールのタイトルを設定します。 半角で255文字(全角で127文字)まで入力できます。 初期値は、「Systemwalker Desktop Keeper WARNING Report at {@DATE} {@TIME}」です。[初期値に戻す]ボタンをクリックすることで、初期値に戻すことができます。 設定できるパラメーターは、「設定できるパラメーター」を参照してください。
[緊急対処依頼・解除完了時の動作] (必須)	緊急対処依頼・解除完了した場合に管理者へ通知されるメールのタイトルを設定します。 半角で255文字(全角で127文字)まで入力できます。 初期値は、「Systemwalker Desktop Keeper WARNING Report at {@DATE} {@TIME}」です。[初期値に戻す]ボタンをクリックすることで、初期値に戻すことができます。 設定できるパラメーターは、「設定できるパラメーター」を参照してください。

設定できるパラメーター

通知内容ごとに設定できるパラメーターは、以下のとおりです。

パラメーター名	指定した場合にメールタイトルに表示される内容	禁止ログ・検知	領域枯渇時の動作	CTの監視動作	緊急対処依頼・解除完了時の動作
{@DATE}	管理者へ通知されるログの操作日付	○	○	○	○
{@TIME}	管理者へ通知されるログの操作時刻	○	○	○	○
{@KIND}	管理者へ通知されるログの種別	○	—	○	○
{@SV}	管理者へ通知されるログが蓄積されている(統合)サーバ名	○	○	○	○
{@CT}	管理者へ通知されるログが発生する操作を行ったクライアント(CT)の名称	○	—	○	○
{@COMP}	管理者へ通知されるログが発生する操作を行ったクライアント(CT)のコンピュータ名	○	—	○	○
{@USER}	管理者へ通知されるログが発生する操作を行ったユーザー名	○	—	○	—
{@ERR}	発生したエラー内容	—	○	—	○

○:パラメーターとして設定できます。

—:パラメーターとして設定できません。

- 必要な設定項目を入力し、[設定]ボタンをクリックします。

メール通知形式

クライアント(CT)やデータベースで発生した事象が、管理者にメール通知される形式は、以下のとおりです。クライアント(CT)がデュアルスタックの場合、端末欄へはIPv4アドレスだけが表示されます。

項目名	形式
メール件名	Systemwalker Desktop Keeper WARNING Report at [yyyy/mm/dd hh:mm:ss]

項目名	形式
	注)メールタイトルのパラメーターが初期値の場合
本文(Subject)	<p>禁止ログ検知時</p> <p>操作種別: 管理サーバ: ユーザー名: 端末: CTバージョン: 操作日時: 詳細:</p> <p>データベース異常時</p> <p>エラー内容: 管理サーバ: 発生日時: 詳細:</p> <p>MACアドレス変更時</p> <p>操作種別: 管理サーバ: ユーザー名: 端末: CTバージョン: 操作日時: 詳細:</p> <p>■MACアドレス 変更前:[] 変更後:[]</p> <p>■コンピュータ名 変更前:[] 変更後:[]</p> <p>■IPアドレス 変更前:[] 変更後:[]</p> <p>手動で緊急対処依頼が行われた場合の通知</p> <p>緊急対処依頼方法:%1からの緊急対処依頼 管理サーバ:%2(%3) 端末:%4(%5) CTバージョン:%6 緊急対処依頼日時:%7 緊急対処:%8 緊急対処内容:%9 WebコンソールURL:%10 詳細:%11</p> <p>可変情報</p> <p>%1: 緊急対処依頼を行った方法 %2: 管理(統合管理)サーバの端末名 %3: 管理(統合管理)サーバのIPアドレス %4: クライアント(CT)の端末名 %5: クライアント(CT)のIPアドレス %6: クライアント(CT)のバージョン %7: 緊急対処をクライアント(CT)へ依頼した日時</p>

項目名	形式
	<p>%8: 緊急対処依頼の成功可否</p> <p>%9: 緊急対処の内容</p> <p>%10: WebコンソールのURL</p> <p>%11: 空白</p> <p>検知製品が緊急対処依頼を行った場合の通知</p> <p>緊急対処依頼方法: 検知製品からの緊急対処依頼 管理サーバ:%1(%2) 端末:%3(%4) CTバージョン:%5 緊急対処依頼日時:%6 緊急対処:%7 緊急対処内容:%8 検知製品名:%9 検知製品によるネットワーク遮断:%10 WebコンソールURL:%11 詳細:%12 検知製品によるネットワーク遮断が行われている場合は、既にネットワークが利用できない状態であるため緊急対処依頼が失敗します。クライアント(CT)利用者に直接緊急対処を依頼してください。 連携製品ログ:%13</p> <p>可変情報</p> <p>%1: 管理(統合管理)サーバの端末名</p> <p>%2: 管理(統合管理)サーバのIPアドレス</p> <p>%3: クライアント(CT)の端末名</p> <p>%4: クライアント(CT)のIPアドレス</p> <p>%5: クライアント(CT)のバージョン</p> <p>%6: 緊急対処をクライアント(CT)へ依頼した日時</p> <p>%7: 緊急対処依頼の成功可否</p> <p>%8: 緊急対処の内容</p> <p>%9: 検知製品の名称</p> <p>%10: 検知製品によるネットワーク遮断の有無</p> <p>%11: WebコンソールのURL</p> <p>%12: 検知製品によって以下ようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> — 検知製品がiNetSec SFの場合 C&CサーバのIPアドレス(取得できた場合) — 検知製品がWindows Defenderの場合 Windows Defenderが検知したイベントの概要 <p>%13: 連携製品のログ</p> <p>緊急対処解除が行われた場合の通知</p> <p>緊急対処解除完了 管理サーバ:%1(%2) 端末:%3(%4) CTバージョン:%5 緊急対処解除日時:%6 詳細:%7</p>

項目名	形式
	可変情報 %1: 管理(統合管理)サーバの端末名 %2: 管理(統合管理)サーバのIPアドレス %3: クライアント(CT)の端末名 %4: クライアント(CT)のIPアドレス %5: クライアント(CT)のバージョン %6: 緊急対処解除を行った日時 %7: 空白

イベントログ表示形式

クライアント(CT)やデータベースで発生した事象が、Windowsのイベントビューアに表示される形式について説明します。通知された情報は、Windowsのイベントログの「アプリケーションログ」に表示されます。以下に表示内容を説明します。クライアント(CT)がデュアルスタックの場合、端末欄へはIPv4アドレスだけが表示されます。

項目名	説明
種類	[警告]が表示されます。
日付	通知情報がイベントビューアに表示された日付です。
時刻	通知情報がイベントビューアに表示された時刻です。
ユーザー	ユーザーIDです。
コンピュータ	コンピュータ名です。
ソース	[SWDTK]が表示されます。
分類	[なし]が表示されます。
イベントID	以下の番号が表示されます。 禁止ログ検知時 8001: アプリケーション起動禁止 8002: 印刷禁止 8003: ログオン禁止 8004: PrintScreenキー押下 8005: 連携アプリケーション 8006: メール添付禁止 8010: デバイス構成変更(デバイスが、USBデバイスの場合) 8012: URLアクセス禁止 8013: FTPサーバ接続禁止 8014: Webアップロード禁止、 8015: Webダウンロード禁止 8017: クリップボード操作禁止 8018: デバイス構成変更(デバイスが、PCカード、Wi-Fi接続、Bluetoothの場合) 8021: デバイス構成変更(メディアの場合) クライアント(CT)の監視動作 8007: クライアント(CT)端末時刻不一致 8008: MACアドレス変更有り

項目名	説明
	<p>8011:トレース採取中のクライアント(CT)</p> <p>データベース異常時</p> <p>2002:データベース領域枯渇しきい値を超えました</p> <p>3006:データベース領域枯渇</p> <p>3007:付帯データ蓄積フォルダのディスク領域枯渇</p> <p>3008:コマンドプロンプトログフォルダのディスク領域枯渇</p> <p>3009:一括送信ログフォルダのディスク領域枯渇</p> <p>3010:トレースログフォルダのディスク領域枯渇</p> <p>3015:メール内容保存先のディスク領域枯渇</p> <p>3016:障害調査データ保存先のディスク領域枯渇</p> <p>緊急対処依頼・解除完了時</p> <p>8022:手動で緊急対処依頼が行われました</p> <p>8023:検知製品から緊急対処依頼が行われました</p> <p>8024:緊急対処が解除されました</p> <p>詳細は、“リファレンスマニュアル”の“イベントログに出力されるメッセージ”を参照してください。</p>
説明	<p>以下の情報が表示されます。</p> <p>禁止ログ検知時</p> <p>操作種別: 管理サーバ: ユーザー名: 端末: CTバージョン: 操作日時: 詳細:</p> <p>データベース異常時</p> <p>エラー内容: 管理サーバ: 発生日時: 詳細:</p> <p>MACアドレス変更時</p> <p>操作種別: 管理サーバ: ユーザー名: 端末: CTバージョン: 操作日時: 詳細:</p> <p>■MACアドレス 変更前:[] 変更後:[]</p> <p>■コンピュータ名 変更前:[] 変更後:[]</p> <p>■IPアドレス 変更前:[] 変更後:[]</p>

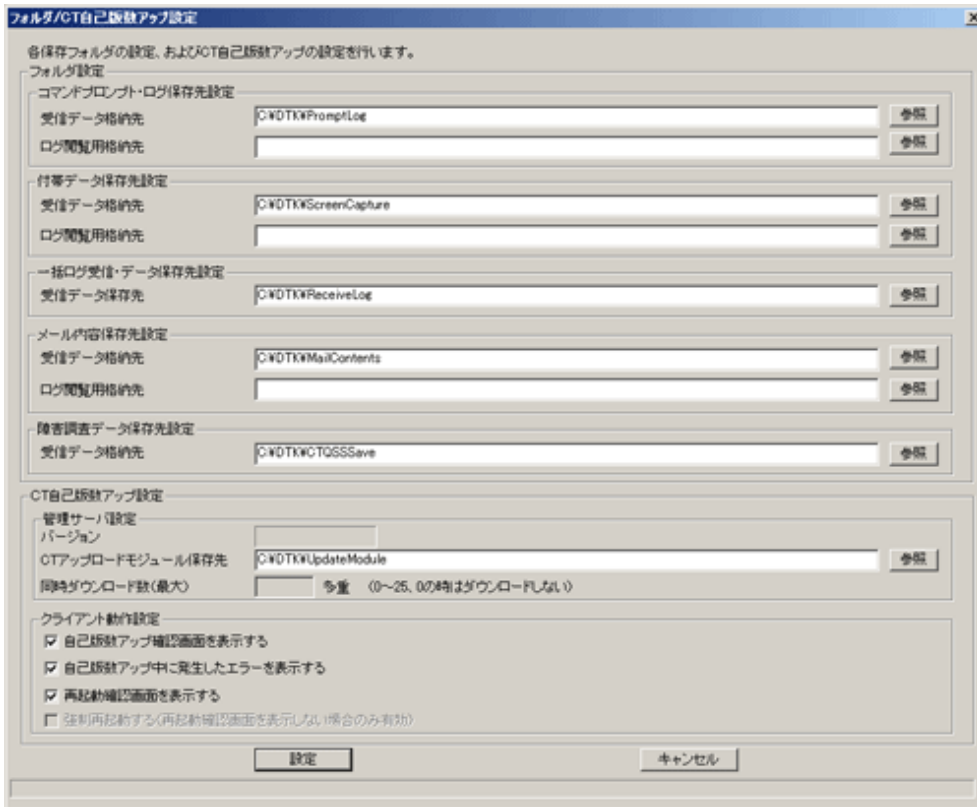
項目名	説明
	<p>手動で緊急対処依頼が行われた場合の通知</p> <p>緊急対処依頼方法:XXXからの緊急対処依頼 管理サーバ: 端末: CTバージョン: 緊急対処依頼日時: 緊急対処: 緊急対処内容: WebコンソールURL: 詳細:</p> <p>検知製品が緊急対処依頼を行った場合の通知</p> <p>緊急対処依頼方法:検知製品からの緊急対処依頼 管理サーバ: 端末: CTバージョン: 緊急対処依頼日時: 緊急対処: 緊急対処内容: 検知製品名:検知製品によるネットワーク遮断: WebコンソールURL: 詳細: 連携製品ログ:</p> <p>緊急対処解除が行われた場合の通知</p> <p>緊急対処解除完了 管理サーバ: 端末: CTバージョン: 緊急対処解除日時: 詳細:</p>

2.3.4.11 保存先フォルダを設定する

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバにおける各種フォルダの設定を行います。

保存先フォルダの設定の手順は以下のとおりです。

1. サーバ設定ツールのメニューから[フォルダ/CT自己版数アップ設定]ボタンをクリックします。
→[フォルダ/CT自己版数アップ設定]画面が表示されます。



2. [フォルダ設定]に表示されている以下の各種情報の保存先の初期値を確認し、変更する場合は、[参照]ボタンをクリックして、保存先を修正します。
([CT自己版数アップ設定]については、ここでは設定の必要はありません。設定内容については、“[4.7 クライアント\(CT\)をバージョンアップする](#)”を参照してください。)

[フォルダ設定]

項目名	説明
[コマンドプロンプト・ログ保存先設定]	<p>管理サーバでのコマンドプロンプトログ保存先フォルダを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> フルパスでフォルダ名を入力する コマンドプロンプトログ保存先フォルダまでのパスをフルパスで入力します。ネットワークドライブは指定できません。 [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、コマンドプロンプトログを保存するフォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できるフルパスの長さは、半角で96文字(全角で48文字)までです。 以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>
[受信データ格納先]	運用中のデータを格納するフォルダを指定します。
[ログ閲覧格納先]	ログ閲覧用のデータを格納するフォルダを指定します。 ログ閲覧データベースを作成し、操作ログをリストアする際に指定します。

項目名	説明
[付帯データ保存先設定]	<p>管理サーバでの付帯データ(画面キャプチャデータ、原本保管ファイル、クリップボード操作原本保管ファイル)の保存先フォルダを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> フルパスでフォルダ名を入力する 付帯データ保存先フォルダまでのパスをフルパスで入力します。ネットワークドライブは指定できません。 [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、付帯データ保存先フォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できるフルパスの長さは、半角で96文字(全角で48文字)までです。 以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>
[受信データ格納先]	運用中のデータを格納するフォルダを指定します。
[ログ閲覧格納先]	ログ閲覧用のデータを格納するフォルダを指定します。ログ閲覧データベースを作成し、操作ログをリストアする際に指定します。
[一括ログ受信・データ保存先設定]	<p>管理サーバでの一括ログデータ保存先フォルダを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> フルパスでフォルダ名を入力する 一括ログデータ保存先フォルダまでのパスをフルパスで入力します。ネットワークドライブは指定できません。 [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、一括ログデータ保存先フォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できるフルパスの長さは、半角で96文字(全角で48文字)までです。 以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>
[メール内容保存先設定]	<p>管理サーバでのメール内容データ(メール本文、添付ファイル)の保存先フォルダを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> フルパスでフォルダ名を入力する メール内容データ保存先フォルダまでのパスをフルパスで入力します。ネットワークドライブは指定できません。 [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、メール内容データ保存先フォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できるフルパスの長さは、半角で96文字(全角で48文字)までです。 以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>
[受信データ格納先]	運用中のデータを格納するフォルダを指定します。
[ログ閲覧格納先]	ログ閲覧用のデータを格納するフォルダを指定します。ログ閲覧データベースを作成し、操作ログをリストアする際に指定します。
[障害調査データ保存先設定]	リモート採取したQSS(障害調査データ)の、管理サーバでの保存先フォルダを指定します。指定方法は、以下のとおりです。

項目名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> フルパスでフォルダ名を入力する 障害調査データ保存先フォルダまでのパスをフルパスで入力します。ネットワークドライブは指定できません。 [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、障害調査データ保存先フォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できるフルパスの長さは、半角で96文字(全角で48文字)までです。 以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>

2.4 管理コンソールをインストールする

Systemwalker Desktop Keeper の管理コンソールを、新規にインストールする方法について説明します。

管理サーバを新規でインストールした場合には、すでに管理コンソールがインストールされていますので、この作業は不要です。

旧版の管理コンソールがインストールされた状態で、V15.3.0の管理コンソールをインストールする場合は“[第4章 バージョンアップ](#)”を参照してください。

インストール前の確認事項

- “リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照して、使用するポート番号を確認します。
- 接続先の(統合)管理サーバ設定時に、コンピュータ名を指定する場合は、名前解決されていることを確認します。
- 管理サーバを新規でインストールした場合、管理コンソールもインストールされます。
この場合、接続先のIPアドレスには[localhost]、ポート番号には[10015]が設定されます。

インストール

管理コンソールのインストール手順は、以下のとおりです。なお、動作環境については“解説書”の“動作環境”を参照してください。

- Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。
- Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。
[管理コンソール インストール]を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。
- [Systemwalker Desktop Keeper 管理コンソール セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
- [インストール先の選択]画面が表示されます。
表示されているインストール先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。
表示されているインストール先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。

注意

管理コンソール機能のインストール先フォルダを圧縮または暗号化の対象とした場合、プログラム動作に影響がでる可能性があります。圧縮や暗号の設定を行わないでください。

[インストール先のフォルダ]で指定できる最大パス長は半角96文字です。

[インストール先のフォルダ]には、全角空白、ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字は指定できません。

以下のドライブは指定できません。

- ネットワークドライブ
- フォーマット形式がNTFS以外のドライブ

フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。半角カナも使用しないでください。

5. [サーバ情報の入力]画面が表示されるので、接続するサーバ情報を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。接続するサーバの設定手順は以下のとおりです。
 - a. 接続するサーバ情報は、以下の情報を設定して、[追加]ボタンをクリックします。

注意

接続する(統合)管理サーバの設定を確認してください

接続する(統合)管理サーバの情報と管理コンソールでの設定を同じ設定にしてください。確認方法は以下のとおりです。

1. 接続する(統合)管理サーバ上で、[スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[サーバ設定ツール]、または [アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ設定ツール]を起動します。
2. [管理サーバ設定]ボタンをクリックします。
3. 以下の項目を確認します。
 - ・[サーバ設定]の[サーバIPアドレス]の設定値
 - ・[ポート番号設定]の[管理コンソール< ---- >階層化サービス]の設定値

- [接続する(統合)管理サーバのコンピュータ名またはIPアドレス]
接続する(統合)管理サーバのコンピュータ名またはIPアドレスを入力します。
コンピュータ名を入力する場合は、名前解決できているものを入力してください。名前解決できていない場合、(統合)管理サーバと管理コンソールは接続できません。
IPアドレスはIPv4形式およびIPv6形式のどちらも入力できます。ただしリンクローカルアドレスは入力しないでください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。
ここで設定した値は、管理コンソールのログイン画面で[接続先サーバ名]の選択候補として表示されます。
注)IPv6アドレスの場合、RFC 5952に準拠した省略形も使用できます。
 - [使用するポート番号]
管理コンソールと階層化サービス間を通信するためのポート番号を入力します。
指定する番号は、[ポート番号設定]の[管理コンソール< ---- >階層化サービス]の設定値を入力します。
追加すると設定した情報が、[追加]ボタンの下に表示されます。
- b. 接続するサーバが複数ある場合は、手順a.の操作をサーバ数分行います。
なお、[↑]ボタンまたは[↓]ボタンで通常接続するサーバが上に表示されるよう調整できます。

6. [インストール準備の完了]画面が表示されます。
インストールを開始する場合は、[インストール]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。
設定した内容を確認または、変更したい場合は、[戻る]ボタンをクリックし、再度設定をやりなおしてください。
7. 以下のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックして、インストール処理を続行します。

インストールの最後に「正常にインストールしました」という画面が表示されます。
画面が表示されるまでインストールが継続していますのでお待ちください。

8. 以下のメッセージが表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

Systemwalker Desktop Keeper管理コンソールを正常にインストールしました。

9. 処理が正常に完了すると、[確認]画面が表示されます。
プログラムを使用するには、[はい]ボタンをクリックして、OSを再起動します。

注意

管理コンソールの利用には管理者情報の登録が必要です

管理コンソールを利用するには[サーバ設定ツール]で管理者情報の登録をおこなう必要があります。管理者情報の登録については、“[2.3.4.8 管理者情報を設定する](#)”を参照してください。

管理コンソールをインストール中、インストーラの背景のみが表示されている状態が数分間継続する場合があります。

端末負荷や排他の状態によりインストーラの内部処理に時間がかかっているためであり、正常動作のため強制終了等を行わないでください。もし、強制再起動等を実施した場合には、上書きインストールによって、インストールを完了させてください。

管理コンソールを利用するPCでは、不正操作を防止するため、以下の設定を行って下さい。

- 利用には、パスワードを設定する
- パスワード付きスクリーンセーバーの設定をする(推奨値:10分以下)

2.5 Webブラウザを使用するPCでの準備

Systemwalker Desktop Keeperでは、Webブラウザを使用してログの参照や分析を行います。

Webブラウザを使用するPCでは、Internet Explorerのセキュリティレベルの設定を必要に応じて行ってください。

Webブラウザのサイト(URL)が属するゾーンのセキュリティレベルが、以下に示すレベルより高い場合、正常に動作しない場合があります。

- ・ セキュリティレベル「中高」

上記の理由で正常動作しない場合、Webブラウザのサイト(URL)を上記と同等以下のセキュリティレベルのゾーンに所属させるか、現在所属しているゾーンのセキュリティレベルを下げる必要があります。

通常、[イントラネット]または[信頼済みサイト]のゾーンは上記のセキュリティレベルが既定となっているため、どちらかのゾーンの[サイト]にWebコンソールのサイト(URL)を登録することをおすすめします。

なお、Webブラウザを表示させた際に属しているゾーン(「イントラネット」、「インターネット」など)は、ファイル・メニューの[プロパティ]を選択することで表示されるプロパティ・ページの中ほどの[ゾーン]項目で確認することができます。



注意

Webコンソール、ログビューアを使用する場合、HTTPSの設定を推奨します。IIS・Webブラウザで設定を行って下さい。

64ビットOS上のInternet Explorerの設定について

64ビットOSの場合は、Webブラウザは32ビット版のInternet Explorerを使用してください。

ファイルのダウンロードが成功しない場合の設定について

ファイルをダウンロードする操作としては以下があります。

- ・ ログ検索後、ファイル追跡後、設定変更ログ検索後のCSV出力機能でのファイルのダウンロード
- ・ コマンドプロンプトログの内容ダウンロード機能によるファイルのダウンロード
- ・ ファイル持出しログの付帯ファイルダウンロード機能によるファイルのダウンロード
- ・ 画像表示画面からのファイル保存によるダウンロード

上記のファイルのダウンロード操作を行った場合、保存先のファイル名を入力した後に[～コピーしました]の画面が表示されたままダウンロードに時間がかかる、またはダウンロードが終了しない場合があります。

その場合、以下の設定を変更してください。

Systemwalker Desktop Patrolと連携する場合の設定について

Systemwalker Desktop Patrolと連携し、Windows Internet Explorer 9以降を使用する場合、以下の設定を行ってください。

1. Internet Explorerの[ツール]-[インターネットオプション]-[セキュリティ]タブを開きます。
2. Systemwalker Desktop KeeperおよびSystemwalker Desktop Patrolのサイト(URL)が属するゾーンを選択して[レベルのカスタマイズ]をクリックし[セキュリティ設定]画面を開きます。
3. 設定欄で[その他]グループにある[異なるドメイン間のウィンドウとフレームの移動]を[有効]にします。

4. [セキュリティ設定]画面で[OK]をクリックします。
5. [セキュリティ]タブで[適用]または[OK]をクリックします。

2.6 クライアント(CT)をインストールする

Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)を、新規にインストールする方法について説明します。

Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)の導入方法には、以下の方法があります。それぞれの概要については、“[1.2.5 クライアント\(CT\)導入方法を決定する](#)”を参照してください。

- 単体インストールによる導入
 - ウィザード形式のインストール
 - サイレントインストール
- マスタPC/マスタ仮想PCを使用した導入
- Systemwalker Desktop Patrolを使用した配付による導入
- Active Directoryのグループポリシーを使用した導入

旧版のクライアント(CT)がインストールされた状態で、V15.3.0のクライアント(CT)をインストールする場合は“[第4章 バージョンアップ](#)”を参照してください。



注意

管理(統合管理)サーバにクライアント(CT)をインストールする場合

管理サーバにクライアント(CT)を導入する場合は、以下の2点について注意が必要です。

- インストール順序について
- 接続するサーバについて

詳細については“[管理サーバ/統合管理サーバにクライアント\(CT\)をインストールする場合](#)”を参照してください

クライアント(CT)のインストールコマンド(Setup.exe)をコピーしてインストールする場合

必ずクライアント(CT)のインストールフォルダごとコピーしてインストールを行ってください。クライアント(CT)のインストールフォルダは、セットアップディスクの「win32¥DTKClient」フォルダとなります。

インストールしたクライアント(CT)が管理コンソールで確認できない場合について

インストールしたクライアント(CT)が管理コンソールで確認できない場合は、以下の原因が考えられます。

- クライアント(CT)のインストール時に指定した管理サーバのIPアドレスが正しくない
- クライアント(CT)のインストール時に指定したポート番号が管理サーバの設定値と違う
- ルータ等で、クライアント(CT)と管理サーバ間で使用するポートが遮断されている

クライアント(CT)のインストール中はネットワークが切断されます

クライアント(CT)のインストール中、一時的にネットワークの切断が行われます。エクスプローラなどでネットワークフォルダを開いている場合は、閉じてください。

Windows 8.1、Windows 10にクライアント(CT)をインストールする場合の注意事項

クライアント(CT)のインストールを実施後、[インストールの完了]画面で[いいえ、後でコンピュータを再起動します。]を選択した場合、その後の操作で必ずOSの「再起動」を実施してください。

OSのシャットダウン(シャットダウンと電源ONの操作)を実施しても、クライアント(CT)機能は適用されません。

パスワードは忘れないでください

クライアント(CT)インストール時のパスワードは、クライアント(CT)アンインストール時に必要となります。

インストール時のパスワードを忘れないよう、メモしておいてください。

クライアント(CT)端末登録時認証について

クライアント(CT)端末登録時認証を行う場合、インストール時に入力するパスワードは、管理コンソールの端末動作設定画面で設定したクライアント管理パスワードと同じものを入力してください。

管理コンソールでのクライアント管理パスワードの設定については、“運用ガイド管理者編”の“端末動作設定を行う”を参照してください。

クライアント(CT)のインストール時に指定する通信ポートについて

インストール時は必ず独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)が設定されるため、セキュア通信方式を使用する場合でも、独自通信方式のポート番号を指定する必要があります。

OSの再起動について

インストール後にOSを再起動することで、クライアント(CT)の各機能が有効となります。また、OSを再起動せずに他のソフトウェアをインストールすると、クライアント(CT)が正常にインストールできない可能性があります。

ポイント

インストール時にイベントログに以下のメッセージが出力される場合があります。

```
イベントログの内容
ソース名 : Service Control Manager Eventlog Provider
イベントID : 7030
レベル : エラー
内容 : ProcessControllerサービスは、対話型サービスとしてマークされています。
      しかし、システムは対話型サービスを許可しないように構成されています。
      このサービスは正常に機能しない可能性があります。
```

このメッセージは、OSが対話型サービスを推奨しないために表示されるメッセージで、動作上の問題はありません。

2.6.1 単体インストール

クライアント(CT)の単体インストール方法には、以下の2つがあります。

ウィザード形式のインストール

ウィザード形式のインストールは、対話形式で行います。“2.6.1.1 ウィザード形式でインストールする”を参照してください。

サイレントインストール

サイレントインストールは、準備したインストール設定ファイルに従って、インストールを自動化できます。“2.6.1.2 サイレントインストールを実施する”を参照してください。

2.6.1.1 ウィザード形式でインストールする

注意

全角文字を含むユーザー名のユーザーがクライアント(CT)をインストールする際に、エラーメッセージが表示される場合があります。

クライアント(CT)のインストールは半角文字のみのユーザー名のユーザーにて実施してください。

Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)を、ウィザード形式で新規にインストールする方法について説明します。

インストール前の確認事項

- “リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照して、使用するポート番号を確認してください。

インストール

ウィザード形式でのクライアント(CT)のインストール手順は、以下のとおりです。なお、動作環境については“解説書”の“動作環境”を参照してください。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。
[CT(クライアント)インストール]を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。
3. [Systemwalker Desktop Keeper クライアント セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. CT(クライアント)の[インストール先の選択]画面が表示されます。表示されているインストール先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。
表示されているインストール先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。

注意

CTのインストール先について

CT(クライアント)のインストール先フォルダや以下のログファイルの格納先フォルダを圧縮または暗号化の対象とした場合、プログラム動作に影響がでる可能性があります。圧縮や暗号の設定を行わないでください。

[インストール先のフォルダ]で指定できる最大パス長は半角96文字です。

[インストール先のフォルダ]には、全角空白、ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字は指定できません。

5. ログファイル格納先を設定する[インストール先の選択]画面が表示されます。表示されている格納先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。
表示されている格納先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。
ログファイルを格納するフォルダのパスには、Windowsのシステムドライブ配下のフォルダを設定します。(CドライブにOSをインストールした場合は、Cドライブがシステムドライブになります)

注意

持出し禁止ドライブを指定しないでください

ログが失われる恐れがあるため、ログファイルの格納先には、持出し禁止ドライブを指定しないでください。

6. [サーバ情報の入力]画面が表示されるので、接続するサーバの情報を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。

サーバ情報の入力
Systemwalker Desktop Keeper のサーバに関する情報を入力してください。

接続する(統合)管理サーバのサーバ名またはIPアドレス:

代替管理サーバのサーバ名またはIPアドレス:

(注)代替管理サーバは、3階層のシステム構成で、ユーザー情報を統合管理サーバで集中管理する場合のみ定義してください。

使用するポート番号(受信用): 10010

使用するポート番号(送信用): 10010

使用するポート番号(送信用2): 10014

InstallShield

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

- **[接続する(統合)管理サーバのサーバ名またはIPアドレス]:**接続する(統合)管理サーバのIPアドレスまたはサーバ名を入力します。
管理サーバ/統合管理サーバにクライアント(CT)をインストールする場合は[接続する(統合)管理サーバのIPアドレス]の指定は不要です。(IPアドレスには127.0.0.1(IPV4):::1(IPv6),127.0.0.1(IPv4/IPv6)と表示され、入力できません)
IPアドレスはIPv4形式およびIPv6形式のどちらも入力できます。
リンクローカルアドレスは入力しないでください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。
指定するIPアドレスは、以下の条件を満たす必要があります。
- サーバ名の長さは253文字以内
 - IPアドレス(IPv4)の長さは15文字以内
 - IPアドレス(IPv6)の長さは39文字以内
 - IPアドレス(IPv4)として使用できる文字は、半角数字(0-9)および半角記号のピリオド(.)
 - IPアドレス(IPv6)として使用できる文字は、半角英数字(A-F, a-f, 0-9)および半角記号のコロン(:)
 - サーバ名として使用できる文字は、半角英数字(A-Z, a-z, 0-9)および半角記号のハイフン(-)、アンダーバー(_)、ピリオド(.)
 - 数字のみのサーバ名、IPアドレスは不可
- **[代替管理サーバのサーバ名またはIPアドレス]:**接続する(統合)管理サーバの異常時に、ユーザーポリシーを照会する代替管理サーバのIPアドレス、または代替管理サーバのコンピュータ名を入力します。
代替管理サーバのIPアドレスは省略可能です。また、本機能は、以下の条件にすべてあてはまる場合に有効になります。IPアドレスはIPv4形式およびIPv6形式のどちらも入力できます。
リンクローカルアドレスは入力しないでください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。
- 管理サーバが3階層の構成である
 - ユーザー一元管理の運用を行っている
 - クライアントの動作をユーザーポリシーで制御している
- 代替管理サーバの選択ポイントは以下のとおりです。
- 統合管理サーバへ接続するクライアント(CT)の場合
下位の管理サーバのいずれかを指定してください。

- 管理サーバへ接続するクライアント(CT)の場合
統合管理サーバを指定してください。

指定するIPアドレスは、以下の条件を満たす必要があります。

- サーバ名の長さは253文字以内
 - IPアドレス(IPv4)の長さは15文字以内
 - IPアドレス(IPv6)の長さは39文字以内
 - IPアドレス(IPv4)として使用できる文字は、半角数字(0 - 9)および半角記号のピリオド(.)
 - IPアドレス(IPv6)として使用できる文字は、半角英数字(A - F, a - f, 0 - 9)および半角記号のコロン(:)
 - サーバ名として使用できる文字は、半角英数字(A - Z, a - z, 0 - 9)および半角記号のハイフン(-)、アンダーバー(_)、ピリオド(.)
 - 数字のみのサーバ名、IPアドレスは不可
- **[使用するポート番号(受信用)]:** 独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、クライアント(CT)とサーバサービス間で通信するためのポート番号(CT側受信用)を入力します。
5001から60000までの値を入力してください。
- **[使用するポート番号(送信用)]:** 独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、クライアント(CT)とサーバサービス間で通信するためのポート番号(クライアント(CT)のログ送信、ポリシー受信用)を入力します。
5001から60000までの値を入力してください。
以下の項目は重複しないように入力してください。
- 使用するポート番号(送信用)
 - 使用するポート番号(送信用2)
- **[使用するポート番号(送信用2)]:** 独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、クライアント(CT)とサーバサービス間で通信するためのポート番号(クライアント(CT)の登録用)を入力します。
5001から60000までの値を入力してください。
以下の項目は重複しないように入力してください。
- 使用するポート番号(送信用)
 - 使用するポート番号(送信用2)

注意

- 独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)を使用する場合、各マシンにおいて、管理サーバ/統合管理サーバのホスト名を名前解決できている必要があります。名前解決できない場合、管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間は通信できません。
セキュア通信方式を使用する場合は、名前解決は必須ではありません。
- セキュア通信方式を使用する場合は、DTKSVMMakeCSR.EXEコマンドの“-cn”オプションで指定した値と、クライアント(CT)で指定する“接続する(統合)管理サーバのサーバ名またはIPアドレス”が一致していない場合、証明書の検証でエラーになります。

7. [印刷監視方式の設定]画面が表示されるので、印刷監視方式について、以下のどちらかを選択して、[次へ]ボタンをクリックします。

- **[この端末で設定されている全てのプリンタでの印刷を監視する(推奨)]:**
1台のクライアント(CT)ごとに印刷操作ログを採取する場合に選択します。この場合、印刷操作ログはクライアント(CT)1台ごとに採取されます。
- **[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]:**
プリンタサーバと同じ統合管理サーバまたは管理サーバ配下にあるクライアント(CT)での印刷操作が、プリンタサーバを経由して行われる場合に選択します。プリンタサーバにもクライアント(CT)をインストールする必要があります。この場合、プリンタサーバではないクライアント(CT)から印刷操作ログは採取されません。印刷操作ログは、プリンタサーバから採取されます。

注意

印刷監視方式の注意点について

【統合管理サーバと管理サーバで統一してください】

統合管理サーバまたは管理サーバ配下のクライアント(CT)では、上記選択を統一してください。統一されていない場合は、印刷操作ログが採取されないことがあります。

【プリンタサーバをサーバ系OS以外にした場合の設定について】

サーバ系のOS(Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019)以外を、プリンタサーバにしている時は、[この端末で設定されている全てのプリンタでの印刷を監視する(推奨)]と設定して運用した場合、プリンタサーバに10台以上接続して印刷できなくなります。この場合は[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]と設定してください。

ポイント

プリンタサーバにユーザーIDを登録する

プリンタサーバに[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]を選択してクライアント(CT)がインストールされている場合、印刷が行われたクライアント(CT)で使用中のユーザーIDをプリンタサーバにも登録しておく必要があります。登録されていない場合は、印刷ログのユーザーIDが以下のように出力されることがあります。

- 印刷が行われたクライアント(CT)で使用中のユーザーIDにユーザー権限しか設定されていない場合、ログの[ユーザーID]が[Guest]として採取されることがあります。
- 印刷時にプリンタサーバに対してログオン要求があり、Administratorにてログオンした場合、ログの[ユーザーID]が[Administrator]として採取されることがあります。

8. [メール制御方式の設定]画面が表示されるので、各ポート番号を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。

- [メール送信監視用ポート番号]:クライアント(CT)とSMTPサーバ間の通信で使用するポート番号を入力します。0 から 65535 までの値を入力してください。以下の項目は重複しないように入力してください。
 - 使用するポート番号(受信用)
 - 使用するポート番号(送信用)
 - 使用するポート番号(送信用2)

- メール送信監視用ポート
 - メール添付禁止用ポート
 - メール添付禁止用ポート2
- **[メール添付禁止用ポート番号]**:メール添付禁止処理で内部的に使用するポート番号を入力します。
5001 から 60000 までの値を入力してください。
以下の項目は重複しないように入力してください。
- ・使用するポート番号(受信用)
 - ・使用するポート番号(送信用)
 - ・使用するポート番号(送信用2)
 - ・メール送信監視用ポート
 - ・メール添付禁止用ポート
 - ・メール添付禁止用ポート2
- **[メール添付禁止用ポート番号2]**:メール添付禁止処理で内部的に使用するポート番号を入力します。
5001 から 60000 までの値を入力してください。
以下の項目は重複しないように入力してください。
- ・使用するポート番号(受信用)
 - ・使用するポート番号(送信用)
 - ・使用するポート番号(送信用2)
 - ・メール送信監視用ポート
 - ・メール添付禁止用ポート
 - ・メール添付禁止用ポート2

注意

【未使用ポートか確認してください】

メール添付禁止用ポートは、必ず他の処理や通信等で使用していないポートを指定してください。

9. [ファイル持出しユーティリティアイコンの作成設定]画面が表示されるので、ファイル持出しユーティリティのアイコンの作成の有無を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。
- **[[デスクトップ]に作成する]**: デスクトップにファイル持出しユーティリティアイコンを作成する場合に選択します。
 - **[[送る]メニューに作成する]**: [送る]メニューにファイル持出しユーティリティアイコンを作成する場合に選択します。
10. [パスワードの入力]画面が表示されるので、クライアント状態表示・変更ユーティリティのパスワードを設定して、[次へ]ボタンをクリックします。
ここで設定するパスワードは、クライアント(CT)のアンインストールや保守コマンドの実行時に必要になります。入力内容の条件は以下のとおりです。
- 半角で32文字までの英数字および以下の記号以外が入力できます。
 - 入力できない記号は、「&」「<」「>」「|」「¥」「"」「~」「'」「?」「:」「^」です。
 - 全角および半角の空白は入力できません。
 - 半角のカナは入力できません。

注意

パスワードを忘れないでください

このパスワードは、クライアント(CT)のアンインストールや、保守コマンドの実行時に必要です。パスワードを忘れると、アンインストールや保守コマンドを実行できなくなるので注意してください。

クライアント(CT)端末登録時認証について

クライアント(CT)端末登録時認証を行う場合、インストール時に入力するパスワードは、管理コンソールの端末動作設定画面で設定したクライアント管理パスワードと同じものを入力してください。

11. [インストール準備の完了]画面が表示されます。
インストールを開始する場合は、[インストール]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。
設定した内容を確認、または変更したい場合は、[戻る]ボタンをクリックし、再度設定をやりなおしてください。
12. 処理が正常に完了すると、[インストール完了]画面が表示されます。
プログラムを使用するには、OSを再起動する必要があります。以下のどちらかを選択し、[完了]ボタンをクリックします。
 - － [はい、今すぐコンピュータを再起動します。]
 - － [いいえ、後でコンピュータを再起動します。]

注意

クライアント(CT)をインストール中、インストーラの背景のみが表示されている状態が数分間継続する場合があります。

端末負荷や排他の状態によりインストーラの内部処理に時間がかかっているためであり、正常動作のため強制終了等を行わないでください。もし、強制再起動等を実施した場合には、上書きインストールによって、インストールを完了させてください。

2.6.1.2 サイレントインストールを実施する

注意

全角文字を含むユーザー名のユーザーがクライアント(CT)をインストールする場合には、エラーメッセージが表示される場合があります。クライアント(CT)のインストールは半角文字のみのユーザー名のユーザーにて実施してください。

インストール設定ファイルを作成する

クライアント(CT)のサイレントインストールで使用するインストール設定ファイル (InstConf.ini)をサーバ設定ツールで作成します。

なお、自己版数管理機能を使用したバージョンアップ時にサイレントインストールを実施する場合も本手順で行います。

作成手順は、以下のとおりです。

1. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[サーバ設定ツール]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ設定ツール]を選択し、ログオンします。

2. [CTサイレントインストールファイル生成]ボタンをクリックします。

→以下の画面が表示されます。

CTのサイレントインストール用の「インストール設定ファイル」の生成を行います。

InstConf.iniの内容設定

サーバIPアドレスまたはサーバ名(CT管理サーバ) 192.168.0.172

サーバIPアドレスまたはサーバ名(代替管理サーバ) 192.168.0.172

代替管理サーバは、3階層のシステム構成で、ユーザー情報を統合管理サーバで集中管理する場合のみ定義する

ポート番号の設定

ポート番号(受信用) 10010 ポート番号(メール添付禁止用) 10018

ポート番号(送信用) 10010 ポート番号(メール添付禁止用2) 10019

ポート番号(送信用2) 10014 ポート番号(メール送信監視用) 25

パスワード(1回目) []

パスワード(再入力) []

ログ出力先フォルダ C:\DTK*_Extension

インストール後のOS再起動指定 再起動確認画面を表示する
 強制再起動する(再起動確認画面を表示しない場合のみ有効)

クライアントインストール先 C:\Program Files\Fujitsu\Systemwalker\Desktop Keeper\

印刷監視方式 この端末で設定されている全てのプリンタでの印刷を監視する(推奨)
 ローカルプリンタでの印刷のみを監視する

メール添付禁止 ポート監視方式(推奨)
 V12.0L20~V13.0.0互換方式

ログオン直後の適用ポリシー ユーザーポリシー
 常にCTポリシー(V12.0L20~V13.0.0互換方式)

ファイル持出しユーティリティアイコンの作成設定

[デスクトップ]に作成する [送る]メニューに作成する


インストール設定ファイル C:\InstConf.ini 参照


出力開始 キャンセル

3. 以下の情報を入力し、[出力開始]ボタンをクリックします

設定項目	値
[サーバIPアドレスまたはサーバ名(CT管理サーバ)]	接続する管理サーバ/統合管理サーバのIPアドレスまたはサーバ名を入力します。 [サーバ名を入力する場合] ・ 半角253文字まで入力できます。

設定項目	値
	<ul style="list-style-type: none"> • サーバ名として使用できる文字は、半角英数字(A - Z、a - z、0 - 9)、半角記号のハイフン(-)、アンダーバー(_)およびピリオド(.)です。 • 数字のみのコンピュータ名は入力できません。 <p>[IPv4アドレスを入力する場合]</p> <ul style="list-style-type: none"> • 半角15文字まで入力できます。 • 使用できる文字は、半角数字(0-9)および半角記号のピリオド(.)です。 • ループバックアドレス(127.0.0.1)は指定できません。 <p>[IPv6アドレスを入力する場合]</p> <ul style="list-style-type: none"> • 半角39文字まで入力できます。 • 使用できる文字は、半角英数字(A - F、a - f、0 - 9)および半角記号のコロン(:)です。 • ループバックアドレス(::1)は指定できません。 <p>・リンクローカルアドレスは入力しないでください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。</p> <p>注)各マシンにおいて、管理サーバ/統合管理サーバのホスト名を名前解決できている必要があります。 名前解決できない場合、管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間は通信できません。</p>
[サーバIPアドレスまたはサーバ名(代替管理サーバ)]	<p>接続する(統合)管理サーバの異常時に、ユーザーポリシーを照会する代替管理サーバのIPアドレスまたはサーバ名を入力します。初期状態では、[サーバIPアドレス(CT管理サーバ)]と同じ値が表示されるので、必要に応じて変更してください。本機能は、以下の条件にすべてあてはまる場合に有効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 管理サーバが3階層の構成である • ユーザー一元管理の運用を行っている • クライアントの動作をユーザーポリシーで制御している <p>条件にあてはまらない場合は、[サーバIPアドレス(CT管理サーバ)]と同じ値を設定してください。</p> <p>[サーバ名を入力する場合]</p> <ul style="list-style-type: none"> • 半角253文字まで入力できます。 • サーバ名として使用できる文字は、半角英数字(A - Z、a - z、0 - 9)、半角記号のハイフン(-)、アンダーバー(_)およびピリオド(.)です。 • 数字のみのコンピュータ名は入力できません。 <p>[IPv4アドレスを入力する場合]</p> <ul style="list-style-type: none"> • 半角15文字まで入力できます。 • 使用できる文字は、半角数字(0-9)および半角記号のピリオド(.)です。 • ループバックアドレス(127.0.0.1)は指定できません。 <p>[IPv6アドレスを入力する場合]</p> <ul style="list-style-type: none"> • 半角39文字まで入力できます。

設定項目		値
		<ul style="list-style-type: none"> • 使用できる文字は、半角英数字(A-F, a-f, 0-9)および半角記号のコロン(:)です。 • ループバックアドレス(::1)は指定できません。 <p>• リンクローカルアドレスは入力しないでください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。</p> <p>注)IPv6アドレスの場合、RFC 5952に準拠した省略形も使用できます。</p> <p>注)各マシンにおいて、管理サーバ/統合管理サーバのホスト名を名前解決できている必要があります。 名前解決できない場合、管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)は通信できません。</p>
[ポート番号の設定]	[ポート番号(受信用)]	<p>独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、クライアント(CT)とサーバサービス間で通信するためのポート番号(CT側受信用)を入力します。 5001から60000までの値を入力してください。</p>
	[ポート番号(送信用)]	<p>独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、クライアント(CT)とサーバサービス間で通信するためのポート番号(クライアント(CT)のログ送信、ポリシー受信用)を入力します。 1から65535までの値を入力してください。</p>
	[ポート番号(送信用2)]	<p>独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、クライアント(CT)とサーバサービス間で通信するためのポート番号(クライアント(CT)の登録用)を入力します。 1から65535までの値を入力してください。</p>
	[ポート番号(メール添付禁止用)]	<p>[メール添付禁止機能]を[ポート監視方式(推奨)]と選択した場合に、メール添付禁止処理で内部的に使用するポート番号を入力します。 [メール添付禁止機能]を[V12.0L20～V13.0.0互換方式]と選択した場合は入力する必要がありません。 5001から60000までの値を入力してください。</p>
	[ポート番号(メール添付禁止用2)]	<p>[メール添付禁止機能]を[ポート監視方式(推奨)]と選択した場合に、メール添付禁止処理で内部的に使用するポート番号を入力します。 [メール添付禁止機能]を[V12.0L20～V13.0.0互換方式]と選択した場合は入力する必要がありません。 5001から60000までの値を入力してください。</p>
	[ポート番号(メール送信監視用)]	<p>メール送信監視用のポート番号を入力します。 0から65535までの値を入力してください。</p>
[パスワード(1回目)]		<p>パスワードを入力します。 半角で32文字までの英数字および以下の記号以外が入力できます。 入力できない記号は、「&」「<」「>」「 」「¥」「"」「~」「'」「?」「:」「^」です。 全角および半角の空白は入力できません。</p> <p> 注意</p> <p>.....</p> <p>パスワードを忘れないでください</p> <p>このパスワードは、クライアント(CT)のアンインストールや、保守コマンドの実行時に必要です。パスワードを忘れると、アンインストールや保守コマンドを実行できなくなるので注意してください。</p>

設定項目	値
	<p>クライアント(CT)端末登録時認証について</p> <p>クライアント(CT)端末登録時認証を行う場合、インストール時に入力するパスワードは、管理コンソールの端末動作設定画面で設定したクライアント管理パスワードと同じものを入力してください。</p> <p>.....</p>
[パスワード(再入力)]	誤登録を防ぐため、パスワードを再入力します。
[ログ出力先フォルダ]	<p>クライアント(CT)のログを格納するフォルダとして、Windowsのシステムドライブ配下のフォルダを指定します。CドライブにOSをインストールした場合は、Cドライブがシステムドライブになります。</p> <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で96文字まで入力できます。ただし、以下の記号はフォルダ名として使用できません。</p> <p>使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p> <p>環境変数を指定することもできます。</p> <p>例)%ProgramFiles%</p> <p> 注意</p> <p>.....</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ログが失われる恐れがあるため、ログファイルの格納先には、持出し禁止ドライブを指定しないでください。 ・ プログラム動作に影響がでる可能性があるため、ログファイルの格納先には、圧縮や暗号の設定を行わないでください。 <p>.....</p>
[インストール後のOS再起動指定]	<p>インストール後のOS再起動処理を指定します。</p> <p>再起動確認画面を表示する</p> <p>クライアント(CT)にてインストール実施後の再起動画面を表示する場合に指定します。この項目は[強制再起動する]をチェックしない場合だけ有効となります。[強制再起動する]をチェックした場合は本ボタンはグレーアウトされます。</p> <p>本項目をチェックした場合、インストール完了後、再起動画面が表示されます。</p> <p>「はい、今すぐコンピュータを再起動します。」または「いいえ、後でコンピュータを再起動します。」のどちらかを選択してください。</p> <p>チェックしない場合、インストール完了後、何も表示されずに終了します。終了後再起動するかどうかは、以下の[強制再起動する]の設定により動作が変わります。</p> <p>強制再起動する</p> <p>クライアント(CT)にてインストール実施後強制的に再起動する場合に指定します。この項目は[再起動確認画面を表示する]をチェックしない場合だけ有効となります。[再起動確認画面を表示する]をチェックした場合、本ボタンはグレーアウトされます。</p> <p>本項目をチェックした場合、インストール完了後、自動的に再起動が実行されます。ファイルなどを開いていた場合、内容が保存されずに終了してしまうため、内容が失われてしまう可能性があるため注意してください。</p> <p>チェックしない場合、インストールが完了するとそこで処理が終了します。[再起動確認画面を表示する]をチェックしない場合は[再起動確認]画面は表示されず、自動的に再起動もありません。ユーザーによる手動の再起動が必要となります。</p>

設定項目	値
[クライアントインストール先]	<p>クライアント(CT)インストールフォルダのパスを指定します。</p> <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で96文字まで入力できます。ただし、以下の記号はフォルダ名として使用できません。</p> <p>使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p> <p>環境変数を指定することもできます。</p> <p>例)%ProgramFiles%</p> <p> 注意</p> <p>.....</p> <p>圧縮や暗号の対象外にしてください</p> <p>プログラム動作に影響がでる可能性があるため、クライアントインストール先には、圧縮や暗号の設定を行わないでください。</p> <p>.....</p>
[印刷監視方式]	<p>印刷の監視方式を指定します。</p> <p>この端末で設定されている全てのプリンタでの印刷を監視する(推奨):</p> <p>1台のクライアント(CT)ごとに印刷操作ログを採取する場合に指定します。この場合、印刷操作ログはクライアント(CT)1台ごとに採取されます。</p> <p>ローカルプリンタでの印刷のみを監視する:</p> <p>プリンタサーバと同じ管理サーバ/統合管理サーバ配下にあるクライアント(CT)での印刷操作が、プリンタサーバをとおして行われる場合に選択します。プリンタサーバにもクライアント(CT)をインストールする必要があります。この場合、プリンタサーバではないクライアント(CT)から印刷操作ログは採取されません。印刷操作ログは、プリンタサーバから採取されます。</p> <p> 注意</p> <p>.....</p> <ul style="list-style-type: none"> 管理サーバ/統合管理サーバ配下のクライアント(CT)では、印刷の監視方式を統一してください。統一されていない場合は、印刷操作ログが採取されないことがあります。 サーバ系のOS(Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019)以外を、プリンタサーバにしている時は、[この端末で設定されている全てのプリンタでの印刷を監視する(推奨)]と設定して運用した場合、プリンタサーバに10台以上接続して印刷できなくなります。この場合は[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]と設定してください。 <p>.....</p>
[メール添付禁止]	<p>メール添付禁止機能を指定します。</p> <p>ポート監視方式(推奨)</p> <p>ドライバによるポート監視方式です。通常、この設定を指定します。</p> <p>V12.0L20～V13.0.0互換方式</p> <p>過去バージョンでのメール添付禁止方式です。バージョンアップ時に、過去バージョンの禁止動作と同一にする必要がある場合に設定します。</p>
[ログオン直後の適用ポリシー]	<p>ログオン直後のユーザーポリシー適用の可否を指定します。</p>

設定項目	値
	ユーザーポリシー ログオン直後はユーザーポリシーが適用されます。(初期値) 常にCTポリシー(V12.0L20~V13.3.0互換方式) ログオン直後は、CTポリシーで動作します。
[ファイル持出しユーティリティアイコンの作成設定]	ファイル持出しユーティリティのアイコンの作成の有無を指定します。 [デスクトップ]に作成する デスクトップにファイル持出しユーティリティアイコンを作成する 場合に選択してください。 [送る]メニューに作成する [送る]メニューにファイル持出しユーティリティアイコンを作成する 場合に選択してください。
[インストール設定ファイル]	サイレントインストール設定ファイル(InstConf.ini)の保存先を指定 します。指定方法は、以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> 絶対パスでファイル名を入力する サイレントインストール設定ファイルまでのパスを絶対パスで入 力します。 [参照]ボタンから選択する [名前を付けて保存]画面が表示されるので、サイレントインス トール設定ファイルを保存するフォルダを選択し、ファイル名を入 力したあとに、[保存]ボタンをクリックします。 指定できる絶対パスの長さは、半角で96文字まで入力できます。た だし、以下の記号はファイル名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」

ポイント

プリンタサーバにユーザーIDを登録する

プリンタサーバに[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]を選択してクライアント(CT)がインストールされている場合、印刷が行われたクライアント(CT)で使用中のユーザーIDをプリンタサーバにも登録しておく必要があります。登録されていない場合は、印刷ログのユーザーIDが以下のように出力されることがあります。

- 印刷が行われたクライアント(CT)で使用中のユーザーIDにユーザー権限しか設定されていない場合、ログの[ユーザーID]が[Guest]として採取されることがあります。
- 印刷時にプリンタサーバに対してログオン要求があり、Administratorにてログオンした場合、ログの[ユーザーID]が[Administrator]として採取されることがあります。

サイレントインストールを行う

インストールを行う前に“リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照して、使用するポート番号を確認してください。

クライアント(CT)が導入されているPCでクライアント(CT)のサイレントインストールを行うと、上書きインストールとなりますが、この場合、IPアドレスやポート番号、ログ格納先ディレクトリは変更できません。また、パスワードを初回のインストールで使用したパスワードから変更して指定しても、パスワードは変更されません。

- PCに、ローカルコンピュータのAdministratorsグループに所属するユーザーまたはドメインのDomain Adminsグループに所属するユーザーでログオンします。
 他のアプリケーションを使用している場合は、終了してください。

2. セットアップディスクをドライブにセットします。
“インストール設定ファイルを作成する”で作成したクライアント(CT)用のサイレントインストール設定ファイル (InstConf.ini)を、任意のドライブ、フォルダにコピーします。
3. コマンドプロンプトを起動します。
4. コマンドプロンプトのカレントディレクトリを、インストールコマンド格納フォルダに移動してください。インストールコマンドは、セットアップディスクの「win32¥DTKClient」フォルダにあります。
5. インストールコマンド(Setup.exe)を実行します。
 - － オプションは、大文字/小文字は区別しません。
 - － オプションが指定されていない場合、エラーメッセージを表示しアンインストールを終了します。

指定例

以下の状況を仮定します。

- Dドライブにセットアップディスクがセットされている
- Setup.exeコマンドがD:¥win32¥DTKClient配下にある
- インストール設定ファイルがC:¥Dtkにある

```
D:¥win32¥DTKClient¥Setup.exe /Silent "C:¥Dtk¥InstConf.ini"
```



本コマンドを実行する場合、管理者として実行したコマンドプロンプト上で本コマンドを実行してください。

→インストールが完了すると、CTサイレントインストールファイル生成で“ダイアログを表示する”と指定した場合は、OSの再起動を促す画面が表示されます。

6. OSの再起動を促す画面が表示されます。
以下のどちらかを選択し、[完了]ボタンをクリックします。
[はい、今すぐコンピュータを再起動します。]:すぐに再起動する場合に選択します。
[いいえ、後でコンピュータを再起動します。]:あとで再起動する場合に選択します。

2.6.2 マスタPC/仮想マスタPCを使用した導入

物理環境にインストールする場合

物理環境にマスタPCを使用した導入方法は以下のとおりです。導入方法の概要は、“[1.2.5 クライアント\(CT\)導入方法を決定する](#)”を参照してください。

1. マスタPCとするPCのLANケーブルを抜きます。
以降、手順3.完了までLANケーブルを接続しないでください。
2. クライアント(CT)をインストールします。
インストール方法については、単体インストールの“[2.6.1.1 ウィザード形式でインストールする](#)”または、“[2.6.1.2 サイレントインストールを実施する](#)”を参照してください。
3. イメージ作成ソフトウェアを使用して、マスタイメージを作成します。
4. クライアント(CT)のイメージをインストールする各PCに配付します。
5. クライアント(CT)が配付されたPCを起動し、管理サーバへ登録されることを確認します。
(以降は、マスタとした端末をSystemwalker Desktop Keeperの管理サーバで管理する場合、実施してください。)
6. マスタPCのLANケーブルを接続し、Windowsを再起動します。
7. マスタPCが管理サーバへ登録されることを確認します。



注意

マスタPC作成時の注意点について

クライアント(CT)のイメージを作成し、クライアント(CT)を導入する場合は、必ず、管理サーバとネットワーク接続を行わずクライアント(CT)をインストールし、イメージを作成してください。(管理サーバと一度でも通信が行われた状態でイメージを作成し、他のPCに展開した場合は、同一PCとしてサーバに誤登録されるので注意してください。)

また、イメージ作成元端末と展開先端末の構成は、同様な構成にしてください。イメージ作成時にUSB経由のドライブ(CDドライブなど)を取り付けた場合は、展開先端末のイベントログにエラーメッセージが表示されます。

仮想環境にインストールする場合

仮想環境にクライアント(CT)を導入する方法は以下のとおりです。導入方法の概要は、“[1.2.5 クライアント\(CT\)導入方法を決定する](#)”を参照してください。

なお、本手順は、非永続環境(ユーザがログオンするたびにマスタイメージに戻る環境など)に対するインストールを想定しています。仮想環境であっても永続環境の場合は、上記“物理環境にインストールする場合”の手順での導入をおすすめします。

1. 仮想環境のマスタとするイメージにクライアント(CT)をインストールします。
インストール方法については、単体インストールの“[2.6.1.1 ウィザード形式でインストールする](#)”または、“[2.6.1.2 サイレントインストールを実施する](#)”を参照してください。
インストール後は、必ず再起動を行ってください。
2. 仮想環境のマスタとするイメージに管理者権限でログオンします。
3. 管理コンソールを起動し、マスタイメージにインストールしたクライアント(CT)が登録されていることを確認します。
4. 仮想環境のマスタイメージ上でコマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行します。

```
fsw11ej7.exe [password] /image provisioning
```

5. 仮想環境の機能でマスタイメージを保存します。

2.6.3 Systemwalker Desktop Patrolを使用した導入

Systemwalker Desktop Patrolのソフトウェア配信機能を利用して、Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)を管理対象マシンに一括導入する方法は以下のとおりです。導入方法の概要は、“[1.2.5 クライアント\(CT\)導入方法を決定する](#)”を参照してください。

1. サーバ設定ツールでサイレントインストール設定ファイルを作成します。
作成方法は、“[インストール設定ファイルを作成する](#)”を参照してください。
2. PCに、ローカルコンピュータのAdministratorsグループに所属するユーザーまたはドメインのDomain Adminsグループに所属するユーザーでログオンします。
3. セットアップディスクをドライブにセットします。
“[インストール設定ファイルを作成する](#)”で作成したクライアント(CT)用のサイレントインストール設定ファイル(例:InstConf.ini)を、任意のドライブ、フォルダにコピーします。
4. 任意のフォルダ(例: C:\work\dtkclient)に「win32\DTKClient」フォルダをコピーします。
5. 手順1.で作成したインストール設定ファイル(InstConf.ini)を、手順4.で作成した任意のフォルダ(例: C:\work\dtkclient)にコピーします。
6. Systemwalker Desktop Patrolのコンテンツ配信機能で実行するバッチファイルを作成します。
以下のバッチの例は、サイレントインストールファイルをInstConf.iniとして作成した場合です。(バッチ名: Setup.bat)

```
rem *****
rem * Systemwalker Desktop Keeper コンテンツ配信登録バッチ *
rem *****
@ECHO OFF
```

```
SETLOCAL
rem バッチ起動ドライブ取得
SET STARTDRIVE=%~d0
rem バッチ起動ディレクトリ取得
SET STARTDIR=%~p0
rem インストーラパス作成
SET INSTALLDIR=%STARTDRIVE%%STARTDIR%
rem ドライブ移動
%STARTDRIVE%
rem カレントディレクトリ移動
cd %INSTALLDIR%
rem サイレントインストール実行
%setup.exe /Silent "%INSTALLDIR%InstConf.ini"
```

7. Systemwalker Desktop PatrolにSetup.batが実行されるようにコンテンツを登録します。
Systemwalker Desktop Patrolのソフトウェア配信機能の利用方法については、“Systemwalker Desktop Patrol 運用ガイド 管理者編”を参照してください。

2.6.4 Active Directoryのグループポリシーを使用した導入

注意

- 本手順ではActive Directoryのグループポリシーのスタートアップスクリプトを使用してクライアント(CT)の展開を行うため、SYSTEMアカウントでクライアント(CT)のインストールを行います。
- 本手順は新規インストールにだけ対応しています。
- 本手順は管理者権限で実施してください。
- インストールスクリプトには、暗号化していないパスワードを記述しますので、ユーザーの責任で管理してください。

Active Directoryのグループポリシーを使用して、Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)を管理対象マシンに導入する方法は以下のとおりです。導入方法の概要は、“[1.2.5 クライアント\(CT\)導入方法を決定する](#)”を参照してください。

1. インストール設定ファイルの作成
2. インストールスクリプトの編集
3. グループポリシーの登録
4. インストール結果の確認
5. グループポリシーの解除

2.6.4.1 インストール設定ファイルの作成

インストール設定ファイルを作成します。作成方法は“[インストール設定ファイルを作成する](#)”を参照してください。

注意

- 作成したインストール設定ファイルの名称はデフォルトの「InstConf.ini」として下さい。
- インストール設定ファイルに指定する、[インストール後のOS再起動指定]の「再起動確認画面を表示する」のチェックボックスは外してください。

2.6.4.2 インストールスクリプトの編集

インストールスクリプトを、環境に合わせて編集します。

ファイル名

distributeDTKCT.bat

distributeDTKCT.batは、セットアップディスクの“win32”配下に格納されています。

文字コード

文字コードは、Shift JISです。

フォーマット

編集する箇所は以下のとおりです。

```
set SHARE_DIR=[クライアント(CT)のインストーラを配置する共有フォルダのUNCパス]
set SHARE_ID=["SHARE_DIR"に指定したフォルダへアクセスするユーザーID]
set SHARE_PW=["SHARE_ID"に指定したユーザーIDのパスワード]
```

パラメーター

インストールスクリプトに設定する値について説明します。

No.	環境変数名	デフォルト値	説明
1	SHARE_DIR	なし	クライアント(CT)のインストーラを配置する共有フォルダのUNCパスを指定してください。本環境変数は省略できません。 本値は“2.6.4.3 グループポリシーの登録”で使用します。
2	SHARE_ID	なし	"SHARE_DIR"に指定したフォルダへアクセスするユーザーIDを指定してください。 ※書き込み権限のあるユーザーIDを指定してください。
3	SHARE_PW	なし	"SHARE_ID"に指定したユーザーIDのパスワードを指定してください。

例

インストールスクリプトを編集した例を示します。

```
set SHARE_DIR=\\192.168.10.10\share
set SHARE_ID=user1@domain.local
set SHARE_PW=hogehoge1!
```

注意

- "SHARE_ID"と"SHARE_PW"を省略した場合は、"SHARE_DIR"へはローカルのSYSTEMアカウントでアクセスを行います。
- "SHARE_ID"と"SHARE_PW"で設定した値で"SHARE_DIR"への接続に失敗すると、"SHARE_DIR"へはローカルのSYSTEMアカウントでアクセスを行います。

2.6.4.3 グループポリシーの登録

Active Directoryのグループポリシーへの登録方法について説明します。

最初は少数のユーザーに対してグループポリシーを登録し、展開テストを行うことを推奨します。

1. [コントロールパネル]から[管理ツール]—[グループポリシーの管理]を選択します。
2. [グループポリシーの管理]画面が表示されますので、[フォレスト:(ドメイン名)]—[ドメイン]—[(ドメイン名)]—[グループポリシーオブジェクト]まで展開します。

3. クライアント(CT)を展開するコンピュータが存在するグループにグループポリシーオブジェクトを作成します。
既に存在するグループポリシーオブジェクトを使用する場合は作成する必要はありません。
4. 使用するグループポリシーオブジェクトを右クリックし、[編集]を選択します。
5. [グループポリシー管理エディタ]画面が表示されますので、[コンピュータの構成]—[ポリシー]—[Windowsの設定]—[スクリプト(スタートアップ/シャットダウン)]を選択し、[スタートアップのプロパティ]画面を開きます。
6. [追加]ボタンを選択し、[スクリプト名]に"distributeDTKCT.bat"を入力して[OK]ボタンを選択します。
7. [ファイルの表示]ボタンを選択して表示されるフォルダに、"distributeDTKCT.bat"をコピーします。
8. インストール設定ファイルとクライアント(CT)のインストーラフォルダ(セットアップディスクの「win32¥DTKClient」フォルダ)内のすべてのファイルを、インストールスクリプトの"SHARE_DIR"に指定したフォルダにコピーします。
9. [スタートアップのプロパティ]画面の[OK]ボタンを選択し、設定を有効にします。
10. グループポリシーが適用されたPCでは起動時にクライアント(CT)が自動的にインストールされます。



注意

クライアント(CT)を展開したPCはインストール完了後にOSの再起動をする必要があります。

2.6.4.4 インストール結果の確認

以下の方法で、展開したクライアント(CT)が正常にインストールされたことを確認できます。

- 管理コンソールにて、展開したクライアント(CT)がインストールされたPCが表示されているか確認します。
- 以下のフォルダに、展開したクライアント(CT)のインストール結果のログが出力されます。

フォルダ:

正常終了時:<"SHARE_DIR"に指定したフォルダ>¥DTK¥log¥

異常終了時:<"SHARE_DIR"に指定したフォルダ>¥DTK¥log¥error¥

ファイル:年月日時分秒.ミリ秒_コンピュータ名.log (例:20140424120000.85_COMPUTER1.log)

正常にインストールされなかった場合は、インストール結果のログに従い対処してください。

2.6.4.5 グループポリシーの解除

以下の方法で、展開したクライアント(CT)が正常にインストールされたことを確認できます。

クライアント(CT)の展開が完了すると、グループポリシーの解除を行います。

1. [コントロールパネル]から[管理ツール]—[グループポリシーの管理]を選択します。
2. [グループポリシーの管理]画面が表示されますので、[フォレスト:(ドメイン名)]—[ドメイン]—[ドメイン名]—[グループポリシーオブジェクト]まで展開します。
3. クライアント(CT)を展開したグループのグループポリシーオブジェクトを右クリックし、[編集]を選択します。
4. [グループポリシー管理エディタ]画面が表示されますので、[コンピュータの構成]—[ポリシー]—[Windowsの設定]—[スクリプト(スタートアップ/シャットダウン)]を選択し、[スタートアップのプロパティ]画面を開きます。
5. "distributeDTKCT.bat"を選択し、[削除]ボタンを選択します。
6. [ファイルの表示]ボタンを選択して表示されるフォルダから、"distributeDTKCT.bat"を削除します。
7. インストール設定ファイルとクライアント(CT)のインストーラフォルダ(セットアップディスクの「win32¥DTKClient」フォルダ)内からコピーしたすべてのファイルを、インストールスクリプトの"SHARE_DIR"に指定したフォルダから削除します。
8. [スタートアップのプロパティ]画面の[OK]ボタンを選択し、設定を有効にします。
9. 手順3で選択したグループポリシーオブジェクトを削除します。
他の用途で使用している場合は削除する必要はありません。

2.6.5 インターネット経由で管理サーバ/統合管理サーバに接続するクライアント(CT)をインストールする

管理サーバ/統合管理サーバと同じ業務ネットワークに接続していない端末にクライアント(CT)を導入し、インターネット経由で管理サーバ/統合管理サーバにアクセスする場合は、以下の手順でクライアント(CT)をインストールします。

注意

インストール時に指定する中継サーバのIPアドレスまたはサーバ名は、接続先の中継サーバ構築時、サーバ証明書を生成する際に指定した情報(SDSVMMakeCSR.exe実行時の-CNパラメーターの値)と同じ値を入力してください。

異なる情報を設定した場合、クライアント(CT)が中継サーバと通信できません。

中継サーバでサーバ証明書を生成する手順の詳細は“[2.10.3.2 HTTPS通信を設定する](#)”を参照してください。

単体インストール

単体インストール方法には、以下の2つがあります。

- ・ ウィザード形式でインストールする
- ・ サイレントインストールを実施する

ウィザード形式でインストールする

1. セットアップディスクのクライアント(CT)のインストーラ「win32\YDTKClient」フォルダをクライアント(CT)の任意の場所にフォルダごとコピーします。
2. セットアップディスクの「win32」フォルダ配下の「dtkcustom_internet.ini」を、“手順1.”でコピーした「DTKClient」フォルダにコピーします。
3. 「DTKClient」フォルダ配下の「Setup.exe」を実行します。
4. 以降の手順は“[2.6.1.1 ウィザード形式でインストールする](#)”の“インストール”を参照してください。ただし、“手順6.”の[サーバ情報の入力]画面では、以下の情報を入力してください。
 - [接続する(統合)管理サーバのサーバ名またはIPアドレス]:インターネットから接続する際の中継サーバのIPアドレスまたはサーバ名を入力します。
 - [代替管理サーバのサーバ名またはIPアドレス]:接続する中継サーバの異常時に、ユーザーポリシーを照会する代替中継サーバのIPアドレス、または代替中継サーバのコンピュータ名を入力します。
 - [使用するポート番号(受信用)]:入力する必要はありません。
 - [使用するポート番号(送信用)]:クライアント(CT)のログ送信時、ポリシーの受信時に、クライアント(CT)から中継サーバへの通信で使用するポート番号です。
 - [使用するポート番号(送信用2)]:クライアント(CT)の登録時に、クライアント(CT)から中継サーバへの通信で使用するポート番号です。

その他の項目は“インストール”と同様です。

サイレントインストールを実施する

インストール設定ファイルを作成する

インストール設定ファイルの作成手順については、“[2.6.1.2 サイレントインストールを実施する](#)”を参照してください。

ただし、“手順3.”の情報入力については、以下のように入力してください。

設定項目	値
[サーバIPアドレスまたはサーバ名(CT管理サーバ)]	インターネットから接続する際の中継サーバのIPアドレスまたはサーバ名を入力します。

設定項目		値
[サーバIPアドレスまたはサーバ名(代替管理サーバ)]		接続する中継サーバの異常時に、ユーザーポリシーを照会する代替中継サーバのIPアドレス、または代替中継サーバのコンピュータ名を入力します。
[ポート番号の設定]	[ポート番号(受信用)]	入力する必要はありません。
	[ポート番号(送信用)]	クライアント(CT)のログ送信時、ポリシーの受信時に、クライアント(CT)から中継サーバへの通信で使用するポート番号です。
	[ポート番号(送信用2)]	クライアント(CT)の登録時に、クライアント(CT)から中継サーバへの通信で使用するポート番号です。

その他の項目は“[2.6.1.2 サイレントインストールを実施する](#)”と同様です。

サイレントインストールを行う

1. セットアップディスクのクライアント(CT)のインストーラ「win32¥DTKClient」フォルダをクライアント(CT)の任意の場所にフォルダごとコピーします。
2. セットアップディスクの「win32」フォルダ配下の「dtkcustom_internet.ini」を、“手順1.”でコピーした「DTKClient」フォルダにコピーします。
3. Windowsの[ファイル名を指定して実行]を選択します。またはコマンドプロンプトを起動します。
4. 「DTKClient」フォルダ配下の「Setup.exe」を実行します。

以降の手順は“[2.6.1.2 サイレントインストールを実施する](#)”と同様です。

マスタPC/仮想マスタPCを使用した導入

導入手順については、“[2.6.2 マスタPC/仮想マスタPCを使用した導入](#)”を参照してください。

ただし、“手順2.”でインストールする方法については、本項の単体インストールの“[ウィザード形式でインストールする](#)”または、“[サイレントインストールを実施する](#)”を参照してください。

Systemwalker Desktop Patrolを使用した導入

導入手順については、“[2.6.3 Systemwalker Desktop Patrolを使用した導入](#)”を参照してください。

ただし、“手順5.”と“手順6.”の間で以下の手順を行ってください。

1. セットアップディスクの「win32」フォルダ配下の「dtkcustom_internet.ini」を、“手順4.”でコピーした「DTKClient」フォルダにコピーします。

Active Directoryのグループポリシーを使用した導入

導入手順については、“[2.6.4 Active Directoryのグループポリシーを使用した導入](#)”を参照してください。

ただし、“[2.6.4.3 グループポリシーの登録](#)”の“手順8.”と“手順9.”の間で以下の手順を行ってください。

1. セットアップディスクの「win32」フォルダ配下の「dtkcustom_internet.ini」を、“手順8.”でコピーした「DTKClient」フォルダにコピーします。

2.7 Citrix XenApp監視機能をインストールする

Systemwalker Desktop KeeperのCitrix XenApp監視機能を、新規にインストールする方法について説明します。

Citrix XenApp監視機能の新規インストール方法には、以下の2つがあります。

- ウィザード形式のインストール
- サイレントインストール

旧版のCitrix Presentation Server監視機能、Citrix XenApp監視機能がインストールされた状態で、V15.3.0のCitrix XenApp監視機能をインストールする場合は“[第4章 バージョンアップ](#)”を参照してください。



注意

Citrix XenApp監視機能のインストールコマンド(Setup.exe)をコピーしてインストールする場合

必ずCitrix XenApp監視機能のインストーラフォルダごとコピーしてインストールを行ってください。Citrix XenApp監視機能のインストールフォルダは、セットアップディスクの「win32¥DTKforXenApp」フォルダとなります。

Citrix XenApp監視機能のインストール時に指定する通信ポートについて

インストール時は必ず独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)が設定されるため、セキュア通信方式を使用する場合でも、独自通信方式のポート番号を指定する必要があります。

OSの再起動について

インストール後にOSを再起動することで、Citrix XenApp監視機能の各機能が有効となります。また、OSを再起動せずに他のソフトウェアをインストールすると、Citrix XenApp監視機能が正常にインストールできない可能性があります。

2.7.1 インストール前の確認事項

- ・ “リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照して、使用するポート番号を確認してください。
- ・ Citrix XenAppにて、公開アプリケーションから正常にログオフした後にアクティブ状態のセッションが残る場合があります。Citrix XenApp監視機能の導入時に、以下の記事内の対処を行ってください。
<http://support.citrix.com/article/CTX102282>
なお、追加するプロセスのファイル名は以下のものを指定してください。
fsw11eja.exe, fsw21ej0.exe, fsw21ej6.exe

2.7.2 ウィザード形式でインストールする

Citrix XenApp ServerにCitrix XenApp監視機能をインストールする手順は以下のとおりです。なお、動作環境については“解説書”の“動作環境”を参照してください。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。
[Citrix XenApp監視 インストール]を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。
3. [Citrix XenApp監視 セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. Citrix XenApp監視機能の[インストール先の選択]画面が表示されます。
表示されているインストール先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。
表示されているインストール先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。



注意

圧縮や暗号の対象外にしてください

Citrix XenApp監視機能のインストール先フォルダを圧縮または暗号化の対象とした場合、プログラム動作に影響がでる可能性があるため、圧縮や暗号の設定を行わないでください。

5. ログファイル格納先を設定する[インストール先の選択]画面が表示されます。
表示されている格納先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。
表示されている格納先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。
ログファイルを格納するフォルダのパスには、Windowsのシステムドライブ配下のフォルダを設定してください。(CドライブにOSをインストールした場合は、Cドライブがシステムドライブになります)

注意

持出し禁止ドライブを指定しないでください

ログが失われる恐れがあるため、ログファイルの格納先には、持出し禁止ドライブを指定しないでください。

- [サーバ情報の入力]画面が表示されるので、接続するサーバの情報を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。
 - [接続する(統合)管理サーバのサーバ名またはIPアドレス]:**接続する(統合)管理サーバのIPアドレスを入力します。
Citrix XenApp Serverを複数台で運用している環境では、すべてのCitrix XenApp Serverにおいて、[接続する(統合)管理サーバのIPアドレス]を統一してください。IPアドレスはIPv4形式およびIPv6形式のどちらも入力できます。
 - [代替管理サーバのサーバ名またはIPアドレス]:**接続する(統合)管理サーバの異常時に、ユーザーポリシーを照会する代替管理サーバのIPアドレスを入力します。
代替管理サーバのIPアドレスは省略可能です。また、本機能は、以下の条件にすべてあてはまる場合に有効になります。IPアドレスはIPv4形式およびIPv6形式のどちらも入力できます。
 - 管理サーバが3階層の構成である
 - ユーザー一元管理の運用を行っている
 - クライアントの動作をユーザーポリシーで制御している

注)IPv6アドレスの場合、RFC 5952に準拠した省略形も使用できます。
 - [使用するポート番号(受信用)]:**独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、Citrix XenApp監視とサーバサービス間で通信するためのポート番号(Citrix XenApp監視側受信用)を入力します。
5001から60000までの値を入力してください。
 - [使用するポート番号(送信用)]:**独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、Citrix XenApp監視とサーバサービス間で通信するためのポート番号(Citrix XenApp監視機能の端末情報、ログ送信、ポリシー受信用)を入力します。
5001から60000までの値を入力してください。
以下の項目は重複しないように入力してください。
 - 使用するポート番号(送信用)
 - 使用するポート番号(送信用2)
 - [使用するポート番号(送信用2)]:**独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、Citrix XenApp監視とサーバサービス間で通信するためのポート番号(Citrix XenApp監視機能の登録用)を入力します。
5001から60000までの値を入力してください。
以下の項目は重複しないように入力してください。
 - 使用するポート番号(送信用)
 - 使用するポート番号(送信用2)

注意

独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)を使用する場合、各マシンにおいて、管理サーバ/統合管理サーバのホスト名を名前解決できている必要があります。名前解決できない場合、管理サーバ/統合管理サーバとCitrix XenApp監視機能間には通信できません。セキュア通信方式を使用する場合は、名前解決は必須ではありません。

- [印刷監視方式の設定]画面が表示されるので、[この端末で設定されている全てのプリンタでの印刷を監視する(推奨)]を選択して、[次へ]ボタンをクリックします。

注意

プリンタサーバをサーバ系OS以外にした場合の設定について

サーバ系のOS(Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019)以外を、プリンタサーバにしている場合は、[この端末で設定されている全てのプリンタでの印刷を監視する(推奨)]を設定して運用したとき、プリンタサー

パに10台以上接続して印刷できなくなります。この場合は[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]を設定してください。[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]を設定する場合は、“[2.6.1.1 ウィザード形式でインストールする](#)”の手順10.を参照してください。

8. [パスワードの入力]画面が表示されるので、クライアント状態表示・変更ユーティリティのパスワードを設定して、[次へ]ボタンをクリックします。

ここで設定するパスワードは、Citrix XenApp監視機能のアンインストールや保守コマンドの実行時に必要になります。入力内容の条件は以下のとおりです。

- － 半角で32文字までの英数字および以下の記号以外が入力できます。
- － 入力できない記号は、「&」「<」「>」「|」「¥」「"」「~」「'」「?」「:」「^」です。
- － 全角および半角の空白は入力できません。
- － 半角のカナは入力できません。

注意

パスワードを忘れないでください

このパスワードは、Citrix XenApp監視機能のアンインストールや、保守コマンドの実行時に必要です。パスワードを忘れると、アンインストールや保守コマンドを実行できなくなるので注意してください。

クライアント(CT)端末登録時認証について

クライアント(CT)端末登録時認証を行う場合、インストール時に入力するパスワードは、管理コンソールの端末動作設定画面で設定したクライアント管理パスワードと同じものを入力してください。

9. [インストール準備の完了]画面が表示されます。
インストールを開始する場合は、[インストール]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。
設定した内容を確認、または変更したい場合は、[戻る]ボタンをクリックし、再度設定をやりなおしてください。
10. 処理が正常に完了すると、[インストール完了]画面が表示されます。
プログラムを使用するには、OSを再起動する必要があります。以下のどちらかを選択し、[完了]ボタンをクリックします。
 - － [はい、今すぐコンピュータを再起動します。]
 - － [いいえ、後でコンピュータを再起動します。]

2.7.3 サイレントインストールを実施する

注意

- ・ Citrix XenApp監視機能のサイレントインストールは、新規インストールだけに対応しています。
- ・ サイレントインストール中は処理を中断しないでください。
- ・ インストールパラメーターCSVファイルには、暗号化していないパスワードを記述します。
インストールパラメーターCSVファイルはユーザーの責任で管理し、サイレントインストール完了後は、作成したインストールパラメーターCSVファイルを削除してください。

Citrix XenApp監視機能のサイレントインストールの手順は、以下のとおりです。

1. インストールパラメーターCSVファイルを作成します。
インストールパラメーターCSVファイルの詳細は、“[A.2.1 インストールパラメーターCSVファイル](#)”を参照してください。
2. パラメーター設定コマンドと1.で作成したインストールパラメーターCSVファイルを利用して、応答ファイルを作成します。
パラメーター設定コマンドの詳細は、“[A.2.2 パラメーター設定コマンド](#)”を参照してください。
3. サイレントインストール用スクリプトと2.で作成した応答ファイルを利用して、インストールを実行します。
サイレントインストール用スクリプトの詳細は、“[A.2.4 サイレントインストール用スクリプト](#)”を参照してください。

4. インストール結果を確認します。
サイレントインストール用スクリプトの復帰値およびメッセージを確認してください。

サイレントインストールで使用するファイル、コマンドおよびメッセージの詳細については、“[A.2 Citrix XenApp監視機能のサイレントインストール](#)”を参照してください。

2.8 ログアナライザサーバを構築する

Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバのインストール、および環境構築について説明します。

2.8.1 ログアナライザサーバをインストールする

Systemwalker Desktop Keeperのログアナライザサーバを、新規にインストールする方法について説明します。

ログアナライザサーバの新規インストール方法には、以下の2つがあります。

- ・ ウィザード形式のインストール
- ・ サイレントインストール

Systemwalker Desktop Log Analyzer 管理サーバ、またはSystemwalker Desktop Keeper V14.0.0～V14.3.1のログアナライザサーバがインストールされた状態で、V15.0.0以降のログアナライザサーバをインストールする場合は“[第4章 バージョンアップ](#)”の“[4.9 Systemwalker Desktop Log Analyzerから移行する](#)”を参照してください。



注意

- ・ Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019の環境で、Windowsファイアウォール機能を有効にした場合、ログアナライザサーバが使用する通信ポートが使用できなくなるため、Webコンソール、またはレポート出力ツールから接続できなくなる場合があります。
Windowsファイアウォールの例外に、ログアナライザサーバが使用するポート番号(デフォルトは、30001、30002、30004)を登録してください。
- ・ Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019の環境へログアナライザサーバをインストールした場合、[コントロールパネル]-[管理ツール]-[サービス]にて、[Interstage Navigator Server]の[スタートアップの種類]を[自動(遅延開始)]に設定した上でOSを再起動してください。

2.8.1.1 インストール前の確認事項

- ・ “解説書”の“動作環境”を参照して、データベース関連ファイルのインストール先に指定するドライブに必要なディスク容量が確保できるかを確認してください。
- ・ “解説書”の“動作環境”を参照して、“混在運用できない製品”を確認してください。
- ・ 以下の製品がインストールされているか確認してください。
 - Interstage Navigator Server
Interstage Navigator Serverがインストールされている場合は、一度アンインストールを行ってから本製品をインストールしてください。
- ・ “リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照して、使用するポート番号を確認してください。
ログアナライザサーバでは、以下の3つのポートをデフォルト値として使用します。
 - 30001: 目的別集計機能で使用
 - 30002: データベースへのアクセスに使用
 - 30004: レポート出力ツール、ログアナライザで使用
- ・ Systemwalker Desktop KeeperのインストーラをDVD-ROMからローカルディスクへコピーして行う場合、コピー先のパスに全角文字などの2バイト文字を含まないようにしてください。
- ・ 同じバージョン・レベルのログアナライザサーバがすでにインストールされている場合は、上書きインストールはできません(実行しても何も表示されずに終了します)。



注意

ログアナライザユーザーについて

「ログアナライザユーザー」とは、Systemwalker Desktop Keeperのログ分析機能を使用する場合に、ログアナライザサーバ上で、データベース構築やデータ移入などの運用に使用するWindowsアカウントです。

インストールを行う前に、以下のログアナライザユーザーとして指定できる条件や権限の仕様について確認してください。

- ログアナライザユーザーにローカルアカウントを指定する場合は、インストールをローカルアカウントで実行してください。また、ログアナライザユーザーにドメインアカウントを指定する場合は、インストールをドメインアカウントで実行してください。
- ログアナライザユーザーとしてドメインアカウントを指定する場合は、同名のローカルアカウントが存在しないことを必ず確認してください。
- ログアナライザユーザーに指定するWindowsアカウントは、以下の権限/設定が必要です。
 - ー ローカルアカウントの場合は、Administratorsグループに所属していること、ドメインアカウントの場合は、Domain Adminsグループに所属していること
 - ー 無期限パスワードが設定されていること
なお、ローカルアカウントの場合に限り、存在しないWindowsアカウントを指定した場合は、自動的に上記の権限/設定のWindowsアカウントが生成されます。
- ログアナライザユーザーに指定したWindowsアカウントには、以下の権限が自動的に付与されます。
 - ー サービスとしてログオン
 - ー オペレーティングシステムの一部として機能
 - ー バッチジョブとしてログオン

2.8.1.2 ウィザード形式でインストールする

ログアナライザサーバのインストール手順は、以下のとおりです。なお、動作環境については“解説書”の“動作環境”を参照してください。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。
[ログアナライザサーバ インストール]を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。
3. [Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバ セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. ログアナライザサーバ機能の[インストール先の選択]画面が表示されます。

画面上に表示されている[インストール先ドライブ]の[必要な容量/空き容量]を確認してください。

表示されているインストール先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。

表示されているインストール先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。

ログアナライザサーバのインストールフォルダには空白、ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字は指定できません。また、以下のドライブは指定できません。

- ー ドライブのルート (C:¥、D:¥等)
- ー ネットワークドライブ
- ー フォーマット形式がNTFS以外のドライブ

フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。半角カナも使用しないでください。



注意

圧縮や暗号の対象外にしてください

ログアナライザサーバ機能のインストール先フォルダや以下のデータベース関連ファイルのインストール先フォルダを圧縮または暗号化の対象とした場合、プログラム動作に影響がでる可能性があるため、圧縮や暗号の設定を行わないでください。

5. データベース関連ファイルの[インストール先の選択]画面が表示されます。(すでに使用可能なSymfoware Serverがインストールされている場合は本設定画面は表示されません。次の手順に進んでください。)

画面上に表示されている[インストール先ドライブ]の[必要な容量/空き容量]を確認してください。

表示されているインストール先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。

表示されているインストール先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。

データベース関連ファイルのインストールフォルダには空白、ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字は指定できません。また、以下のドライブは指定できません。半角空白も指定できません。

- ー ドライブのルート(C:¥、D:¥等)
- ー ネットワークドライブ
- ー フォーマット形式がNTFS以外のドライブ

フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。半角カナも使用しないでください。

注意

[インストール先ドライブ]で指定できる最大パス長は半角96文字です。

6. [ポート番号の入力]画面が表示されるので、ログアナライザサーバが使用するポート番号を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。ポート番号をデフォルト値から変更する場合は、5001から60000までの使用していない番号を入力してください。数値以外の文字列は指定できません。

- ー **[通信ポート1]:** 目的別集計機能で使用します。初期値は30001です。
- ー **[通信ポート2]:** データベースとの通信に使用します。初期値は30002です。
- ー **[通信ポート3]:** レポート出力ツール、ログアナライザで使用します。初期値は30004です。

7. [ログアナライザユーザーの登録]画面が表示されるので、データベースの構築やデータ移入などの運用で使用するWindowsアカウントを設定して、[次へ]ボタンをクリックします。

- ー **[ユーザー名]:** 先頭が英字で始まる18文字以下の半角英数字が入力できます。空白文字は使用できません。指定できるユーザー名には以下の条件があります。
 - 既存のグループ名と同じユーザー名は指定できません。
 - コンピュータ名と同じユーザー名は指定できません。
- ー **[パスワード]:** 14文字以下の半角英数記号が入力できます。空白文字は使用できません。また、パスワードは省略できません。

8. 手順7.で、OSに登録されていないユーザー名を指定した場合は、[パスワード確認]画面が表示されるので、パスワードを再度入力します。パスワードが正しく入力されると、手順7.で指定したユーザーがログアナライザユーザーとしてローカルに作成されます。(手順7.で、すでにOSに登録されているユーザーをログアナライザユーザーとして指定した場合は、[パスワード確認]画面は表示されません。)

9. [ファイルコピーの開始]画面が表示されます。

設定した内容を確認し、インストールを開始する場合は、[次へ]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。

設定した内容を変更したい場合は、[戻る]ボタンをクリックし、再度設定をやりなおしてください。

10. 以下のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックして、インストール処理を続行します。

インストールの最後に「正常にインストールしました」という画面が表示されます。画面が表示されるまでインストールが継続していますのでお待ちください。

11. 以下のメッセージが表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバを正常にインストールしました。

12. 処理が正常に完了すると、[確認]画面が表示されます。
プログラムを使用するには、[はい]ボタンをクリックして、OSを再起動します。

2.8.1.3 サイレントインストールを実施する



- ログアナライザサーバのサイレントインストールは、新規インストールだけに対応しています。
- サイレントインストール中は処理を中断しないでください。
- インストールパラメーターCSVファイルには、暗号化していないパスワードを記述します。
インストールパラメーターCSVファイルはユーザーの責任で管理し、サイレントインストール完了後は、作成したインストールパラメーターCSVファイルを削除してください。

ログアナライザサーバのサイレントインストールの手順は、以下のとおりです。

1. インストールパラメーターCSVファイルを作成します。
インストールパラメーターCSVファイルの詳細は、“[A.3.1 インストールパラメーターCSVファイル](#)”を参照してください。
2. パラメーター設定コマンドと1.で作成したインストールパラメーターCSVファイルを利用して、応答ファイルを作成します。
パラメーター設定コマンドの詳細は、“[A.3.2 パラメーター設定コマンド](#)”を参照してください。
3. サイレントインストール用スクリプトと2.で作成した応答ファイルを利用して、インストールを実行します。
サイレントインストール用スクリプトの詳細は、“[A.3.4 サイレントインストール用スクリプト](#)”を参照してください。
4. インストール結果を確認します。
サイレントインストール用スクリプトの復帰値およびメッセージを確認してください。

サイレントインストールで使用するファイル、コマンドおよびメッセージの詳細については、“[A.3 ログアナライザサーバのサイレントインストール](#)”を参照してください。

2.8.2 データベースを構築する

Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバのデータベースを新規に構築する方法について説明します。



データベースを構築する場合、以下の制限・注意があります

【Systemwalker Desktop Log Analyzer のデータベースはそのまま移行できません】

Systemwalker Desktop Log AnalyzerからSystemwalker Desktop Keeper V15.0.0以降に移行する場合、データの再移入が必要です。
データベースを構築する前に必ず“[第4章 バージョンアップ](#)”を参照してください。

【データベース作成先の圧縮・暗号化について】

データベースを構築するドライブやフォルダは、圧縮や暗号の設定を行わないでください。

【データベース作成先のウイルススキャンについて】

データベースを構築するフォルダは、ウイルススキャンソフトウェアの対象から外してください。

【データベース作成時のユーザー(ログアナライザユーザー)について】

データベース環境を構築した時のWindowsログオンユーザー(ログアナライザユーザー)は削除しないでください。データベース環境を削除、データベース環境の移行および管理情報やログデータのリストアには、データベース環境を構築した時に使用したWindowsログオンユーザーが必要です。

【イベントビューアの設定について】

事前にイベントビューア(アプリケーションログ)の最大ログサイズ、最大になったときの動作の設定を確認し、新規のイベントログが問題なく記録されるようにしてください。イベントログが記録されない状態ではデータベースの構築作業が中断する場合があります。

データベース構築前の確認事項

ログアナライザサーバでは以下のポートをデータベースアクセス時に使用します。

- 30004番

すでに上記ポート番号が使用されている場合は、データベースを構築する前に“リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照し、Systemwalker Desktop Keeperの環境を変更してください。

データベース構築時間の目安について

作成するデータベースの容量により、データベース構築に時間がかかります。作成時間の目安は以下のとおりです。

- データベース容量が約50GBの場合(Xeon 3.16GHz、メモリ4GB、RAID1構成)

測定条件:

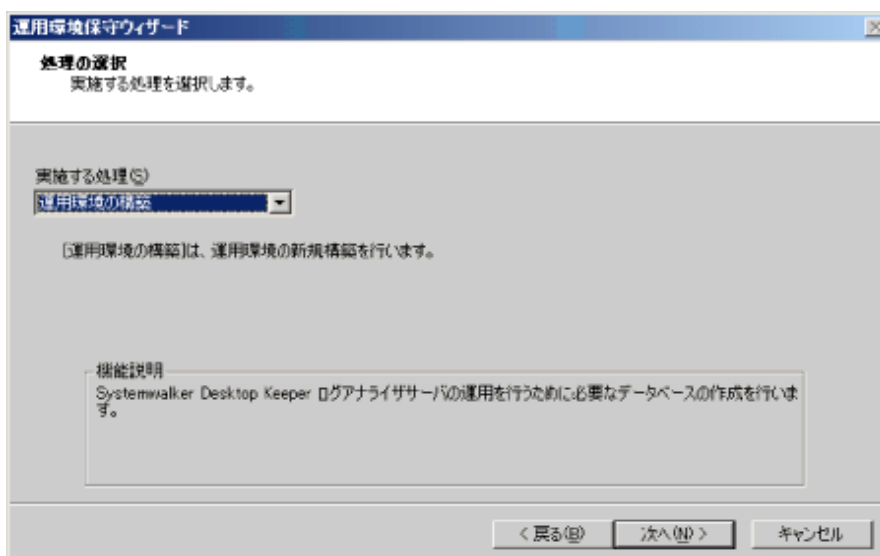
- クライアント台数: 250台
- ファイル操作ログ件数: 500件
- ファイル操作ログ以外の件数: 500件
- 保存月数: 4ヶ月

データベース構築時間: 約30分

注)処理時間例は参考値です。PCのCPU、メモリ、ディスク性能、他のアプリケーションの動作状況などの要因で変化します。

Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバのデータベースを構築する手順は、以下のとおりです。

1. ログアナライザユーザー(ログアナライザサーバインストール時に設定したWindowsアカウント)でログオンします。
2. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[ログアナライザ]-[運用環境保守ウィザード]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[運用環境保守ウィザード]を選択します。
3. [運用環境保守ウィザードへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. [処理の選択]画面が表示されるので、[実施する処理]を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。



項目名	説明
[実施する処理]	実施する処理を選択します。ここでは、“運用環境の構築”を選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> 運用環境の構築 運用環境の削除

5. [ログアナライザサーバ認証]画面が表示されます。

[ユーザー名]と[パスワード]を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。

6. [データベース情報の入力]画面が表示されます。

[データベース格納先]と[データベース見積もり]を設定して、[容量計算]ボタンをクリックします。

[容量]に表示された[データベース容量]と[ディスク空き容量]を確認し、[ディスク空き容量]が不足している場合は、[データベース格納先]を変更してください。また、[データベース容量]は必要に応じて加算できます。[データベース容量]に直接設定しなおしてください。

[データベース格納先]と[データベース見積もり]が確定したら、[次へ]ボタンをクリックします。

項目名	説明
[データベース格納先]	データベースの作成先を入力します。初期値は、“C:\%DTK_LOGANALYZER%\SFWD”です。表示されている作成先から変更する場合は、[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更してください。 データベース格納先のフォルダ名として指定できる文字数は、32文字までです。空白、一部の記号(タブ, ;, #), ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字は指定できません。 また、以下は指定できません。 <ul style="list-style-type: none"> ドライブのルート(C:¥, D:¥ 等) ネットワークドライブ NTFS以外のドライブ
[データベース見積もり]	[クライアント台数] (必須) このサーバで管理するクライアント台数を1~99999の範囲で入力します。
	[ファイル操作ログ件数] (必須) ファイル操作のログ件数を1~99999の範囲で入力します。

項目名		説明
	[ファイル操作ログ以外の件数](必須)	ファイル操作ログ以外のログ件数を1～99999の範囲で入力します。
	[保存月数](必須)	保存月数を1～12の範囲で選択します。
[容量]	[データベース容量](必須)	[データベース容量の試算]の各項目を設定し、[容量試算]ボタンをクリックしたときに、試算値が表示されます。 データベース作成先のディスク空き容量が十分にあり、試算値より大きい容量で作成したい場合は、ディスク空き容量の範囲内で本項目を再設定してください。
	[ディスク空き容量]	作成先ディスクの空き容量が表示されます。

注意

[保存月数]について

データベース内部では、指定された保存月数×31のログの格納領域に分割します。

例えば、保存月数が3の場合、3×31=93件の格納領域に分割します。

データ移入コマンドの起動ごとに、格納領域1、格納領域2、格納領域3、・・・のように異なる格納領域に格納していきますが、格納領域93の次は格納領域1に戻り上書きするため、当該領域の古いデータは削除されます。

また、上書き格納するデータが既存の格納領域で入りきらない場合は、次の格納領域など複数一度に削除する場合があります。上記のとおり、[保存月数]に相当する格納領域をサイクリックに使用しますが、操作日時の最も古いデータではなく、最も移入したのが古いデータが格納領域単位で上書きされることに注意してください。

- [設定内容の確認]画面が表示されるので、画面に表示されている内容に誤りがないか確認し、[次へ]ボタンをクリックします。
[処理の実行]画面が表示され、データベースの作成を開始します。
- 処理が正常に完了すると、[処理完了]画面が表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

2.8.3 ログアナライザサーバの環境を設定する

ログアナライザサーバをインストールしデータベースの構築完了後、サーバの環境を構築します。サーバの環境設定には、管理サーバ/統合管理サーバ側での環境構築作業と、ログアナライザサーバ上での環境構築作業が必要です。環境構築作業の前にそれぞれのサーバ上で、以下の事前準備を行ってください。

事前準備1: 共有フォルダの作成(ログアナライザサーバでの作業)

管理サーバ/統合管理サーバで収集したログ、および管理者情報の受渡しのため、ログアナライザサーバ上に共有フォルダを作成しておく必要があります。

共有フォルダは、フルパスで140文字以内になるように作成してください。なお、セキュリティの観点から共有フォルダに対しては以下の設定を行ってください。

- 接続を許可するユーザー数を管理サーバ/統合管理サーバの台数に設定します。
- 接続を許可するユーザーには、Administratorsグループ、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーをフルコントロールで設定します。
- 共有フォルダのセキュリティ設定へ以下のグループとユーザーをフルコントロールで設定します。
 - [接続を許可するユーザー]として設定したユーザー
 - Administratorsグループ
 - SYSTEMユーザー

ここで作成した共有フォルダ名は、後述するログアナライザ設定や、データ移入コマンドで使用します。

- [ログアナライザ設定]画面では、共有ネットワークフォルダ名(¥¥IPアドレス¥¥フォルダパス)形式で指定してください。
- データ移入コマンドでは、共有フォルダのローカルパスを指定してください。

事前準備2: ログ一時格納先フォルダの作成(管理サーバ/統合管理サーバでの作業)

管理サーバ/統合管理サーバ上でログ一時格納先フォルダを作成しておく必要があります。

ログ一時格納先フォルダは、140文字以内かつ、半角空白を含まないフルパスで作成してください。また、事前準備1で作成した共有フォルダをログ一時格納先フォルダとして使用することはできません。

ログ一時格納先フォルダに必要なディスク容量見積もりについては、“解説書”の“動作環境”を参照して、“ログ転送実行時に必要な一時ディスク容量見積もり式”を参照してください。

事前準備3: [サーバ情報設定]画面での自ノードの[IPアドレス]の確認(管理サーバ/統合管理サーバでの作業)

管理サーバ/統合管理サーバのサーバ情報設定の中で、自ノードIPアドレスにループバックアドレス「127.0.0.1」または「::1」が設定されている場合は、以降の作業を行う前に必ず正しいIPアドレスに更新してください。

設定方法は、“2.3.4.6 サーバ情報を設定する”を参照してください。



注意

IPv6アドレスを指定する場合は、“運用ガイド管理者編”の“IPv6対応について”を参照してください。



注意

1台のログアナライザサーバに複数の管理サーバからデータを移入する場合は、各管理サーバのサーバ設定ツールにおける入出力ファイルのエンコードの設定は全て同じとなるようにしてください。

2.8.3.1 管理サーバ/統合管理サーバ上で、ログアナライザ環境を設定する

ログアナライザサーバを管理サーバ/統合管理サーバと関連付け、管理サーバ/統合管理サーバで収集するログおよび管理者情報をログアナライザサーバ側に移入するための環境を、管理サーバ/統合管理サーバ側で設定します。

管理サーバ/統合管理サーバ上で、以下の設定を行います。



注意

ログアナライザ設定は、サービス停止が可能な時間帯に実行してください。

ログアナライザ設定を実行している間、管理サーバの以下のサービスが停止します。したがって、サービス停止が可能な時間帯に実行してください。

- SWLevelControlService
- SWServerService

なお、SWServerServiceを起動した直後、または、日付が変更になったとき(午前0時)にデータベースの空き容量の確認が動作しますが、確認動作が終了するまでの約15分間、サービスが停止しないことがあります。

そのため、上記の時間帯はログアナライザ設定を実行しないようにしてください。

1. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[ログアナライザ設定]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[ログアナライザ設定]を選択します。

→[ログアナライザ設定]画面が表示されます。

The screenshot shows the 'Log Analyzer Settings' dialog box with the following fields and options:

- データ転送設定** (Data Transfer Settings) tab is selected.
- 転送先(ログアナライザサーバ)** (Transfer Destination):
 - ログの転送先共有フォルダ (形式: ¥¥<IPアドレス>¥¥<フォルダ>) (Log transfer destination shared folder):
 - フォルダパス(H) (Folder path):
- 共有フォルダ接続用Windowsアカウント** (Windows account for shared folder connection):
 - アカウント名(A) (Account name):
 - パスワード(P) (Password):
- 転送元(管理サーバ)** (Transfer Source):
 - ログ一時格納先フォルダ (形式: <ドライブ名>¥¥<フォルダ>) (Log temporary storage folder):
 - フォルダパス(D) (Folder path):
 - データベースユーザーID (サーバ設定ツールで設定したバックアップ・リストア権限のあるID) (Database user ID):
 - ユーザーID(C) (User ID):
 - パスワード(W) (Password):
- ログ取得期間** (Log acquisition period):
 - 直近の31日間(初期値) (Recent 31 days (initial value))
 - 期間指定 (2014/12/05) から実行日の前日までの期間 (Specify period: from 2014/12/05 to the day before the execution date)
- データ転送** (Data transfer):
 - 開始時刻 (Start time): 0 時 00 分 (0:00)
 - データ転送用Windowsアカウント (Windows account for data transfer):
 - アカウント名(U) (Account name):
 - パスワード(V) (Password):
- Buttons: 設定(S) (Settings), 終了(E) (End)

2. [ログアナライザ設定]画面の[データ転送設定]タブにて以下の項目を入力します。

項目名	説明
[転送先 (ログアナライザサーバ)]	[ログの転送先共有フォルダ] ログを送信するログアナライザサーバ上の共有フォルダ名を、UNC形式(¥¥IPアドレス¥共有フォルダ名 [例]¥¥192.168.0.1¥share)で設定します。IPv6アドレスで指定する場合は、「運用ガイド 管理者編」の「IPv6対応について」を参照してください。 ログアナライザサーバが、管理サーバ/統合管理サーバと同一コンピュータ上にある場合も、共有フォルダの設定を行い、上記形式で指定してください。

項目名		説明
	[共有フォルダ接続用 Windowsアカウント]	<p>“事前準備1:共有フォルダの作成(ログアナライザサーバでの作業)”で「接続を許可するユーザー」として設定したアカウント名とパスワードを指定してください。</p> <p>アカウント名は以下の形式で指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ローカルアカウントの場合、「コンピュータ名¥アカウント名」 ドメインアカウントの場合、「ドメイン名¥アカウント名」 <p>パスワードは64文字まで指定できます。</p> <p>なお、パスワードが65文字以上である場合は、64文字以下のパスワードに変更した上で本設定を行ってください。</p>
[転送元 (管理サーバ)]	[ログ一時格納先フォルダ]	<p>ログを一時的に格納するフォルダ(注1) 140文字まで指定できます。</p>
	[データベース情報]	<p>管理サーバ/統合管理サーバのサーバ設定ツールで設定したアクセス権限が"バックアップ・リストア"のユーザーIDとパスワードを設定します。</p> <p>パスワードは64文字まで指定できます。</p> <p>なお、パスワードが65文字以上である場合は、64文字以下のパスワードに変更した上で本設定を行ってください。</p> <p>データベース名は、固定値のため設定を変更することはできません。</p>
[ログ取得期間]		<p>データ取得開始日を設定します。</p> <p>本項目については、導入時に設定する必要はありません。運用環境を整える段階で、ログの転送スケジュールを決定し、本設定を行ってください。詳細は、「運用ガイド 管理者編」の「管理サーバでログ取得期間を設定する」を参照してください。</p>
[データ転送]	[開始時刻]	<p>データを定期的に転送するための設定を行います。</p> <p>データ転送を開始する時刻を指定してください。</p> <p>開始時刻は夜間など、クライアント(CT)の利用者が少ない時間帯を指定します。</p>
	[アカウント名]	<p>データを定期的に転送するためのタスクを実行する、Windowsアカウントを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ローカルアカウントを指定する場合は、ログアナライザ設定をローカルアカウントで実行してください。また、ドメインアカウントを指定する場合は、ログアナライザ設定をドメインアカウントで実行してください。 ドメインアカウントを指定する場合は、同名のローカルアカウントが存在しないことを必ず確認してください。 [データ転送]の[アカウント名]に指定するWindowsアカウントは、以下の権限/設定が必要です。 <ul style="list-style-type: none"> ローカルアカウントの場合は、Administratorsグループに所属していること、ドメインアカウントの場合は、Domain Adminsグループに所属していること 無期限パスワードが設定されていること

項目名		説明
		<ul style="list-style-type: none"> アカウント名は以下の形式で指定してください。 ローカルアカウント、ドメインアカウントの場合、ともに「アカウント名」
	[パスワード]	パスワードは64文字まで指定できます。 なお、パスワードが65文字以上である場合は、64文字以下のパスワードに変更した上で本設定を行ってください。

注1) 事前準備2で用意したフォルダを指定してください。

3. [サーバ情報設定]タブをクリックします。
[ログアナライザ設定]画面の[サーバ情報設定]タブにて各項目を入力します。

ログアナライザ設定

データ転送設定 **サーバ情報設定**

ログアナライザサーバ情報

IPアドレスまたはホスト名	通信ポート1	通信ポート3

IPアドレスまたはホスト名(D)

通信ポート1(P)

通信ポート3(C)

追加(A) 削除(D)

設定(S) 終了(E)

項目名		説明
[ログアナライザサーバ情報]	[IPアドレスまたはホスト名]	ログアナライザサーバのIPアドレスまたはホスト名を、1～18文字で入力します。 IPv6で通信を行う場合は、IPv6アドレスを直接指定せず、hostsに設定された最大18文字のホスト名を指定するようにしてください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。 複数のログアナライザサーバを指定する場合は、すべてのログアナライザサーバでIPアドレス(またはホスト名)が重複しないように指定してください。
	[通信ポート1]	ログアナライザサーバの目的別集計用ポート番号(ログアナライザサーバインストール時に[通信ポート1]で指定したポート番号)を、4～5文字で入力します。 5001～60000までの半角数字を指定できます。 複数のログアナライザサーバを指定する場合は、すべてのログアナライザサーバで同一のポート番号である必要があります。
	[通信ポート3]	ログアナライザサーバのレポート出力ツール、ログアナライザ用ポート番号(ログアナライザサーバインストール時に[通信ポート3]で指定したポート番号)を、4～5文字で入力します。 5001～60000までの半角数字を指定できます。

4. 入力が完了したら[設定]ボタンをクリックし、入力した内容を設定します。
5. [設定]ボタンをクリックすると、管理者情報転送コマンドが自動実行されコマンドプロンプトが表示されます。処理が終了すると、コマンドプロンプトは自動で閉じます。
6. [ログアナライザ設定]画面を閉じます。

参考

[データ転送]の[開始時刻]設定では、管理サーバのOSのタスク機能に、TRANS.bat(ログアナライザサーバへのデータ転送)コマンドを登録し、定期的に転送できるように設定します。

データ転送開始時刻の詳細については、“運用ガイド管理者編”の“管理サーバでデータ転送時刻を設定する”を参照してください。タスク機能のタスク開始時刻以外の設定値は、自動で設定されます。

詳細設定項目を変更する場合は、“運用ガイド管理者編”の“管理サーバでデータ転送タスクを変更する”を参照し、値を変更してください。

2.8.3.2 ログアナライザサーバ上で、ログアナライザ環境を設定する

管理サーバ/統合管理サーバで収集するログおよび管理者情報をログアナライザサーバ側に移入するための環境を、ログアナライザサーバ側で設定します。

1. ログアナライザサーバに、ログアナライザユーザー(ログアナライザサーバインストール時に設定したWindowsアカウント)でログオンします。

2. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[ログアナライザ]-[データ移入設定]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[データ移入設定]を選択し、[データ移入設定]画面を起動します。
⇒[データ移入設定]画面が表示されます。

項目名		説明
[データ移入]	[開始時刻]	データを定期的に移入するための設定を行います。 データ移入を開始する時刻を指定してください。 データ移入の開始時刻は、データ転送の開始時刻より遅く設定し、データ転送の実行終了後に開始するようにします。
	[ログの移入元フォルダ]	ログアナライザ設定の転送先共有フォルダを指定します。(注) ローカルパス形式で指定します。ネットワークフォルダは指定できません。 注)事前準備1で作成した共有フォルダを指定してください。

3. 入力が完了したら[設定]ボタンをクリックし、入力した内容を設定します。
4. [設定]ボタンをクリックすると、管理者情報移入コマンドが自動実行されコマンドプロンプトが表示されます。処理が終了すると、コマンドプロンプトは自動で閉じます。
5. [データ移入設定]画面を閉じてください。

参考

[データ移入]の[開始時刻]設定では、ログアナライザサーバのOSのタスク機能に、DTTOOLEX.EXE(ログアナライザサーバへのデータ移入・削除)コマンドを登録し、定期的にデータベースに格納できるように設定します。

データ移入開始時刻の詳細については、“運用ガイド管理者編”の“ログアナライザサーバでデータ移入時刻を設定する”を参照してください。

タスク機能のタスク開始時刻以外の詳細設定項目は、自動で設定されます。

詳細設定項目を変更する場合は、“運用ガイド管理者編”の“ログアナライザサーバでデータ移入タスクを変更する”を参照し、値を変更してください。

2.9 レポート出力の環境を構築する

Systemwalker Desktop Keeper レポート出力ツールのインストール、および環境構築について説明します。

2.9.1 レポート出力ツールをインストールする

Systemwalker Desktop Keeperのレポート出力ツールのインストールを、新規にインストールする方法について説明します。

インストール前の確認事項

- “解説書”の“動作環境”を参照して、“混在運用できない製品”を確認してください。
- “リファレンスマニュアル”の“ポート番号一覧”を参照して、使用するポート番号を確認してください。
- Systemwalker Desktop KeeperのインストーラをDVD-ROMからローカルディスクへコピーして行う場合、コピー先のパスに全角文字などの2バイト文字を含まないようにしてください。
- IPv6アドレスは指定できません。ログアナライザサーバとの通信にIPv6環境を使用する場合は、hostsの設定を行ってください。
- 同じバージョン・レベルのレポート出力ツールがすでにインストールされている場合は、上書きインストールはできません(実行しても何も表示されずに終了します)。

インストール

レポート出力ツールのインストール手順は、以下のとおりです。なお、動作環境については“解説書”の“動作環境”を参照してください。

1. Administratorsグループに所属するユーザーまたはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。

[レポート出力ツール インストール]を選択します。

インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。

3. [Systemwalker Desktop Keeper レポート出力ツール セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. レポート出力ツール機能の[インストール先の選択]画面が表示されます。

画面上に表示されている[インストール先ドライブ]の[必要な容量/空き容量]を確認してください。

表示されているインストール先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。

表示されているインストール先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。

レポート出力ツールのインストールフォルダには空白、ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字は指定できません。また、以下のドライブは指定できません。

- ドライブのルート (C:¥、D:¥等)
- ネットワークドライブ
- フォーマット形式がNTFS以外のドライブ

上書きインストールする場合は、設定の変更はできません([参照]ボタンは無効です)。

フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。

半角カナも使用しないでください。

5. データベース関連ファイルの[インストール先の選択]画面が表示されます。画面上に表示されている[インストール先のフォルダ]の[必要な容量/空き容量]を確認してください。表示されているインストール先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。表示されているインストール先から変更する場合は、変更したいフォルダの[参照]ボタンをクリックし、フォルダを変更したあと、[次へ]ボタンをクリックします。データベース関連ファイルのインストールフォルダには空白、ひらがな、カタカナ、漢字などのマルチバイト文字は指定できません。また、以下のドライブは指定できません。半角空白も指定できません。

- ドライブのルート (C:¥、D:¥等)
- ネットワークドライブ
- フォーマット形式がNTFS以外のドライブ

Systemwalker Desktop Keeper V15.0.0以降のV/Lから上書きインストールする場合は、設定の変更はできません。

フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。

注意

[インストール先のフォルダ]で指定できる最大パス長は半角96文字です。

- [ログアナライザサーバ情報の入力]画面が表示されるので、接続するログアナライザサーバの接続先、通信ポート番号を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。

[接続先]: 接続するログアナライザサーバのIPアドレスまたはホスト名を設定します(ホスト名は最大18文字でhostsに設定されたものを指定してください)。IPv6で通信を行う場合は必ずホスト名での指定を行ってください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。

[通信ポート]: ログアナライザサーバインストール時の[ポート番号の入力]画面で、レポート出力ツールで使用する、[通信ポート3]で指定した値と同じ値を設定します。

なお、上書きインストールする場合は、設定の変更はできません。

- [ファイルコピーの開始]画面が表示されます。
設定した内容を確認し、インストールを開始する場合は、[次へ]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。
設定した内容を変更したい場合は、[戻る]ボタンをクリックし、再度設定をやりなおしてください。
- 以下のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックして、インストール処理を続行します。

インストールの最後に「正常にインストールしました」という画面が表示されます。
画面が表示されるまでインストールが継続していますのでお待ちください。

- 以下のメッセージが表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

Systemwalker Desktop Keeper レポート出力ツールを正常にインストールしました。

- 処理が正常に完了すると、[確認]画面が表示されます。
プログラムを使用するには、[はい]ボタンをクリックして、OSを再起動します。

レポート出力ツールのインストール後は、レポート出力ツールを動作させるための環境設定が必要です。(接続するログアナライザサーバの情報は、環境設定後に有効になります。)

引き続き、“[2.9.2 レポート出力の環境を設定する](#)”を参照し、環境設定を行ってください。

2.9.2 レポート出力の環境を設定する

レポート出力ツールのインストール後、レポート出力ツールを使用するための環境を構築します。レポート出力を行う場合に必要な環境設定の手順および設定内容について説明します。

設定する項目は以下のとおりです。

サーバ設定

レポートを生成するときに接続するログアナライザサーバを設定します。

バッチユーザー設定

ログアナライザサーバでレポート出力バッチコマンドを実行する管理者のユーザーIDとパスワードを設定します。

トレースレベル

レポート出力ツールが出力するログの詳細レベルを指定します。

注意

レポート出力ツールのインストール直後は、必ず環境設定が必要です

レポート出力ツールのインストール直後は、[トレースレベル]設定以外はなにも設定されていません。(ログアナライザサーバの情報については、インストール時の設定だけでは有効になりません)

レポート出力ツールを実行する前に、下記操作手順に従い、必ず[サーバ]設定、[バッチユーザー]設定の順に設定を行ってください。
なお、[トレースレベル]設定については、設定を変更する必要はありません。

操作手順は以下のとおりです。

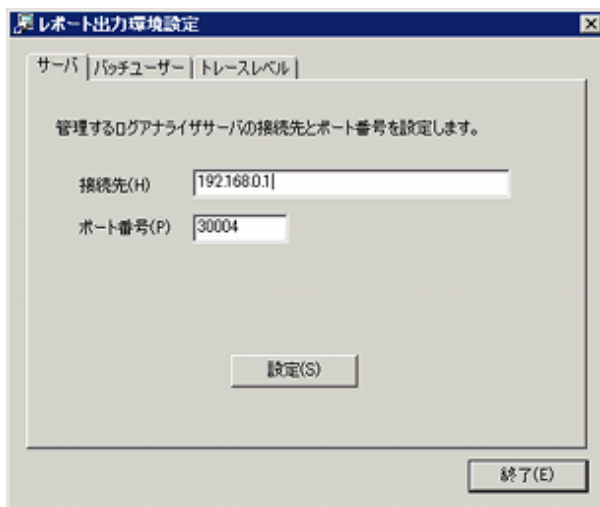
1. レポート出力ツールをインストールしたPC上で、Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログインします。

注意

ログオンアカウントを忘れないでください

ここでWindowsにログオンしたユーザー名とパスワードは、レポート出力スケジュールの設定時に、Windowsにログオンするときに必要です。メモに残すなどして、忘れないようにしてください。

2. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[ログアナライザ]-[レポート出力環境設定]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[レポート出力環境設定]を選択します。
3. [サーバ]タブを選択し、サーバ情報を設定します。



項目名	説明
[接続先]	インストール時に設定した接続するログアナライザサーバの接続先(IPアドレスまたはホスト名)が表示されます。 必要に応じて変更してください。設定可能な文字数は最大半角18文字です。IPv6アドレスは指定できません。なおIPv6環境の場合はhostsに設定されたホスト名で指定してください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。
[ポート番号]	インストール時に設定した接続するログアナライザサーバのポート番号が表示されます。 必要に応じて変更してください。設定可能な文字数は半角5文字です。

4. [設定]ボタンをクリックします。設定確認画面が表示されるので、続行する場合は[はい]ボタンをクリックします。なお、設定後の値は、次回起動時のデフォルト値となります。
5. サーバの設定が正常に行われると、完了メッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。

6. [バッチユーザー]タブを選択し、バッチユーザー情報を設定します。

項目名	説明
[管理サーバ]	バッチユーザーに設定するユーザーIDが登録されているSystemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバをプルダウンメニューから選択して指定します。 プルダウンメニューにはサーバ設定ツールで設定された各管理サーバのIPアドレスまたはサーバ名が表示されます。
[ユーザーID]	ユーザーIDを指定します。指定できるのは、サーバ設定ツールで設定済みの管理者のユーザーIDです。
[パスワード]	[ユーザーID]に入力したユーザーIDのパスワードを指定します。

7. [設定]ボタンをクリックします。設定確認画面が表示されるので、続行する場合は[はい]ボタンをクリックします。
 8. バッチユーザーの設定が正常に行われると、完了メッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。
 9. [トレースレベル]タブを選択し、ログの詳細レベルを設定します。

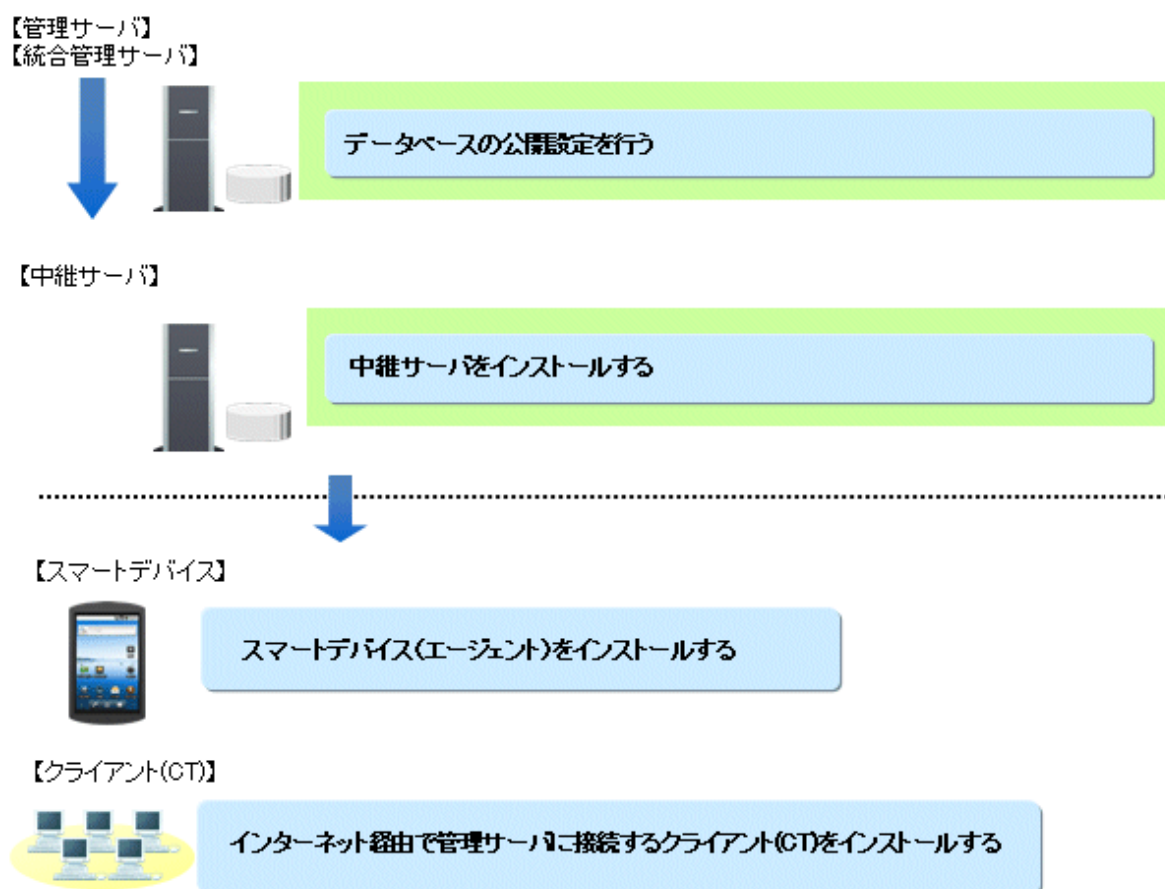
項目名	説明
[トレースレベル]	ログの詳細レベルを設定します。指定可能な値は以下のとおりです。

項目名	説明
	1: 起動/終了およびエラーを出力します。 2: 詳細なトレース情報を出力します。 初期値は1です。

10. [設定]ボタンをクリックします。設定確認画面が表示されるので、続行する場合は[はい]ボタンをクリックします。
11. トレースレベルの設定が正常に行われると、完了メッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。
12. すべての設定が完了したら、[終了]ボタンをクリックして[環境設定]画面を終了します。

2.10 中継サーバ環境を構築する

Systemwalker Desktop Keeper 中継サーバのインストールおよび環境構築について説明します。
 管理サーバ、統合管理サーバ、中継サーバ上の手順につきましては、Administratorsグループに所属するユーザーまたはDomain Adminsグループに所属するユーザーで実施してください。



2.10.1 データベースの公開設定を行う (統合管理サーバ/管理サーバ)

中継サーバから統合管理サーバ/管理サーバのデータベースに接続するために以下の値が初期設定されています。

ポート番号:42050

この値を変更したい場合には、以下の手順を実行してください。

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバで実施します。

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバの構築が終了してから実施してください。

ポイント

統合管理サーバおよび管理サーバと、中継サーバの配置関係について

3階層のシステム構成においては、中継サーバは統合管理サーバへ接続するようにします。

統合管理サーバが存在しない2階層のシステム構成においては、中継サーバは管理サーバへ接続してください。詳細は"[1.2.1.4 中継サーバの設置基準](#)"を参照してください。

1. ファイアウォールで、リモート接続に使用する接続用ポートを開放します。
中継サーバから、管理サーバの運用データベースへリモート接続を可能にするために設定したポート番号を、ファイアウォールの「例外」として登録し、ポートを開放します。
開放するポート番号は、[サーバ設定ツール]画面の[管理サーバ設定]ボタンをクリックし、[ポート番号設定]の[管理サーバ<---->運用データベース]のポート番号で設定した値です。

2.10.2 中継サーバをインストールする

Systemwalker Desktop Keeperの中継サーバを、新規にインストールする方法について説明します。

中継サーバの新規インストール方法には、以下の2つがあります。

- ・ ウィザード形式のインストール
- ・ サイレントインストール

2.10.2.1 ウィザード形式でインストールする

中継サーバのインストール手順は、以下のとおりです。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。
ほかのアプリケーションを使用している場合は、終了してください。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。
[中継サーバ インストール]を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。
3. [Systemwalker Desktop Keeper 中継サーバ セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. 中継サーバの[インストール先の選択]画面が表示されます。表示されているインストール先から変更しない場合は、[次へ]ボタンをクリックします。

表示されているインストール先から変更する場合は、[参照]ボタンをクリックし、変更先フォルダを選択後、[次へ]ボタンをクリックします。

注意

中継サーバのインストール先フォルダを圧縮または暗号化の対象とした場合、プログラム動作に影響がでる可能性があります。圧縮や暗号の設定を行わないでください。

[インストール先のフォルダ]で指定できる最大パス長は100文字です。

[インストール先のフォルダ]には、半角英数字、"- "または"_"が指定できます。また、以下のドライブは指定できません。

- ー ネットワークドライブ
- ー フォーマット形式がNTFS、FAT以外のドライブ

フォルダパスには半角の「,」;」「#」が含まれないようにしてください。半角カナも使用しないでください。

5. [ファイルコピーの開始]画面が表示されます。
設定した内容を確認し、インストールを開始する場合は、[次へ]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。
設定した内容を変更したい場合は、[戻る]ボタンをクリックし、再度設定をやりなおしてください。

6. 以下のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックして、インストール処理を続行します。

インストールの最後に「正常にインストールしました」という画面が表示されます。
画面が表示されるまでインストールが継続していますのでお待ちください。

7. 以下のメッセージが表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

Systemwalker Desktop Keeper中継サーバを正常にインストールしました。

8. 処理が正常に完了すると、[確認]画面が表示されます。
プログラムを使用するには、[はい]ボタンをクリックして、OSを再起動します。

2.10.2.2 サイレントインストールを実施する



- 中継サーバのサイレントインストールは、新規インストールだけに対応しています。
- サイレントインストール中は処理を中断しないでください。

中継サーバのサイレントインストールの手順は、以下のとおりです。

1. インストールパラメーターCSVファイルを作成します。
すべてのパラメーターをデフォルト値でインストールする場合は、本手順は不要です。
インストールパラメーターCSVファイルの詳細は、“[A.4.1 インストールパラメーターCSVファイル](#)”を参照してください。
2. パラメーター設定コマンドを利用して、応答ファイルを作成します。
1.でインストールパラメーターCSVファイルを作成していない場合は、本手順は不要です。
パラメーター設定コマンドの詳細は、“[A.4.2 パラメーター設定コマンド](#)”を参照してください。
3. サイレントインストール用スクリプトを利用して、インストールを実行します。
サイレントインストール用スクリプトの詳細は、“[A.4.4 サイレントインストール用スクリプト](#)”を参照してください。
4. インストール結果を確認します。
サイレントインストール用スクリプトの復帰値およびメッセージを確認してください。

サイレントインストールで使用するファイル、コマンドおよびメッセージの詳細については、“[A.4 中継サーバのサイレントインストール](#)”を参照してください。

2.10.3 中継サーバの動作環境を設定する

中継サーバの動作環境の設定方法を説明します。

2.10.3.1 スマートデバイス/PCの情報を設定する

管理するスマートデバイス(Android端末またはiOS端末)またはPC(Windows端末)ごとに、以下の設定を行ってください。

- Android端末の場合
 1. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、以下の設定をします。
 - Android端末の管理を有効化します。指定するオプションは、-Android.enabledです。
 - 管理サーバ/統合管理サーバを設定します。指定するオプションは、-hです。
 2. デフォルトのポート番号(48080)に変更がある場合は、“リファレンスマニュアル”の“使用するポート番号の変更方法”を参照し、ポート番号を変更します。
 3. スマートデバイス(エージェント)(Android)とHTTPS通信を行う場合は、HTTPS通信用の証明書環境を構築します。
詳細な手順は、“[2.10.3.2 HTTPS通信を設定する](#)”を参照してください。本手順は、iOS端末を管理する場合と共通のため、iOS端末の設定で実施されている場合には、実施する必要はありません。
 4. 中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)で、中継サーバを起動します。

- iOS端末の場合

ポイント

.....

以下の手順1から手順4までは、一度で設定できます。

.....

1. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、iOS端末の管理を有効化します。指定するオプションは、-iOS.enabledです。
2. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、管理サーバ/統合管理サーバを設定します。指定するオプションは、-hです。
この手順は、Android端末を管理する場合と共通のため、Android端末の設定で実施されている場合には、実施する必要はありません。
3. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、iOS端末から接続するサーバまたはリバースプロキシの設定をします。指定するオプションは、-iOS.connect.h、-iOS.connect.pおよび-iOS.connect.profile.pです。
4. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、iOS管理データベースを設定します。指定するオプションは、-iOSmgr.hです。Systemwalker Desktop KeeperだけでiOS端末を管理する場合は、管理サーバを指定してください。Systemwalker Desktop PatrolでもiOS端末を管理する場合には、管理サーバまたはSystemwalker Desktop PatrolのCSのうち、iOS管理データベースを運用しているサーバを指定してください。
この設定値は、一度設定したあと変更しないでください。
5. iOS管理データベースとの通信に使用するデフォルトのポート番号(55432)に変更がある場合は、“リファレンスマニュアル”の“使用するポート番号の変更方法”を参照し、ポート番号を変更します。
6. スマートデバイス(エージェント)(iOS)とHTTPS通信を行うため、HTTPS通信用の証明書環境を構築します。
詳細な手順は、“2.10.3.2 HTTPS通信を設定する”を参照してください。本手順は、Android端末を管理する場合と共通のため、Android端末の設定で、実施されている場合には、実施する必要はありません。
7. Apple社証明書登録コマンド(swss_ImportAppleCert.bat)を利用して、“2.2 事前準備”で準備したMDM証明書を導入します。
8. 中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)で、中継サーバを起動します。

- Windows端末の場合

ポイント

.....

以下の手順1から手順3までは、一度で設定できます。

.....

1. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、Windows端末の管理を有効化します。指定するオプションは、-Windows.enabledです。
2. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、接続する管理サーバ/統合管理サーバのFQDNまたはIPアドレスを設定します。指定するオプションは、-hです。
(中継サーバに接続する中継サーバの場合は、接続先の中継サーバのFQDNまたはIPアドレスを設定します。)
この手順は、Android端末/iOS端末を管理する場合と共通のため、Android端末/iOS端末の設定で実施されている場合には、実施する必要はありません。

注意

-
- 管理サーバに接続する中継サーバの場合、手順2で設定する管理サーバ/統合管理サーバの情報(FQDNまたはIPアドレス)は、管理サーバでサーバ証明書を生成した際に指定した情報(DTKSVMMakeCSR.exe実行時の-CNパラメーターの値)と同じ値を入力してください。
異なる情報を指定した場合、中継サーバが管理サーバと通信できません。
管理サーバでサーバ証明書を生成する手順の詳細は“2.3.4.2.1 証明書を設定する”を参照してください。
 - 中継サーバに接続する中継サーバの場合、手順2で設定する中継サーバの情報(FQDNまたはIPアドレス)は、接続先の中継サーバでサーバ証明書を生成した際に指定した情報(SDSVMMakeCSR.exe実行時の-CNパラメーターの値)と同じ値を入力してください。

異なる情報を指定した場合、中継サーバが接続先の中継サーバと通信できません。
中継サーバでサーバ証明書を生成する手順の詳細は“[2.10.3.2 HTTPS通信を設定する](#)”を参照してください。

3. Windows端末からの接続に使用するデフォルトのポート番号(48643、48281、48443、48081)に変更がある場合は、“リファレンスマニュアル”の“使用するポート番号の変更方法”を参照し、ポート番号を変更します。
4. クライアント(CT)とHTTPS通信を行うため、HTTPS通信用の証明書環境を構築します。
詳細な手順は、“[2.10.3.2 HTTPS通信を設定する](#)”を参照してください。
5. 中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)で、中継サーバを起動します。

各コマンドの詳細については、“リファレンスマニュアル”の“コマンドリファレンス”を参照してください。



注意

Windows端末を接続する中継サーバの設定をする場合の注意

Windows端末を接続する中継サーバが管理サーバと通信を行うためには、管理サーバでセキュア通信の証明書が設定されている必要があります。

設定の詳細は、“[2.3.4.2.1 証明書を設定する](#)”を参照してください。

Systemwalker Desktop PatrolのSSと共存する場合の注意事項

- 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で設定する以下の項目は、Systemwalker Desktop Keeperだけで使用する項目です。
 - h
 - p
 - Android.http.p
 - Android.https.p
 - Android.enabled
 - iOS.enabled
 - Windows.https.p
 - Windows.scep.p
 - Windows.manage.https.p
 - Windows.manage.scep.p
 - Windows.enabled
- 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で設定する以下の項目は、Systemwalker Desktop Patrolと共通で使用する項目です。
 - iOSmgr.h
 - iOSmgr.p
 - iOS.profile.p
 - iOS.https.p
 - iOS.connect.h
 - iOS.connect.p
 - iOS.connect.profile.p
- “iOS端末の場合”の手順6および手順7の設定項目は、Systemwalker Desktop Patrolと共通で使用する項目です。
- Systemwalker Desktop Patrolと共通で使用する項目は、Systemwalker Desktop Patrolでも同じ値を設定してください。
Systemwalker Desktop Keeperで設定した後に、同じ設定項目をSystemwalker Desktop Patrolで異なる値に変更するとSystemwalker

Desktop Keeperで実施した設定も変更されます。また、Systemwalker Desktop Patrolで設定した後に、同じ設定項目をSystemwalker Desktop Keeperで異なる値に変更すると、Systemwalker Desktop Patrolで実施した設定も変更されます。

2.10.3.2 HTTPS通信を設定する

中継サーバとスマートデバイス(エージェント)/クライアント(CT)間をHTTPS通信する場合の設定方法を説明します。設定手順は、利用者が用意したサーバ証明書か、Systemwalkerの証明書かによって異なります。

証明書導入時の設定

以下の手順で設定します。

利用者が用意したサーバ証明書を使用する場合

1. SDSVMakeCSR.exeコマンドで、-fileオプションを指定して、証明証発行申請書を生成します。
2. 手順1で生成された証明書発行申請書を認証局に送付後、認証局で発行された認証局証明書(中間認証局証明書)およびサーバ証明書を取得します。
3. SDSVService.batコマンドで、中継サーバを停止します。
4. SDSVImportCert.exeコマンドで、-file オプション(-alias オプション)を指定して、手順2で取得した認証局証明書(中間認証局証明書)を登録します。
5. SDSVImportCert.exeコマンドで、-file オプションを指定して、手順2で取得したサーバ証明書を登録します。
6. Windowsクライアント(CT)を接続する中継サーバの場合、または中継サーバを接続する中継サーバの場合、以下の手順を実施します。
 - a. SDSVMakeCSR.exeコマンドで、-fileオプションを指定して、証明書発行申請書を生成します。この手順は手順1とは別に行う必要があります。
 - b. 手順aで生成した証明書発行申請書のファイルを管理サーバに格納し、管理サーバのDTKSVMMakeCSR.exeコマンドで、-file2 オプション、-certfile2 オプションを指定して、格納した証明書発行申請書のファイルを元に、サーバ証明書を生成します。
 - c. SDSVImportCert.exeコマンドで-file2 オプションを指定して、手順bで取得したサーバ証明書を登録します。
7. SDSVConfig.exeコマンドで、利用者が用意したサーバ証明書の利用を「有効」にします。
8. SDSVService.batコマンドで、中継サーバを起動します。



手順4と手順5の登録順を誤った場合は、再度、手順1からやり直してください。

Systemwalkerのサーバ証明書を使用する場合

1. SDSVMakeCSR.exeコマンドで、-fileオプション、-certfileオプションを指定して、証明書発行申請書、サーバ証明書を生成します。
2. SDSVService.batコマンドで、中継サーバを停止します。
3. SDSVImportCert.exeコマンドで、-CACERTオプションを指定して実行します。
4. SDSVImportCert.exeコマンドで、-file オプションを指定して、手順1で生成したサーバ証明書を登録します。
5. Windowsクライアント(CT)を接続する中継サーバの場合、または中継サーバを接続する中継サーバの場合、以下の手順を実施します。
 - a. SDSVMakeCSR.exeコマンドで、-fileオプションを指定して、証明書発行申請書を生成します。この手順は手順1とは別に行う必要があります。
 - b. 手順aで生成した証明書発行申請書のファイルを管理サーバに格納し、管理サーバのDTKSVMMakeCSR.exeコマンドで、-file2 オプション、-certfile2 オプションを指定して、格納した証明書発行申請書のファイルを元に、サーバ証明書を生成します。
 - c. SDSVImportCert.exeコマンドで、-file2 オプションを指定して、手順bで取得したサーバ証明書を登録します。

6. SDSVConfig.exeコマンドで、手順5で登録したサーバ証明書の利用を「有効」にします。
7. SDSVService.batコマンドで、中継サーバを起動します。

注意

.....
手順3と手順4の登録順を誤った場合は、再度、手順1からやり直してください。
.....

証明書更新時の設定

以下の手順で設定します。

利用者が用意したサーバ証明書を使用する場合

1. SDSVMakeCSR.exeコマンドで、サーバ証明書の証明書発行申請書を生成します。
2. 手順1で生成された証明書発行申請書を認証局に送付後、認証局で発行されたサーバ証明書を取得します。
3. SDSVService.batコマンドで、中継サーバを停止します。
4. SDSVImportCert.exeコマンドで、-file オプションを指定して、手順2で取得したサーバ証明書を登録します。
5. Windowsクライアント(CT)を接続する中継サーバの場合、または中継サーバを接続する中継サーバの場合、以下の手順を実施します。
 - a. SDSVMakeCSR.exeコマンドで、-fileオプションを指定して、証明書発行申請書を生成します。この手順は手順1とは別に行う必要があります。
 - b. 手順aで生成した証明書発行申請書のファイルを管理サーバに格納し、管理サーバのDTKSVMMakeCSR.exeコマンドで、-file2 オプション、-certfile2 オプションを指定して、格納した証明書発行申請書のファイルを元に、サーバ証明書を生成します。
 - c. SDSVImportCert.exeコマンドで、-file2 オプションを指定して、手順bで取得したサーバ証明書を登録します。
6. SDSVService.batコマンドで、中継サーバを起動します。

Systemwalkerのサーバ証明書を使用する場合

1. SDSVMakeCSR.exeコマンドで、-fileオプション、-certfileオプションを指定して、証明書発行申請書、サーバ証明書を生成します。
2. SDSVService.batコマンドで、中継サーバを停止します。
3. SDSVImportCert.exeコマンドで、-file オプションを指定して、手順1で生成したサーバ証明書を登録します。
4. Windowsクライアント(CT)を接続する中継サーバの場合、または中継サーバを接続する中継サーバの場合、以下の手順を実施します。
 - a. SDSVMakeCSR.exeコマンドで、-fileオプションを指定して、証明書発行申請書を生成します。この手順は手順1とは別に行う必要があります。
 - b. 手順aで生成した証明書発行申請書のファイルを管理サーバに格納し、管理サーバのDTKSVMMakeCSR.exeコマンドで、-file2 オプション、-certfile2 オプションを指定して、格納した証明書発行申請書のファイルを元に、サーバ証明書を生成します。
 - c. SDSVImportCert.exeコマンドで、-file2 オプションを指定して、手順bで取得したサーバ証明書を登録します。
5. SDSVService.batコマンドで、中継サーバを起動します。

各コマンドの詳細については、“リファレンスマニュアル”の“コマンドリファレンス”を参照してください。

注意

.....
Systemwalker Desktop Patrol V15.0.0以降のSSと共存する場合、Systemwalker Desktop Keeperで証明書の登録を行ったあとに、Systemwalker Desktop Patrolで証明書の登録を実施すると、iOS端末と中継サーバ間はSystemwalker Desktop Patrolで登録した証明書でHTTPS通信を行います。
.....

2.11 スマートデバイス(エージェント)(Android)をインストールする

Systemwalker Desktop Keeper のスマートデバイス(エージェント)(Android)を、新規にインストールする方法について説明します。

2.11.1 スマートデバイス(エージェント)(Android)のインストール

スマートデバイス(エージェント)(Android)は、以下の2とおりの方法でインストールできます。

- ・ インターネットサイトからダウンロードする場合
スマートデバイスの利用者がGoogle playから「Desktop Keeper Client」をダウンロード(インストール)します。
- ・ Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMに含まれる、スマートデバイス(エージェント)のAndroidアプリファイル(拡張子がapkのファイル)を以下の方法を使ってスマートデバイスに配付し、スマートデバイスの利用者がインストールする場合
 - － SDカードにコピーして配付する(スマートデバイス(エージェント) (Android)のインストールには、ファイル操作ができるアプリケーションが必要となる場合があります)
 - － スマートデバイスの利用者が、社内のWebサーバ、ファイルサーバ等からダウンロードする
 - － 電子メールの添付ファイルでスマートデバイスの利用者に配付する

スマートデバイス(エージェント)(Android)のapkファイルは、Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMの以下に含まれています。

```
<Systemwalker Desktop Keeper DVD-ROMルート>\¥win32¥SmartDevice¥x86¥Client¥Systemwalker_Log_Agent.apk
```

配付されたSystemwalker_Log_Agent.apkを選択すると以下の画面が表示されます。



[インストール]をタップして、インストールします。



インストールがブロックされた場合

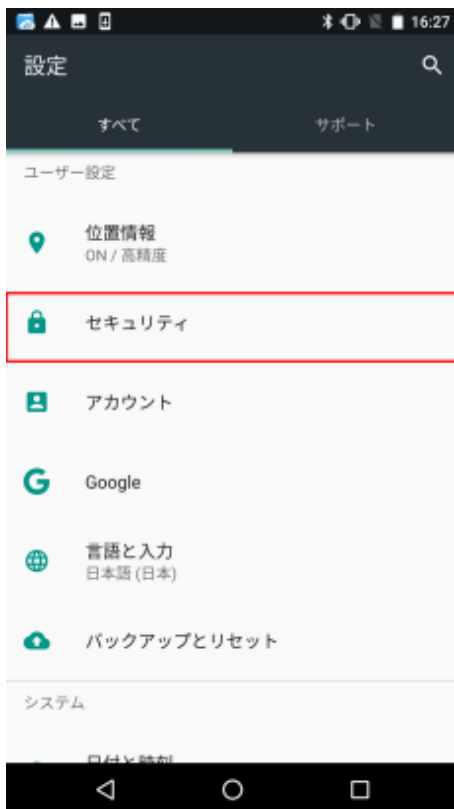
以下、Android 7.0での手順を示します。OS、機種によっては手順が異なる場合がありますので、詳細は製品のマニュアルをご確認ください。

インストール時に以下の警告画面が表示された場合、設定を変更し再度インストールを行う必要があります。



上記警告画面が表示された場合は、以下の方法でエージェントをインストールします。

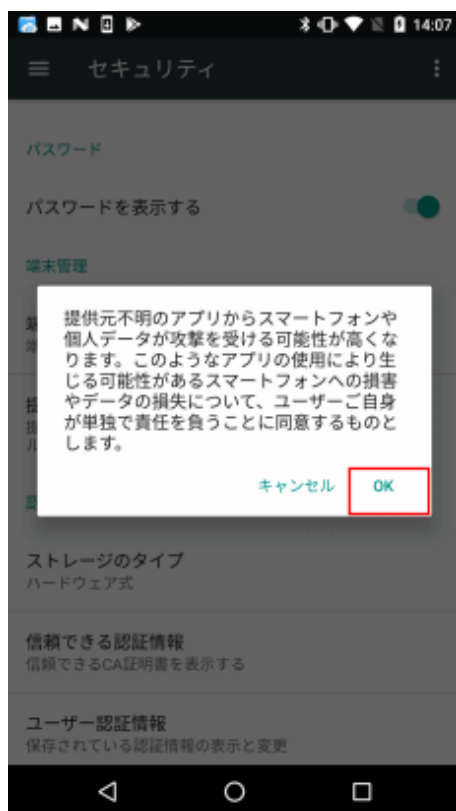
1. [設定]ボタンをタップして[設定]画面を表示し、[セキュリティ]をタップします。



2. セキュリティ画面の[提供元不明のアプリ]をチェックします。

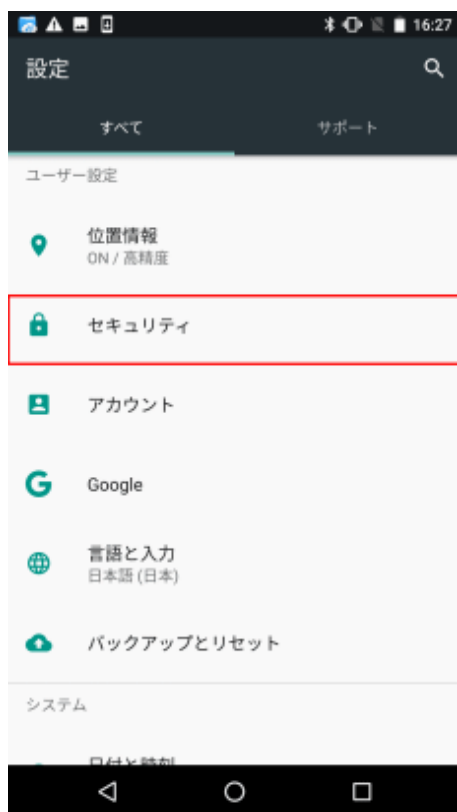


3. 確認ダイアログが表示されますので、[OK]ボタンをタップします。



4. 再度、スマートデバイス(エージェント)(Android)をインストールします。

5. インストール完了後、設定画面を開き、[セキュリティ]をタップします。



6. [提供元不明のアプリ]のチェックを外します。



公式のアプリケーションストアのアプリケーションだけインストールを許可します。

2.11.2 中継サーバとの同期用URLの設定

スマートデバイス(エージェント)(Android)インストール後、中継サーバと通信するための同期用URLを設定します。



注意

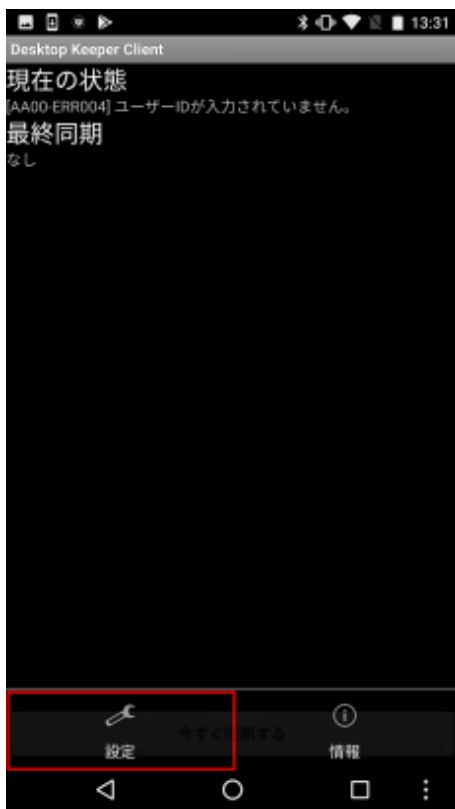
スマートデバイス(エージェント)(Android)のインストール直後について

- スマートデバイス(エージェント)(Android)は、同期URLを設定し中継サーバと同期を行うまでは、操作ログ取得および操作禁止は一切行われません。スマートデバイス(エージェント)(Android)インストール後は必ず同期用URLを設定し、中継サーバと同期を行ってください。
- スマートデバイス(エージェント)(Android)をインストール直後は、アンインストールが可能な状態に設定されています。アンインストールできないようにするために、クライアント管理パスワードを設定した上で中継サーバと同期を行ってください。

1. インストールしたエージェント(Desktop Keeper Client)を起動します。



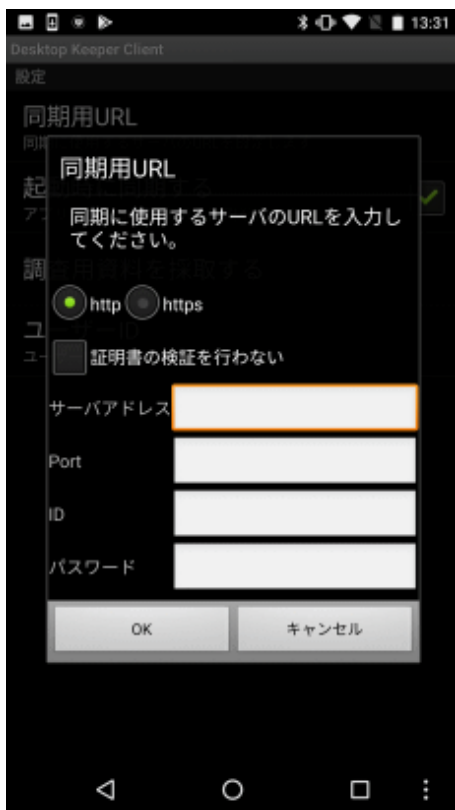
- インストールしたエージェントを起動後、メニューボタンをタップし、オプションメニューを表示します。オプションメニューを表示後、[設定]をタップします。



- 設定画面の[同期用URL]をタップします。



4. 中継サーバのURLを[同期用URL]に入力し、[OK]ボタンをタップします。



同期用URLは、以下のように設定します。

一 中継サーバに接続する場合

a. http,https

スマートデバイスとの通信プロトコルを設定します。

“2.10.3.2 HTTPS通信を設定する”でHTTPS通信を設定した場合は、httpsを選択します。

b. 証明書の検証を行わない

チェックしない: 正式な証明書でなければ接続しない。(初期値)

チェックする: 正式な証明書でなくても接続します。

c. サーバアドレス

中継サーバのアドレスを指定します。

- サーバ名を入力する場合

- 半角15文字まで入力できます。

- サーバ名として使用できる文字は、半角英数字(A-Z、a-z、0-9)および半角記号のハイフン(-)です。

- “-”以外の記号は指定できません。

- 数字のみのコンピュータ名は入力できません。

- IPv4アドレスを入力する場合

- 半角15文字まで入力できます。

- 使用できる文字は、半角数字(0-9)および半角記号のピリオド(.)です。

注)サーバ名を入力する場合は、名前解決できているものを入力してください。名前解決できていない場合、管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)の通信はできません。

d. Port

HTTP/HTTPSリスナーポート: “2.10.3.1 スマートデバイス/PCの情報を設定する”で設定したポート番号

e. ID

使用できません

- f. パスワード
使用できません

一 Proxyサーバを中継して接続する場合

a. http,https

Proxyサーバとの通信プロトコルを設定します。
「httpまたはhttps」を選択してください。

b. サーバアドレス

Proxyサーバのアドレスを指定します。
サーバ名を入力する場合

-半角15文字まで入力できます。

-サーバ名として使用できる文字は、半角英数字(A-Z, a-z, 0-9)および半角記号のハイフン(-)です。

-“-”以外の記号は指定できません。

-数字のみのコンピュータ名は入力できません。

- IPv4アドレスを入力する場合

-半角15文字まで入力できます。

-使用できる文字は、半角数字(0-9)および半角記号のピリオド(.)です。

注)サーバ名を入力する場合は、名前解決できているものを入力してください。名前解決できていない場合、管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)の通信はできません。

c. Port

HTTP/HTTPSリスナーポート:Proxyサーバのポート番号

d. ID

ベーシック認証のID

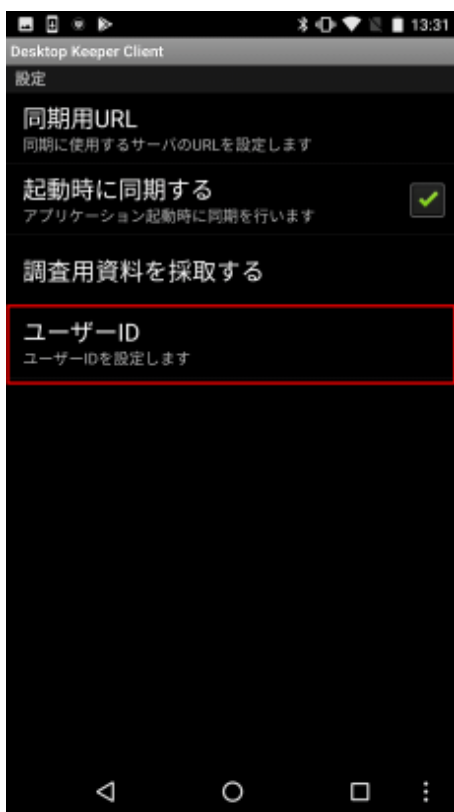
(Proxyサーバでベーシック認証を行う場合)

e. パスワード

ベーシック認証のパスワード

(Proxyサーバでベーシック認証を行う場合)

5. 設定画面の[ユーザーID]をタップします。



6. [ユーザーID]を入力し、[OK]ボタンをタップします。



ユーザーIDを入力せずに[キャンセル]ボタンをタップすると以下のメッセージが表示されます。

AA001-SEL001 ユーザーIDを入力しないとサーバと通信できません。終了しますか。

終了する場合には[OK]ボタンをタップしてください。ただし、管理サーバと通信はできません。
[ユーザーID入力]画面に戻る場合には[キャンセル]ボタンをタップしてください。
ユーザーIDで使用できる文字は以下になります。

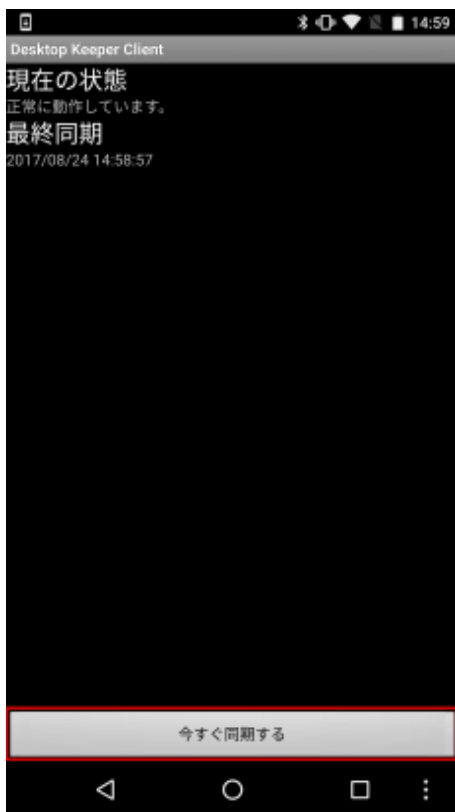
- 指定できる文字数は最大20文字です。
- 半角英数字、および半角記号の「-」、「@」、「.」、「_」が使用できます。
- 英字を指定する場合は、大文字/小文字が区別されます。

7. 設定画面の[起動時に同期する]を確認し、チェックが外れている場合はタップし、チェック状態にします。

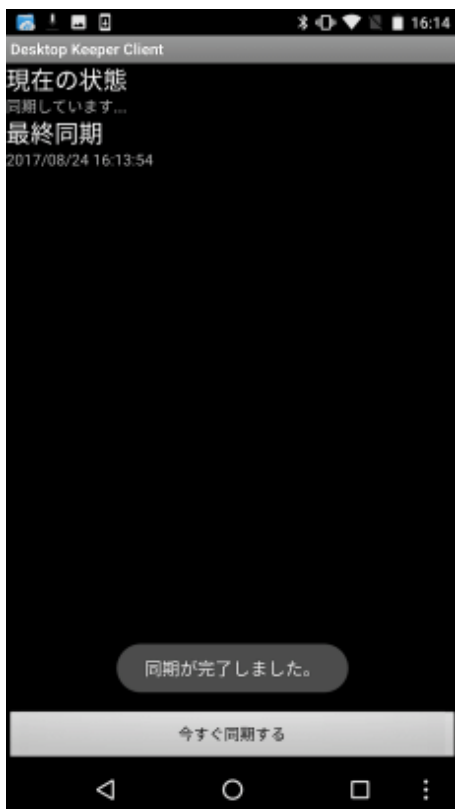


8. [バック(戻る)]ボタンをタップし、エージェントの画面に戻ります。

9. エージェント画面の[今すぐ同期する]をタップします。



10. 「同期が完了しました」が表示されたら同期終了です。この時点で最新のポリシーが適用されています。

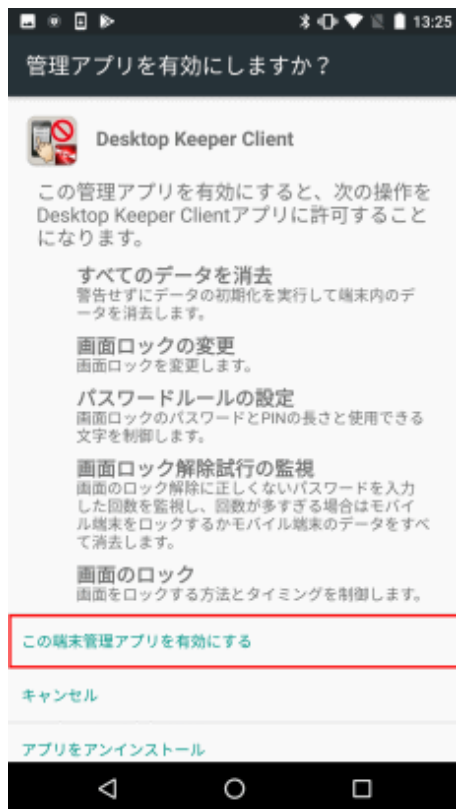


アンインストールを容易に実行できないようにするには

Desktop Keeper Clientを起動すると、下記の確認メッセージが表示されます。

[この端末管理アプリを有効にする]をタップすると、Desktop Keeper Clientがアンインストールできなくなります。

[キャンセル]をタップした場合、Desktop Keeper Clientをアンインストールするには、管理コンソールの[端末動作設定]画面の[クライアント管理パスワード]で設定されたパスワードの入力が必要になります。



Desktop Keeper Clientをアンインストールできない状態にして、ご利用されることを推奨します。

2.12 スマートデバイス(エージェント)(iOS)をインストールする

Systemwalker Desktop Keeperのスマートデバイス(エージェント)(iOS)を、新規にインストールする方法について説明します。

2.12.1 スマートデバイス(エージェント)(iOS)のインストール

注意

iOS端末の利用者に以下のURLを通知します。

[https://\[中継サーバのhost名/IPアドレス\]:\[ポート番号\]/mdmi/systemwalker/](https://[中継サーバのhost名/IPアドレス]:[ポート番号]/mdmi/systemwalker/)

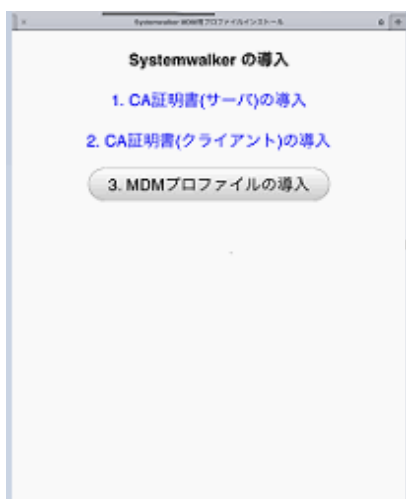
公開するホスト名/IPアドレスは、証明書発行申請書の作成コマンド(SDSVMakeCSR.exe)の-CNオプションに指定した値と一致している必要があります。一致していない場合、証明書の検証でエラーになります。

公開するホスト名/IPアドレスは社内からだけアクセスできるように、ネットワークを設定してください。

ポート番号は、設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)をオプションなしで実行して確認できます。オプション名は、-iOS.connect.profile.pです。

デフォルト値は「50080」です。

1. 管理者から通知されたURLにアクセスします。



注意

CA証明書(サーバ)、CA証明書(クライアント)がiOS端末に導入されている場合は、これら2つの証明書は上書きされます。MDMプロファイルがiOS端末に導入されている場合は、一度iOS端末上のMDMプロファイル(Profile Service Enroll)を削除してから、MDMプロファイルを導入してください。MDMプロファイル(Profile Service Enroll)の削除方法については、“5.4 スマートデバイス(エージェント)(iOS)をアンインストールする”を参照してください。

2. [1. CA証明書(サーバ)の導入]をタップします。
3. iOS端末上で[CA証明書]のインストール画面が起動しますので、[インストール]をタップします。
4. インストール中に「証明書」の信頼性が検証できません。このプロファイルをインストールすると、iPad(iPhone)上の設定が変更されます。」というメッセージが表示されますが、[インストール]をタップして処理を続行してください。また、iOS端末にパスワードロックを設定している場合、インストール時にパスワードの入力が必要です。
5. インストールが完了すると、[インストール完了]画面が表示されます。[完了]をタップしてください。

注意

iOS端末に対して、証明書を手動でインストールした場合、その証明書が自動的に信頼されない場合があります。その場合は、証明書に対する信頼を手動で有効にする必要があります。

iOS 11での手順の例を以下に示します。

1. 「設定」>「一般」>「情報」>「証明書信頼設定」の順に選択します。
2. 「ルート証明書を全面的に信頼する」で、証明書に対する信頼を有効にします。

6. [2. CA証明書(クライアント)の導入]をタップします。
7. iOS端末上で[CA証明書]のインストール画面が起動しますので、[インストール]をタップします。
8. インストール中に「証明書」の信頼性が検証できません。このプロファイルをインストールすると、iPad(iPhone)上の設定が変更されます。」というメッセージが表示されますが、[インストール]をタップして処理を続行してください。また、iOS端末にパスワードロックを設定している場合、インストール時にパスワードの入力が必要です。
9. インストールが完了すると、[インストール完了]画面が表示されます。[完了]をタップしてください。

注意

iOS端末に対して、証明書を手動でインストールした場合、その証明書が自動的に信頼されない場合があります。その場合は、証明書に対する信頼を手動で有効にする必要があります。

iOS 11での手順の例を以下に示します。

1. 「設定」>「一般」>「情報」>「証明書信頼設定」の順に選択します。
2. 「ルート証明書を全面的に信頼する」で、証明書に対する信頼を有効にします。

10. [3. MDMプロファイルの導入]をタップします。
11. [構成プロファイル]のインストール画面が表示されますので、[インストール]をタップします。
12. インストール中に「このプロファイルをインストールすると、iPad(iPhone)の設定が変更されます。」というメッセージが表示されますが、[インストール]をタップして処理を続行してください。また、iOS端末にパスコードロックを設定している場合、インストール時にパスコードの入力が必要です。
インストール中に「モバイルデバイス管理」の警告画面が表示されますが、[インストール]をタップして処理を続行してください。
13. インストールが完了すると、[インストール完了]画面が表示されます。[完了]をタップしてください。

第3章 保守

本章では、Systemwalker Desktop Keeperの資産を退避・復元する方法について説明します。

Systemwalker Desktop Keeperの資産は、管理サーバ/統合管理サーバ、およびログアナライザサーバにあります。退避の対象と退避・復元方法について、管理サーバ/統合管理サーバ、ログアナライザサーバに分けて説明します。なお、管理サーバ/統合管理サーバとログアナライザサーバはそれぞれ独立しており、保守作業は個々に実施可能です。

3.1 管理サーバ/統合管理サーバの保守

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバの保守方法について説明します。

3.1.1 資産の退避対象および退避方法

Systemwalker Desktop Keeper管理サーバ/統合管理サーバの資産を退避・復元する目的には以下の2つがあります。

環境異常時に備えた退避

ハードディスクの故障やファイルの破壊などに備えたデータの退避、およびそれら異常発生時の復元

定常的なログ運用のための退避

- データベース領域の枯渇を発生させないために、ログ情報の保存期間を運用により設定し、期間外のログ情報の削除を目的とした退避
注) 運用イメージについては、“[1.2.7 ログの運用方法を決定する](#)”を参照してください。
- ログ閲覧データベースで参照することを目的とした定常的な退避

注意

セキュア通信で使用する証明書については、退避・復元は不要です。

セキュア通信を行うサーバの構築時には、毎回必ず証明書導入時の設定([2.3.4.2.1 証明書を設定する](#))を実施してください。

退避対象には、設定ファイルなど製品自身の動作に関連する“製品資産”と、ログ情報などの“ユーザー資産”に分類されます。製品資産とユーザー資産それぞれの退避対象と上記目的に沿った退避対象・退避方法は以下のとおりです。

種別	退避対象	形式	退避方法	環境異常時に備えた退避	定常的なログ退避
製品資産	設定ファイル	ファイル	手動退避	○	—
	自己版数管理機能のCT更新モジュール	ファイル	手動退避	○	—
ユーザー資産	管理情報	データベース	バックアップツール (GUI/コマンド)	○	○
	ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ以外)	データベース	バックアップツール (GUI/コマンド)	○	○
	ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ)	ファイル	バックアップツール (GUI/コマンド)	○	○
	付帯データ	ファイル	手動退避	○	△
	メール内容データ	ファイル	手動退避	○	△
	設定変更ログ	データベース	コマンド (DTKSTCV.EXEおよびDTKDELST.EXE)	○	○
iOS管理データベース	データベース	バックアップツール(コマンド)	○	○	

○:退避対象 -:退避不要 △:任意

3.1.1.1 製品資産

製品資産として退避・復元される情報の詳細、および退避方法について説明します。

設定ファイル

退避・復元の対象となる設定ファイルは、以下のとおりです。なお、OSのインストール先を変更している場合、ファイルの格納されているディレクトリは、下記の表とは異なる場合があります。(下表の場合、CドライブにOSをインストールしている場合のパスで表示しています)

No.	退避対象	内容および格納先
1	SWCTVerSettings.ini	自己版数管理機能の設定ファイルです。 統合管理サーバおよび管理サーバに格納されています。 Windows Server 2019の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」 Windows Server 2016の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」 Windows Server 2012の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」 Windows Server 2008の場合:「C:\Windows\system32」 Windows Server 2008 64ビット版および、 Windows Server 2008 R2の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」
2	SWCTVerSettings2.ini	自己版数管理機能の設定ファイルです。 自己版数アップ機能を使用してバージョンアップまたはエディションアップを行っている場合にだけ統合管理サーバおよび管理サーバに格納されています。 Windows Server 2019の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」 Windows Server 2016の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」 Windows Server 2012の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」 Windows Server 2008の場合:「C:\Windows\system32」 Windows Server 2008 64ビット版および、 Windows Server 2008 R2の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」
3	SWDB.ini	Systemwalker Desktop Keeper データベース接続の設定ファイルです。 Windows Server 2019の場合:「C:\Windows」 Windows Server 2016の場合:「C:\Windows」 Windows Server 2012の場合:「C:\Windows」 Windows Server 2008の場合:「C:\Windows」
4	SWMailSettings.ini	管理者通知機能(メール通知)の設定ファイルです。 Windows Server 2019の場合:「C:\Windows」 Windows Server 2016の場合:「C:\Windows」 Windows Server 2012の場合:「C:\Windows」 Windows Server 2008の場合:「C:\Windows」
5	SWEventViewer.ini	管理者通知機能(イベントログ)の設定ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 Windows Server 2019の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」 Windows Server 2016の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」 Windows Server 2012の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」 Windows Server 2008の場合:「C:\Windows\system32」 Windows Server 2008 64ビット版および、 Windows Server 2008 R2の場合:「C:\Windows\System32\WOW64」
6	TRANS_SETTING.ini	データ転送コマンドの設定ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>\LogAnalyzer\TRANS」
7	taskmng.ini	Webコンソールの設定ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 IISフォルダ\Scripts\DTK

No.	退避対象	内容および格納先
8	DTKTaskRegist.ini	集計コマンドの設定ファイルです 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%Server%LogCount」
9	mail.ini	メール設定のファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%Server%LogCount」
10	DtkPrinterBatch_SaveData.ini	複合機連携用コマンドの設定ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%Server%LogCount」
11	DtkPrinterBatchTask.ini	複合機連携タスク登録設定ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%Server%LogCount」
12	LA_connect_Info.csv	ログアナライザ設定のファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%LogAnalyzer%TRANS」
13	CONV_SETTING.ini	データ移入設定のファイルです。 ログアナライザサーバに格納されています。 「<ログアナライザサーバインストールフォルダ>%bin%SWDTLAENV」
14	Config.xml	内部不正リスク検出コマンドの設定ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%Server%LogCount%swdtk_iird%config」
15	TargetPC.csv	内部不正リスク検出コマンドの調査対象PC定義ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%Server%LogCount%swdtk_iird%config」
16	TargetUser.csv	内部不正リスク検出コマンドの調査対象ユーザー定義ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%Server%LogCount%swdtk_iird%config」
17	ExtendedDefinition.xml	内部不正リスク検出コマンドの拡張定義ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%Server%LogCount%swdtk_iird%config」
18	logging.xml	内部不正リスク検出コマンドの設定ファイルです。 統合管理サーバまたは管理サーバに格納されています。 「<管理サーバインストールフォルダ>%Server%LogCount%swdtk_iird%config」

【退避・復元方法】

退避:

上記の場所に格納されているファイルを退避します。

復元:

退避済みのファイルを上記の場所に格納します。

No.7については格納後、以下の手順でファイルの編集を行います。

1. ファイルをエディタ(メモ帳等)で開きます。
2. [Update]セクションに”Flag=0”という表記がある場合は、”Flag=1”に編集します。すでに”Flag=1”となっている場合は、編集する必要はありません。
3. ファイルを保存し、エディタを終了します。

自己版数管理機能のCT更新モジュール

自己版数管理機能のCT更新モジュールの格納先は以下のとおりです。なお、[CTアップロードモジュール保存先]を初期値から変更している場合には、変更先を退避してください。

No.	退避対象	格納先
1	UpdateModuleフォルダの配下すべて	統合管理サーバまたは管理サーバのサーバ設定ツールで指定した、自己版数管理機能のCTアップロードモジュール保存先フォルダです。 (初期値:C:\¥DTK¥UpdateModule)

【退避・復元方法】

退避:

退避対象のフォルダ配下すべてを退避します。

復元:

退避済みのフォルダ配下すべてを上記の場所に格納します。

3.1.1.2 ユーザー資産

ユーザー資産として退避・復元される情報の詳細、および退避方法について説明します。

各管理情報

退避・復元の対象となる管理情報は、以下のとおりです。

No.	退避対象(テーブル名)	内容
1	LEVELOBJECT	階層オブジェクト情報
2	LEVELCOMPOSITION	階層構成
3	PRINTPERMISSION	印刷許可
4	LOGINGUARD	ログオン禁止
5	STARTUPGUARD	アプリケーション起動禁止
6	MAILATTACHSET	メール添付禁止
7	USERINFO	ユーザー情報
8	NODEINFO	ノード情報
9	PHYSICALNODELIST	物理ノード管理
10	SETTINGS	設定値
11	SETTINGSLOG	設定変更ログ
12	FILEACC_ACQUIREPROCESS	ファイル操作ログ登録プロセス
13	FILEACC_ACQUIREEXTENSION	ファイル操作ログ登録拡張子
14	USERPOLICYINFO	ユーザーポリシー情報
15	LOGONUSER_PRINTPERMISSION	ユーザー単元に登録している印刷許可
16	LOGONUSER_STARTUPGUARD	ユーザー単元に登録しているアプリケーション起動禁止
17	USERMAILATTACHSET	ユーザー単元に登録しているメール添付禁止
18	LOGONUSER_SETTINGSLOG	ユーザー単元に登録している設定変更ログ
19	WINDOWTITLELOGFILTER	ウィンドウタイトルログのフィルタリング条件
20	LOGONUSER_WINDOWTITLELOGFILTER	ユーザー単元に登録しているウィンドウタイトルログのフィルタリング条件
21	WINDOWCAPTUREFILTER	画面キャプチャ条件

No.	退避対象(テーブル名)	内容
22	LOGONUSER_WINDOWCAPTUREFILTER	ユーザー単位に登録している画面キャプチャ条件
23	EXCLUSIONCONTROL	排他制御情報
24	DOMAINSETTINGS	ドメイン設定情報
25	OBJECT_CONTROL	CT部門管理者設定情報
26	LOGONUSER_LEVELCOMPOSITION	ユーザー階層構成情報
27	LOGONUSER_CONTROL	ユーザー部門管理者設定情報
28	USBMASTER	USB設定情報
29	POLICYTABLE	汎用ポリシー
30	DTK_AUDIT_SETTING	状況画面設定情報
31	DTK_TOTAL_ALERTLOG	異常操作件数集計情報
32	DTK_ALERT_LIST	異常一覧情報
33	DTK_ALERTPC_LIST	異常PC一覧情報
34	DTK_PRINTER_OBJECTMASTER	複合機用オブジェクト管理
35	DTK_PRINTER_PRINTUSERMASTER	複合機用利用者管理
36	DTK_PRINTER_PAPERNUM_BASIC	複合機用枚数集計
37	iOS管理データベースのすべてのテーブル	iOS管理データベース

【退避・復元方法】

退避:

バックアップツール(GUI)またはバックアップコマンドを使用します。詳細は“[3.1.2 ユーザー資産を退避する](#)”を参照してください。
iOS端末を管理している場合は、バックアップコマンドを使用してください。バックアップツール(GUI)では、iOS管理データベースは退避されません。

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバとSystemwalker Desktop PatrolのCSが共存し、両製品でiOS端末を管理している場合は、Systemwalker Desktop Patrolの管理情報の退避も行ってください。

復元:

リストアツール(GUI)を使用します。詳細は“[3.1.3 ユーザー資産を復元する](#)”を参照してください。

iOS端末を管理している場合は、リストアツール(GUI)に続いて、iOS管理データベースのリストアコマンドでiOS管理データベースの復元を行ってください。

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバとSystemwalker Desktop PatrolのCSが共存し、両製品でiOS端末を管理している場合は、Systemwalker Desktop Patrolの管理情報の復元も行ってください。

ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ以外)

退避・復元の対象となるログ情報は、以下のとおりです。

No.	情報名(テーブル名)	内容
1	COMMONLOG1	共通ログ1 <ul style="list-style-type: none"> ・ アプリケーション起動ログ ・ アプリケーション終了ログ ・ メール送信ログ ・ メール送信中止ログ ・ メール添付禁止ログ(注1) ・ メール受信ログ ・ PrintScreenキー禁止ログ

No.	情報名(テーブル名)	内容
		<ul style="list-style-type: none"> • PrintScreenキー操作ログ • クリップボード操作禁止ログ • クリップボード操作ログ
2	COMMONLOG2	<p>共通ログ2</p> <ul style="list-style-type: none"> • ウィンドウタイトル取得ログ • 印刷禁止ログ • コマンドプロンプト操作ログ(インデックス情報だけ) • 連携アプリケーションログ
3	COMMONLOG3	<p>共通ログ3</p> <ul style="list-style-type: none"> • メール添付禁止ログ(注1) • ウィンドウタイトル取得ログ(URL付き) • ログオン、ログオフ、PC起動、PC終了、PC休止、PC復帰ログ PC接続ログ、PC切断ログ • デバイス構成変更ログ(注2) • Web操作ログ • Web操作禁止ログ • FTP操作ログ • FTP操作禁止ログ • 環境変更ログ • アプリケーション使用ログ(スマートデバイス) • SDカードマウント/アンマウントログ(スマートデバイス) • Bluetooth接続ログ(スマートデバイス) • SIMカードマウント/アンマウントログ(スマートデバイス) • Wi-Fi接続ログ(スマートデバイス) • Webアクセスログ(スマートデバイス) • 電話発着信ログ(スマートデバイス) • アプリケーション構成変更ログ(スマートデバイス) • アプリケーション使用禁止(スマートデバイス) • Bluetooth接続禁止(スマートデバイス) • Wi-Fi接続禁止(スマートデバイス)
4	STARTUPGUARDLOG	アプリケーション起動禁止ログ
5	LOGINGUARDLOG	ログオン禁止ログ
6	PRINTLOG	印刷操作ログ
7	FILEBRINGOUTLOG	ファイル持出しログ
8	LOGKEYWORDS	ログキーワード検索
9	FILEACCESSLOG	ファイル操作ログ
10	SESSIONMANAGE	仮想環境への接続情報
11	USERLIST	ユーザー検索用管理情報

注1)

V14.0.1以前のメール添付禁止ログは、COMMONLOG3に格納されています。V14.1.0以降のメール添付禁止ログはCOMMONLOG1へ格納されますが、以下の条件の場合はCOMMONLOG3へ格納されます。

・V12.0L20～V13.0.0互換方式を使用している

注2)

デバイス構成変更ログは、V13まではCOMMONLOG1に記録されています。

【退避・復元方法】

退避:

バックアップツール(GUI)またはバックアップコマンドを使用します。詳細は“3.1.2 ユーザー資産を退避する”を参照してください。

復元:

リストアツール(GUI)を使用します。詳細は“3.1.3 ユーザー資産を復元する”を参照してください。

ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ)

コマンドプロンプト操作ログの格納先は以下のとおりです。[コマンドプロンプト・ログ保存先]を初期値から変更している場合には、変更先を退避します。

No.	退避対象	格納先
1	PromptLogフォルダの配下すべて	統合管理サーバまたは管理サーバのサーバ設定ツールで指定した、コマンドプロンプト・ログ保存先フォルダです。 (初期値:C:\¥DTK¥PromptLog)

【退避・復元方法】

退避:

バックアップツール(GUI)またはバックアップコマンドを使用します。詳細は“3.1.2 ユーザー資産を退避する”を参照してください。

復元:

リストアツール(GUI)を使用します。詳細は“3.1.3 ユーザー資産を復元する”を参照してください。

付帯データ

付帯データの格納先は以下のとおりです。[付帯データ保存先]を初期値から変更している場合には、変更先を退避します。

No.	退避対象	格納先
1	ScreenCaptureフォルダ配下すべて	統合管理サーバまたは管理サーバのサーバ設定ツールで指定した、付帯データ保存先フォルダです。 (初期値:C:\¥DTK¥ScreenCapture) 付帯データは、上記保存先フォルダ配下の[日単位のフォルダ]-[CT単位のフォルダ]配下に格納されています。

【退避・復元方法】

退避:

退避対象のフォルダ配下すべてを退避します。

付帯データは、運用に応じて個別にバックアップしてください。なお、バックアップツールやバックアップコマンドを使用してログの削除を実行しても、付帯データは削除されません。

復元:

退避済みのフォルダ配下すべてを上記の場所に格納します。

メール内容データ

メール内容データの格納先は以下のとおりです。[メール内容保存先]を初期値から変更している場合には、変更先を退避します。

No.	退避対象	格納先
1	MainContentsフォルダ配下すべて	統合管理サーバまたは管理サーバのサーバ設定ツールで指定した、メール内容データ保存先フォルダです。 (初期値:C:\¥DTK¥MailContents) メール内容データは、上記保存先フォルダ配下の[日単位のフォルダ]-[CT単位のフォルダ]配下に格納されています。

【退避・復元方法】

退避:

退避対象のフォルダ配下すべてを退避します。

メール内容データは、運用に応じて個別にバックアップしてください。なお、バックアップツールやバックアップコマンドを使用してログの削除を実行しても、メール内容データは削除されません。

復元:

退避済みのフォルダ配下すべてを上記の場所に格納します。

障害調査データ

障害調査データの格納先は以下のとおりです。[障害調査データ保存先]を初期値から変更している場合には、変更先を退避します。

No.	退避対象	格納先
1	CTQSSSaveフォルダ配下すべて	統合管理サーバまたは管理サーバのサーバ設定ツールで指定した、障害調査データ保存先フォルダです。 (初期値:C:\¥DTK¥CTQSSSave) 障害調査データは、上記保存先フォルダ配下の[日単位のフォルダ]-[CT単位のフォルダ]配下に格納されています。

【退避・復元方法】

退避:

退避対象のフォルダ配下すべてを退避します。

障害調査データは、運用に応じて個別にバックアップしてください。なお、バックアップツールやバックアップコマンドを使用してログの削除を実行しても、障害調査データは削除されません。

復元:

退避済みのフォルダ配下すべてを上記の場所に格納します。

3.1.2 ユーザー資産を退避する

本製品が提供するユーザー資産のバックアップ機能には以下の3つがあります。

バックアップツール(GUI)

GUI画面によりバックアップ条件を設定して実行します。

iOS管理データベースはバックアップされません。

バックアップツール(自動)

GUI画面により自動バックアップの条件を設定して、自動的にバックアップを実行します。

バックアップコマンド

コマンドへのパラメーター指定によりバックアップ条件を設定します。コマンド自身にスケジュール機能はありません。

ポイント

タスクにコマンドを登録しておくことで便利

バックアップコマンドを、スケジュール機能をもったバッチファイルに組み込むことによって、指定した日時に実行できます。

バックアップツール(GUI)およびバックアップコマンドは以下の操作を行うことができます。

- データの退避
ハードディスクの故障やファイルの破壊などに備えることができます。またデータベースの再構築時にも使用します。退避可能な情報は以下の3つです。
 - 管理情報
 - ログ情報(データベース上のログデータおよびコマンドプロンプト操作ログ)
 - 設定変更情報(DTKSTCVコマンドで出力する情報)退避可能な情報の詳細については、“[3.1.1.2 ユーザー資産](#)”を参照してください。
データの退避の処理時間は退避の対象となるログ件数により概算できます。目安は以下のとおりです。
 - 7,000件/秒 (Xeon、2.0GHz、メモリ2GB、RAID1構成)
注)サーバ性能、RAID構成によってはこれ以上時間がかかる場合があります。
- データの削除
運用時にデータベースに蓄積された不要なデータを削除し、データベースの領域不足を防ぐことができます。
データの削除の処理時間は削除の対象となるログ件数により概算できます。目安は以下のとおりです。
 - 200件/秒 (Xeon、2.0GHz、メモリ2GB、RAID1構成)
注)サーバ性能、RAID構成によってはこれ以上時間がかかる場合があります。
- ログの情報出力(ログビューア形式)
運用時に採取された操作ログや禁止ログをログビューア形式(ログビューアで表示した形式)でCSVファイル(UTF-8)として出力し、参照できます。ただし、ログビューア形式で取り出した情報はリストアできません。
ログの情報出力の処理時間は退避の対象となるログ件数により概算できます。目安は以下のとおりです。
 - 2,000件/秒 (Xeon、2.0GHz、メモリ2GB、RAID1構成)
注)サーバ性能、RAID構成によってはこれ以上時間がかかる場合があります。
- データのバックアップ・削除のスケジュール設定(バックアップツール(GUI)だけ)
データのバックアップ・削除を自動で実行するためのスケジュール設定を行うことができます。設定した内容は、タスクスケジューラに登録されます。自動実行は、以下の動作を行います。
 - データの退避(管理情報、ログ情報、設定変更ログ)
 - データの削除(ログ情報、設定変更ログ)
 - ログの情報出力(ログビューア形式)
 - 自動実行時にエラーが発生した場合に管理者にメール通知します。
[サーバ設定ツール]-[管理者通知設定]-[メール送信設定]で通知するメールアドレスを設定する必要があります。

バックアップツール(GUI)およびバックアップコマンドの動作状況は、イベントログに出力されます。

バックアップツール(GUI)およびバックアップコマンドは、付帯データを除くユーザー資産データ(管理情報、ログ情報)をバックアップするものであり、本製品のプログラムや設定情報のすべてをバックアップするものではありません。すべての情報をバックアップするには別途バックアップソフトウェア等によるバックアップを定期的に行ってください。

3.1.2.1 バックアップツール(GUI)を利用する

バックアップツール(GUI)によって、ユーザー資産をバックアップする方法について説明します。



注意

バックアップツール(GUI)の使用時に考慮すべきことについて

【出力先のディスク容量について】

退避ファイルの出力先として指定するディスクは、容量に十分余裕のあるディスクを使用してください。多量のデータを処理することでディスク容量に不足が発生する場合は、退避対象として指定する日付の範囲を狭めるなどの対応を行ってください。

【データベース関連ファイルのインストール先のディスク容量について】

データベース関連ファイルのインストール先の容量に十分余裕があるか確認してください。多量のログデータをバックアップする場合、データベース関連ファイルのインストール先ドライブに十分な空き領域が必要です。必要なディスク容量については、“解説書”の“動作環境”を参照してください。

【退避・復元は各サーバで行ってください】

3階層のシステム構成の場合、それぞれの管理サーバでデータベースを持っているため、退避、復元は統合管理サーバ、管理サーバ単位で実施してください。

【データの変換について】

バックアップツールでは、ログ内のデータを変換してCSVファイルに出力する場合があります。変換内容は以下の2点です。

- TAB、CR、LF → 半角空白置換
- "(ダブルクォーテーション) → ""(二重にする)

【付帯データの扱いについて】

付帯データ(画面キャプチャデータ、原本保管データ)は、バックアップツール/バックアップコマンドによるバックアップ対象ではありません。また、ログの削除を実行しても、付帯データは削除されません。付帯データの退避、復元については、“[3.1.1 資産の退避対象および退避方法](#)”の付帯データを参照してください。

【メール内容データの扱いについて】

メール内容データ(メール本文、添付ファイル)は、バックアップツール/バックアップコマンドによるバックアップ対象ではありません。また、ログの削除を実行しても、メール内容データは削除されません。メール内容データの退避、復元については、“[3.1.1 資産の退避対象および退避方法](#)”のメール内容データを参照してください。

【UACの昇格について】

Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019の場合、ビルドインAdministrator以外のユーザーでバックアップツールを起動するとネットワークドライブを選択できません。これは、UACのセキュリティ強化によるものです。ビルドインAdministrator以外のユーザーでバックアップを行う場合には、権限昇格したコマンドプロンプトでネットワークドライブを割り当てた後、実行してください。

ポイント

バックアップツール(GUI)へのログオン履歴について

バックアップツール(GUI)へのログオン履歴はイベントログ(アプリケーション)に出力されます。

事前準備

復元を前提としたデータ退避を行う場合には、以下の設定情報を控えてください。(画面のビットマップ採取やメモを取るなど)

対象	退避画面
管理コンソール	[端末動作設定]
サーバ設定ツール	[システム設定]
	[ActiveDirectory連携設定] 注)Active Directory連携機能利用時
	[管理者通知設定]
	[管理サーバ設定]
	[トレース設定]
	[フォルダ/CT自己版数アップ設定]

[端末動作設定]の表示方法は以下のとおりです。

1. [管理コンソール]を起動します。

- [動作設定]メニューから[端末動作設定]を選択します。
→[端末動作設定]画面が表示されます。

サーバ設定ツールの各画面の表示方法は、“2.3.4 管理サーバ/統合管理サーバの環境を設定する”を参照してください。

注意

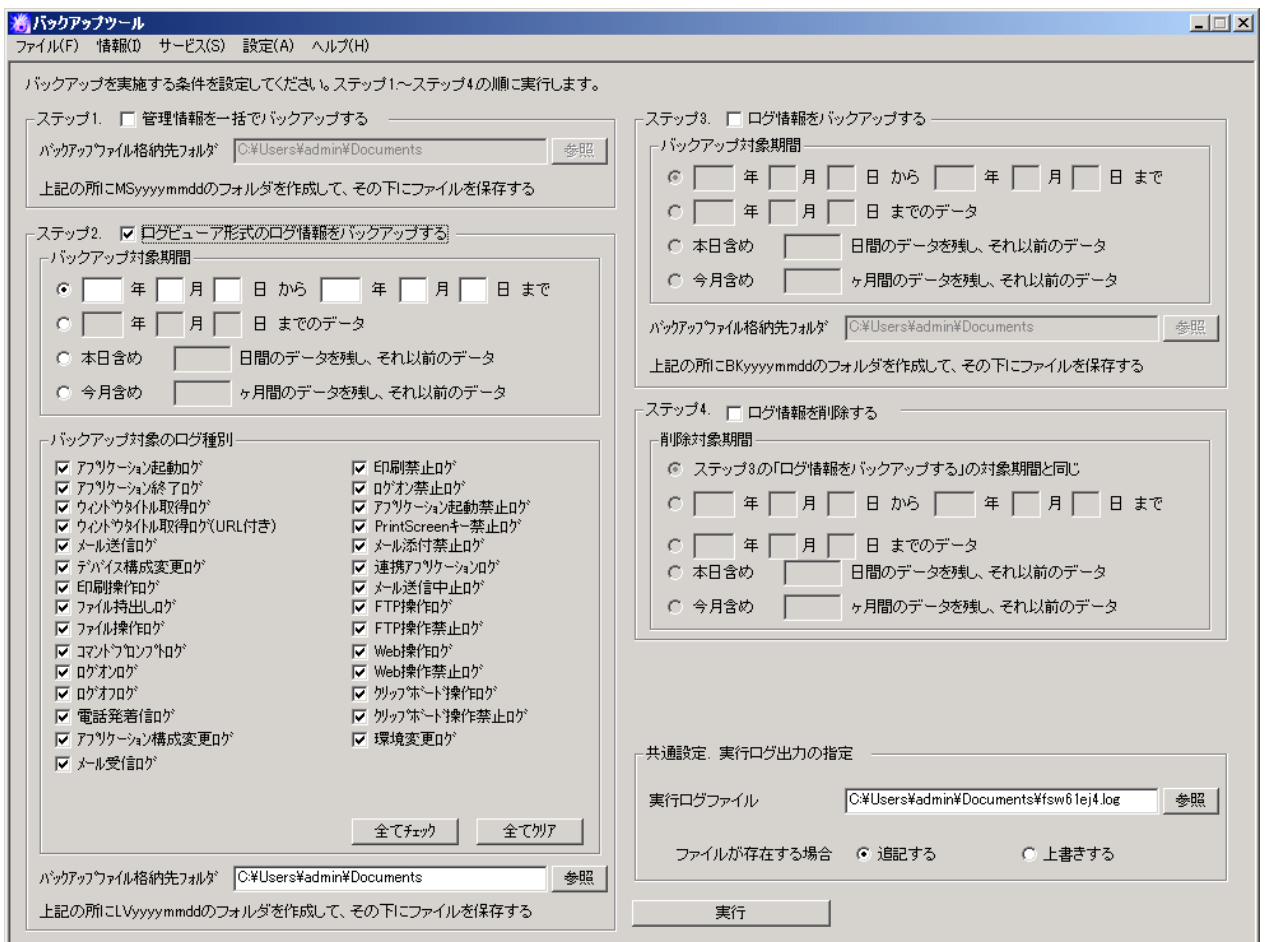
控えた情報は大切に保管してください

上記の設定情報はバックアップツールでは退避できません。復元後、退避時と同じ設定にする場合は、復元後に端末動作設定の再設定を行う必要があるため、バックアップデータと共に控えた情報は大切に保管してください。

バックアップを実行する

バックアップツールの使用手順は以下のとおりです。

- Android端末またはiOS端末を管理している場合は、中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)を使用して中継サーバのサービスを停止します。コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“SDSVService.bat(中継サーバのサービス起動・停止)”を参照してください。
- Administratorsグループに所属するユーザーまたはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。
- 管理サーバ/統合管理サーバをインストールしたPCの[スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[バックアップツール]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[バックアップツール]を選択します。
→[Systemwalker Desktop Keeper バックアップツール]画面が表示されます。
- サーバ設定ツールで登録したユーザーID(アクセス権が“バックアップ・リストア”のユーザーID)、パスワードを入力して、[OK]ボタンをクリックします。(初期管理者のユーザーID、パスワードを使用してもログインできます)
→[バックアップツール]画面が表示されます。



バックアップを実施する条件を設定してください。ステップ1～ステップ4の順に実行します。

ステップ1. 管理情報を一括でバックアップする

バックアップファイル格納先フォルダ

上記の所にMSYyyyymmddのフォルダを作成して、その下にファイルを保存する

ステップ2. ログビューア形式のログ情報をバックアップする

バックアップ対象期間

年 月 日 から 年 月 日 まで

年 月 日 までのデータ

本日含め 日間のデータを残し、それ以前のデータ

今月含め ヶ月間のデータを残し、それ以前のデータ

バックアップ対象のログ種別

<input checked="" type="checkbox"/> アプリケーション起動ログ	<input checked="" type="checkbox"/> 印刷禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> アプリケーション終了ログ	<input checked="" type="checkbox"/> ログオン禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ウィンドウタイトル取得ログ	<input checked="" type="checkbox"/> アプリケーション起動禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ウィンドウタイトル取得ログ(URL付き)	<input checked="" type="checkbox"/> PrintScreenキー禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> メール送信ログ	<input checked="" type="checkbox"/> メール添付禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> デバイス構成変更ログ	<input checked="" type="checkbox"/> 連携アプリケーションログ
<input checked="" type="checkbox"/> 印刷操作ログ	<input checked="" type="checkbox"/> メール送信中止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ファイル持出しログ	<input checked="" type="checkbox"/> FTP操作ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ファイル操作ログ	<input checked="" type="checkbox"/> FTP操作禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> コマンドラインログ	<input checked="" type="checkbox"/> Web操作ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ログオンログ	<input checked="" type="checkbox"/> Web操作禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ログオフログ	<input checked="" type="checkbox"/> クラウド操作ログ
<input checked="" type="checkbox"/> 電話発着信ログ	<input checked="" type="checkbox"/> クラウド操作禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> アプリケーション構成変更ログ	<input checked="" type="checkbox"/> 環境変更ログ
<input checked="" type="checkbox"/> メール受信ログ	

バックアップファイル格納先フォルダ

上記の所にLYyyyymmddのフォルダを作成して、その下にファイルを保存する

ステップ3. ログ情報をバックアップする

バックアップ対象期間

年 月 日 から 年 月 日 まで

年 月 日 までのデータ

本日含め 日間のデータを残し、それ以前のデータ

今月含め ヶ月間のデータを残し、それ以前のデータ

バックアップファイル格納先フォルダ

上記の所にBKYyyyymmddのフォルダを作成して、その下にファイルを保存する

ステップ4. ログ情報を削除する

削除対象期間

ステップ3の「ログ情報をバックアップする」の対象期間と同じ

年 月 日 から 年 月 日 まで

年 月 日 までのデータ

本日含め 日間のデータを残し、それ以前のデータ

今月含め ヶ月間のデータを残し、それ以前のデータ

共通設定: 実行ログ出力の指定

実行ログファイル

ファイルが存在する場合 追記する 上書きする

[バックアップツール]画面のメニューバーについて説明します

メニューバー		機能概要	
[ファイル]	[終了]	バックアップツールを終了します。	
[情報]	[テーブル件数確認]	ログ情報が格納されているデータベースのテーブルにおけるレコード数を表示します。	
[サービス]	[サービス状況確認]	接続している管理サーバ上の“階層化サービス”、“サーバサービス”の動作状況を表示します。	
	[サービス起動]	接続している管理サーバ上の“階層化サービス”、“サーバサービス”を起動します。	
	[サービス停止]	接続している管理サーバ上の“階層化サービス”、“サーバサービス”を停止します。	
[設定]	[抽出項目設定]	ログビューア形式のバックアップ、ログテーブルのバックアップ、ログテーブルのレコード削除を行うときに、入力した日付をどのデータ項目で抽出・削除を行うかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ・クライアント発生日時で処理(標準) ・サーバ格納日時で処理 	
	[出力項目設定]	ログビューア形式のバックアップを行うときに、付加情報を出力するかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ・付加情報を出力しない ・付加情報を出力する (V13.0.0～V15.1.3 互換形式) 	
	[自動バックアップ設定]	自動バックアップ設定画面を表示します。	
	[バックアップツールトレース]	[しない]	バックアップツールのトレースを採取しません。
		[概要]	バックアップツールのトレースを概要モードで採取します。
[詳細]		バックアップツールのトレースを詳細モードで採取します。	
[ヘルプ]	[オンラインヘルプ]	オンラインマニュアルを表示します。	
	[バージョン情報]	著作権情報およびバージョン情報を表示します。	

- バックアップツールで「管理情報」と「ログ情報」をバックアップするには、接続している管理サーバ上の“階層化サービス”、“サーバサービス”を停止する必要があります。
 - [サービス]メニューの[サービス停止]を選択すると、サービス停止確認の画面が表示されるので[OK]ボタンをクリックします。
 - 操作結果の状態を表す画面が表示されます。
- 初回のバックアップでは、ログ情報のバックアップやログ情報の削除期間を設定する場合のデータ抽出方法を設定します。[設定]メニューの[抽出項目設定]を選択します。
→[抽出項目設定]画面が表示されます。
ログのバックアップ、ログの削除における日時指定をログがクライアント(CT)で作成された日時で処理するのか、サーバへ格納された日時で処理するのかを選択します。
 - **[クライアント発生日時で処理(標準)]:**
日時指定をログがクライアント(CT)で作成された日時で処理する場合に選択します。
 - **[サーバ格納日時で処理]:**
日時指定をログがサーバに格納された日時で処理する場合に選択します。
- ログをクライアント(CT)での発生時間で抽出する場合は[クライアント発生日時で処理(標準)]を、サーバへの格納時間で抽出する場合には[サーバ格納日時で処理]を選択し、[設定]ボタンをクリックします。

 注意

抽出項目設定は運用後に変更しないでください

抽出項目設定は、運用開始後に変更しないでください。運用開始後に変更してバックアップを行った場合はバックアップできないログデータが発生する場合があります。抽出項目の見直しなど、運用開始後にやむを得ず設定を変更する場合は、前データをバックアップした後に変更してください。

8. [バックアップツール]画面において、以下のステップ1～4の情報を入力します。

ステップ1. 管理情報を一括でバックアップする

項目名	説明
[管理情報を一括でバックアップする]	管理情報をバックアップする場合はチェックします。
[バックアップファイル格納先フォルダ]	<p>バックアップした管理情報を格納するフォルダを選択します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 絶対パスでフォルダ名を入力する 出力する管理情報格納フォルダまでのパスを絶対パスで入力します。 [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、出力する管理情報を格納するフォルダを選択したあとに、[開く]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)まで入力できます。ただし、以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p> <p>バックアップした管理情報は指定したフォルダのサブフォルダ名MSyyyymmdd配下に格納されます。(yyyymmddはバックアップ処理を実行した日)</p> <p>なお、同じ日に同じフォルダへ2度以上バックアップを実行した場合はサブフォルダの末尾に(1)という名前が自動的に付与されます。</p> <p>2度目 MSyyyymmdd(1) 3度目 MSyyyymmdd(2) 4度目 MSyyyymmdd(3) (以降、同様に番号が付きます。)</p>

ステップ2. ログビューア形式のログ情報をバックアップする

項目名	説明
[ログビューア形式のログ情報をバックアップする]	ログ情報をログビューアで参照した場合と同じ形式でバックアップする場合にチェックします。
[バックアップ対象期間]	<p>バックアップする期間を4つの方法で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 期間指定してログデータをバックアップ <ul style="list-style-type: none"> — 年は2000～9999、月は1～12、日は1～31を入力(システム日付まで指定可) 指定日以前のログデータをバックアップ <ul style="list-style-type: none"> — 年は2000～9999、月は1～12、日は1～31を入力(システム日付まで指定可)

項目名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • 本日を含め、指定した日数以前のログデータをバックアップ <ul style="list-style-type: none"> － 0～999を入力。 － 1と指定した場合は昨日までのログデータをバックアップします。0と指定した場合は実行時点までのログデータをバックアップします。 • 今月を含め、指定した月数以前のログデータをバックアップ <ul style="list-style-type: none"> － 0～99を入力 － 1と指定した場合は昨月末までのログデータをバックアップします。0と指定した場合は実行時点までのログデータをバックアップします。
[バックアップ対象のログ種別]	バックアップするログをチェックします。
[バックアップファイル格納先フォルダ]	<p>バックアップしたログ情報を格納するフォルダを選択します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 絶対パスでフォルダ名を入力する 出力するログ格納フォルダまでのパスを絶対パスで入力します。 • [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、出力するログ情報を格納するフォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)まで入力できます。ただし、以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p> <p>バックアップしたログ情報は指定したフォルダのサブフォルダ名LVyyyyymmdd配下に格納されます。(yyyyymmddはバックアップ処理を実行した日)</p> <p>なお、同じ日に同じフォルダへ2度以上バックアップを実行した場合はサブフォルダの末尾に(1)という名前が自動的に付与されます。</p> <p>2度目 LVyyyyymmdd(1) 3度目 LVyyyyymmdd(2) 4度目 LVyyyyymmdd(3) (以降、同様に番号が付きます)</p>

ステップ3. ログ情報をバックアップする

項目名	説明
[ログ情報をバックアップする]	ログ情報をバックアップする場合にチェックします。
[バックアップ対象期間]	<p>バックアップする期間を4つの方法で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 期間指定してログデータをバックアップ <ul style="list-style-type: none"> － 年は2000～9999、月は1～12、日は1～31を入力(システム日付まで指定可) • 指定日以前のログデータをバックアップ

項目名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> — 年は2000～9999、月は1～12、日は1～31を入力(システム日付まで指定可) • 本日を含め、指定した日数以前のログデータをバックアップ <ul style="list-style-type: none"> — 0～999を入力。 — 1と指定した場合は昨日までのログデータをバックアップします。0と指定した場合は実行時点までのログデータをバックアップします。 • 今月を含め、指定した月数以前のログデータをバックアップ <ul style="list-style-type: none"> — 0～99を入力 — 1と指定した場合は昨月末までのログデータをバックアップします。0と指定した場合は実行時点までのログデータをバックアップします。
[バックアップファイル格納先フォルダ]	<p>バックアップしたログ情報を格納するフォルダを選択します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 絶対パスでフォルダ名を入力する 出力するログ格納フォルダまでのパスを絶対パスで入力します。 • [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、出力するログ情報を格納するフォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)まで入力できます。ただし、以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p> <p>バックアップしたログ情報は指定したフォルダのサブフォルダ名BKyyyyymmdd配下に格納されます。(yyyyymmddはバックアップ処理を実行した日)</p> <p>なお、同じ日に同じフォルダへ2度以上バックアップを実行した場合はサブフォルダの末尾に(1)という名前が自動的に付与されます。</p> <p>2度目 BKyyyyymmdd(1) 3度目 BKyyyyymmdd(2) 4度目 BKyyyyymmdd(3) (以降、同様に番号が付きます)</p>

ステップ4. ログ情報を削除する

項目名	説明
[ログ情報を削除する]	ログ情報を削除する場合にチェックします。
[削除対象期間]	<p>ログを削除する期間を5つの方法で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ステップ3. の[ログ情報をバックアップする]の対象期間と同じログデータを削除 • 期間指定してログデータを削除

項目名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> — 年は2000～9999、月は1～12、日は1～31を入力(システム日付まで指定可) • 指定日以前のログデータを削除 — 年は2000～9999、月は1～12、日は1～31を入力(システム日付まで指定可) • 本日を含め、指定した日数以前のログデータを削除 — 0～999を入力 — 1と指定した場合は昨日までのログデータを削除します。0と指定した場合は実行時点までのログデータを削除します。 • 今月を含め、指定した月数以前のログデータを削除 — 0～99を入力 — 1と指定した場合は昨月末までのログデータを削除します。0と指定した場合は実行時点までのログデータを削除します。

9. [バックアップツール]画面において、共通設定項目を入力します。

共通設定. 実行ログ出力の指定

項目名	説明
[実行ログファイル]	<p>バックアップツールの実行結果を格納するファイルを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 絶対パスでファイル名を入力する 出力する実行結果ファイルまでのパスを絶対パスで入力します。 • [参照]ボタンから選択する [ファイルを開く]画面が表示されるので、出力する実行ファイルを格納するフォルダ選択し、ファイル名を入力したあとに、[開く]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で255文字(全角で127文字)まで入力できます。ただし、以下の記号はファイル名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>
[ファイルが存在する場合]	<p>実行ログファイルが[実行ログファイル]で指定した場所に存在する場合の処理を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 追記する 実行ログファイルが[実行ログファイル]で指定した場所に存在した場合は、前回の実行ログの後に追記します。 • 上書きする 実行ログファイルが[実行ログファイル]で指定した場所に存在した場合は、前回の実行ログを上書きします。

10. すべての条件を入力したあとに、[実行]ボタンをクリックします。

→実行を確認する画面が表示されるので、実行する場合は[OK]ボタンをクリックします。

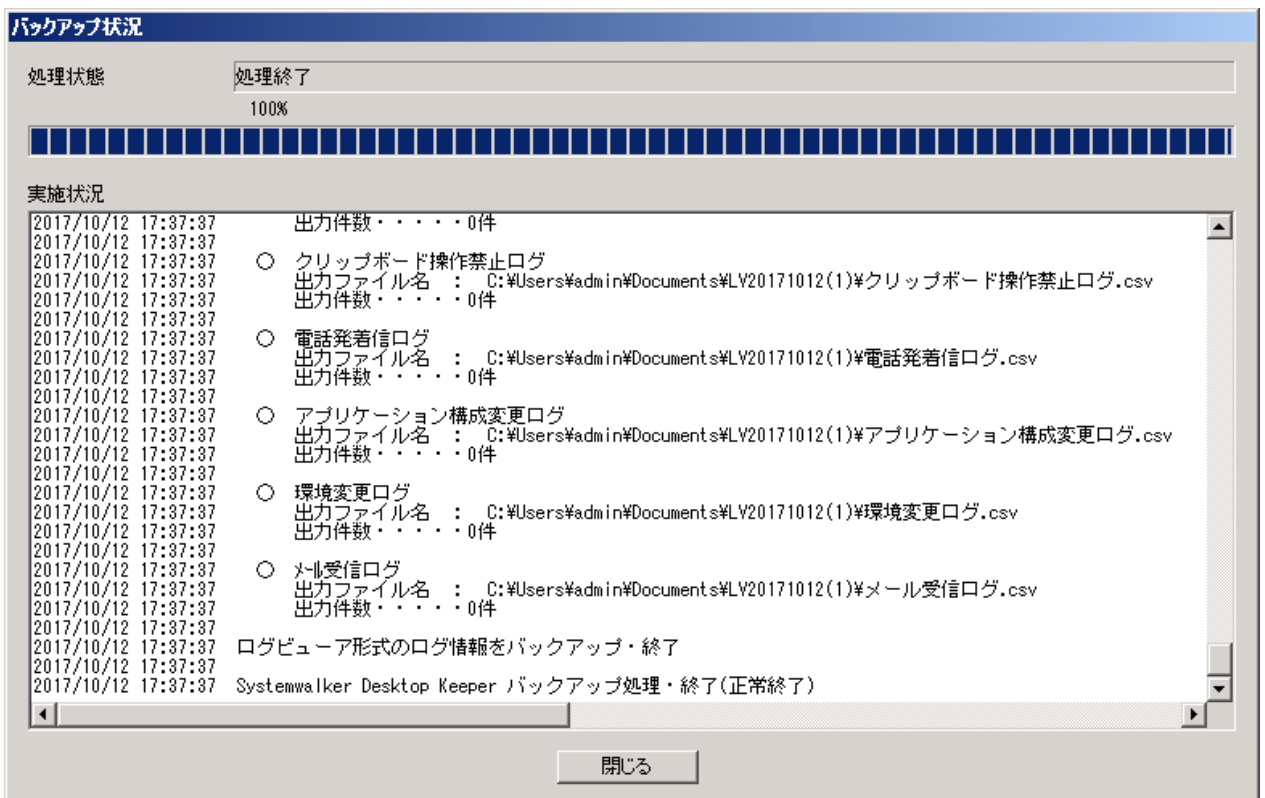
注意

バックアップするログの期間と削除する期間が異なっていた場合

バックアップツールで指定したバックアップするログの期間と削除する期間が違った場合、以下のメッセージが表示されます。処理を続行すると、バックアップしていない期間を削除してしまう可能性があるため、設定が正しいか十分に確認してください。

[BKCI-SEL001] ログ情報のバックアップで指定した対象期間と、ログ情報の削除で指定した対象期間が異なります。
対象期間を確認してください。
処理を続行しますか？

11. [バックアップ状況]画面が表示され、処理が開始されます。
12. バックアップ処理が正常終了すると、完了画面が表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。
13. 実施状況に表示されている情報を確認し、[閉じる]ボタンをクリックします。



14. 停止している管理サーバの“階層化サービス”、“サーバサービス”を起動します。サービスの起動は[サービス]メニューの[サービス起動]を選択すると、サービス起動確認の画面が表示されるので[OK]ボタンをクリックします。
15. 操作結果の状態を表す画面が表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。
16. Android端末またはiOS端末を管理している場合は、中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)を使用して中継サーバのサービスを起動します。コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“SDSVService.bat(中継サーバのサービス起動・停止)”を参照してください。

サービス状況を確認する

バックアップツールは接続している管理サーバのSystemwalker Desktop Keeperサービスの終了が必要であるため、サービスの状況を確認する必要があります。バックアップツールで、管理サーバのSystemwalker Desktop Keeperサービスの状況を確認する方法について説明します。

1. [サービス]メニューの[サービス状況確認]を選択します。
[サービス状況確認]画面が表示されます。
2. 確認後、[OK]ボタンをクリックします。

ログ情報のテーブルのレコード件数を確認する

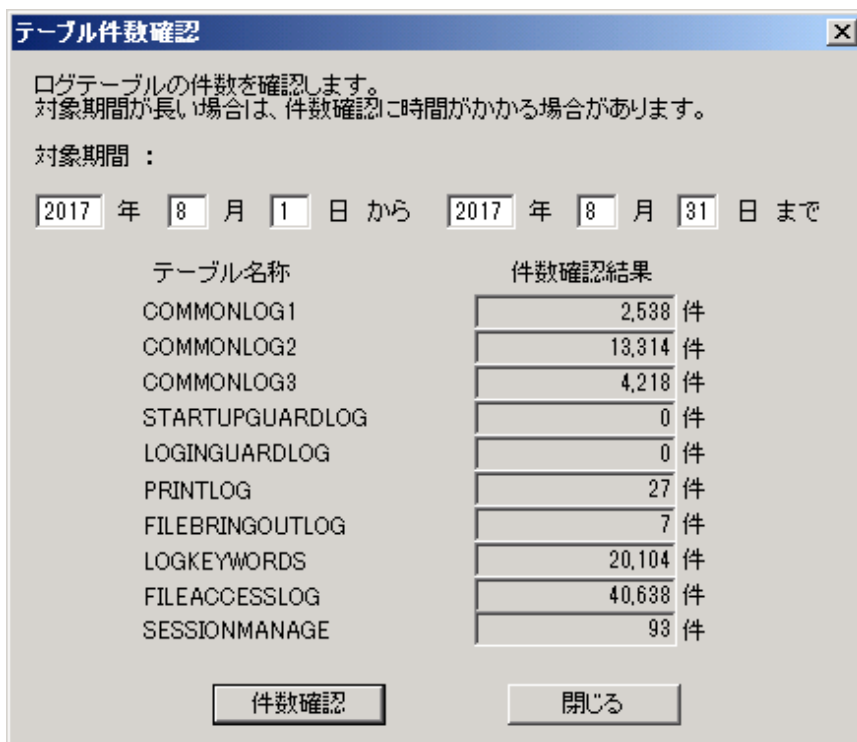
バックアップツールでのログ情報のバックアップ対象テーブルのレコード件数を表示する方法について説明します。

1. [情報]メニューの[テーブル件数確認]を選択します。
→[テーブル件数確認]画面が表示されます。テーブルの内容については、“[3.1.1.2 ユーザー資産](#)”の“ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ以外)”を参照してください。
2. 対象期間を入力します。
 - 年は2000～9999の範囲で入力します。
 - 月は1～12の範囲で入力します。
 - 日は1～31の範囲で入力します。

ポイント

レコード件数の集計が[クライアント発生日時]で処理されるか[サーバ格納日時]で処理されるかは、[設定]メニューの[抽出項目設定]の設定に従います。

3. [件数確認]ボタンをクリックします。
→件数がテーブルごとに表示されます。



テーブル名称	件数確認結果
COMMONLOG1	2,538 件
COMMONLOG2	13,314 件
COMMONLOG3	4,218 件
STARTUPGUARDLOG	0 件
LOGINGUARDLOG	0 件
PRINTLOG	27 件
FILEBRINGOUTLOG	7 件
LOGKEYWORDS	20,104 件
FILEACCESSLOG	40,638 件
SESSIONMANAGE	93 件

4. 確認後、[閉じる]ボタンをクリックします。

バックアップツールを終了する

1. バックアップツールを終了させるには[ファイル]メニューの[終了]を選択します。
2. 終了画面が表示されます。
→バックアップツール画面で指定した条件を保存するかどうかを選択します。条件を保存して終了する場合は[はい]を、保存せず終了する場合は[いいえ]をクリックします。終了をキャンセルする場合は[キャンセル]をクリックします。
なお、メニューから指定した設定値([抽出項目設定]、[デバッグトレースの設定])は各設定時に保存されます。

ユーザー資産を退避する

“3.1.1.2 ユーザー資産”を参照し、退避したいユーザー資産を退避してください。

3.1.2.2 バックアップ・削除を自動化する



自動バックアップ・削除にかかる時間について

自動バックアップ・削除は、管理情報のバックアップ、ログビューア形式のログ情報のバックアップ、ログ情報のバックアップ、ログ情報の削除を行います。

そのため自動バックアップ・削除には、時間がかかる場合があります。

自動バックアップの設定について

自動バックアップの設定を行うと、データベースで管理されているSystemwalker Desktop Keeperの操作ログや禁止ログなどの「ログ情報」として記述されているすべてのテーブルは削除されます。

ログ情報を削除せずにバックアップする場合は、以下のコマンドおよびバッチファイルをWindowsのタスクに登録して実行してください。

- DTKMSTB.exe
- DTKLGTB.exe
- DTKLGAT.bat

コマンドおよびバッチファイルの詳細についてはリファレンスマニュアルを参照してください。

バックアップツール(GUI)からデータのバックアップ・削除を自動化する設定方法について説明します。

本設定は、運用データベース作成時にバックアップ・削除設定を行わなかった場合に実施してください。

自動バックアップ・削除は、Windowsのタスクスケジューラに登録されます。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。
2. 管理サーバ/統合管理サーバをインストールしたマシンの[スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[バックアップツール]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[バックアップツール]を選択します。
→[Systemwalker Desktop Keeper バックアップツール]初期画面が表示されます。

3. サーバ設定ツールで登録したユーザーID(アクセス権が“バックアップ・リストア”のユーザーID)とパスワードを入力して、[OK]ボタンをクリックします。(初期管理者のユーザーID、パスワードを使用してもログインできます)

→[バックアップツール]画面が表示されます。

バックアップを実施する条件を設定してください。ステップ1～ステップ4の順に実行します。

ステップ1. 管理情報を一括でバックアップする

バックアップファイル格納先フォルダ

上記の所にMSYyyyymmddのフォルダを作成して、その下にファイルを保存する

ステップ2. ログビューア形式のログ情報をバックアップする

バックアップ対象期間

年 月 日 から 年 月 日 まで

年 月 日 までのデータ

本日含め 日間のデータを残し、それ以前のデータ

今月含め ヶ月間のデータを残し、それ以前のデータ

バックアップ対象のログ種別

<input checked="" type="checkbox"/> アプリケーション起動ログ	<input checked="" type="checkbox"/> 印刷禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> アプリケーション終了ログ	<input checked="" type="checkbox"/> ログオン禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ウィンドウタイトル取得ログ	<input checked="" type="checkbox"/> アプリケーション起動禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ウィンドウタイトル取得ログ(URL付き)	<input checked="" type="checkbox"/> PrintScreenキー禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> メール送信ログ	<input checked="" type="checkbox"/> メール添付禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> デバイス構成変更ログ	<input checked="" type="checkbox"/> 連携アプリケーションログ
<input checked="" type="checkbox"/> 印刷操作ログ	<input checked="" type="checkbox"/> メール送信中止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ファイル持出しログ	<input checked="" type="checkbox"/> FTP操作ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ファイル操作ログ	<input checked="" type="checkbox"/> FTP操作禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> コマンドプロンプトログ	<input checked="" type="checkbox"/> Web操作ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ログオンログ	<input checked="" type="checkbox"/> Web操作禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> ログオフログ	<input checked="" type="checkbox"/> クラウドホスト操作ログ
<input checked="" type="checkbox"/> 電話発信情報ログ	<input checked="" type="checkbox"/> クラウドホスト操作禁止ログ
<input checked="" type="checkbox"/> アプリケーション構成変更ログ	<input checked="" type="checkbox"/> 環境変更ログ
<input checked="" type="checkbox"/> メール受信ログ	

バックアップファイル格納先フォルダ

上記の所にLYyyyymmddのフォルダを作成して、その下にファイルを保存する

ステップ3. ログ情報をバックアップする

バックアップ対象期間

年 月 日 から 年 月 日 まで

年 月 日 までのデータ

本日含め 日間のデータを残し、それ以前のデータ

今月含め ヶ月間のデータを残し、それ以前のデータ

バックアップファイル格納先フォルダ

上記の所にBKYyyyymmddのフォルダを作成して、その下にファイルを保存する

ステップ4. ログ情報を削除する

削除対象期間

ステップ3の「ログ情報をバックアップする」の対象期間と同じ

年 月 日 から 年 月 日 まで

年 月 日 までのデータ

本日含め 日間のデータを残し、それ以前のデータ

今月含め ヶ月間のデータを残し、それ以前のデータ

共通設定: 実行ログ出力の指定

実行ログファイル

ファイルが存在する場合 追記する 上書きする

4. [設定]メニューから[自動バックアップ設定]を選択します。
 →[自動バックアップ設定]画面が表示されます。

対象	回避画面
自動バックアップ・削除	<p>自動バックアップ・削除を行うかを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行う: 自動バックアップ・削除を行います。 ・ 行わない: 自動バックアップ・削除を行いません。 <p>初期値: 行う</p>
自動バックアップ・削除設定	<p>自動バックアップ・削除の設定を行います。</p>
タスク名	<p>タスクスケジュールに登録されるタスク名です。</p> <p>固定値(DTK_Auto_Backup_Command)です。</p>
バックアップ先フォルダ	<p>自動バックアップでデータを保存するフォルダを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 絶対パスでフォルダ名を入力する 出力する管理情報格納フォルダの絶対パスを入力します。 ・ [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、出力する管理情報を格納するフォルダを選択したあとに、[開く]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)まで入力できます。ただし、以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p> <p>バックアップした管理情報は指定したフォルダのサブフォルダ名MSyyyyymmdd 配下に格納されます。(yyyyymmddはバックアップ処理を実行した日)</p> <p>バックアップしたログ情報は指定したフォルダのサブフォルダ名BKyyyyymmdd 配下に格納されます。(yyyyymmddはバックアップ対象の終了日)</p>

対象	退避画面
	<p>バックアップしたログビューア形式のログ情報は指定したフォルダのサブフォルダ名 VLyymmdd 配下に格納されます。(yyymmddはバックアップ対象の終了日)</p> <p>管理情報、ログ情報、ログビューア形式のログ情報とも、同じフォルダへ2度以上バックアップを実行した場合は、サブフォルダ名の末尾に番号が付加されます。</p> <p>【管理情報の場合の例】</p> <p>2度目 MSyyymmdd(1)</p> <p>3度目 MSyyymmdd(2)</p> <p>4度目 MSyyymmdd(3)</p> <p>(以降、同様に番号が付加されます。)</p> <p>なお、ログビューア形式のログ情報の場合、サブフォルダの中に設定変更ログも格納されます。</p> <p>ファイル名は、Configuration change log.csvです。</p> <p>初期値:インストール時に指定したフォルダ</p>
スケジュールの種類	<p>自動バックアップ・削除を行う間隔の設定を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日:毎日行います ・ 週:週1回行います ・ 月:月1回行います <p>初期値:日</p>
実行曜日	<p>[スケジュールの種類]で[週]を選択した場合に実行する曜日を選択します。</p> <p>月～日を選択できます。</p> <p>初期値:月</p>
実行日	<p>[スケジュールの種類]で[月]を選択した場合に実行する日を入力します。</p> <p>1～31を入力できます。</p> <p>初期値:1</p>
実行開始時刻	<p>自動バックアップ・削除を実行する時間を設定します。</p> <p>0時0分～23時59分で指定できます。</p> <p>初期値:0時0分</p>
範囲指定	<p>自動バックアップ・削除の範囲を指定します。</p>
<p>前日1日分のバックアップを行い、保存期日以前のデータを削除します。</p>	<p>操作ログを保存する期間を1～365で指定します。</p> <p>指定した期間外の操作ログのデータは削除されます。</p> <p>例)30日とした場合は31日以前の操作ログのデータを削除</p> <p>初期値:30</p> <p>本設定は、[スケジュールの種類]で[日]を選択した場合だけ指定可能です。</p>
<p>保存期日分のデータをデータベースに残し、それ以前のデータをバックアップ・削除します。</p>	<p>操作ログを保存する期間を設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日:1～365で指定できます。手入力も可能です。 ・ 週:1～52で指定できます。 ・ 月:1～12で指定できます。 <p>[スケジュールの種類]で[日]を選択した場合は、[日]だけが選択できます。</p> <p>[スケジュールの種類]で[週]を選択した場合は、[日]と[週]が選択できます。</p>

対象	退避画面
	<p>[スケジュールの種類]で[月]を選択した場合は、[日]と[月]が選択できます。</p> <p>初期値:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日:30 ・ 週:4 ・ 月:1 <p>指定した期間外の操作ログのデータは削除されます。</p> <p>例)30日とした場合は31日以前の操作ログのデータを削除</p>

注意

運用中に範囲指定を変更する場合は、事前にバックアップツールを利用してバックアップを行ってください。以下のように一部期間のデータがバックアップされない場合があります。

例:「保存期日分のデータをデータベースに残し、それ以前のデータをバックアップ・削除します。」で保存期日を2日以上に設定した運用中に「前日1日分のバックアップを行い、保存期日以前のデータを削除します。」に設定変更した場合。例えば、設定変更前の保存期日に10日が設定されていた場合、前々日以前の10日分のバックアップが採取されません。

5. [設定]ボタンをクリックします。

注意

[実行日]で29日以降を指定すると、存在しない月には実行されない旨のメッセージが表示されます。実行月によって、日が存在しない場合、自動バックアップ・削除は動作しません。毎月確実に実行させるためには、28日以前を指定してください。

注意

スケジュールの設定をOSのタスク機能で直接編集した場合について

自動バックアップ設定を行うと、OSのタスク機能に「DTK_Auto_Backup_Command」というタスク名で作成されます。このタスクを直接変更した場合は、[自動バックアップ設定]画面には反映されません。

また、タスクを直接変更した後に、[自動バックアップ設定]画面で変更を行うと[自動バックアップ設定]画面で設定した内容に変更されます。

保存期間とログ情報の対象について

自動バックアップ機能での保存期間はログ情報がクライアント(CT)で採取された日付ではなく、ログ情報が管理サーバ/統合管理サーバに格納された日付から計算されます。

バックアップ時に考慮すべきことについて

【付帯データの扱いについて】

付帯データ(画面キャプチャデータ、原本保管データ)は、バックアップツール/バックアップコマンドによるバックアップ対象ではありません。付帯データの格納先フォルダの構成は、以下のとおりです。運用に応じて個別にバックアップしてください。付帯データの格納先については、“2.3.4.11 保存先フォルダを設定する”を参照してください。なお、ログの削除コマンド(DTKDELR)を実行しても、付帯データは削除されません。

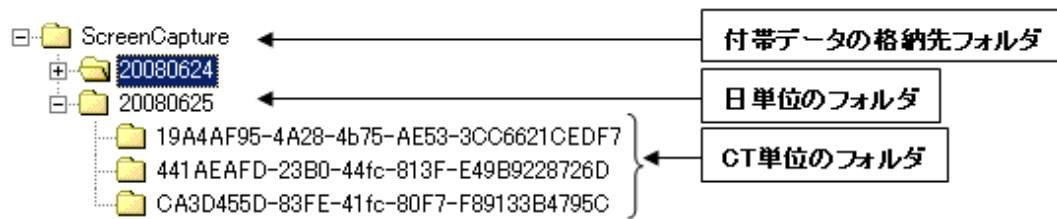
[構成]

付帯データの格納先フォルダ

+-日単位のフォルダ

+-CT単位のフォルダ

[例]



【メール内容データの扱いについて】

メール内容データ(メール本文、添付ファイル)は、バックアップコマンドのバックアップ対象ではありません。メール内容データの格納先フォルダの構成は、以下のとおりです。運用に応じて個別にバックアップしてください。メール内容データの格納先については、“2.3.4.11 保存先フォルダを設定する”を参照してください。

なお、ログの削除コマンド(DTKDELR)を実行しても、メール内容データは削除されません。

削除する場合は、DTKMLDL.BAT(メール内容削除)コマンドを使用してください。使用方法の詳細は、“リファレンスマニュアル”の“DTKMLDL.BAT(メール内容削除)”を参照してください。

[構成]

メール内容データの格納先フォルダ

+日単位のフォルダ

+CT単位のフォルダ

[例]



ユーザー資産を退避する

“3.1.1.2 ユーザー資産”を参照し、退避したいユーザー資産を退避してください。

3.1.2.3 バックアップコマンドを利用する

Systemwalker Desktop Keeperが提供するバックアップコマンドによって、データベースに蓄積されているデータを操作する方法について説明します。

バックアップコマンドには、スケジューラの機能は含んでいません。

ポイント

タスクにコマンドを登録しておく便利です

OSに標準で提供されている「タスク」の機能を使用するか、ARCserveなどのスケジューラ機能ソフトウェアを使用することによって、バックアップ作業をスケジュールできます。なお、Windows Server 2008以降の場合、タスクの実行ユーザーを管理者権限のあるユーザーにする必要があるため、注意してください。

注意

バックアップコマンド使用時に考慮すべきことについて

【本コマンドの使用可能レベルについて】

V15.1.0以降で使用できるコマンドです。異なるバージョンで構築された環境で使用した場合の動作は保証していません。

【コマンド実行時のカレントディレクトリについて】

バックアップコマンドを手動で起動する場合、コマンドプロンプトのカレントディレクトリを、バックアップコマンド格納フォルダに移動してください。

[格納フォルダ]

データベース関連ファイルのインストールフォルダ¥BackupCommand

(V15.3.0の管理サーバを新規にインストールした場合、データベース関連ファイルのインストールフォルダは、管理サーバのインストールフォルダ¥DBです。)

例) C:¥DTKDB¥BackupCommand

例) C:¥Program Files (x86)¥Fujitsu¥Systemwalker Desktop Keeper¥DB¥BackupCommand

【出力先のディスク容量について】

退避ファイルの出力先として指定するディスクは、容量に十分余裕のあるディスクを使用してください。多量のデータを処理することでディスク容量に不足が発生する場合は、退避対象として指定する日付の範囲を狭めるなどの対応を行ってください。

【データベース関連ファイルのインストール先のディスク容量について】

データベース関連ファイルのインストール先の容量に十分余裕があるか確認してください。多量のログデータをバックアップする場合、データベース関連ファイルのインストール先ドライブに十分な空き領域が必要です。必要なディスク容量については、“解説書”の“動作環境”を参照してください。

【Windows Server 2008の場合の実行権限について】

Windows Server 2008の場合、バックアップコマンドを実行する場合は管理者権限が必要です。Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオン後、実行してください。

【コマンドプロンプトのコマンド拡張機能を有効にしてください】

バックアップコマンドを実行するためには、コマンドプロンプトのコマンド拡張機能が有効になっている必要があります。

なお、コマンド拡張機能は、初期設定では有効になっています。コマンドプロンプトより「echo %CMDEXTEVERSION%」を実行し、その結果が2以上の場合は有効です。

【コマンドの対応日付について】

バックアップコマンドが対応している日付は、2001年1月1日より、2034年12月31日までです。これ以外の期間で使用した場合の動作は保証しません。

【データの変換について】

バックアップコマンドでは、ログ内のデータを変換してCSVファイルに出力する場合があります。変換内容は以下の2点です。

- TAB、CR、LF → 半角空白置換
- "(ダブルクォーテーション) → ""(二重にする)

【付帯データの扱いについて】

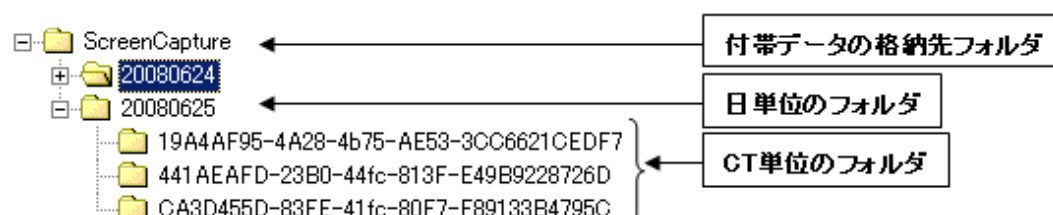
付帯データ(画面キャプチャデータ、原本保管データ)は、バックアップツール/バックアップコマンドによるバックアップ対象ではありません。付帯データの格納先フォルダの構成は、以下のとおりです。運用に応じて個別にバックアップしてください。付帯データの格納先については、“2.3.4.11 保存先フォルダを設定する”を参照してください。なお、ログの削除コマンド(DTKDELR)を実行しても、付帯データは削除されません。

[構成]

付帯データの格納先フォルダ

- +日単位のフォルダ
- +CT単位のフォルダ

[例]



【メール内容データの扱いについて】

メール内容データ(メール本文、添付ファイル)は、バックアップコマンドのバックアップ対象ではありません。メール内容データの格納先フォルダの構成は、以下のとおりです。運用に応じて個別にバックアップしてください。メール内容データの格納先については、“[2.3.4.11 保存先フォルダを設定する](#)”を参照してください。

なお、ログの削除コマンド(DTKDELR)を実行しても、メール内容データは削除されません。

削除する場合は、DTKMLDL.BAT(メール内容削除)コマンドを使用してください。使用方法の詳細は、“リファレンスマニュアル”の“DTKMLDL.BAT(メール内容削除)”を参照してください。

[構成]

メール内容データの格納先フォルダ
 +-日単位のフォルダ
 +-CT単位のフォルダ

[例]



バックアップコマンドの種類

Systemwalker Desktop Keeperが提供するバックアップコマンドは、13種類あります。各コマンドによって、データベースに蓄積されているデータに対して行える操作が異なります。以下にコマンドと機能について示します。バックアップコマンドは以下のフォルダに格納されています。

バックアップコマンド格納先:

データベース関連ファイルのインストールフォルダ¥BackupCommand

(V15.3.0の管理サーバを新規にインストールした場合、データベース関連ファイルのインストールフォルダは管理サーバのインストールフォルダ¥DBです。)

例) C:¥DTKDB¥BackupCommand

例) C:¥Program Files (x86)¥Fujitsu¥Systemwalker Desktop Keeper¥DB¥BackupCommand

No.	コマンド名	機能
1	DTKMSTB.EXE	”3.1.1.2 ユーザー資産”の”各管理情報”に記述されているすべてのテーブル内のデータを、テーブルごとにCSVファイルとして退避できます。 iOS端末を管理している場合は、iOS管理データベースも退避します。
2	DTKLGTB.EXE	”3.1.1.2 ユーザー資産”の”ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ以外)”に記述されているすべてのテーブル内のデータを、テーブルごとにCSVファイルとして退避できます。
3	DTKLG1T.EXE	データベースに蓄積されているログの情報を、指定した1種別だけ、または全ログ種別の全データを一括して、ログビューア形式でCSVファイルに出力し、参照できます。
4	DTKLGAT.BAT	データベースに蓄積されているログの情報を一括してログビューア形式でCSVファイルに出力し、参照できます。
5	DTKDELR.EXE	”3.1.1.2 ユーザー資産”の”ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ以外)”に記述されているすべてのテーブル内のデータ、および”ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ)”に記載されているデータを削除できます。
6	DTKDKDL.BAT	”3.1.1.2 ユーザー資産”の”ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ以外)”に記述されているすべてのテーブル内のデータを、テーブルごとにCSVファイルとして退避して、退避したテーブル内のデータをデータベースから削除できます。

No.	コマンド名	機能
7	DTKCVDL.BAT	”3.1.1.2 ユーザー資産”の”ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ以外)”に記述されているすべてのテーブル内のデータを、テーブルごとにCSVファイルとして退避、およびデータベースに蓄積されているログの情報を一括してCSVファイルに出力できます。そして、退避したテーブル内のデータをデータベースから削除できます。
8	DTKSTCV.EXE	採取された設定変更ログの情報を、期間を指定してCSVファイルに出力できます。
9	DTKDELST.EXE	採取された設定変更ログの情報を、期間を指定してその期間中に記録されたログを削除できます。
10	DTKMLDL.BAT	”3.1.1.2 ユーザー資産”の”メール内容データ”を、管理サーバ/統合管理サーバから削除できます。
11	DTKBFDM.EXE	他のバックアップコマンドの内部で使用されているコマンドです。 過去の日付の計算を行います。
12	DTKELSET.BAT	他のバックアップコマンドの内部で使用されているコマンドです。 [ERRORLEVEL]値の再設定を行います。
13	DTKNUMCK.BAT	他のバックアップコマンドの内部で使用されているコマンドです。 バックアップコマンドのパラメーターとして入力された情報が数値かどうかのチェックを行います。
14	DTKSERVICE.BAT	PostgreSQLサービスおよびDesktop Keeperサービスの起動状況の表示およびこれらのサービスの起動と停止を行います。
15	DTKTBLTRUNCATE.BAT	”3.1.1.2 ユーザー資産”の”ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ以外)”に記述されているすべてのテーブル内のデータを、データベースから削除できます。テーブルの初期化を行い、で該当テーブルの全ログ削除および拡張領域の解放を行います。DTKDELR.EXEと違い、削除期間は指定できません。
16	DTKTBLUNLOAD.BAT	”3.1.1.2 ユーザー資産”の”ログ情報(コマンドプロンプト操作ログ以外)”に記述されているすべてのテーブル内のデータを、テーブルごとにCSVファイルとして退避できます。該当するテーブルの全データを出力します。DTKLGTB.EXEと違い、退避期間は指定できません。
17	DailySch.bat	サンプルコマンドです。91日以前のログを退避・削除します。詳細は、”事例-I: 91日以前のログを退避・削除する場合(ログ保存期間:3カ月)”を参照してください。
18	DailySch2.bat	サンプルコマンドです。91日以前のログを退避・削除し、直近1週間のログをバックアップします。詳細は、”事例-II: 91日以前のログを削除し、直近1週間のログをバックアップする場合(ログ保存期間:3カ月)”を参照してください。
19	DTKTask_DailySchBackup.bat	サンプルコマンドです。DailySch.batおよびDailySch2.batをタスクから実行する場合の、タスク登録用のコマンドです。詳細は”事例-I: 91日以前のログを退避・削除する場合(ログ保存期間:3カ月)”または”事例-II: 91日以前のログを削除し、直近1週間のログをバックアップする場合(ログ保存期間:3カ月)”を参照してください。

DailySch.bat、DailySch2.batおよびDTKTask_DailySchBackup.batを除く、各コマンドの詳細については、“リファレンスマニュアル”の“コマンドリファレンス”を参照してください。DailySch.bat、DailySch2.batおよびDTKTask_DailySchBackup.batの詳細は“事例-I: 91日以前のログを退避・削除する場合(ログ保存期間:3カ月)”または“事例-II: 91日以前のログを削除し、直近1週間のログをバックアップする場合(ログ保存期間:3カ月)”を参照してください。

バックアップコマンドを編集する

以下のバックアップコマンドについては、使用する前に編集する必要があります。使用する環境に応じて、編集を行ってください。なお、実行結果はイベントログのアプリケーションログに出力されます。

対象となるバックアップコマンド

— DTKLGAT.BAT

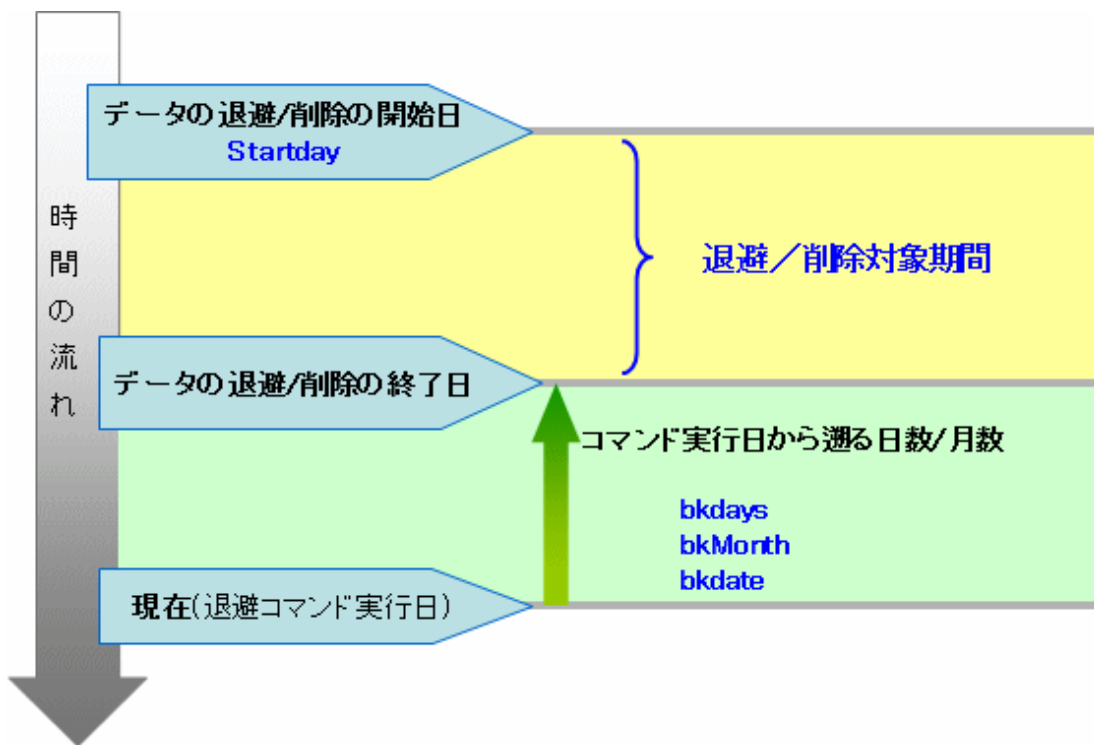
- DTKBKDL.BAT
- DTKCVDL.BAT
- DTKTBLTRUNCATE.BAT
- DTKTBLUNLOAD.BAT

編集する際のポイント

- 編集する箇所は「動作パラメーター指定ブロック(ユーザー編集)」のブロックです。
- 各パラメーターには設定例を記載しています。設定例の記述形式に合わせて必要に応じて編集します。
- ユーザーID/パスワードは、サーバ設定ツールで登録したログオンID(アクセス権が“バックアップ・リストア”のログオンID)を入力します。
- コマンドによっては終了処理ブロックに「pause」があります。コマンド実行の終了時に一時停止させない場合、すべての「pause」を「rem pause」に編集してください。
- bkdrive:ドライブ名の最後に「:」が必要です。
- bkdir:フォルダ名の最初に「¥」が必要です。

退避/削除対象期間

「DTKCVDL.BAT」を使用する場合に、退避/削除対象となる期間を指定する必要があります。対象となる退避/削除対象期間について、以下の図に示します。青英文字は、動作パラメーター指定ブロック内に記載されているパラメーターを指します。



事前準備

復元を前提としたデータ退避を行う場合には、以下の設定情報を控えてください。(画面のビットマップ採取やメモを取るなど)

対象	退避画面
管理コンソール	[端末動作設定]
サーバ設定ツール	[システム設定]
	[ActiveDirectory連携設定] 注)Active Directory連携機能利用時
	[管理者通知設定]

対象	退避画面
	[管理サーバ設定]
	[フォルダ/CT自己版数アップ設定]

[端末動作設定]の表示方法は以下のとおりです。

1. [管理コンソール]を起動します。
2. [動作設定]メニューから[端末動作設定]を選択します。
→[端末動作設定]画面が表示されます。

サーバ設定ツールの各画面の表示方法は、[“2.3.4 管理サーバ/統合管理サーバの環境を設定する”](#)を参照してください。



注意

控えた情報は大切に保管してください

上記の設定情報はバックアップツールでは退避できません。復元後、退避時と同じ設定にする場合は、復元後に端末動作設定の再設定を行う必要があるため、バックアップデータと共に控えた情報を大切に保管してください。

バックアップを実行する

バックアップコマンドの使用方法については、“リファレンスマニュアル”の“コマンドリファレンス”を参照してください。



注意

実行時には必ずサービスを停止してください

退避・復元を行う前には、サーバサービス、階層化サービスおよび中継サーバを停止する必要があります。停止しなかった場合、退避・復元時にデータの不整合が発生する可能性があります。バッチファイルを作成してバックアップコマンドを実行する場合は、後述する“スケジュール登録するバッチファイルの作成例”のように、必ずサーバサービスおよび階層化サービスの停止処理を記述してください。SWServerServiceを起動した直後、あるいは、日付が変更になったとき(午前0時)にデータベースの空き容量の確認が動作しますが、確認動作が終了するまでの約15分間、サービスが停止しないことがあります。

そのため上記の時間帯は、バッチファイルを実行しないようにスケジュール登録してください。

手動で実施する場合の停止手順は以下のとおりです。

1. PCに、ローカルコンピュータのAdministratorsグループに所属するユーザーまたは、ドメインのDomain Adminsグループに所属するユーザーでログオンします。
他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. Windowsのサービス画面を表示し、以下の各サービスを選択して、[操作]メニューから[停止]を選択します。、停止するまでに30秒から1分程度かかる場合があります。SWServerServiceを起動した直後、または、日付が変更になったとき(午前0時)にデータベースの空き容量の確認が動作しますが、確認動作が終了するまでの約15分間、サービスが停止しないことがあります。しばらくしてから停止を確認してください。
 - SWLevelControlService
 - SWServerService

また、Android端末またはiOS端末を管理している場合は、中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)を使用して中継サーバのサービスを停止します。コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“SDSVService.bat(中継サーバのサービス起動・停止)”を参照してください。

以下に、バックアップコマンドを使用して、ログ運用の主な事例としてスケジュールを登録してバックアップコマンドを実行する例を2パターン説明します。

事例1: 91日以前のログを退避・削除する場合(ログ保存期間: 3カ月)

運用条件

- 運用として、データの保存期間を90日とし、それ以前のデータはデータベース上に残さず、ファイルヘッダデータをバックアップします。

- 毎日、91日以前のデータを、指定したドライブにバックアップ日の日付が付いたディレクトリ名を作成し、その下にデータをバックアップした出力ファイルを置きます。
- バックアップ対象は、以下のとおりです。
 - 管理情報に記述されているすべてのテーブル(DTKMSTBを利用)
 - ログ情報(データベース上のログデータおよびコマンドプロンプト操作ログ)に記述されているすべてのテーブル、およびデータベースに蓄積されているログの情報(DTKCVDLを利用)
- 退避可能な情報の詳細については、“3.1.1.2 ユーザー資産”を参照してください。
- バックアップしたデータ部分はデータベースより削除します。(DTKCVDLにより実施)
- バックアップの実行は、OS標準実装の「タスク」機能を使用し自動起動します。ただし、データベースのレコード削除も行うため、Systemwalker Desktop Keeperのサーバ側の処理との間でデータベースアクセスの競合を発生させないように、Systemwalker Desktop Keeperのサーバ側サービスを停止してから行います。
- サーバ側サービスを停止させることから、利用者の少ない夜間の2時より起動することとします。
- バックアップおよびデータベースのレコード削除にかかる時間は事前に検証を行い、合わせて30分程度で終了する想定としています。

運用設定

上記の“運用条件”で説明した運用を行うために、提供するバックアップコマンドの中から、DTKMSTB、DTKCVDL、DailySch、DTKTask_DailySchBackup.batを使用します。

なお、本運用設定により、バックアップ先のドライブおよびフォルダの構成は、以下のようになります。(XXXXXXXXは終了日になります)

- 管理情報に記述されているすべてのテーブル
→D:\¥BACKUP¥MSXXXXXXXX¥ 配下
- ログ情報(データベース上のログデータおよびコマンドプロンプト操作ログ)に記述されているすべてのテーブル
→D:\¥BACKUP¥BKXXXXXXXX¥ 配下
- データベースに蓄積されているログの情報
→D:\¥BACKUP¥LVXXXXXXXX¥ 配下

退避可能な情報の詳細については、“3.1.1.2 ユーザー資産”を参照してください。

運用設定の手順は、以下のとおりです。実行結果ログは、DailySch.batの実行結果出力ログ(%EXECDAY%.log)に出力されます。

1. 「DailySch.bat」を編集します。編集するポイントは以下です。
 - 編集する箇所は「設定(ユーザー編集)」のブロックです。
 - 各パラメーターには設定例を記載しています。設定例の記述形式に合わせて必要に応じて編集します。
 - ユーザーID/パスワードは、サーバ設定ツールで登録したログオンID(アクセス権が“バックアップ・リストア”のログオンID)を入力します。
2. 「DTKCVDL.bat」の内容を“バックアップコマンドを編集する”に従って編集した上で、以下のように編集します。
 - 動作パラメーターの「bkdays」は「90」と指定します。
 - 動作パラメーターの「bkdrive」は「DailySch.bat」の「BKDRIVE」と一致させます。
 - 動作パラメーターの「bkdir」は「DailySch.bat」の「BKFOLDERNAME」と一致させます。
 - コマンド実行の終了時に一時停止させない場合、終了処理ブロックのすべての「pause」を「rem pause」に変更します。
3. 「DailySch.bat」の「BKDRIVE」に設定したドライブに、「BKFOLDERNAME」に設定したフォルダを作成します。運用例では、D:\¥BACKUPです。
4. 「DTKTask_DailySchBackup.bat」を編集します。
「設定」ブロックの「BACKUPCOMMANDFOLDER」には「DailySch.bat」が格納されているフォルダを設定します。
5. 「タスク」に「DTKTask_DailySchBackup.bat」のコマンドを登録します。
 - a. [管理ツール]-[タスク スケジューラ]と開き、[タスクの作成]を選択します。

- b. 実行するプログラムの選択画面にて、[参照]ボタンをクリックして「DTKTask_DailySchBackup.bat」を登録します。
- c. 名前を付け、日単位の実行として、毎日2:00に実行として登録します。
- d. 実行時のユーザーIDとパスワードを登録するので、Administrator権限のあるユーザーで登録します。

事例-II:91日以前のログを削除し、直近1週間のログをバックアップする場合(ログ保存期間:3カ月)

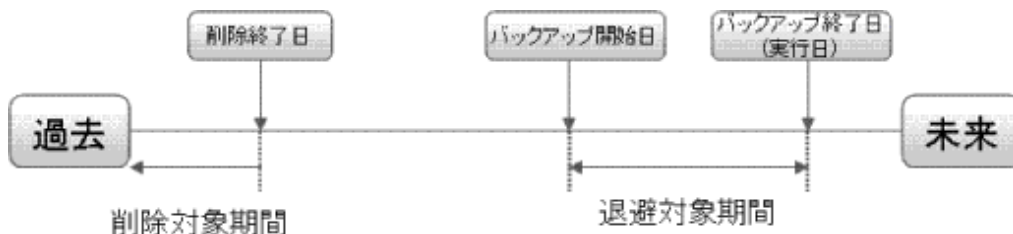
運用条件

- 運用として、データの保存期間を90日とし、それ以前のデータはデータベース上に残さず、ファイルヘデータをバックアップします。
- 毎日、直近1週間のデータを、指定したドライブにバックアップ開始日の日付が付いたディレクトリ名を作成し、その下にデータをバックアップした出力ファイルを置きます。
- バックアップ対象は、以下のとおりです。
 - 管理情報に記述されているすべてのテーブル(DTKMSTBを利用)
 - ログ情報(データベース上のログデータおよびコマンドプロンプト操作ログ)に記述されているすべてのテーブル、およびデータベースに蓄積されているログの情報

退避可能な情報の詳細については、「3.1.1.2 ユーザー資産」を参照してください。

- 91日以前のデータ部分はデータベースより削除します。
- バックアップの実行は、OS標準実装の「タスク」機能を使用し自動起動します。ただし、データベースのレコード削除も行うため、Systemwalker Desktop Keeperのサーバ側の処理との間でデータベースアクセスの競合を発生させないように、Systemwalker Desktop Keeperのサーバ側サービスを停止してから行います。
- サーバ側サービスを停止させることから、利用者の少ない夜間の2時より起動することとします。
- バックアップおよびデータベースのレコード削除にかかる時間は事前に検証を行い、合わせて30分程度で終了する想定としています。

以下のような運用を想定しています。



例では、退避期間を退避実行日付から1週間前までを退避、91日以前を削除する運用とします。

運用設定

上記の“運用条件”で説明した運用を行うために、提供するバックアップコマンドの中から、DTKMSTB、DTKLGTB、DTKLG1T、DTKDEL、DailySch2、DTKTask_DailySchBackup.batを使用します。

なお、本運用設定により、バックアップ先のドライブおよびフォルダの構成は、以下のようになります。(XXXXXXXXはバックアップ開始日になります)

- 管理情報に記述されているすべてのテーブル
→D:\¥BACKUP¥MSXXXXXXXX¥ 配下
- ログ情報(データベース上のログデータおよびコマンドプロンプト操作ログ)に記述されているすべてのテーブル
→D:\¥BACKUP¥BKXXXXXXXX¥ 配下
- データベースに蓄積されているログの情報
→D:\¥BACKUP¥LVXXXXXXXX¥ 配下

退避可能な情報の詳細については、「3.1.1.2 ユーザー資産」を参照してください。

運用設定の手順は、以下のとおりです。実行結果ログは、DailySch2.batの実行結果出力ログ(%EXECDAY%.log)に出力されます。

1. 「DailySch2.bat」を編集します。編集するポイントは以下です。
 - 編集する箇所は「設定(ユーザー編集)」のブロックです。
 - 各パラメーターには設定例を記載しています。設定例の記述形式に合わせて必要に応じて編集します。
 - ユーザーID/パスワードは、サーバ設定ツールで登録したログオンID(アクセス権が“バックアップ・リストア”のログオンID)を入力します。
2. 「DailySch2.bat」の「BKDRIVE」に設定したドライブに、「BKFOLDERNAME」に設定したフォルダを作成します。
運用例では、D:\BACKUPです。
3. 「DTKTask_DailySchBackup.bat」を編集します。
 - 「設定」ブロックの「BACKUPCOMMANDFOLDER」には「DailySch2.bat」が格納されているフォルダを設定します。
 - 「処理」ブロックの「DailySch.bat」と記載されている箇所を「DailySch2.bat」に変更します。
4. 「タスク」に「DTKTask_DailySchBackup.bat」のコマンドを登録します。
 - a. [管理ツール]-[タスク スケジューラ]と開き、[タスクの作成]を選択します。
 - b. 実行するプログラムの選択画面にて、[参照]ボタンをクリックして「DTKTask_DailySchBackup.bat」を登録します。
 - c. 名前を付け、日単位の実行として、毎日2:00に実行として登録します。
 - d. 実行時のユーザーIDとパスワードを登録するので、Administrator権限のあるユーザーで登録します。

ユーザー資産を退避する

“3.1.1.2 ユーザー資産”を参照し、退避したいユーザー資産を退避してください。

3.1.3 ユーザー資産を復元する

本製品が提供するリストア機能には、以下のツールがあります。

リストアツール

GUI画面によりリストア条件を設定して実行します。

リストアツールは、以下の2つの機能でバックアップしたデータを復元できます。

- バックアップツール
- バックアップコマンド

(過去バージョンの管理サーバ/統合管理サーバでバックアップしたデータも復元できます。)

リストアツールでは以下のデータを復元できます。

- 管理情報
- ログ情報(データベース上のログデータおよびコマンドプロンプト操作ログ)

復元可能な情報の詳細については、“3.1.1.2 ユーザー資産”を参照してください。

なお、リストアの処理時間はリストアの対象となるログ件数により概算できます。目安は以下のとおりです。

- 5,000件/秒 (Xeon、2.0GHz、メモリ2GB、RAID1構成)

注) サーバ性能、RAID構成によってはこれ以上時間がかかる場合があります。

リストアツールの動作状況は、イベントログに出力されます。

データベースのリストアコマンド(DTKTBLRESTOR.EXE)は、ログ閲覧データベースへリストアを行うもので、運用データベースに対しては使用できません。

iOS管理データベースのリストアコマンド(swss_MDMDB_RESTORE.exe)

iOS 管理 データベースをリストアします。コマンドの使用方法については、“リファレンスマニュアル”の“swss_MDMDB_RESTORE.exe(iOS管理データベースのリストア)”を参照してください。

iOS管理データベースのリストアコマンドは、以下の機能でバックアップしたiOS管理データベースを復元できます。

ー DTKMSTB.EXE(管理情報の退避)

iOS管理データベースのリストアコマンドの動作状況は、ログファイルに出力されます。

注意

Systemwalker Desktop KeeperとSystemwalker Desktop Patrolが共存している場合、中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)を使用して、中継サーバと接続しているiOS管理データベースのホスト名を確認します。「iOSmgr.h」に表示されたiOS管理データベースのホスト名と一致するサーバでバックアップしたデータを「iOSmgr.h」に表示されているホスト名と一致するサーバにリストアします。

3.1.3.1 リストアツールを利用する

Systemwalker Desktop Keeperが提供するリストアツールによって、データベースからバックアップしたデータをリストアする方法について説明します。

注意

ツール使用時に考慮すべきことについて

【運用データベースにはリストアしないでください】

運用中の管理サーバ/統合管理サーバには、「管理情報」を復元しないでください。「管理情報」が上書きされてしまい、「管理情報」と「ログ情報」に不整合が発生します。

【管理コンソールの端末動作設定およびサーバ設定ツールの各設定は個別に復元が必要です】

これらの設定情報はバックアップツール(GUI)やバックアップコマンドでは退避されていません。リストアツールでデータベースを復元後に、情報の再設定をしてください。

【管理情報をリストアすると以前の情報は削除されます】

管理情報をリストアすると以前の管理情報はすべて上書きされます。差分反映ではありませんので注意してください。

【リストア処理に時間がかかる場合があります】

ログ情報がすでに存在している環境に、ログ情報を追加してリストアする場合は、リストア後にインデックス情報の再作成の処理が実行されるため、リストア時間が長くなります。(ログがない状態と比較して、約3倍程度、リストア時間が長くなります。)

【管理情報バックアップ時のレコード数とリストア時のレコード数が違う場合があります】

リストアツールでは不整合となった管理情報を削除するため、バックアップ時のレコード数とリストア時のレコード数が違う場合があります。

【運用データベースの管理情報をリストアする場合はiOS管理データベースもリストアしてください】

iOS端末の管理を行っている場合は、運用データベースとiOS管理データベースの不整合を防ぐため、同時期にバックアップしたデータをリストアしてください。

iOS管理データベースのリストアコマンドの使用方法については、“リファレンスマニュアル”の“swss_MDMDDB_RESTORE.exe(iOS管理データベースのリストア)”を参照してください。

【UACの昇格について】

Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019の場合、ビルドインAdministrator以外のユーザーでバックアップツールを起動するとネットワークドライブを選択できません。これは、UACのセキュリティ強化によるものです。

ビルドインAdministrator以外のユーザーでバックアップを行う場合には、権限昇格したコマンドプロンプトでネットワークドライブを割り当てた後、実行してください。

ポイント

ログオン情報の履歴について

ログオン情報はイベントログ(アプリケーション)に出力されます。

運用中のデータベースへリストアを実行する

リストアツールの使用手順は以下のとおりです。

1. Android端末またはiOS端末を管理している場合は、中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)を使用して中継サーバのサービスを停止します。コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“SDSVService.bat(中継サーバのサービス起動・停止)”を参照してください。
2. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
3. バックアップ実行時に控えておいたサーバ設定ツールの以下の設定情報を、再設定します。

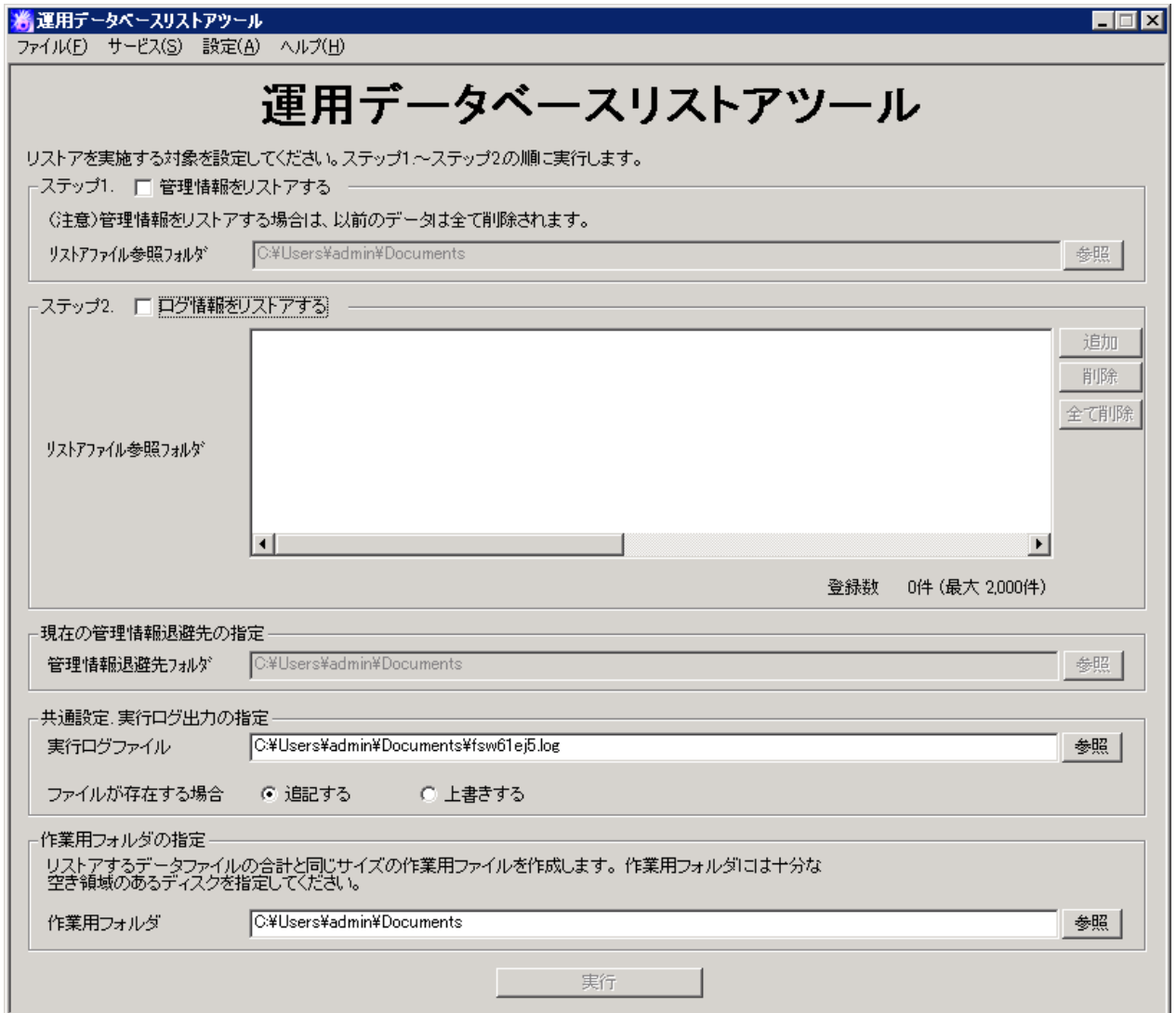
- － [システム設定]
- － [ActiveDirectory連携設定] 注)Active Directory連携機能利用時
- － [管理者通知設定]
- － [管理サーバ設定]
- － [トレース/フォルダ/CT自己版数アップ設定]

サーバ設定ツールの各画面の表示方法は、“[2.3.4 管理サーバ/統合管理サーバの環境を設定する](#)”を参照してください。

4. 管理サーバ/統合管理サーバをインストールしたPCの[スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[運用データベースリストアツール]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[運用データベースリストアツール]を選択します。
→[運用データベースリストアツール]画面が表示されます。運用中のデータベースに対してリストアを行うことを確認し、[はい]ボタンをクリックします。
→[Systemwalker Desktop Keeper 運用データベースリストアツール]画面が表示されます。
5. サーバ設定ツールで登録したユーザーID(アクセス権が“バックアップ・リストア”のユーザーID)でログインします。(初期管理者のユーザーID、パスワードを使用してもログインできます)

6. [OK]ボタンをクリックします。

→[リストアツール]画面が表示されます。



[リストアツール]画面のメニューバーについて説明します

メニューバー		機能概要	
[ファイル]	[終了]	リストアツールを終了します。	
[サービス]	[サービス状況確認]	接続している管理サーバ上の“階層化サービス”、“サーバサービス”の動作状況を表示します。	
	[サービス起動]	接続している管理サーバ上の“階層化サービス”、“サーバサービス”を起動します。	
	[サービス停止]	接続している管理サーバ上の“階層化サービス”、“サーバサービス”を停止します。	
[設定]	[リストアツールトレース]	[しない]	リストアツールのトレースを採取しません。
		[概要]	リストアツールのトレースを概要モードで採取します。
		[詳細]	リストアツールのトレースを詳細モードで採取します。
[ヘルプ]	[オンラインヘルプ]	オンラインマニュアルを表示します。	
	[バージョン情報]	著作権情報およびバージョン情報を表示します。	

7. リストアツールで「管理情報」、「ログ情報」をリストアするには接続している管理サーバ上の“階層化サービス”、“サーバサービス”を停止する必要があります。サービスの停止は[サービス]メニューの[サービス停止]を選択すると、サービス停止確認の画面が表示されるので[OK]ボタンをクリックします。
8. 操作結果の状態を表す画面が表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。
9. [リストアツール]画面において、以下のステップ1,2の情報、共通設定、および作業フォルダ情報を入力します。

ステップ1. 管理情報をリストアする

項目名	説明
[管理情報をリストアする]	管理情報をリストアする場合はチェックします。
[リストアファイル参照フォルダ]	<p>リストアするファイルが存在するフォルダを指定します。 (LEVELOBJECT.csvファイルやLEVELCOMPOSITION.csvファイルを含む管理情報をバックアップしたフォルダを指定してください)</p> <p>指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 絶対パスでフォルダ名を入力する リストアする管理情報格納フォルダまでのパスを絶対パスで入力します。 ・ [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、リストアする管理情報が存在するフォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)まで入力できます。 以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>

ステップ2. ログ情報をリストアする

項目名	説明
[ログ情報をリストアする]	ログ情報をリストアする場合にチェックします。
[リストアファイル参照フォルダ]	<p>リストアするファイルが存在するフォルダを[追加]ボタンから指定します。リストアするフォルダは、複数指定できます。(COMMONLOG1.csvファイルやLOGKEYWORDS.csvファイルを含むログ情報をバックアップしたフォルダを指定してください)</p> <p>各ボタン、チェックボックスについて説明します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ [追加]ボタン リストア対象とするフォルダを選択できます。 ・ [削除]ボタン フォルダリストから選択したフォルダを削除します。 ・ [全て削除]ボタン フォルダリストからすべてのフォルダを削除します。 ・ 全削除する(高速削除)チェックボックス データベースに格納されている操作ログデータをリストアする前に削除します。 ログ閲覧用データベースにリストアする場合だけ選択可能なため、運用データベースリストアツールではグレーアウトされています。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)までです。 半角で189文字(全角で94文字)を超える絶対パスが選択された場合は半角で189文字(全角で94文字)で切断されます。</p>

現在の管理情報退避先の指定

項目名	説明
[管理情報退避先フォルダ]	<p>管理情報のバックアップ先を指定します。</p> <p>(管理情報をリストアする際に問題が発生した場合に備えて、リストア前の最新の情報をバックアップします。)</p> <p>指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 絶対パスでフォルダ名を入力する リストアする管理情報格納フォルダまでのパスを絶対パスで入力します。 [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、リストアする管理情報が存在するフォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)まで入力できます。</p> <p>以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>

共通設定. 実行ログ出力の指定

項目名	説明
[実行ログファイル]	<p>リストアツールの実行結果を格納するファイルを指定します。指定方法は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 絶対パスでファイル名を入力する 出力する実行結果ファイルまでのパスを絶対パスで入力します。 [参照]ボタンから選択する [ファイルを開く]画面が表示されるので、出力する実行ファイルを格納するフォルダ選択し、ファイル名を入力したあとに、[開く]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で255文字(全角で127文字)まで入力できます。</p> <p>以下の記号はファイル名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>
[ファイルが存在する場合]	<p>実行ログファイルが[実行ログファイル]で指定した場所に存在する場合の処理を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 追記する 実行ログファイルが[実行ログファイル]で指定した場所に存在した場合は、前回の実行ログの後に追記します。 上書きする 実行ログファイルが[実行ログファイル]で指定した場所に存在した場合は、前回の実行ログを上書きします。

作業用フォルダの指定

項目名	説明
[作業用フォルダ]	<p>作業用ファイルを格納するフォルダを指定します。この作業フォルダには管理情報をリストアする場合には、管理情報のデータファイルの合計の1.2倍のサイズの作業用ファイルが作成されます。ログ情報をリストアする場合には、全フォルダ配下の各ログテーブル合計の中で、最大のサイズの1.2倍のサイズの作業ファイルが作成されます。(たとえば FILEACCESSLOG.csvの全ファイルの合計が10GBだったとすると、12GBが必要です)そのため、作業用フォルダには十分な空き容量のあるディスクを指定してください。最低でも10MBの空き容量が必要です。なお、実行後、作業用ファイルは削除されます。</p>

項目名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • 絶対パスでフォルダ名を入力する 作業用フォルダまでのパスを絶対パスで入力します。 作業用フォルダに指定できるのは、ローカルのハードディスクのみです。 • [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、作業用フォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 <p>指定できる絶対パスの長さは、半角で189文字(全角で94文字)まで入力できます。 以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」</p>

10. すべての条件を入力したあとに、[実行]ボタンをクリックします。
→実行を確認する画面が表示されます。
11. 実行する場合は[OK]ボタンをクリックします。[リストア状況]画面が表示され処理が開始されます。
12. リスト処理が正常終了すると、完了画面が表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。
13. 実施状況に表示されている情報を確認し、[閉じる]ボタンをクリックします。
14. iOS端末を管理している場合は、iOS管理データベースのリストアコマンド(swss_MDMDB_RESTORE.exe)でiOS管理データベースの復元を行います。本コマンドは、管理サーバで実行します。
15. 停止している管理サーバの“階層化サービス”、“サーバサービス”を起動します。サービスの起動は[サービス]メニューの[サービス起動]を選択すると、サービス起動確認の画面が表示されるので[OK]ボタンをクリックします。
16. 操作結果の状態を表す画面が表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。
17. バックアップ実行時に控えておいた管理コンソールの[端末動作設定]画面の設定情報を、再設定します。
[端末動作設定]の表示方法は以下のとおりです。
 - a. [管理コンソール]を起動します。
 - b. [動作設定]メニューから[端末動作設定]を選択します。
→[端末動作設定]画面が表示されます。
18. Android端末またはiOS端末を管理している場合は、中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)を使用して中継サーバのサービスを起動します。コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“SDSVService.bat(中継サーバのサービス起動・停止)”を参照してください。

ログ閲覧用データベースへリストアを実行する

ポイント

旧バージョンで取得したログ情報や管理者情報も、ログ閲覧データベースへリストアすることにより、参照できます。

3階層構成の統合管理サーバでバックアップしたログ情報をログ閲覧用データベースにリストアした場合、クライアント(CT)操作ログ画面で表示される統合管理サーバのIPアドレスは、ログ閲覧用データベースを構築している管理サーバのIPアドレスになります。また、下位管理サーバのIPアドレスは「0.0.0.0」と表示されます。

3階層構成の下位管理サーバまたは2階層構成の管理サーバでバックアップしたログ情報をログ閲覧用データベースにリストアした場合、クライアント(CT)操作ログ画面で表示される管理サーバのIPアドレスは、ログ閲覧用データベースを構築している管理サーバのIPアドレスになります。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. 管理サーバ/統合管理サーバをインストールしたマシンの[スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[ログ閲覧データベースリストアツール]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[ログ閲覧データベースリストアツール]を選択します。
→[Systemwalker Desktop Keeper ログ閲覧用データベースリストアツール]画面が表示されます。

サーバ設定ツールで登録したユーザーID(アクセス権が“バックアップ・リストア”のユーザーID)、パスワードを入力し、[OK]ボタンをクリックします。(初期管理者のユーザーID、パスワードを使用してもログインできます)
→[リストアツール]画面が表示されます。

メニューバーや入力項目は、一部を除き、運用データベースリストアツールと同一です。同一の項目については、運用データベースリストアツールの説明を参照してください。ここでは、ログ閲覧用データベースリストアツールだけ行う設定項目について説明します。

ステップ2. ログ情報をリストアする

項目名	説明
[リストア前に既存ログ情報を全削除する]	ログ閲覧データベースにログ情報が格納されている場合、リストアを実施する前にログ情報を削除します。

- すべての条件を入力したあとに、[実行]ボタンをクリックします。
→実行を確認する画面が表示されます。
- 実行する場合は[OK]ボタンをクリックします。[リストア状況]画面が表示され処理が開始されます。
- リストア処理が正常終了すると、完了画面が表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。
- 実施状況に表示されている情報を確認し、[閉じる]ボタンをクリックします。

リストアツールを終了する

リストアツールを終了させる方法について説明します。

1. リストアツールを終了させるには[ファイル]メニューの[終了]を選択します。
→終了確認画面が表示されます。
2. リストアツール画面で指定した条件を保存するかどうかを選択します。条件を保存して終了する場合は[はい]を、保存せず終了する場合は[いいえ]をクリックします。終了をキャンセルする場合は[キャンセル]をクリックします。
メニューから指定した設定値([デバッグトレースの設定])は各設定時に保存されます。

ユーザー資産を復元する

“[3.1.1.2 ユーザー資産](#)”を参照し、復元したいユーザー資産を復元してください。

3.2 中継サーバの保守

Systemwalker Desktop Keeper 中継サーバの保守方法について説明します。

3.2.1 資産の退避方法

Systemwalker Desktop Keeper 中継サーバの資産の退避方法について説明します。

Systemwalker Desktop Keeper 中継サーバの資産を退避するには、以下のコマンドを実行します。

```
SDSVBackup.bat -dir バックアップディレクトリ
```

コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“SDSVBackup.bat(中継サーバのバックアップ)”を参照してください。



Systemwalker Desktop KeeperとSystemwalker Desktop Patrolが共存している場合は、Systemwalker Desktop Patrolの退避も行ってください。

3.2.2 資源の復元方法

Systemwalker Desktop Keeper 中継サーバの資産の復元方法について説明します。

1. 中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)を使用して、中継サーバのサービスを停止します。
本コマンドは、中継サーバで実行します。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
SDSVRestore.bat -dir バックアップディレクトリ
```

3. Apple社証明書登録コマンド(swss_ImportAppleCert.bat)を使用して、“[2.2 事前準備](#)”で準備したMDM証明書を再登録します。
4. 復元後、中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)を使用して、中継サーバのサービスを起動します。
本コマンドは、中継サーバで実行します。

各コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“コマンドリファレンス”を参照してください。



Systemwalker Desktop KeeperとSystemwalker Desktop Patrolが共存している場合は、Systemwalker Desktop Patrolの復元も行ってください。

3.3 ログアナライザサーバの保守

Systemwalker Desktop Keeperのログアナライザサーバの保守方法について説明します。

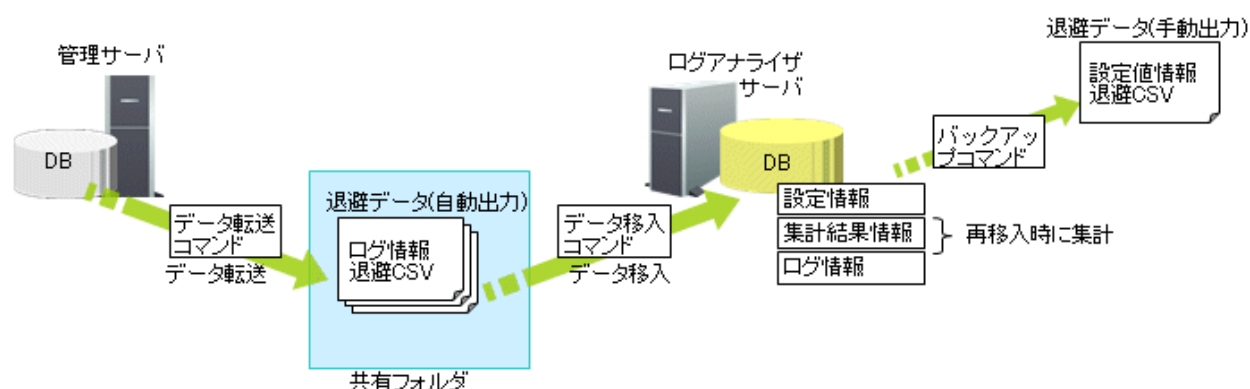
3.3.1 概要および退避対象資産

Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバの資産を退避・復元する内容について説明します。

ログアナライザサーバの退避対象には、設定情報、集計結果情報、ログ情報といった“ユーザー資産”があります。ユーザー資産の退避対象と退避方法は以下のとおりです。

	ユーザー資産		
	設定情報	集計結果情報	ログ情報
バックアップ方法	バックアップコマンド	なし	データ転送コマンド
バックアップ契機	定期、ただし設定変更時は必須	なし	データ転送時
バックアップ手順	手動	なし	自動
バックアップファイル	設定情報退避CSV	なし	ログ情報退避CSV
リストア方法	バックアップコマンド	なし(再集計要)	データ移入コマンドによる再移入

ログアナライザサーバの保守の概要



ログアナライザサーバにおけるユーザー資産には、“設定情報”、“集計結果情報”、および“ログ情報”があります。設定情報はバックアップコマンドを使用して退避・復元を行います。

ログ情報はデータ転送コマンドが出力するデータがそのまま退避データとなります。

集計結果情報は、ログ情報退避CSVをログアナライザサーバに再移入することにより集計が行われ復元されます。

設定情報退避CSVおよびログ情報退避CSVはバックアップデータです。フォルダ構成を維持した状態で外部媒体などに大切に保管してください。

バックアップコマンドが退避する設定情報のテーブルとファイル名は以下のとおりです。

種類	テーブル	使用目的	ファイル名
設定情報	SETTING_INF	設定情報	SETTING_INF.csv
	REMOVEPC	除外条件設定	REMOVEPC.csv
	KEYWORD_INF	絞込条件設定	KEYWORD_INF.csv
	GROUPMASTER	グループ情報	GROUPMASTER.csv
	USERMASTER	ユーザー情報	USERMASTER.csv
	SVMMASTER	管理サーバ情報	SVMMASTER.csv
	PCMASTER	端末情報	PCMASTER.csv
	PCMASTER_SV	端末情報2	PCMASTER_SV.csv
	GROUPMASTER_SV	グループ情報2	GROUPMASTER_SV.csv
	ALARMPRINTMASTER	印刷上限情報	ALARMPRINTMASTER.csv

種類	テーブル	使用目的	ファイル名
	COMPOSITIONMASTER	構成情報	COMPOSITIONMASTER.csv
	SVNODEMASTER	サーバノード情報	SVNODEMASTER.csv
	USERSECTIONMASTER	部門管理情報	USERSECTIONMASTER.csv
	PRINTERMASTER	複合機リスト情報	PRINTERMASTER.csv
	PRINTERCOUNT_SETTING_INF	複合機連携設定情報	PRINTERCOUNT_SETTING_INF.csv
	PRINTER_PAPERNUM_BASIC	複合機連携集計情報	PRINTER_PAPERNUM_BASIC.csv
	OBJECTMASTER	複合機集計単位情報	OBJECTMASTER.csv
	PRINTUSERMASTER	複合機連携利用者情報	PRINTUSERMASTER.csv
	PRINTUSER_PAPERNUM_BASIC	複合機連携利用者集計情報	PRINTUSER_PAPERNUM_BASIC.csv

注意

- ・ 設定変更時は、バックアップと同時に必ず再集計を行ってください。設定変更時に再集計を行わないと、リストア後の集計結果が正しく一致しない場合があります。
- ・ ログ保存期間は1年を推奨します。ログ保存期間が1年未満の場合、再集計実施時にログ保存期間より古い集計結果は消去されます。

3.3.2 資産を退避する

ユーザー資産である設定情報、集計結果情報、およびログ情報のうち、ログ情報はデータ転送コマンドの出力結果がそのまま退避データとなります。集計結果情報は退避する必要はありません。ここでは、設定情報を退避するためのバックアップコマンドを使用します。

3.3.2.1 バックアップコマンドを使用する

Systemwalker Desktop Keeperログアナライザが提供するバックアップコマンドによって、データベースに蓄積されているデータを操作する方法について説明します。

バックアップコマンドには、スケジューラの機能は含んでいません。スケジューラの機能を使用する場合は、OSに標準で提供されている「タスク」の機能を使用するか、ARCserveなどのスケジューラ機能ソフトウェアを使用してください。なお、管理者権限で実行する必要がありますので、注意してください。

注意

バックアップコマンド使用時に考慮すべきことについて

【本コマンドの使用可能レベルについて】

V15.1.0以降で使用できるコマンドです。異なるバージョンで構築された環境で使用した場合の動作は保証しておりません。

【出力先のディスク容量について】

退避ファイルの出力先として指定するディスクは、容量に十分余裕のあるディスクを使用してください。

【実行権限について】

バックアップコマンドを実行する場合は管理者権限が必要です。Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオン後、実行してください。

【コマンドプロンプトのコマンド拡張機能を有効にしてください】

バックアップコマンドを実行するためには、コマンドプロンプトのコマンド拡張機能が有効になっている必要があります。

なお、コマンド拡張機能は、初期設定では有効になっています。コマンドプロンプトより「echo %CMDEXTVERSION%」を実行し、その結果が2以上の場合は有効と確認できます。

【バックアップのタイミング】

原則として設定変更後に速やかにバックアップを行ってください。バックアップ前に消失したデータについては退避・復元できません。

バックアップコマンド格納先:

[ログアナライザサーバインストールフォルダ]¥bin¥SWDTLAENV

例) C:¥Program Files¥Fujitsu¥Systemwalker Desktop Keeper¥LogAnalyzer¥Server¥bin¥SWDTLAENV

コマンド名	行える操作
LADBBKR S.BAT	“3.3.1 概要および退避対象資産”の“設定情報”に記述されているすべてのテーブルを、テーブルごとにCSVファイルとして退避できます。

コマンドの詳細については、“リファレンスマニュアル”の“LADBBKRS.BAT(ログアナライザ設定情報退避・復元)”を参照してください。

バックアップを実行する

バックアップコマンドの使用方法については、“リファレンスマニュアル”の“LADBBKRS.BAT(ログアナライザ設定情報退避・復元)”を参照してください。



実行時にはログアナライザを使用しないでください

退避・復元を行う前には、Webコンソール、レポート出力ツール、データ移入コマンド、ユーザー管理コマンドなどログアナライザの機能を使用しないでください。

3.3.3 資産を復元する

3.3.3.1 リストア手順

リストアする際の手順の流れを以下に説明します。

リストア作業の流れ



1. ログアナライザユーザー(ログアナライザサーバインストール時に設定したWindowsアカウント)でログオンします。
2. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[ログアナライザ]-[運用環境保守ウィザード]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[運用環境保守ウィザード]を起動して、データベースを再構築します。

- 設定情報退避CSVをログアナライザ設定情報退避・復元コマンド(LADBBKRS.bat)を使用してデータベースにリストアします。コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“LADBBKRS.bat(ログアナライザ設定情報退避・復元)”を参照してください。
例:

```
LADBBKRS.bat -rs -d c:¥backup
```

- 外部媒体等に保管しているログ情報退避CSVを、フォルダ構成を維持した状態で共有フォルダ(手順5.でログアナライザサーバへのデータ移入・削除コマンドの-fで指定するフォルダ)にコピーします。
- コピーしたフォルダ配下に存在する、以下のファイル名を変更します。
 - 変更前のファイル名:conv_end
 - 変更後のファイル名:trans_end

上記ファイルは、期間フォルダ(例:20080421_20080421)ごとに存在します。
フォルダ数が多い場合は、以下のようにバッチ処理で変更すると便利です。

【バッチファイルの例】

```
ECHO OFF
IF %1.==. GOTO NOPARAM
FOR /R %1 /D %%f IN (*) DO (
  IF EXIST %%f¥conv_end (
    move %%f¥conv_end %%f¥trans_end
  )
)
GOTO END
:NOPARAM
ECHO フォルダパスを指定してください。
:END
ECHO ON
```

例:退避データを保管してあるパス z:¥DTKDATAを、共有フォルダのパス c:¥DTKDATAにコピーし、その後、作成したバッチコマンドを実行します。

例:

```
conv.bat c:¥DTKDATA
```

- ログ情報退避CSVをログアナライザサーバへのデータ移入・削除コマンド(DTTOOLEX.EXE)を使用して再移入します。
なお、再移入処理は処理時間がかかります。
参考情報:ログ数約1.8億件のデータで約24時間
コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“DTTOOLEX.EXE(ログアナライザサーバへのデータ移入・削除)”を参照してください。
例:

```
dttoolEx.exe -f c:¥DTKDATA
```

- 設定情報退避CSVを再度リストアコマンドを使用してデータベースに復元します。
例:

```
LADBBKRS.bat -rs -d c:¥backup
```

- 運用を再開します(データ転送コマンドとデータ移入コマンドの運用)。



注意

リストアコマンドは2度実行します

手順7.の設定情報の再リストアを行わないと、ユーザーIDが削除される、設定内容が最新の状態でないなど、正しく復元されない場合があります。

3.3.3.2 リストアコマンドを使用する

Systemwalker Desktop Keeperログアナライザが提供するリストアコマンドによって、退避したデータをデータベースへ復元する操作の方法について説明します。なおリストアコマンドはバックアップコマンドと同一です。



リストアコマンド使用時に考慮すべきことについて

【本コマンドの使用可能レベルについて】

V15.1.0以降で使用できるコマンドです。異なるバージョンで構築された環境で使用した場合の動作は保証していません。

【実行権限について】

リストアコマンドを実行する場合は管理者権限が必要です。Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオン後、実行してください。

【コマンドプロンプトのコマンド拡張機能を有効にしてください】

リストアコマンドを実行するためには、コマンドプロンプトのコマンド拡張機能が有効になっている必要があります。

なお、コマンド拡張機能は、初期設定では有効になっています。コマンドプロンプトより「echo %CMDEXTVERSION%」を実行し、その結果が2以上の場合は有効と確認できます。

リストアコマンド格納先:

[ログアナライザサーバイnstoolフォルダ]¥bin¥SWDTLAENV

例) C:¥Program Files¥Fujitsu¥Systemwalker Desktop Keeper¥LogAnalyzer¥Server¥bin¥SWDTLAENV

コマンド名	行える操作
LADBBKR S.BAT	“3.3.1 概要および退避対象資産”の“設定情報”に記述されているすべてのテーブルを、テーブルごとにCSVファイルとして復元できます。

コマンドの詳細については、“リファレンスマニュアル”の“LADBBKRS.BAT(ログアナライザ設定情報退避・復元)”を参照してください。

リストアを実行する

リストアコマンドの使用方法については、“リファレンスマニュアル”の“LADBBKRS.BAT(ログアナライザ設定情報退避・復元)”を参照してください。



実行時にはログアナライザを使用しないでください

退避・復元を行う前には、Webコンソール、レポート出力ツール、データ移入コマンド、ユーザー管理コマンドなどログアナライザの機能を使用しないでください。

第4章 バージョンアップ

本章では、Systemwalker Desktop Keeperのバージョンアップの方法について説明します。

4.1 異なるバージョン間の注意事項

異なるバージョン間の動作状況について説明します。

統合管理サーバと管理サーバ間

統合管理サーバと管理サーバの間で異なるバージョンを使用した場合、以下の動作となります。その他の場合は、必ず同一バージョンを使用してください。

		下位管理サーバ	
		V15.2.0	V15.3.0
統合管理サーバ	V15.2.0	○	×
	V15.3.0	○※1	○

○: 正常に動作します。

×: 正常に動作しません。

※1 Webコンソールは統合管理サーバ(V15.3.0)上で動作しますが、下位管理サーバ(V15.2.0)の検索ログを表示する時、環境変更ログの「備考」欄については、V15.2.0と同じく空欄で表示します。

管理サーバ/統合管理サーバとログアナライザサーバ間

管理サーバ/統合管理サーバとログアナライザサーバの間で異なるバージョンを使用した場合、正常に動作しません。必ず同一バージョンを使用してください。

また、異なるバージョンの管理サーバ/統合管理サーバで転送したデータを移入した場合も、正常に動作しません。

管理サーバ/統合管理サーバと管理コンソール間

管理サーバ/統合管理サーバと管理コンソール間で異なるバージョンを使用した場合、正常に動作するのは以下の組み合わせです。その他の場合は、必ず同一バージョンを使用してください。

		管理コンソール	
		V15.2.0	V15.3.0
管理サーバ/統合管理サーバ	V15.2.0	○	○※1
	V15.3.0	○※2	○※3

○: 正常に動作します。

×: 正常に動作しません。

※1 管理コンソールでは、以下の2点が変わります。

- ・ 端末動作設定画面の「通信タイムアウト」の設定範囲が、V15.2.0と同じく30～300となります。
- ・ 緊急対処の状況表示画面の「緊急対処依頼方法」は空欄で表示します。

※2 V15.3.0用のポリシーは、V15.2.0の管理コンソールからは設定できません。この場合、管理サーバ/統合管理サーバは、V15.3.0でサポートされた機能は使用しないものとみなして動作します。

※3 V15.2.0のCTを選択した場合、緊急対処の状況表示画面の「緊急対処依頼方法」は空欄で表示します。

管理サーバ・統合管理サーバとクライアント(CT)間

 **注意**

通信セキュリティ設定について

V14.3.1以前のクライアント(CT)の自己版数管理要求を受け付ける場合、通信セキュリティ設定を切り替えてください。セキュリティ強化コマンドを使用することで通信セキュリティ設定を切り替えることが可能です。セキュリティ強化コマンドの使用方法については、“リファレンスマニュアル”の“DTKSETCN.exe (セキュリティ強化コマンド)”を参照してください。

なお、上記設定にて自己版数管理要求を受け付ける設定にした場合でも、自己版数管理機能によるバージョンアップ以外の機能(移行対象情報ファイルを用いて接続先を変更するなど)は動作しません。

 **注意**

クライアント(CT)端末登録時認証について

V15.1.0より前のバージョンのクライアント(CT)をV15.1.0以降の管理サーバに登録する場合、クライアント(CT)端末登録時認証は使用できません。クライアント管理パスワードを解除してください。詳細は、“運用ガイド管理者編”の“端末動作設定を行う”を参照してください。

管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間で異なるバージョンを使用した場合、下表の動作となります。

CTバージョンは、管理コンソールのCTバージョンで確認できます。CTバージョンと製品のバージョン/エディションとの対応は、“リファレンスマニュアル”の“CTバージョン”を参照してください。

なお、CTバージョンをクライアント(CT)側で確認する場合は、以下のコマンドを実行してください。

```
fsw11ej7.exe <Password> /D /C
```

コマンドの詳細については、“リファレンスマニュアル”の“FSW11EJ7.EXE(システムの保守)”を参照してください。

		クライアント(CT)																			
		V12.0L10		V12.0L20		V13.0.0		V13.2.0 V13.2.1		V13.3.0		V14.0.0 V14.0.1		V14.1.0	V14.2.0	V14.3.0	V15.0.0	V15.1.0	V15.2.0	V15.3.0	
		BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE
管理サーバ/統合管理サーバ	BEV12.0L10	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	BEV12.0L20	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	SEV12.0L20	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	BEV13.0.0	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	SEV13.0.0	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	BEV13.2.0	○	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	SEV13.2.0	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	SEV13.2.1	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	BEV13.3.0	○	○	×	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	SEV13.3.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	V14.0.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	V14.0.1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	V14.1.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
	V14.2.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×

	クライアント(CT)																			
	V12.0L10			V12.0L20		V13.0.0		V13.2.0 V13.2.1		V13.3.0		V14.0.0 V14.0.1		V14.1.0	V14.2.0	V14.3.0	V15.0.0	V15.1.0	V15.2.0	V15.3.0
	BE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE	SE							
V14.3.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
V15.0.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
V15.1.0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×
V15.2.0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×
V15.3.0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○

○:正常に動作します。

○※1:正常に動作しますが、一部機能が制限されます。「注意」を参照してください。

○※2:統合管理サーバ/管理サーバ V15.1.0(またはV15.1.1)と、クライアント(CT) V15.1.2(またはV15.1.3)の組み合わせは正常に動作しません。

○※3:統合管理サーバ/管理サーバ 15.1.2と、クライアント(CT) V15.1.3の組み合わせは正常に動作しません。

×:正常に動作しません。

注意

管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間の通信について

管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間の通信は暗号化されます。

そのため、V14.3.1以前の通信暗号化の修正を適用していないクライアント(CT)との通信など、暗号化されていない通信については制限されます。

- V13.3.0～V14.3.1のクライアントは、2014年9月以降の緊急修正を適用するか、V15.1.0以降へのバージョンアップが必要です。
- V13.2.1以前のクライアントは使用できません。V15.1.0以降へのバージョンアップが必要です。
- 管理サーバをV15.1.0以降にバージョンアップした後は、新規インストールできるクライアントはV15.0.0以降です。ただし、管理サーバのバージョンより新しいバージョンのクライアントはインストールできません。

V15.3.0の管理コンソールで設定したポリシーは、クライアント(CT)のバージョン、エディションにより機能が制限されます。クライアント(CT)のバージョン、エディションによる機能ごとの動作の可否は以下のとおりです。

V15.3.0サポート機能	クライアント(CT)																
	V12.0L10	V12.0L20		V13.0.0		V13.2.0 V13.2.1		V13.3.0		V14.0.0 V14.0.1	V14.1.0	V14.2.0	V14.3.0	V15.0.0	V15.1.0	V15.2.0	V15.3.0
		BE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE								
コマンドプロンプト操作ログの採取	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ファイル操作ログ(ローカルドライブ)の採取	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ユーザーポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
連携アプリケーションログの採取	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ウィンドウタイトル取得ログのURL情報の採取	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ファイル操作ログ(ネットワークドライブ)の採取	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
メール添付禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
メール送信時宛先確認	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
送信メール内容の参照	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
操作ログ送信方法設定(時間指定送信機能除く)	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
操作ログ送信方法設定(時間指定送信機能)	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ログオン/ログオフログの採取	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ログフィルタ機能	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
画面キャプチャの採取(および端末動作設定での画面キャプチャ条件設定)	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
PrintScreenキー操作ログの採取	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
原本保管機能	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ファイル操作ログ取得除外フォルダの適用(任意フォルダ指定機能除く)	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ファイル操作ログ取得除外フォルダの適用(任意フォルダ指定機能)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
ファイル操作ログにおけるファイルサイズの記録	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
ファイル持出しユーティリティからCD-R/RWへの書き込み	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ファイル持出しユーティリティからDVD-R/RWへの書き込み(OS: Windows 7)	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ファイル持出しユーティリティからの暗号化持出し条件の設定 ・ 復号時のパスワードの試行回数設定	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○ (注3)	○ (注3)	○ (注3)

V15.3.0サポート機能	クライアント(CT)																
	V12.0L10	V12.0L20		V13.0.0		V13.2.0 V13.2.1		V13.3.0		V14.0.0 V14.0.1	V14.1.0	V14.2.0	V14.3.0	V15.0.0	V15.1.0	V15.2.0	V15.3.0
		BE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 復号可能期限設定 ・ 暗号化ファイルの拡張子設定 																	
ファイル持出しユーティリティでの持出し可能条件の設定 <ul style="list-style-type: none"> ・ 期間、時間、曜日指定 ・ 起動可能日時確認方法の設定 	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ファイル持出しユーティリティでの持出し先USBデバイス情報の取得	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ファイル持出しユーティリティでの持出し理由の入力	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
ファイル持出しユーティリティでのZIP暗号化ファイルの作成	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○
PC起動ログ/PC終了ログ/PC休止ログ/PC復帰ログの採取	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
FTP操作ログの採取	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
Webダウンロード操作ログの採取	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
Webアップロード操作ログの採取	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
FTPサーバ接続禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
URLアクセス禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
Webダウンロード禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
Webアップロード禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
USBデバイス個体識別	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○
クリップボード操作ログ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
クリップボード操作禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
ネットワークドライブへの接続禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
DVD/CDからの読み込み禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○

V15.3.0サポート機能	クライアント(CT)																
	V12.0L10	V12.0L20		V13.0.0		V13.2.0 V13.2.1		V13.3.0		V14.0.0 V14.0.1	V14.1.0	V14.2.0	V14.3.0	V15.0.0	V15.1.0	V15.2.0	V15.3.0
		BE	BE	SE	BE	SE	BE	SE	BE								
PC接続/PC切断ログの採取	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
用紙使用状況の通知	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
Bluetoothデバイスの接続禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○
Wi-Fiの接続禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○
PCカード、PCI ExpressCardの接続禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○
その他デバイス(赤外線、IEEE1394、シリアルポート/パラレルポート)の接続禁止ポリシーの適用	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○
クライアントへの緊急対処	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
クライアントへの緊急対処でのiNetSec SFとの連携	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
クライアントへの緊急対処でのWindows Defenderとの連携	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
Sense YOU Technology Bizとの連携	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
PC使用時間の通知	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
ファイル持出しユーティリティのUDF/UDF BridgeフォーマットでのDVD/CD書き込み	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
USBデバイス接続時のアラート表示	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
メディア個体識別	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
デバイス情報取得ツール	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
環境変更ログの採取	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
メール受信ログの採取	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
受信メール内容の参照	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
内蔵SDカードリーダーの個体識別	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○

○: 正常に動作します。

×: 正常に動作しません。

注1) 持出しユーティリティ利用時だけ有効な機能です。

- 注2) WebアップロードとWebダウンロードを同時に禁止する/許可する設定のみできます。
注3) 自己復号化暗号ファイルだけ対応しています。
注4) 本機能は、V15.1.2以降で対応しています。

注意

バージョンアップ時のデータベース容量の増加について

V15.1.0以降ではデータベースの変更に伴い、データベース容量が増加します。(算出条件で変動しますが、約1.2倍程度増加)このため、V15.0以前からの移行時にはデータベースの作成サイズに注意してください。
バージョンアップ後に必要なデータベースの容量については、“解説書”の“動作環境”を参照してください。

ログアナライザサーバとレポート出力ツール間

ログアナライザサーバとレポート出力ツールで異なるバージョンを使用した場合、正常に動作しません。必ず同一バージョンを使用してください。

管理サーバ/統合管理サーバと中継サーバ間

管理サーバ/統合管理サーバと中継サーバで異なるバージョンを使用した場合、正常に動作しません。必ず同一バージョンを使用してください。

全体

V13.2.1以前の環境からV15.3へバージョンアップすることはできません。新規に導入して環境構築を行ってください。

4.2 バージョンアップの流れ

バージョンアップの流れについて説明します。

4.2.1 管理サーバ/統合管理サーバを同一サーバでバージョンアップする

旧版のSystemwalker Desktop Keeperから管理サーバ/統合管理サーバをV15.3.0にバージョンアップする流れについて、以下の2パターンで説明します。

- [V13からのバージョンアップの場合](#)
- [V14/V15からのバージョンアップの場合](#)

また、Systemwalker Desktop Log AnalyzerからSystemwalker Desktop Keeperに移行する流れについても説明します。Systemwalker Desktop Log AnalyzerからSystemwalker Desktop Keeperに移行する場合は、移行の実施前に、管理サーバ/統合管理サーバのバージョンアップを完了させてください。

- [Systemwalker Desktop Log Analyzerからの移行](#)

Systemwalker Desktop Keeper V15.3.0を新規インストールする場合は、“[第2章 導入](#)”を参照してください。

注意

V15.3.0へバージョンアップする場合、必ずユーザー資産のバックアップを行って下さい。ここでバックアップしたユーザー資産を使用して、V15.3.0へバージョンアップ後に、ユーザー資産の復元を行います。
運用データベース、ログ閲覧データベースは再定義が必要です。V13.2.0より提供されていたデータベースのバージョンアップコマンド"SWDTK_DBCV"はV15.1.0以降では提供されません。

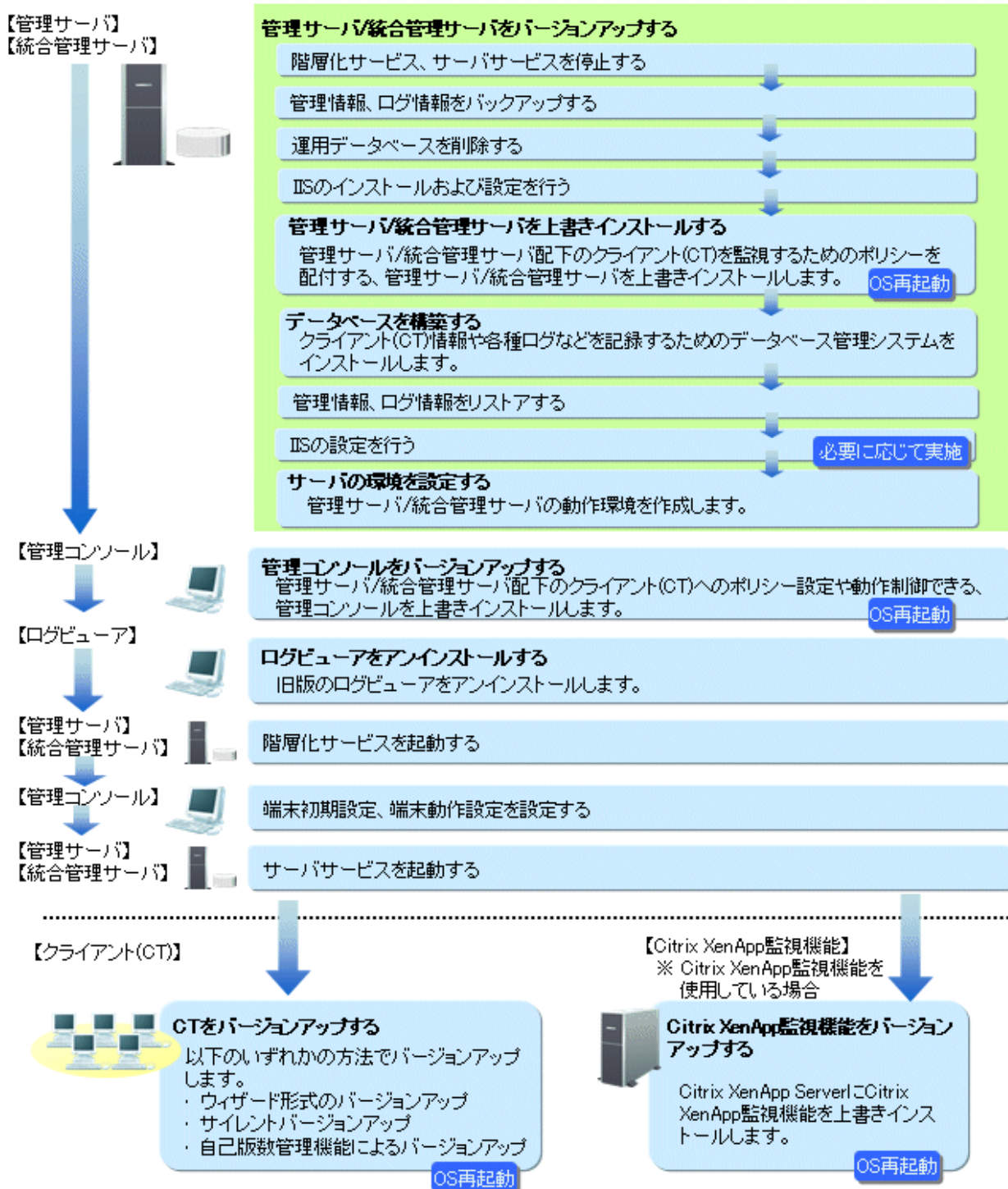
注意

バージョンアップ後のバックアップ作業について

バージョンアップ後は旧版のバックアップコマンドは使用できません。すべてV15.3.0のバックアップコマンドを使用してください。

V13からのバージョンアップの場合

V13.3.0からのバージョンアップの流れは以下のとおりです。



V14/V15からのバージョンアップの場合

V14/V15のWebコンソールのURLをブラウザのブックマークとして保存している場合は、再度、V15.3.0のWebコンソールにアクセスして、ブックマークを登録しなおしてください。V15.3.0のWebコンソールのアクセス方法は、“運用ガイド 管理者編”の“ログビューアを起動する”を

参照してください。
V14/V15からのバージョンアップの流れは以下のとおりです。

注意

管理サーバ/統合管理サーバのバージョンアップ後に発生するエラーについて

ログアナライザを利用している環境において、管理サーバ/統合管理サーバのバージョンアップ後に、管理サーバ/統合管理サーバ上で以下のエラーイベントログが発生する場合があります。

イベントID : 3421

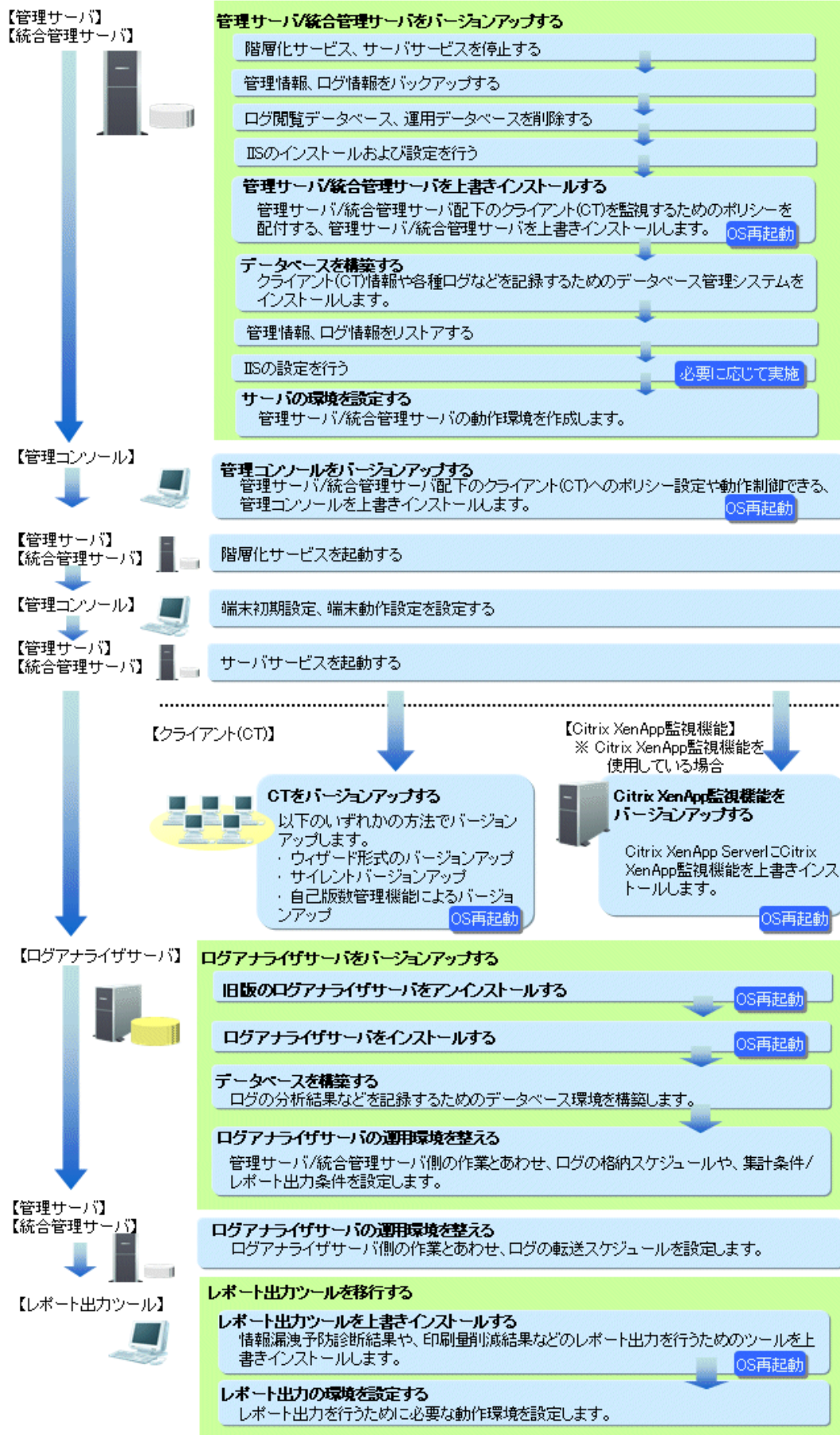
種類 : エラー

ソース : SWDTK_PB

メッセージ:「複合機連携バッチ処理において、ログアナライザサーバデータベースのアクセスに失敗しました。(サーバIPアドレス=%1 結果コード=%2 結果メッセージ=%3 結果詳細=%4)」

注) %1~%4は環境によって異なります。

本エラーはログアナライザサーバをバージョンアップすることで対処されます。

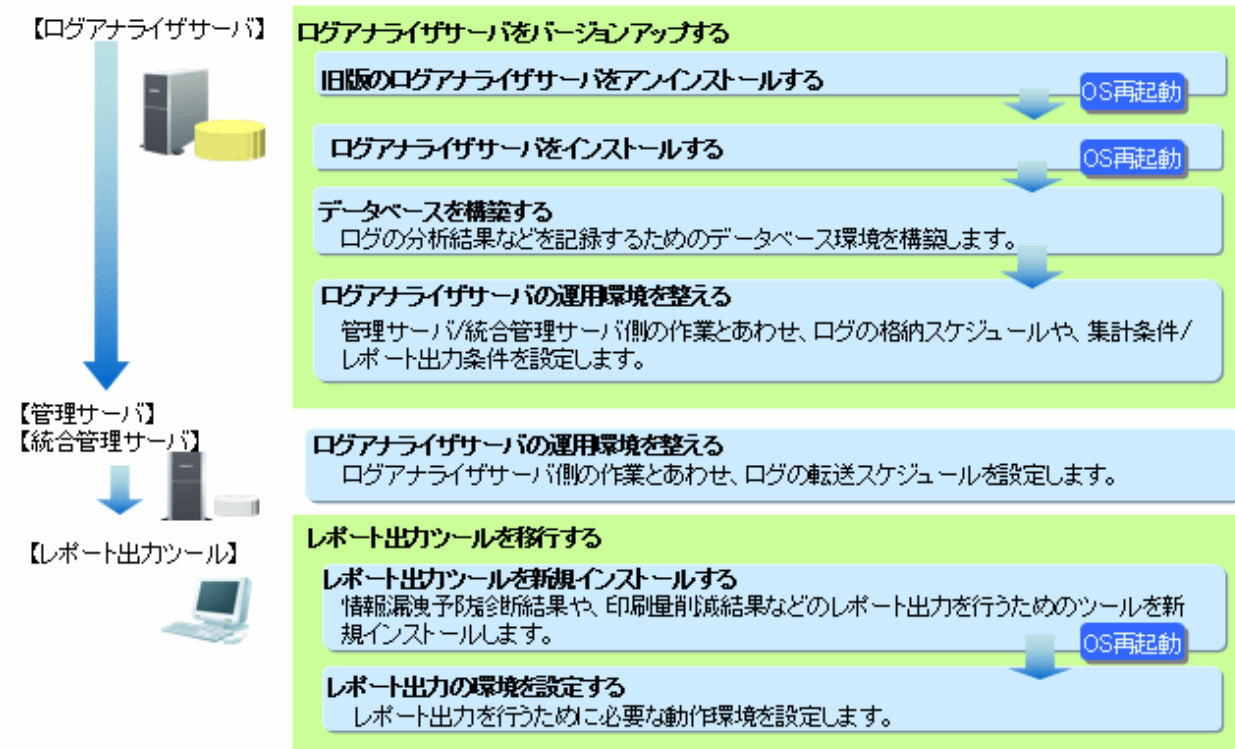


ログアナライザサーバのバージョンアップ手順は、“4.9.1 Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバからログアナライザサーバに移行する”を参照してください。「Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバ」は、「旧版のログアナライザサーバ」と読み替えてください。

ログアナライザを使用せずに状況画面を使用する場合は、ログアナライザサーバのバージョンアップ作業、レポート出力ツールの移行作業は、不要です。

Systemwalker Desktop Log Analyzerからの移行

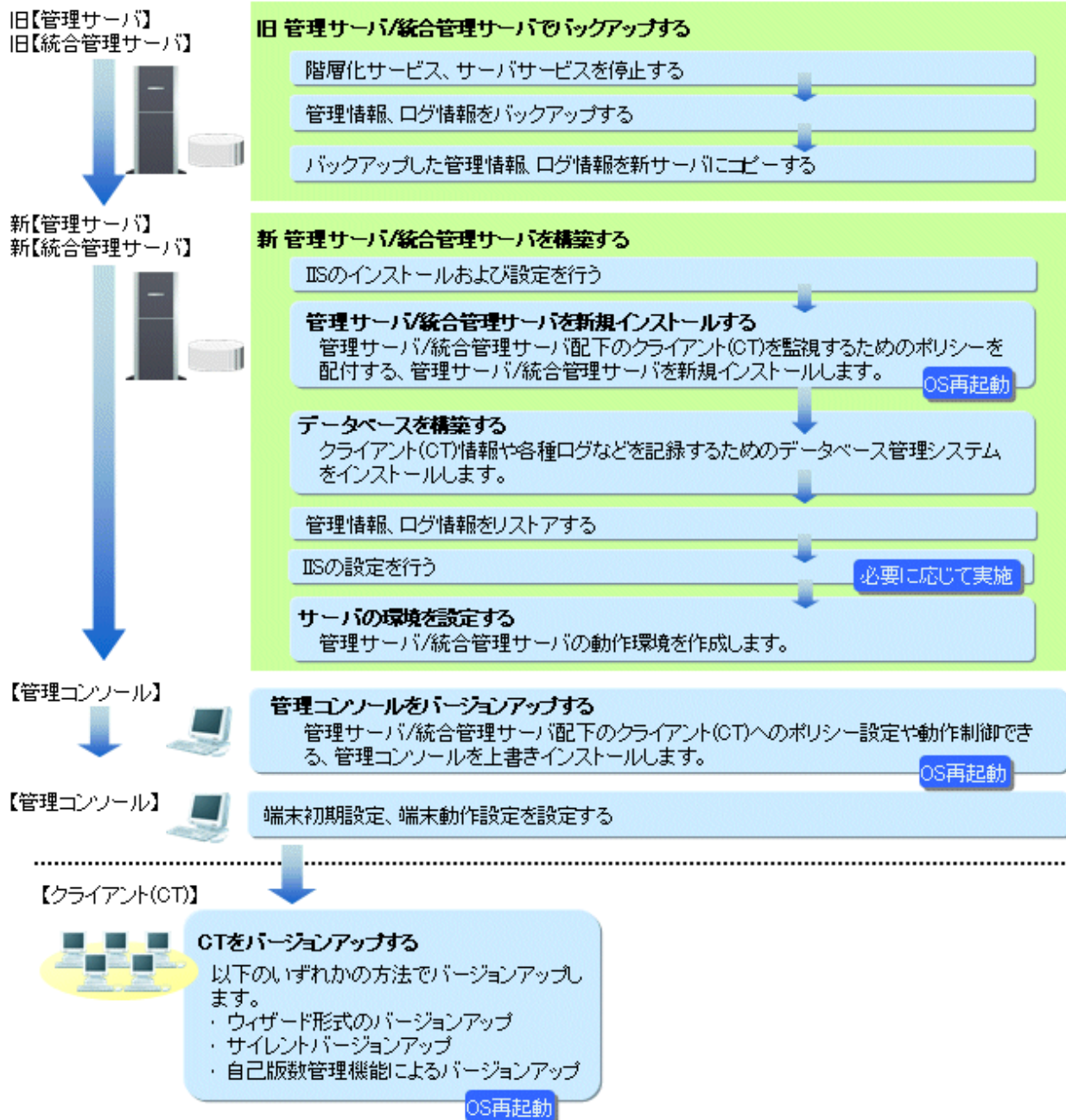
バージョンアップは、現在の環境をすべて削除してから、新規に環境を構築しなおします。バージョンアップ作業の流れを以下に示します。



4.2.2 管理サーバ/統合管理サーバを別サーバでバージョンアップする

旧版のSystemwalker Desktop Keeperから管理サーバ/統合管理サーバを別サーバ上でV15.3.0にバージョンアップする流れについて説明します。

バージョンアップの流れについては、以下のとおりです。



4.3 管理サーバ/統合管理サーバをバージョンアップする

管理サーバ/統合管理サーバのバージョンアップ手順について説明します。

4.3.1 同一サーバ上でバージョンアップする

管理サーバ/統合管理サーバを同一サーバ上でバージョンアップする方法について説明します。

バージョンアップ前に考慮すべき内容について

【管理サーバ/統合管理サーバの停止が必要です】

バージョンアップを行う場合、管理サーバ/統合管理サーバの運用を停止する必要があります。そのため、業務に支障のないように、利用者の少ない時間帯に行ってください。

【ファイアーウォールの例外ポートの追加が必要な場合があります】

管理サーバの通信ポートを変更する場合は、ファイアーウォールの許可ポートに、変更後のポート番号を追加してください。

【データ移行の時間を考慮してください】

バージョンアップの場合、データの移行が必要です。データベースの容量によっては作業に時間がかかります。現在のデータベースよりユーザー資産をバックアップする時間、データベースを新規に定義する時間、データベースにユーザー資産を復元する時間をすべて考慮する必要があります。また、ログ閲覧データベースを使用する場合は、ログ閲覧データベースを新規に定義する時間と、参照したいデータを復元する時間も考慮してください。

【上書きインストールに時間がかかる場合があります】

付帯データやコマンドプロンプトログが多数存在する環境で管理サーバ/統合管理サーバの上書きインストールを実行した場合、付帯データやコマンドプロンプトログのアクセス権の確認/変更処理のため実行時間が長くなります。(上書きインストール時間の目安:付帯データやコマンドプロンプトログの数が10万ファイルで約30分)

【初期管理者の定義について】

V13以降の初期管理者は、サーバ設定ツール、バックアップツール、リストアツール、およびリストアコマンドを使用できます。

【IISの設定について】

V14.0.0以降の版からのバージョンアップで、IISの設定が[全ての不明なISAPI拡張モジュールを許可する]の設定になっている場合には、管理サーバ/統合管理サーバインストール時にIISの設定を新たに行いません。Webコンソールは、[全ての不明なISAPI拡張モジュールを許可する]の設定のまま動作します。

【状況画面の集計スケジュールについて】

V14.0.1以前からのバージョンアップの場合、状況画面の集計処理は初期値である1:00に動作します。状況画面の集計中は階層化サービスが起動している必要があるため、状況画面の集計処理と階層化サービスを停止する操作(バックアップ・リストアや、データ転送など)の処理が重なっていないことを確認してください。もし処理が重なる場合は、バージョンアップ後に状況画面の集計スケジュールを変更してください。変更方法は“運用ガイド 管理者編”の“状況画面を利用するための準備をする”を参照してください。

【ログ閲覧データベースについて】

V14.2.0、V14.3.0からのバージョンアップでログ閲覧データベースを使用している場合は、バージョンアップ前にログ閲覧データベースを削除し、バージョンアップ後に再作成してください。

【バージョンアップに必要なディスク容量について】

バックアップツールのテーブル件数の確認画面を使用して、各テーブルの件数を確認してください。表示された件数を元に、ディスク容量を計算してください。テーブルログ内容によりませんが、平均1KB/件で計算してください。なお、1度に多量のバックアップを行えないことがあります。その場合、1テーブルで最大2000万を目安にバックアップの期間を分割して実施してください。

Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019の場合、ビルドインAdministrator以外のユーザーでバックアップツールを起動するとネットワークドライブを選択できません。これは、UACのセキュリティ強化によるものです。ビルドインAdministrator以外のユーザーでバックアップを行う場合には、権限昇格したコマンドプロンプトでネットワークドライブを割り当てた後、実行してください。

【バージョンアップに必要な時間について】

Systemwalker Desktop Keeper V15.3.0では、旧版からデータベースの移行ができないため、必要なデータをバックアップ、リストアする時間が追加で必要になります。

以下に、バックアップ、リストアについて目安の時間を記載します。

【測定結果】

- データのバックアップ
データのバックアップ時間はバックアップの対象となるログ件数により概算できます。目安は以下のとおりです。
7,000件/秒 (Xeon、2.0GHz、メモリ2GB、RAID1構成)
注)サーバ性能、RAID構成によってはこれ以上時間がかかる場合があります。
- 旧版のSystemwalker Desktop Keeperにバンドルされているデータベースの削除:巨大なデータベースでも数分程度で終了します。

3. Systemwalker Desktop Keeper V15.3.0のデータベース構築
データベース構築時間:約1分(Xeon、2.0GHz、メモリ2GB、RAID1構成)
注)サーバ性能、RAID構成によっては、これ以上時間がかかる場合があります

4. データのリストア
リストアの処理時間はリストアの対象となるログ件数により概算できます。目安は以下のとおりです。
5,000件/秒 (Xeon、2.0GHz、メモリ2GB、RAID1構成)
注)サーバ性能、RAID構成によってはこれ以上時間がかかる場合があります。

【Systemwalker Desktop Patrolが同居している場合の注意事項】

すでにSystemwalker Desktop Patrolがインストールされている環境にSystemwalker Desktop Keeperをバージョンアップインストールする場合、iOS端末を管理するためのサービスが自動的に停止します。
この場合、iOS端末を管理するためのサービスはOSを再起動するまで使用できなくなります。

【クライアント(CT)端末登録時認証について】

クライアント(CT)端末登録時認証を行う場合、管理コンソールの端末動作設定画面にて、クライアント管理パスワードを設定してください。詳細は、“運用ガイド管理者編”の“端末動作設定を行う”を参照してください。

管理サーバ/統合管理サーバのバージョンアップの手順は、以下のとおりです。“4.2 バージョンアップの流れ”に沿って以下の手順を実行してください。

IISがインストールされていない場合、管理サーバ/統合管理サーバをバージョンアップする前にIISのインストールが必要です。IISのインストールについては、“2.3.1 IISのインストールと設定”を参照してください。

管理サーバ/統合管理サーバにログオンする

1. Administratorsグループに所属するユーザーまたはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。

階層化サービス、サーバサービス、セキュア通信サービスを停止する

1. [コントロールパネル]-[ネットワーク接続]を選択します。
2. [ローカル エリア接続]を選択し、ローカルエリア接続を無効にします。無効にしたあと、1分程度待ってから次の手順を行ってください。
3. Windowsのサービス画面を表示し、以下の各サービスを選択して、[操作]メニューから[停止]を選択します。停止するまでに30秒から1分程度かかる場合があります。また、SWServerServiceを起動した直後、あるいは日付が変更になったとき(午前0時)にデータベースの空き容量の確認が動作しますが、確認動作が終了するまでの約15分間、サービスが停止しないことがあります。しばらくしてから停止を確認してください。
 - SWLevelControlService
 - SWServerService
 - SWSecureCommunicationService
4. 上記各サービス停止後、[ローカル エリア接続]を有効にします。

IISのインストールおよび設定を行う(V13からのバージョンアップの場合)

IISのインストールおよび設定方法は、新規インストール時の“2.3.1 IISのインストールと設定”と同様の手順ですので、そちらを参照してください。

IISのアプリケーションプールの停止(V15.1以降からのバージョンアップの場合)

以下の手順に従ってアプリケーションプールを停止してください。

1. [コントロールパネル]-[管理ツール]-[インターネットインフォメーションサービス(IIS)マネージャー]を起動します。
2. 左ツリーの[コンピュータ名]を展開し[アプリケーションプール]を選択します。
3. 中央のウィンドウのアプリケーションプールから[DTK]を選択します。
4. 右ウィンドウの[操作]-[アプリケーションプールタスク]から[停止]を選択します。

注意

- 中央ウィンドウのアプリケーションプールに[DTK]が存在しない場合は、DefaultAppPoolを使用しています。このプールは、他の機能でも使われている場合があるため、停止させる場合には、サーバ機能の役割をご確認の上、問題ないことを確認してください。
- アプリケーションプールはOS再起動後自動的に開始しません。バージョンアップ後、OS再起動前に、手動で開始してください。なお、開始していない場合は、Web版ログビューアを参照しようとする以下のエラーになります。
HTTP Error 503. The service is unavailable.

管理情報、ログ情報をバックアップする

バージョンアップ前の環境で、Systemwalker Desktop Keeperのバックアップコマンド、バックアップツールを使用して管理情報、ログ情報、コマンドプロンプト操作ログをバックアップします。

また、バックアップコマンドインストールフォルダ内のバッチファイルを直接利用してバックアップ運用を行っている場合は、バージョンアップによりバッチファイルも上書きされるため、バッチファイル自体の退避も必要です。

バージョンアップ前にバッチファイルを退避し、バージョンアップ後に新しいバッチファイルに設定内容を反映します。ただし、フォーマットが変更されているので、そのまま置き替えによる復元は行わないでください。

注意

バックアップ作業の注意点について

【管理情報のバックアップは必須です】

必ず、管理情報のバックアップを実施してください。実施しなかった場合、システムを復元できません。ログ情報を移行しない場合は、ログ情報のバックアップは必要ありません。

【管理情報とログ情報は同時にバックアップしてください】

管理情報とログ情報は同じタイミングでバックアップしてください。違うタイミングでバックアップしたデータの場合、データ移行が正常に行われません。

【データベースのバックアップは移行するログ情報すべてが対象です】

ログ情報は全期間のデータがバックアップ対象となるように注意してください。

【ログ閲覧データベースについて】

V14.2.0以降でログ閲覧データベースを使用している場合、ログ閲覧データベースは管理情報やログ情報をバックアップする機能はありません。そのため、移行する前に格納しているデータの範囲を確認し、バージョンアップ後にログ閲覧データベースに格納するデータを事前に用意してください。

【iOS管理データベースについて】

V15.0.0B以降でiOS管理データベースを使用している場合、iOS管理データベースはバックアップツールでは退避できません。バックアップコマンドを使用して退避してください。使用するコマンドは、DTKMSTB.EXE (管理情報の退避)です。

- 管理情報、ログ情報をすべてバックアップします。
バックアップツール(V13.0以降)、またはバックアップコマンドを使用して、管理サーバ/統合管理サーバの管理情報とログ情報の全期間のバックアップをします。
運用データベースへ全期間のログを復元する必要がない場合、またはログ閲覧データベースに格納する場合には、参照したい期間ごとにログ情報をバックアップしておくことを推奨します。その場合、バックアップコマンドを使用して期間を分割しながらバックアップするようにバッチを用意しておく便利です。
バックアップは各バージョンのバックアップコマンド、またはバックアップツールを使用します。バックアップコマンド、またはバックアップツールによるバックアップ方法は各バージョンのマニュアルを参照してください。
- バックアップ実行結果を確認します。
管理情報、ログ情報のバックアップの実行結果を確認し、正常にバックアップされていることを確認します。

- バックアップ用のバッチファイルを退避します。ただし、バッチファイルを使用していない場合、またはバッチファイルをSystemwalker Desktop Keeperのインストール先以外のユーザー任意のフォルダに移動して利用している場合は不要です。退避する必要がある場合は、バックアップ用のバッチファイルのインストール先について各バージョンのマニュアルを参照してください。

注意

バックアップ用のバッチファイルの退避はV13、V14からのバージョンアップの時にも必要です

上記のバックアップ用のバッチファイルの退避手順については、V13、V14からのバージョンアップの時にも必要な手順となります。上記の退避が必要となる条件および手順4.を確認してください。

ログ閲覧データベースを削除する(V14.2.0～V15.0.0からのバージョンアップの場合)

ログ閲覧データベースを使用している場合は、「運用環境保守ウィザード(環境構築・削除)」機能を使用してログ閲覧データベースを削除してください。

ログ閲覧データベースを削除する(V15.1.0以降からのバージョンアップの場合)

ログ閲覧データベースを使用している場合は、サーバ設定ツールを使用してログ閲覧データベースを削除してください。

運用データベースを削除する(V13.3～V15.0からのバージョンアップの場合)

旧版のデータベースの削除が必要になります。

運用環境保守ウィザード(環境構築・削除)ツールを利用して、対象のデータベースを削除してください。

旧版のデータベース(Symfoware RDB SWDTK、Symfoware RDB SWDTK2)が存在する環境で管理サーバのインストーラを実行した場合、以下のメッセージが表示されバージョンアップができません。

```
[I101-ERR115] Systemwalker Desktop Keeper管理サーバをバージョンアップできません。
以下のデータベースシステムが削除されていません。
%1
%2
```

注)可変情報には、Symfoware RDB SWDTK、Symfoware RDB SWDTK2、または両方が表示されます。

旧版のデータベースを削除後、管理サーバのインストーラを実行してください。

運用データベースを削除する(V15.1.0以降からのバージョンアップの場合)

運用データベースを使用している場合は、サーバ設定ツールを使用して運用データベースを削除してください。

iOS管理データベースを削除する(V15.0.0B～V15.0.1Bからのバージョンアップの場合)

iOS管理データベースを使用している場合は、iOS管理データベースの構築・削除コマンド(swss_MDMDB_ENV.exe)を使用して、iOS管理データベースを削除してください。指定するオプションは/Dです。

iOS管理データベースを削除する(V15.1.0以降からのバージョンアップの場合)

iOS管理データベースを使用している場合は、サーバ設定ツールを使用してiOS管理データベースを削除してください。

データベース管理システム(DBMS)をアンインストールする(V13またはV14からのバージョンアップの場合)

注意

他のアプリケーションがデータベース管理システムを使用している場合など、管理サーバ/統合管理サーバのデータベース関連ファイルのインストール先にデータベース管理システムが残っている状態の場合は、絶対にフォルダを削除しないでください。削除した場合には、データベース管理システムが動作できなくなります。

データベース関連ファイルのインストール先:C:\YDTK(デフォルトパス)

DBMS(Symfoware Server)をアンインストールします。

他のアプリケーションが使用していないことを確認してください。他のアプリケーションが使用している場合はアンインストールしないでください。

DBMS(Symfoware Server)のアンインストール手順は、以下のとおりです。

1. 管理サーバインストール時のWindowsアカウント(管理者権限)でログオンします。
2. [コントロールパネル]-[プログラムの追加と削除] または、[アプリケーションの追加と削除]を起動します。
3. “Symfoware Client”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。

注意

Symfowareクライアントアンインストール時のメッセージについて

Symfowareクライアントのアンインストール時に以下のメッセージが表示される場合がありますが、そのまま[OK]ボタンをクリックして進めてください。

```
Symfoware .NET Data Provider Installer
GACからSymfoware .NET Data Providerの下記のアセンブリのアンインストールに失敗しました。
Fujitsu.Symfoware
Fujitsu.Symfoware.resources
policy.1.80.Fujitsu.Symfoware
Symfoware Serverクライアント機能のアンインストール終了後、手動でアンインストールしてください。アンインストール方法：エクスプロータでOSのインストール先のフォルダ¥Assemblyを表示し、上記のアセンブリ名を選択し、「ファイル」メニューから「アセンブリのアンインストール」を選択します。
```

4. “Symfoware Server Enterprise Edition”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。

管理サーバ/統合管理サーバを上書きインストールする

注意

管理サーバ/統合管理サーバのバージョンアップ順序について

3階層の場合、統合管理サーバからバージョンアップを行ってください。そのあと、管理サーバでバージョンアップを行ってください。また、バージョンアップ中の不整合が発生しないよう、すべての管理サーバや統合管理サーバでのバージョンアップが完了するまで、統合管理サーバから配下の管理サーバの情報を参照しないでください。

管理サーバ/統合管理サーバと管理コンソールの同居について

管理サーバ/統合管理サーバと管理コンソールが同居している場合、管理コンソールも同時にバージョンアップされます。

ログアナライザサーバと同居している場合のバージョンアップ順序について

ログアナライザサーバと同居している場合は、必ず以下の順序でバージョンアップを行ってください。

1. 旧版のログアナライザサーバのデータベース削除とログアナライザサーバのアンインストール
詳細は“[5.7 ログアナライザサーバをアンインストールする](#)”を参照してください。
2. 管理サーバのバージョンアップ
3. 今版のログアナライザサーバのインストールとデータベース構築
詳細は“[2.8 ログアナライザサーバを構築する](#)”を参照してください。

ログアナライザ設定について

ログアナライザサーバの同居非同居に関わらずログアナライザを使用している場合は、管理サーバのバージョンアップ後に再度ログアナライザ設定を行ってください。

詳細は“[2.8.3.1 管理サーバ/統合管理サーバ上で、ログアナライザ環境を設定する](#)”を参照してください。

管理サーバ/統合管理サーバの上書きインストール手順は、以下のとおりです。

1. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。
[管理サーバ/管理コンソール インストール]を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。

2. [Systemwalker Desktop Keeper サーバ セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
3. 管理サーバ/統合管理サーバ上に、旧版のログビューアがインストールされている場合、以下のメッセージが表示されます。メッセージ画面で[OK]ボタンをクリックすると、インストール処理の前に旧版のログビューアのアンインストールが開始されます。旧版ログビューアがインストールされていない場合は、インストール処理が続行されます。

V13.3.0以前のログビューアがインストールされています。
V14.0.0以降、ログビューア機能は管理サーバに含まれるため、ログビューアのアンインストールを行います。

注意

データベースの移行ができなくなるため、フォルダを削除しないでください

ログビューアのアンインストール中に、以下のフォルダを削除する旨のメッセージが表示される場合がありますが、フォルダの削除は行わないでください。そのまま管理サーバのインストールを続行してください。

アンインストール完了後、以下のフォルダが残っている可能性があるため手動で削除を行ってください。

・トレースログ格納フォルダ：

[%1]

%1：トレースログ格納フォルダのフォルダパス

ここでは再起動は行わないでください

ログビューアのアンインストール完了時、OSの再起動を指示される場合がありますが、再起動せずにそのまま管理サーバのインストールを続行してください。

誤ってOSを再起動を実行した場合は、管理サーバの上書きインストールが中断しているため、再度上書きインストールを実行する必要があります。その場合はログビューアのアンインストールは完了しているため、上記メッセージは表示されません。

4. 管理サーバ/統合管理サーバ上にSystemwalker Desktop Log Analyzerのログ連携アダプタがインストールされている場合、以下のメッセージが表示され、ログ連携アダプタのアンインストール処理が実行されます。メッセージ画面で[OK]ボタンをクリックすると、インストール処理の前にログ連携アダプタのアンインストールが開始されます。なお、Systemwalker Desktop Log Analyzerでのログ連携アダプタの設定値は引き継がれます。ログ連携アダプタがインストールされていない場合は、インストール処理が続行されます。

V13.3.0以前のSystemwalker Desktop Log Analyzer ログ連携アダプタがインストールされています。
V14.0.0以降、ログ連携アダプタ機能はSystemwalker Desktop Keeper 管理サーバに含まれるため、ログ連携アダプタのアンインストールを行います。

注意

ここでは再起動は行わないでください

ログ連携アダプタのアンインストール完了時、OSの再起動を指示される場合がありますが、再起動せずにそのまま管理サーバのインストールを続行してください。

誤ってOSの再起動を実行した場合は、管理サーバの上書きインストールが中断しているため、再度上書きインストールを実行する必要があります。その場合はログ連携アダプタのアンインストールは完了しているため、上記メッセージは表示されません。

5. 以下のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックして、インストール処理を続行します。

インストールの最後に「正常にインストールしました」という画面が表示されます。
画面が表示されるまでインストールが継続していますのでお待ちください。

6. [I121-WRN001]のメッセージが表示されます。
7. 以下のメッセージが表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

Systemwalker Desktop Keeper管理サーバを正常にインストールしました。

8. 処理が正常に完了すると、[確認]画面が表示されます。
以下の手順でIISのアプリケーションプールを開始状態にした後、[はい]ボタンをクリックして、OSを再起動します。

1. [コントロールパネル]-[管理ツール]-[インターネットインフォメーションサービス(IIS)マネージャー]を起動します。

2. 左ツリーの[コンピュータ名]を展開し[アプリケーションプール]を選択します。
3. 中央のウィンドウのアプリケーションプールから[DTK]を選択します。
4. 右ウィンドウの[操作]-[アプリケーションプールタスク]から[開始]を選択します。

バージョンアップ時にイベントログに、以下のエラーが表示されることがありますが、問題ありません。

[種類]エラー

[ソース]SWDTK

[イベントID]3014

[説明]現在のバージョンのデータベースの構造ではありません。データベース環境を確認してください。

運用データベースを構築する

運用データベースの構築方法は、“[2.3.4.3 データベースを構築する](#)”と同様の手順ですので、そちらを参照してください。

管理情報、ログ情報をリストアする

管理サーバ/統合管理サーバを上書きインストールする直前にバックアップしておいた旧バージョンの管理情報、ログ情報をSystemwalker Desktop Keeperのリストアツールを使用してリストアします。

1. サーバ設定ツールの[管理者情報設定]画面で、アクセス権がバックアップ・リストアのユーザーIDを追加します。
2. V15.3.0のリストアツールで管理情報、ログ情報をリストアします。
リストアを行うと、自動的にデータの移行とV15.3.0で新規に作成された情報の追加を行います。リストアツールの使用方法については、“[3.1.3 ユーザー資産を復元する](#)”を参照してください。

IISの設定を行う

IISの設定は自動で行われます。ただし、V13からバージョンアップした場合は、“[2.3.3 IISの設定](#)”を参照し、必要に応じてSystemwalker Desktop Keeper専用のアプリケーションプールを作成してください。

サーバの環境を設定する

V15.3.0にバージョンアップした場合、前バージョンでの設定値は有効になっています。

また、[管理者情報設定]画面の[デバイス/メディア登録/更新/削除]、[Wi-Fi接続先登録/更新/削除]、[メール内容保存]、[バックアップログ閲覧]および[緊急対処]については、旧版に存在しない権限は、全管理者に対し権限が与えられていませんので、必要に応じて移行後に権限を付与してください。

V14.1.0以前からのバージョンアップの場合は、状況画面の設定は行われていませんので、環境設定で集計条件の設定を行ってください。設定方法は“[運用ガイド 管理者編](#)”の“[状況画面を利用するための準備をする](#)”を参照してください。

その他、サーバ環境の変更がある場合はサーバ設定を行ってください。サーバ設定の方法は、初期導入時の“[2.3.4 管理サーバ/統合管理サーバの環境を設定する](#)”と同様の手順ですので、そちらを参照してください。

V15.0.1以前からのバージョンアップの場合、データベース枯渇監視の閾値は値の範囲が「5～20」となります。

5%よりも小さな値を指定した状態でバージョンアップした場合、5%の値で上書きされます。

ログ閲覧データベースを構築する

(V14.2.0～V15.2.0からのバージョンアップの場合)

ログ閲覧データベースを使用していた場合は、V15.3.0の[サーバ設定ツール]-[データベース構築・削除・情報表示]を使用して新たにログ閲覧データベースを定義します。

ログ閲覧データベースの構築方法は、“[2.3.4.3 データベースを構築する](#)”と同様の手順ですので、そちらを参照してください。

また、ログ閲覧データベースに、閲覧したい管理情報、ログ情報を格納します。Systemwalker Desktop Keeperのリストアツールまたはリストアコマンドを使用してリストアします。リストア方法は、“[3.1.3.1 リストアツールを利用する](#)”または“[リファレンスマニュアル](#)”の“[DTKTBLRESTOR.EXE \(データベースリストアコマンド\)](#)”を参照してください。

iOS管理データベースを構築する(V15.0.0B以降からのバージョンアップの場合)

iOS管理データベースを使用していた場合は、V15.3.0の[サーバ設定ツール]-[データベース構築・削除・情報表示]を使用して新たにiOS管理データベースを定義します。

iOS管理データベースの構築方法は、“[2.3.4.3 データベースを構築する](#)”と同様の手順ですので、そちらを参照してください。

また、iOS管理データベースに、退避したiOS管理データをリストアします。リストア方法は、“リファレンスマニュアル”の“swss_MD MDB_RESTORE.exe (iOS管理データベースのリストア)”を参照してください。

4.3.2 別サーバ上でバージョンアップする



バージョンアップ前に考慮すべき内容について

【状況画面の集計スケジュールについて】

V14.0.1以前からのバージョンアップの場合、状況画面の集計処理は初期値である1:00に動作します。状況画面の集計中は階層化サービスが起動している必要があるため、状況画面の集計処理と階層化サービスを停止する操作(バックアップ・リストアや、データ転送など)の処理が重なっていないことを確認してください。もし処理が重なる場合は、バージョンアップ後に状況画面の集計スケジュールを変更してください。変更方法は“運用ガイド 管理者編”の“状況画面を利用するための準備をする”を参照してください。

旧管理サーバ/統合管理サーバにログオンする

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。

旧管理サーバ/統合管理サーバの階層化サービス、サーバサービスを停止する

Windowsのサービス画面を表示し、以下の各サービスを選択して、[操作]メニューから[停止]を選択します。停止するまでに30秒から1分程度かかる場合があります。SWServerServiceを起動した直後、または日付が変更になったとき(午前0時)にデータベースの空き容量の確認が動作しますが、確認動作が終了するまでの約15分間、サービスが停止しないことがあります。しばらくしてから停止を確認してください。

- SWLevelControlService
- SWServerService

旧管理サーバ/統合管理サーバの管理情報、ログ情報をバックアップする

Systemwalker Desktop Keeperのバックアップコマンドまたはバックアップツールを使用して管理情報、ログ情報をバックアップします。ただし、V15.0.0B以降でiOS管理データベースを使用している場合、iOS管理データベースはバックアップツールでは退避できません。管理情報はバックアップコマンドを使用してバックアップしてください。使用するコマンドは、DTKMSTB.EXE (管理情報の退避)です。

旧管理サーバ/統合管理サーバでバックアップした管理情報、ログ情報を新サーバにコピーする

旧管理サーバ/統合管理サーバでバックアップした管理情報とログ情報を新サーバにコピーします。

新管理サーバ/統合管理サーバでIISのインストールおよび設定を行う

IISのインストールおよび設定方法は、新規インストール時の“[2.3.1 IISのインストールと設定](#)”を参照してください。

新管理サーバ/統合管理サーバを新規インストールする

管理サーバ/統合管理サーバのインストール方法は、新規インストール時の“[2.3.2 管理サーバ/統合管理サーバをインストールする](#)”を参照してください。

新管理サーバ/統合管理サーバでデータベースを構築する

データベースの構築方法は、新規インストール時の“[2.3.4.3 データベースを構築する](#)”を参照してください。

新管理サーバ/統合管理サーバで管理情報、ログ情報をリストアする

管理情報、ログ情報をリストアする方法は、“[3.1.3 ユーザー資産を復元する](#)”を参照してください。

新管理サーバ/統合管理サーバでIISの設定を行う

IISの設定は自動で行われます。“2.3.3 IISの設定”を参照し、必要に応じてSystemwalker Desktop Keeper専用のアプリケーションプールを作成します。

新管理サーバ/統合管理サーバでサーバの環境を設定する

V15.3.0にバージョンアップした場合、前バージョンでの設定値は有効になっています。

また、[管理者情報設定]画面の[デバイス/メディア登録/更新/削除]、[Wi-Fi接続先登録/更新/削除]、[メール内容保存]、[バックアップログ閲覧]および[緊急対処]については、旧版に存在しない権限は、全管理者に対し権限が与えられていませんので、必要に応じて移行後に権限を付与します。

V14.1.0以前からのバージョンアップの場合は、状況画面の設定は行われていませんので、環境設定で集計条件を設定します。設定方法は“運用ガイド 管理者編”の“状況画面を利用するための準備をする”を参照してください。

その他、サーバ環境の変更がある場合はサーバの設定をします。サーバ設定の方法は、初期導入時の“2.3.4 管理サーバ/統合管理サーバの環境を設定する”と同様の手順ですので、そちらを参照してください。

また、旧サーバと新サーバのコンピュータ名が変更になる場合は、“運用ガイド 管理者編”の“管理サーバ/統合管理サーバのIPアドレス/コンピュータ名の変更に伴ってシステム環境を変更する”を参照してください。

V15.0.1以前からのバージョンアップの場合、データベース枯渇監視の閾値は値の範囲が「5～20」となります。

5%よりも小さな値を指定した状態でバージョンアップした場合、5%の値で上書きされます。

4.4 管理コンソールをバージョンアップする

管理コンソールをバージョンアップする方法について説明します。

注意

管理サーバ/統合管理サーバと管理コンソールの同居について

管理サーバ/統合管理サーバと管理コンソールが同居している場合、管理サーバ/統合管理サーバをバージョンアップすると管理コンソールも同時にバージョンアップされます。

この場合、本手順は不要です。

管理コンソールを上書きインストールしてください。手順は以下のとおりです。“4.2 バージョンアップの流れ”に沿って下記の手順を実行してください。

1. Administratorsグループに所属するユーザーまたはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。
[管理コンソール インストール]を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。
3. [Systemwalker Desktop Keeper 管理コンソール セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. [サーバ情報の入力]画面が表示されるので、接続するサーバ情報を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。
接続するサーバの設定手順は以下のとおりです。
 - a. 接続するサーバ情報は、以下の情報を設定して、[追加]ボタンをクリックします。

注意

接続する管理サーバ/統合管理サーバの設定を確認してください

接続する管理サーバ/統合管理サーバの情報と管理コンソールでの設定を同じ設定にしてください。確認方法は以下のとおりです。

1. 接続する(統合)管理サーバ上で、[スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[サーバ設定ツール]、または [アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ設定ツール]を起動します。
2. [管理サーバ設定]ボタンをクリックします。

- 以下の項目を確認します。
 - [サーバ設定]の[サーバIPアドレス]の設定値
 - [ポート番号設定]の[管理コンソール<---->階層化サービス]の設定値

-
- **[接続する(統合)管理サーバのコンピュータ名またはIPアドレス]:** 接続する管理サーバ/統合管理サーバのコンピュータ名またはIPアドレスを入力します。

コンピュータ名を入力する場合は、名前解決できているものを入力してください。名前解決できていない場合、管理サーバ/統合管理サーバと管理コンソールは接続できません。
ここで設定した値は、管理コンソールのログイン画面で[接続先サーバ名]の選択候補として表示されます。IPアドレスはIPv4形式およびIPv6形式のどちらも入力できます。
リンクローカルアドレスは入力しないでください。リンクローカルアドレスを指定した場合の動作は保障していません。

- **[使用するポート番号]:** 管理コンソールと階層化サービス間を通信するためのポート番号を入力します。指定する番号は、[ポート番号設定]の[管理コンソール<---->階層化サービス]の設定値を入力します。

追加すると設定した情報が、[追加]ボタンの下に表示されます。

- 接続するサーバが複数ある場合は、手順a.の操作をサーバ数分を行います。
なお、[↑]ボタンまたは[↓]ボタンで通常接続するサーバが上に表示されるよう調整できます。

- [インストール準備の完了]画面が表示されます。
インストールを開始する場合は、[インストール]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。
設定した内容を確認または変更したい場合は、[戻る]ボタンをクリックし、再度設定をやりなおしてください。
- 以下のメッセージが表示されるので、[OK]ボタンをクリックして、インストール処理を続行します。

インストールの最後に「正常にインストールしました」という画面が表示されます。
画面が表示されるまでインストールが継続していますのでお待ちください。

- 以下のメッセージが表示されるので、[完了]ボタンをクリックします。

Systemwalker Desktop Keeper管理コンソールを正常にインストールしました。

- 処理が正常に完了すると、[確認]画面が表示されます。
プログラムを使用するには、[はい]ボタンをクリックして、OSを再起動します。

4.5 ログビューアをアンインストールする

V13.3.0以前のログビューアをアンインストールする方法について説明します。

- Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。
他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
- [コントロールパネル]-[プログラムの追加と削除] または、[アプリケーションの追加と削除]を起動します。
- “Systemwalker Desktop Keeper ログビューア”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。
- アンインストールが実行されます。

4.6 端末初期設定・端末動作設定を行う

各環境をバージョンアップした後に端末初期設定、および端末動作設定を行う方法について説明します。
手順は以下のとおりです。“4.2 バージョンアップの流れ”に沿って下記の手順を実行してください。

階層化サービスを開始する

停止していた階層化サービスを開始します。



注意

階層化サービス開始時の注意事項について

3階層の場合、不整合が発生しないよう統合管理サーバでの端末初期設定・端末動作設定がすべて完了するまで、下位管理サーバの階層化サービスを開始しないでください。

- 下位管理サーバの階層化サービスを起動した場合、データ一元管理の設定を行っていると、管理サーバ間でデータ同期処理が開始します。そのため、複数台の管理サーバを起動する場合は少し時間をあけながら起動してください。また、データ同期処理中は管理コンソール、ログビューアは使用できません。

1. Windowsのサービス画面を表示し、階層化サービス(SWLevelControlService)を選択して、[操作]メニューから[開始]を選択します。

端末初期設定を設定する

管理コンソール画面から[端末初期設定]画面を開きます。

1. [管理コンソール]画面を起動します。
2. [動作設定]メニューから[端末初期設定]を選択します。
→[端末初期設定]画面が表示されます。

バージョンアップ前に存在しなかった機能については、初期値が設定されています。必要に応じて設定を行ってください。設定内容の詳細については、“運用ガイド 管理者編”の“端末初期設定を行う”を参照してください。

また、上記手順を行うことで、追加されたポリシーの端末初期設定は設定されますが、既存のCTポリシーやユーザーポリシーへの反映は行われません。追加されたポリシーのCTポリシーやユーザーポリシーへの反映は別途行ってください。CTポリシーやユーザーポリシーの反映方法については、“運用ガイド 管理者編”の“CTポリシー/ユーザーポリシーを変更する”を参照してください。

端末動作設定を設定する

管理コンソールの[端末動作設定]画面の初期値を変更するとき

管理コンソールの[端末動作設定]画面の初期値を変更するときは、以下の手順で行います。

1. [管理コンソール]画面を起動します。
2. [動作設定]メニューから[端末動作設定]を選択します。
→[端末動作設定]画面が表示されます。
3. [端末動作設定]の値を変更します。

管理コンソールの[端末動作設定]画面の初期値の変更を行わない場合は、次の手順に進みます。

サーバサービスを開始する

停止していたサーバサービスを開始します。



注意

統合管理サーバの設定完了後にサービスを開始してください

3階層の場合、不整合が発生しないよう統合管理サーバで“2.3.4 管理サーバ/統合管理サーバの環境を設定する”と端末初期設定・端末動作設定がすべて完了するまで、サーバサービスを開始しないでください。

1. Windowsのサービス画面を表示し、サーバサービス(SWServerService)を選択して、[操作]メニューから[開始]を選択します。

4.7 クライアント(CT)をバージョンアップする

クライアント(CT)をバージョンアップする方法について説明します。



注意

クライアント(CT)のバージョンアップは、最後に行ってください

クライアント(CT)のバージョンアップは、“4.2 バージョンアップの流れ”に沿ってクライアント(CT)以外のバージョンアップが完了してから行ってください。

OSの再起動について

インストール後にOSを再起動することで、クライアント(CT)の各機能が有効となります。また、OSを再起動せずに他のソフトウェアをインストールすると、クライアント(CT)が正常にインストールできない可能性があります。

Windows 8.1、Windows 10にクライアント(CT)をインストールする場合の注意事項

クライアント(CT)のバージョンアップを実施後、[インストールの完了]画面で[いいえ、後でコンピュータを再起動します。]を選択した場合、その後の操作で必ずOSの「再起動」を実施してください。

OSのシャットダウン(シャットダウンと電源ONの操作)を実施しても、クライアント(CT)機能は適用されません。

クライアント(CT)をバージョンアップする方法には、以下の3つがあります。それぞれの方法で、クライアント(CT)を上書きインストールします。

- ・ ウィザード形式のバージョンアップ
- ・ サイレントバージョンアップ
- ・ 自己版数管理機能によるバージョンアップ

4.7.1 ウィザード形式でバージョンアップする



注意

全角文字を含むユーザー名のユーザーがクライアント(CT)をバージョンアップする場合、エラーメッセージが表示される場合があります。全角文字を含むユーザー名のユーザーがクライアント(CT)をバージョンアップする際に、エラーメッセージが表示される場合があります。

クライアント(CT)のインストールは半角文字のみのユーザー名のユーザーにて実施してください。

ウィザード形式でのクライアント(CT)のバージョンアップ手順は、以下のとおりです。

1. Administratorsグループに所属するユーザーまたはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストーラ画面が表示されます。
[CT(クライアント)インストール]を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。
3. [Systemwalker Desktop Keeper クライアント セットアップへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. [印刷監視方式の設定]画面が表示されるので、印刷監視方式について、以下のどちらかを選択して、[次へ]ボタンをクリックします。
 - － [この端末で設定されているすべてのプリンタでの印刷を監視する(推奨)]:
1台のクライアント(CT)ごとに印刷操作ログを採取する場合に選択します。この場合、印刷操作ログはクライアント(CT)1台ごとに採取されます。
 - － [ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]:
プリンタサーバと同じ管理サーバ/統合管理サーバ配下にあるクライアント(CT)での印刷操作が、プリンタサーバを経由して行われる場合に選択します。プリンタサーバにもクライアント(CT)をインストールする必要があります。この場合、プリンタサーバではないクライアント(CT)から印刷操作ログは採取されません。印刷操作ログは、プリンタサーバから採取されます。



注意

印刷監視方式の注意点について

【統合管理サーバと管理サーバで統一してください】

統合管理サーバまたは管理サーバ配下のクライアント(CT)では、上記選択を統一してください。統一されていない場合は、印刷操作ログが採取されないことがあります。

【プリンタサーバをサーバ系OS以外にした場合の設定について】

サーバ系のOS(Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019)以外を、プリンタサーバにしている時は、[この端末で設定されているすべてのプリンタでの印刷を監視する(推奨)]と設定して運用した場合、プリンタサーバに10台以上接続して印刷できなくなります。この場合は[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]と設定してください。

P ポイント

プリンタサーバにユーザーIDを登録する

プリンタサーバに[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]を選択してクライアント(CT)がインストールされている場合、印刷が行われたクライアント(CT)で使用中のユーザーIDをプリンタサーバにも登録しておく必要があります。登録されていない場合は、印刷ログのユーザーIDが以下のように出力されることがあります。

- 印刷が行われたクライアント(CT)で使用中のユーザーIDにユーザー権限しか設定されていない場合、ログの[ユーザーID]が[Guest]として採取されることがあります。
- 印刷時にプリンタサーバに対してログオン要求があり、Administratorにてログオンした場合、ログの[ユーザーID]が[Administrator]として採取されることがあります。

5. [メール制御方式の設定]画面が表示されるので、各ポート番号を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。

- [メール送信監視用ポート番号]:クライアント(CT)とSMTPサーバ間の通信で使用するポート番号を入力します。
- [メール添付禁止用ポート番号]:メール添付禁止処理で内部的に使用するポート番号を入力します。
- [メール添付禁止用ポート番号2]:メール添付禁止処理で内部的に使用するポート番号を入力します。

注意

【未使用ポートか確認してください】

メール添付禁止用ポートは、必ず他の処理や通信等で使用していないポートを指定してください。

6. [ファイル持出しユーティリティアイコンの作成設定]画面が表示されるので、ファイル持出しユーティリティのアイコンの作成の有無を設定して、[次へ]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。
 - － **[[デスクトップ]に作成する]:** デスクトップにファイル持出しユーティリティアイコンを作成する場合に選択します。
 - － **[[送る]メニューに作成する]:** [送る]メニューにファイル持出しユーティリティアイコンを作成する場合に選択します。
7. 処理が正常に完了すると、[インストール完了]画面が表示されます。プログラムを使用するには、OSを再起動する必要があります。以下のどちらかを選択し、[完了]ボタンをクリックします。
 - － [はい、今すぐコンピュータを再起動します。]
 - － [いいえ、後でコンピュータを再起動します。]

4.7.2 サイレントバージョンアップを実施する



注意

全角文字を含むユーザー名のユーザーがクライアント(CT)をバージョンアップする場合、エラーメッセージが表示される場合があります。全角文字を含むユーザー名のユーザーがクライアント(CT)をバージョンアップする際に、エラーメッセージが表示される場合があります。クライアント(CT)のインストールは半角文字のみのユーザー名のユーザーにて実施してください。

準備したインストール設定ファイルを使用して、バージョンアップする方法について説明します。なお、Systemwalker Desktop Patrolのソフトウェア配信機能を利用して、クライアント(CT)を一括してバージョンアップできます。Systemwalker Desktop Patrolのソフトウェア配信方法については、「[Systemwalker Desktop Patrolのソフトウェア配信機能を使用した導入](#)」を参照してください。サイレントバージョンアップ手順は、「[2.6.1.2 サイレントインストールを実施する](#)」と同様の手順で行うので、そちらを参照してください。



注意

【未使用ポートか確認してください】

メール添付禁止用ポートは、必ず他の処理や通信等で使用していないポートを指定してください。

4.7.3 自己版数管理機能を使用してバージョンアップする

Systemwalker Desktop Keeperの機能である自己版数管理機能によるバージョンアップの方法について説明します。



注意

自己版数管理機能を使用する前の注意点について

【ファイアウォールを一時的に無効にしてください】

自己版数管理機能によるバージョンアップを実行する場合、Windowsファイアウォール機能を有効にしていると、クライアントにバージョンアップを確認する画面が表示されないことがあります。この場合、一時的にクライアント端末のWindowsファイアウォール機能を無効にして、OSを再起動することで、バージョンアップを確認する画面が表示されます。バージョンアップ完了後、Windowsファイアウォール機能を有効にしてください。

【同時にダウンロードできる端末数について】

自己版数管理機能で、同時に適用できる端末数の初期値は5となっています。この端末数を変更する場合は、サーバ設定ツールの[フォルダ/CT自己版数アップ設定]画面の[同時ダウンロード数(最大)]で変更してください。なおこの設定値を超える端末は次回起動時に再度、自己版数管理機能が実行されます。

【Windows 7、Windows 8.1、Windows 10に自己版数管理機能を利用する場合】

Windows 7、Windows 8.1、Windows 10の環境に自己版数管理機能を利用する場合、Windowsの「リモートデスクトップ接続」など、Windowsターミナルサービス経由のリモートからログオンしないでください。

【Windows 8.1、Windows 10の高速スタートアップ機能について】

Windows 8.1、Windows 10で高速スタートアップ機能が有効な場合、ログオンしていない状態でシャットダウン操作を行うと、通常、PC起動時に実施する「移行対象情報ファイル」や「CT動作パラメーター情報ファイル」の反映動作、CTポリシーの要求動作、自己版数アップのチェックが動作しない場合があります。確実にこれらの動作を行わせるためには、シャットダウンではなくOSの再起動を行ってください。

【通信セキュリティ設定について】

V14.3.1以前のクライアント(CT)の自己版数管理要求を受け付ける場合、通信セキュリティ設定を切り替えてください。セキュリティ強化コマンドを使用することで通信セキュリティ設定を切り替えることが可能です。セキュリティ強化コマンドの使用方法については、「リファレンスマニュアル」の“DTKSETCN.exe (セキュリティ強化コマンド)”を参照してください。

【クライアント(CT)端末登録時認証について】

V15.1.0より前のバージョンのクライアント(CT)をV15.1.0以降の管理サーバに登録する場合、クライアント(CT)端末登録時認証は使用できません。クライアント管理パスワードを解除してください。詳細は、「運用ガイド管理者編」の“端末動作設定を行う”を参照してください。

【管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間の通信について】

管理サーバ/統合管理サーバとクライアント(CT)間の通信は暗号化されます。そのため、V14.3.1以前の通信暗号化の修正を適用していないクライアント(CT)との通信など、暗号化されていない通信については制限されます。

- V13.3.0～V14.3.1のクライアントは、2014年9月以降の緊急修正を適用するか、V15.1.0以降へのバージョンアップが必要です。
- V13.2.1以前のクライアントは使用できません。V15.1.0以降へのバージョンアップが必要です。
- 管理サーバをV15.1.0以降にバージョンアップした後は、新規インストールできるクライアントはV15.0.0以降です。ただし、管理サーバのバージョンより新しいバージョンのクライアントはインストールできません。

【接続先管理サーバの変更と自己版数管理機能を使用したバージョンアップを同時に行う場合について】

V14.3.1以前の通信暗号化の修正を適用していないクライアント(CT)は、新管理サーバとの間で管理情報登録のための通信が制限されるため、バージョンアップはできません。このため、事前にクライアント(CT)に対し、2014年9月以降の緊急修正を適用しておいてください。



注意

管理(統合管理)サーバにクライアント(CT)を導入している場合の注意点について

管理(統合管理)サーバにクライアント(CT)を導入している場合に、クライアント(CT)の自己版数管理機能によるバージョンアップを設定した場合は、通常自己版数管理機能どおり自己版数アップを行うかどうかの要求があります。自己版数アップを行うと、サーバの再起動が必要なため、他のクライアント(CT)の接続状態など、運用状態を考慮し、適用するかどうか判断してください。

確認画面、完了画面を非表示にした場合の動作について

クライアント動作設定で[自己版数アップ確認画面を表示する]、および[再起動確認画面を表示する]をチェックしていない場合でも、クライアント側ではサーバからのモジュールコピー時のダイアログが表示されます。



ポイント

IPアドレス、またはコンピュータ名の指定により、指定クライアント(CT)に対して自己版数アップを実施できます

全クライアント(CT)一斉の自己版数アップを行わずに、指定したクライアント(CT)に対してだけ自己版数アップを実施できます。例えば、以下のような場合に使用してください。

- ・バージョンアップを全体展開する前に特定の部門だけでテストしたいとき
- ・部門や事業所など、組織のまとまりごとに展開していきたいとき
- ・負荷分散のため、一定のクライアント(CT)台数ごとに展開したいとき

この機能は、「自己版数アップ可能CT設定ファイル(SWCTVerUpIP.txt)」を作成することで実施できます。設定方法は以下のとおりです。この手順は、後述のバージョンアップの手順を実施する前に行ってください。

1. 「SWCTVerUpIP_sample.txt」を「SWCTVerUpIP.txt」という名前でコピー(または、変名)します。「SWCTVerUpIP_sample.txt」は以下のフォルダに格納されています。

Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019の場合:

[OSインストールドライブ]¥ProgramData¥Fujitsu¥Systemwalker Desktop Keeper
--

2. 「SWCTVerUpIP.txt」をメモ帳などのテキストエディタで開きます。
3. 自己版数アップ可能CTのIPアドレス、またはコンピュータ名を記述します。
4. 「SWCTVerUpIP.txt」を保存します。(上記フォルダから移動しないでください。)ファイルの詳細、IPアドレス、またはコンピュータ名の指定方法は、“リファレンスマニュアル”の“自己版数アップ可能CT設定ファイル”を参照してください。

.....

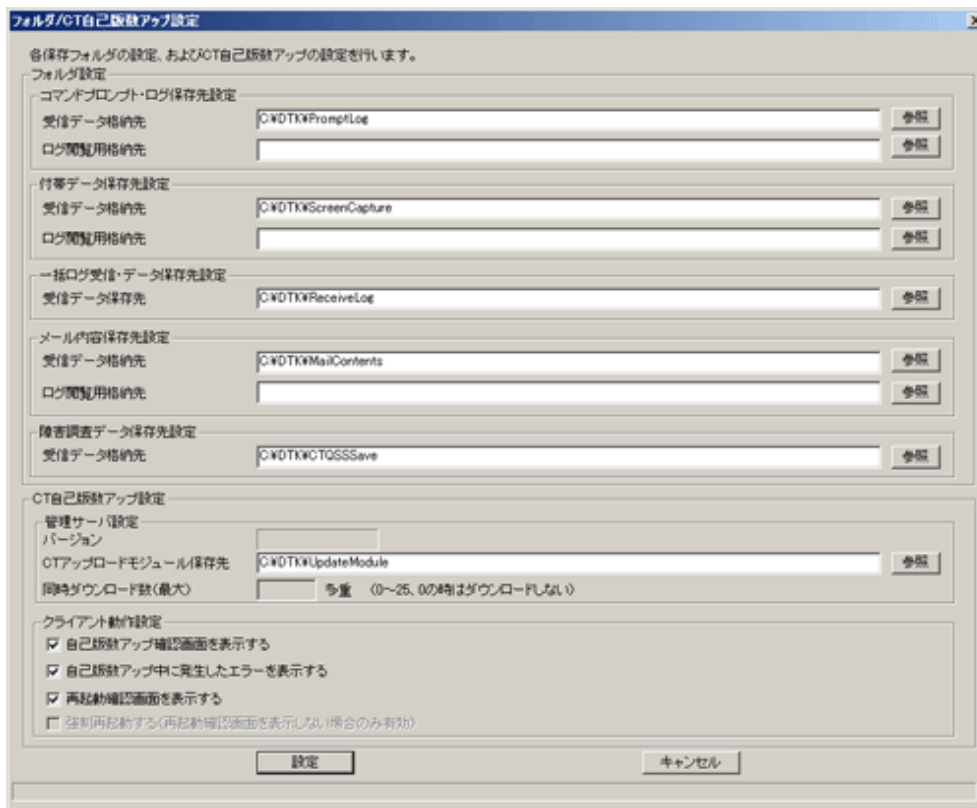
自己版数管理機能によるバージョンアップ手順は、以下のとおりです。なお、以下の手順で示しているファイルの格納先は、OSのインストール先を変更している場合異なります。

サーバの設定

クライアント(CT)が配下にある管理サーバ/統合管理サーバで以下の設定を行います。

1. 管理サーバ/統合管理サーバで、[コントロールパネル]-[ネットワーク接続]を選択します。
2. [ローカル エリア接続]を選択し、ローカルエリア接続を無効にします。無効にしたあと、1分程度待ってから次の手順を行ってください。
3. 管理サーバ/統合管理サーバで、Windowsのサービス画面を表示し、以下の各サービスを選択して、[操作]メニューから[停止]を選択します。停止するまでに30秒から1分程度かかる場合があります。また、SWServerServiceを起動した直後、あるいは、日付が変更になったとき(午前0時)にデータベースの空き容量の確認が動作しますが、確認動作が終了するまでの約15分間、サービスが停止しないことがあります。しばらくしてから停止を確認してください。
 - SWLevelControlService
 - SWServerService
4. 上記各サービス停止後、[ローカル エリア接続]を有効にします。
5. 管理サーバ/統合管理サーバで、セットアップディスクの「win32¥DTKUpdate」フォルダ配下の「SWCTVerSettings2.ini」ファイルを、以下に格納します。
 - Windows Server 2008の場合:「C:¥Windows¥System32」
 - Windows Server 2008の64ビット版、Windows Server 2008 R2、Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019の場合:「C:¥Windows¥SYSWOW64」
6. 「SWCTVerSettings2.ini」ファイルについて、ファイルのプロパティを開き[読み取り専用]チェックボックスのチェックを外して、[OK]ボタンをクリックします。
7. 管理サーバ/統合管理サーバで、「SWCTVerSettings.ini」ファイルの[DistModuleDir]に記述されている場所に以下のフォルダを格納します。
セットアップディスクの「win32¥DTKUpdate」フォルダ配下の「Verx.xx.x.x」フォルダ
なお、「SWCTVerSettings.ini」ファイルは、以下に格納されています。
 - Windows Server 2008の場合:「C:¥Windows¥System32」
 - Windows Server 2008の64ビット版、Windows Server 2008 R2、Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019の場合:「C:¥Windows¥SYSWOW64」

- サーバ設定ツールでCT自己版数アップ設定を行います。
サーバ設定ツールのメニューから[フォルダ/CT自己版数アップ設定]ボタンをクリックします。
→[フォルダ/CT自己版数アップ設定]画面が表示されます。



- [CT自己版数アップ設定]に表示されている“管理サーバ設定”、および“クライアント動作設定”を行います。
([フォルダ設定]については、ここでは設定の必要はありません。設定内容については、“[2.3.4.11 保存先フォルダを設定する](#)”を参照してください。)

[管理サーバ設定]

項目名	説明
[バージョン]	CT自己版数アップ用iniファイル(SWCTVerSettings2.ini)が存在した場合に、CT自己版数アップ用iniファイルに指定しているバージョンを表示します。CT自己版数アップ用iniファイルがない場合は表示しません。
[CTアップロードモジュール保存先]	クライアント(CT)の自己版数アップ用モジュールを格納する保存先フォルダを指定します。指定方法は、以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> フルパスでフォルダ名を入力する 自己版数アップ用モジュールを格納する保存先フォルダまでのパスをフルパスで入力します。 [参照]ボタンから選択する [フォルダの参照]画面が表示されるので、自己版数アップ用モジュールを格納する保存先フォルダを選択したあとに、[OK]ボタンをクリックします。 指定できるフルパスの長さは、半角で96文字(全角で48文字)まで入力できます。ただし、以下の記号はフォルダ名として使用できません。 使用できない記号:「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」
[同時ダウンロード数(最大)]	クライアント(CT)の自己版数アップの多重度を設定します。設定できる値は0から25で0を指定すると自己版数アップ処理が行われません。 CT自己版数アップ用iniファイルがない場合は表示および設定できません。

[クライアント動作設定]

項目名	説明
[自己版数アップ確認画面を表示する]	<p>クライアント(CT)にて自己版数アップの実施を利用者に確認させるかどうかの設定です。チェックされている場合、クライアント(CT)端末起動後しばらくすると以下のメッセージが表示され、自己版数アップを行うかどうかを利用者が選択できます (V13.2.1までの動作です)。</p> <p>チェックされていない場合、確認画面は表示されず、バックグラウンドで自己版数アップ用インストーラがダウンロードされ、実行されます。</p> <hr/> <p>S101-ASK002 最新のモジュールが提供されています。最新版に更新する場合は、「はい」を押してください。更新しない場合は「いいえ」を押してください。「はい」を選択し更新が完了するとOSの再起動が必要となりますので、アプリケーションを終了させておいてください。</p> <hr/> <p>[はい]を選択した場合、自己版数アップが実行されます。[いいえ]を選択した場合、自己版数アップは実行されません。</p>
[自己版数アップ中に発生したエラーを表示する]	<p>クライアント(CT)にて自己版数アップ実施中にエラーが発生した場合にエラー画面を表示するかどうかの設定です。</p> <p>チェックされている場合、自己版数アップによるインストール中にエラーが発生すると、以下のエラーメッセージを表示し、そこで処理が止まります。利用者が手でエラー画面を消さない限り自己版数アップが終了しません(V13.2.1までの動作です)。</p> <p>チェックされていない場合、エラー画面は表示されず、そのまま自己版数アップがエラー終了します。各クライアント(CT)にて自己版数アップが適用されたかどうかを確認するには管理コンソールにて該当クライアント(CT)のCTバージョンを確認してください。</p> <hr/> <p>[1401-ERR011] Systemwalker Desktop Keeper クライアントのインストールに失敗しました。 インストールログファイル内のエラー内容を確認してください。 インストールログファイル:[インストールログファイル名]。 インストールを中止します。</p> <hr/>
[再起動確認画面を表示する]	<p>クライアント(CT)にて自己版数アップ実施後の再起動画面を表示するかどうかの設定です。この項目は[強制再起動する]のチェックされていない場合のみ有効となります。[強制再起動する]がチェックされている場合はグレースアウトされます。</p> <p>チェックされている場合、自己版数アップによるインストール完了後、再起動画面が表示されます。</p> <p>「はい、今すぐコンピュータを再起動します。」または「いいえ、後でコンピュータを再起動します。」のどちらかを選択してください。</p> <p>チェックされていない場合、自己版数アップによるインストール完了後、何も表示されずに自己版数アップが終了します。終了後再起動するかどうかは、次項目の[強制再起動する]の設定により動作が変わります。</p> <p>なお再起動する前までは自己版数アップを適用する前の版のクライアント(CT)が動作します。</p>
[強制再起動する]	<p>クライアント(CT)にて自己版数アップ実施後強制的に再起動するかどうかの設定です。この項目は[再起動確認画面を表示する]のチェックされていない場合のみ有効となります。[再起動確認画面を表示する]のチェックされている場合はグレースアウトされます。</p> <p>チェックされている場合、自己版数アップによるインストール完了後、自動的に再起動が実行されます。ファイルなどを開いていた場合、内容が保存されずに終了してしまうため、内容が失われてしまう可能性があります。</p> <p>チェックされていない場合、自己版数アップによるインストールが完了するとそこで処理が終了します。[再起動確認画面を表示する]のチェックがされていない場合は[再起</p>

項目名	説明
	動確認]画面は表示されず、自動的に再起動もしません。ユーザーによる手動の再起動が必要となります。

10. サーバ設定ツールでCTサイレントインストールファイルの作成を行います。設定の方法は“インストール設定ファイルを作成する”を参照してください。

ポイント

自己版数管理機能を使用したバージョンアップ時に参照する項目

自己版数管理機能を使用時のバージョンアップ時には、CTサイレントインストールファイル作成時に指定した以下の項目のみ参照します。他の項目は参照しません。

- － [印刷の監視方式]
- － [メール添付禁止機能]
- － [ファイル持出しユーティリティアイコンの作成設定]
- － [ポート番号(メール添付禁止用)]
- － [ポート番号(メール添付禁止用2)]
- － [ポート番号(メール送信監視用)]
- － [ログオン直後の適用ポリシー]

11. 手順10.で作成したCTサイレントインストールファイルを、手順7.で格納したフォルダ「Verx.xx.x.x」配下に格納します。
12. 管理サーバ/統合管理サーバで、Windowsのサービス画面を表示し、停止した各サービス(「SWLevelControlService」および「SWServerService」)を選択して、[操作]メニューから[開始]を選択します。

クライアント(CT)の操作

1. バージョンアップするクライアント(CT)を起動して、ログオンします。

→以下のメッセージが表示されます。

[S101-ASK002] 最新のモジュールが提供されています。
 最新版に更新する場合は、「はい」を押してください。
 更新しない場合は「いいえ」を押してください。「はい」
 を選択し更新が完了するとOSの再起動が必要となります
 ので、アプリケーションを終了させておいてください。

注意

【はい】を選択してください

上記のメッセージ画面では、必ず【はい】ボタンをクリックしてください。【いいえ】ボタンをクリックした場合は、「メール送信ログ取得機能」、「メール添付禁止機能」は、再起動するまで動作しません。

2. 【はい】ボタンをクリックすると、「アップデート完了」画面が表示されます。

注意

再起動を行わないと、禁止やログ採取が正常に動作できません

以下の画面では、必ず再起動してください。再起動を行わない場合は、「メール送信ログ取得機能」、「メール添付禁止機能」は、動作しません。

【未使用ポートを確認してください】

メール添付禁止用ポートは、必ず他の処理や通信等で使用していないポートを指定してください。

3. [完了]ボタンをクリックします。
→クライアント(CT)が再起動されます。

4.8 Citrix XenApp監視機能をバージョンアップする

Citrix XenApp監視機能をバージョンアップする方法について説明します。

【バージョンアップ前の確認事項】

- Citrix XenAppにて、公開アプリケーションから正常にログオフした後にアクティブ状態のセッションが残る場合があります。Citrix XenApp監視機能の導入時に、以下の記事内の対処を行ってください。
<http://support.citrix.com/article/CTX102282>
なお、追加するプロセスのファイル名は以下のものを指定してください。
fsw11eja.exe, fsw21ej0.exe, fsw21ej6.exe

Citrix XenApp監視機能を上書きインストールしてください。手順は以下のとおりです。“4.2 バージョンアップの流れ”に沿って下記の手順を実行してください。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットすると、インストール画面が表示されます。
「Citrix XenApp監視 インストール」を選択します。
インストーラ画面が起動しない場合は、DVD-ROMドライブの「swsetup.exe」を起動してください。
3. 「Citrix XenApp監視 セットアップへようこそ」画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. 「印刷監視方式の設定」画面が表示されるので、[この端末で設定されているすべてのプリンタでの印刷を監視する(推奨)]を選択して、[次へ]ボタンをクリックします。

注意

プリンタサーバをサーバ系OS以外にした場合の設定について

サーバ系のOS(Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、Windows Server 2019)以外を、プリンタサーバにしている場合は、この端末で設定されているすべてのプリンタでの印刷を監視する(推奨)]を設定して運用したとき、プリンタサーバに10台以上接続して印刷できなくなります。この場合は[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]を設定してください。[ローカルプリンタでの印刷のみを監視する]を設定する場合は、“2.6.1.1 ウィザード形式でインストールする”の手順10.を参照してください。

5. 「インストール準備の完了」画面が表示されます。
インストールを開始する場合は、[インストール]ボタンをクリックします。インストール処理が開始されます。
設定した内容を確認または、変更したい場合は、[戻る]ボタンをクリックし、再度設定をやりなおしてください。
6. 処理が正常に完了すると、「インストール完了」画面が表示されます。
プログラムを使用するには、OSを再起動する必要があります。以下のどちらかを選択し、[完了]ボタンをクリックします。
 - [はい、今すぐコンピュータを再起動します。]
 - [いいえ、後でコンピュータを再起動します。]

4.9 Systemwalker Desktop Log Analyzerから移行する

Systemwalker Desktop Log AnalyzerからSystemwalker Desktop Keeperに移行する場合の方法について説明します。

4.9.1 Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバからログアナライザサーバに移行する

Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバからSystemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバへ移行するには、現在の環境をすべて削除した上で、新規にログアナライザサーバを構築します。

またログデータについては、Systemwalker Desktop Keeper管理サーバ/統合管理サーバからデータを再移入することによりログアナライザサーバに格納します。

移行手順は以下のとおりです。なお、ログアナライザサーバの移行手順の実施前に、管理サーバ/統合管理サーバのバージョンアップが完了していることを確認してください。

Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバをアンインストールする

移行前に、Systemwalker Desktop Log Analyzer 管理サーバ環境を削除しておく必要があります。

Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバのアンインストール方法については、Systemwalker Desktop Log Analyzerのマニュアルを参照してください。



注意

NAVIDICフォルダとNAVISVフォルダを削除してください

Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバおよび同梱しているInterstage Navigator Serverのアンインストール後に以下のフォルダが残っている場合は、手動で削除を行ってください。削除を行わない場合、ログアナライザサーバが正しくインストールされない場合があります。

- ・ [Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバインストールフォルダ]¥NAVIDIC
- ・ [Systemwalker Desktop Log Analyzer管理サーバインストールフォルダ]¥NAVISV

ログアナライザサーバをインストールする

新規にSystemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバを構築します。構築方法は、“[2.8 ログアナライザサーバを構築する](#)”を参照してください。

ログアナライザサーバの運用環境を整える

ログアナライザサーバの運用環境を設定します。設定方法については、“運用ガイド 管理者編”の“ログの転送をスケジュールする”および“集計条件/レポート出力条件を設定する”を参照してください。

4.9.2 レポート出力ツールを移行する

Systemwalker Desktop Keeper レポート出力ツールを新規に構築します。構築方法は、“[2.9 レポート出力の環境を構築する](#)”を参照してください。

4.10 中継サーバをバージョンアップする

中継サーバのバージョンアップは以下の手順で実施します。



注意

- ・ バージョンアップ前の環境とバージョンアップ後の環境は、IPアドレスとホスト名が同じ値である必要があります。
- ・ Systemwalker Desktop Keeperの中継サーバとSystemwalker Desktop PatrolのSSが同居している環境でバージョンアップを行う場合は、中継サーバとSSの両方をアンインストールしたあとで、新しいバージョンの製品からインストールを行う必要があります。例えば、Systemwalker Desktop KeeperのバージョンがV15.1.3で、Systemwalker Desktop PatrolのバージョンがV15.1.1の場合、Systemwalker Desktop Keeperの中継サーバからインストールしてください。
- ・ V15.0.0A以前からバージョンアップを行う場合、鍵生成アルゴリズムにDSAが指定された証明書の中継サーバに登録している場合、バージョンアップはできません。インストールされている製品の以下のマニュアルを参照し、鍵生成アルゴリズムがRSAの証明書を再作成後、バージョンアップを行ってください。
“導入ガイド”の“スマートデバイスと中継サーバ間をhttps通信する場合の手順”

4.10.1 V15.0.0A以前のバージョンからのバージョンアップ

1. 中継サーバの資産の退避を行ってください。退避方法については、インストールされている製品の以下のマニュアルを参照してください。
“導入ガイド”の“中継サーバの保守”
2. 中継サーバのアンインストールを行ってください。アンインストール方法については、インストールされている製品の以下のマニュアルを参照してください。
“導入ガイド”の“中継サーバをアンインストールする”
3. “2.10.1 データベースの公開設定を行う(統合管理サーバ/管理サーバ)”と2.10.2 中継サーバをインストールする”を参照し、中継サーバのインストールを行ってください。
4. 中継サーバの動作環境を設定します。管理するスマートデバイス(Android端末またはiOS端末)ごとに、以下の設定を行ってください。

4.10.1.1 スマートデバイスの情報を設定する

・Android端末の場合

1. V15.0.0A以前の中継サーバで退避したファイル(persistence.xml)を以下の復元先に上書きコピーします。

```
[中継サーバインストールディレクトリ]¥F3Fmisje6¥var¥domains¥domain1¥applications¥swms¥WEB-INF¥classes¥META-INF¥persistence.xml
```

2. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、以下の設定をします。
 - 管理サーバ/統合管理サーバを設定します。指定するオプションは、-hです。
 - Android端末の管理を有効化します。指定するオプションは、-Android.enabledです。
3. デフォルトのポート番号(48080)に変更がある場合は、“リファレンスマニュアル”の“使用するポート番号の変更方法”を参照し、ポート番号を変更します。
4. スマートデバイス(エージェント)(Android)とHTTPS通信を行う場合は、HTTPS通信用の証明書環境を構築します。
詳細な手順は、“4.10.1.2 HTTPS通信を設定する”を参照してください。本手順は、iOS端末を管理する場合と共通のため、iOS端末の設定で実施されている場合には、実施する必要はありません。
5. 中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)で、中継サーバを起動します。



注意

手順3と手順4の設定項目(手順3は、管理サーバ/統合管理サーバのポート以外)は、Systemwalker Desktop Patrolと共通で使用する項目です。Systemwalker Desktop Patrolですでに設定されている場合には、設定する必要はありません。

・iOS端末の場合



ポイント

以下の手順1から手順4までは、一度で設定できます。

1. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、iOS端末の管理を有効化します。指定するオプションは、-iOS.enabledです。
2. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、管理サーバ/統合管理サーバを設定します。指定するオプションは、-hです。
3. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、iOS端末から接続するサーバまたはリバースプロキシの設定をします。指定するオプションは、-iOS.connect.h、-iOS.connect.pおよび-iOS.connect.profile.pです。
4. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、iOS管理データベースを設定します。指定するオプションは、-iOSmgr.hです。
Systemwalker Desktop KeeperだけでiOS端末を管理する場合は、管理サーバを指定してください。
Systemwalker Desktop PatrolでもiOS端末を管理する場合には、管理サーバまたはSystemwalker Desktop PatrolのCSのうち、iOS

管理データベースを運用しているサーバを指定してください。
この設定値は、一度設定したあと変更しないでください。

5. iOS管理データベースとの通信に使用するデフォルトのポート番号(55432)に変更がある場合は、“リファレンスマニュアル”の“使用するポート番号の変更方法”を参照し、ポート番号を変更します。
6. スマートデバイス(エージェント)(iOS)とHTTPS通信を行うため、HTTPS通信用の証明書環境を構築します。
詳細な手順は、“4.10.1.2 HTTPS通信を設定する”を参照してください。本手順は、Android端末を管理する場合と共通のため、Android端末の設定で、実施されている場合には、実施する必要はありません。
7. Apple社証明書登録コマンド(swss_ImportAppleCert.bat)を利用して、“2.2 事前準備”で準備したMDM証明書を導入します。
8. 中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)で、中継サーバを起動します。

注意

Systemwalker Desktop PatrolのSSと共存する場合の注意事項

- 手順1～手順4の中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で設定する以下の項目は、Systemwalker Desktop Keeperだけで使用する項目です。
 - -h
 - -p
 - -Android.http.p
 - -Android.https.p
 - -Android.enabled
 - iOS.enabled
- 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で設定する以下の項目は、Systemwalker Desktop Patrolと共通で使用する項目です。
 - -iOSmgr.h
 - -iOSmgr.p
 - -iOS.profile.p
 - -iOS.https.p
 - -iOS.connect.h
 - -iOS.connect.p
 - -iOS.connect.profile.p
- 手順6および手順7の設定項目は、Systemwalker Desktop Patrolと共通で使用する項目です。
- Systemwalker Desktop Patrolと共通で使用する項目は、Systemwalker Desktop Patrolでも同じ値を設定してください。
Systemwalker Desktop Keeperで設定した後に、同じ設定項目をSystemwalker Desktop Patrolで異なる値に変更するとSystemwalker Desktop Keeperで実施した設定も変更されます。また、Systemwalker Desktop Patrolで設定した後に、同じ設定項目をSystemwalker Desktop Keeperで異なる値に変更すると、Systemwalker Desktop Patrolで実施した設定も変更されます。

4.10.1.2 HTTPS通信を設定する

中継サーバとスマートデバイス(エージェント)間をHTTPS通信する場合の設定方法を説明します。設定手順は、V15.0.0A以前でHTTPS通信を行っていたかどうかによって異なります。

V15.0.0A以前でHTTPS通信を行っていた場合

1. 中継サーバのサービス起動・停止コマンド(SDSVService.bat)で、中継サーバを停止します。

2. 証明書の登録コマンド(SDSVImportCert.EXEコマンド)で、V15.0.0A以前で保管しておいた認証局証明書および中間認証局証明書を登録します。
3. サーバ証明書の退避復元コマンド(SDSVKeyStore.EXEコマンド)で、V15.0.0A以前で退避しておいたサーバ証明書に関する情報を復元します。
4. SDSVConfig.exeコマンドで、手順3で復元したサーバ証明書の使用を「有効」にします。

V15.0.0A以前でHTTPS通信を行っていない場合

“2.10.3.2 HTTPS通信を設定する”の“証明書導入時の設定”を参照し、設定を行ってください。

各コマンドの詳細については、“リファレンスマニュアル”の“コマンドリファレンス”を参照してください。

4.10.2 V15.0.0B以降のバージョンからのバージョンアップ

1. 中継サーバの退避を行ってください。退避方法については、インストールされている製品の以下のマニュアルを参照してください。
“導入ガイド”の“中継サーバの保守”
2. 中継サーバのアンインストールを行ってください。アンインストール方法については、インストールされている製品の以下のマニュアルを参照してください。
“導入ガイド”の“中継サーバをアンインストールする”
3. “2.10.1 データベースの公開設定を行う (統合管理サーバ/管理サーバ)”と2.10.2 中継サーバをインストールする”を参照し、中継サーバのインストールを行ってください。このとき、バージョンアップ前のインストール先と同じパスにインストールする必要があります。
4. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、以下の設定をします。
 - － Android端末を管理する場合、管理を有効化します。指定するオプションは、-Android.enabledです。
 - － iOS端末を管理する場合、管理を有効化します。指定するオプションは、-iOS.enabledです。
 - － 管理サーバ/統合管理サーバを設定します。指定するオプションは、-hです。
5. “3.2.2 資源の復元方法”を参照し、資産の復元を行ってください。

4.11 スマートデバイス(エージェント)をバージョンアップする

すでにSystemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバの構築が完了している状態で、スマートデバイス(エージェント)を導入します。

スマートデバイス(エージェント)(Android)のバージョンアップ

すでにスマートデバイス(エージェント)(Android)が導入されている環境に本バージョンのスマートデバイス(エージェント)(Android)を導入する場合は、以下の手順でインストールしてください。

1. 配付されたSystemwalker_Log_Agent.apkを選択します。
2. [インストール]ボタンをタップします。

3. 「この既存のアプリケーションへのアップデートをインストールしてもよろしいですか？」の画面が表示されます。この画面で[インストール]ボタンをタップします。



スマートデバイス(エージェント)(iOS)のバージョンアップ

スマートデバイス(エージェント)(iOS)については、エージェントは旧バージョンのもと同じであるため、バージョンアップは不要です。中継サーバをバージョンアップするだけで問題ありません。

注意

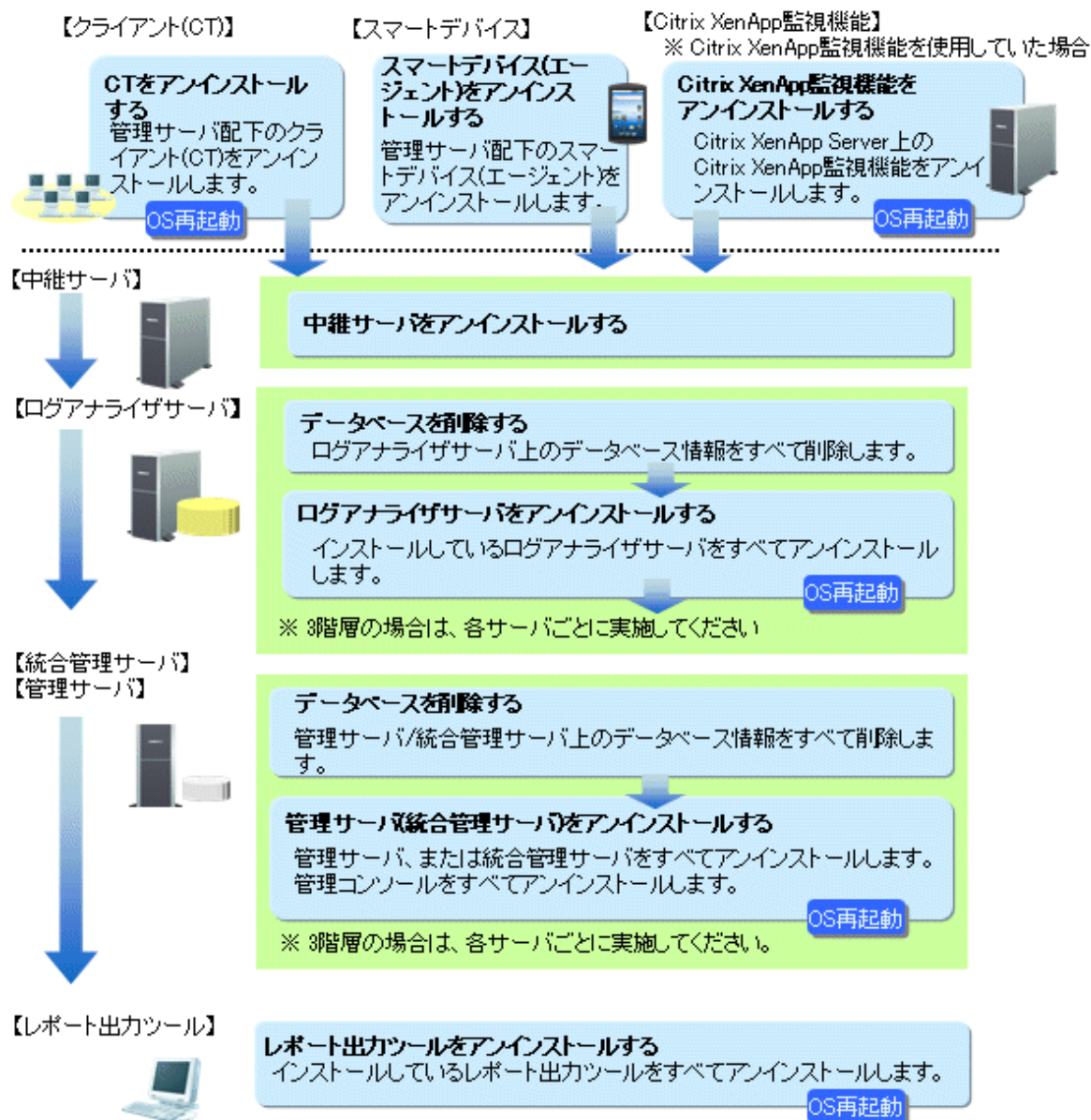
- 最新版のスマートデバイス(エージェント)に、旧版を上書きインストールしないでください。正常に動作しなくなります。
- 中継サーバとスマートデバイス間でhttps通信を行っている場合は、サーバ証明書の退避復元コマンド(SDSVKeyStore.exe)を利用してサーバ証明書のバックアップを実施してください。コマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“SDSVKeyStore.EXE (サーバ証明書の退避復元)”を参照してください。

第5章 アンインストール

本章では、Systemwalker Desktop Keeperのアンインストール方法について説明します。

5.1 アンインストールの手順

Systemwalker Desktop Keeperのアンインストールの手順について説明します。



管理サーバ/統合管理サーバにクライアント(CT)を導入している場合

管理サーバ/統合管理サーバにクライアント(CT)を導入している場合に、管理サーバ/統合管理サーバをアンインストールし、再度インストールする場合は、以下の順序で行ってください。この順序で行わない場合は、管理サーバ/統合管理サーバが再度インストールできません。

1. クライアント(CT)のアンインストール
2. 管理サーバ/統合管理サーバのアンインストール
3. 管理サーバ/統合管理サーバのインストール

4. クライアント(CT)のインストール



「アンインストールと管理(ミドルウェア)」のアンインストールについて

「アンインストールと管理(ミドルウェア)」は、富士通ミドルウェア製品共通のツールです。インストールされている富士通ミドルウェア製品の管理や製品のアンインストーラの起動を行います。どうしても必要な場合を除いてアンインストールしないでください。

1. [スタート]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)], または [アプリ]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)] を起動し、富士通ミドルウェア製品が何も残っていないことを確認します。確認後は閉じてください。
2. 以下のコマンドを実行します。

ー 32ビットOSの場合

```
C:¥Program Files¥Fujitsu¥FujitsuF4CR¥bin¥cirremove.exe
```

ー 64ビットOSの場合

```
C:¥Program Files (x86)¥Fujitsu¥FujitsuF4CR¥bin¥cirremove.exe
```

3. 削除の確認がありますので、アンインストールする場合は「y」を選択します。
4. アンインストール完了後、以下のフォルダ/ファイルが残るので、削除します。

```
C:¥ProgramData¥Fujitsu¥FujitsuF4CR
```

ドライブ名は環境により変わります。

5.2 クライアント(CT)をアンインストールする

Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)を、アンインストールする方法について説明します。

Citrix XenApp クライアントにSystemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)をインストールしている場合も同様の手順でアンインストールしてください。

クライアント(CT)のアンインストール方法には、以下の2種類があります。

- ・ ウィザード形式のアンインストール
- ・ サイレントアンインストール



クライアント(CT)のアンインストール中はネットワークが切断されます。

クライアント(CT)のアンインストール中、一時的にネットワークの切断が行われます。エクスプローラなどでネットワークフォルダを開いている場合は、閉じてください。



アンインストール時に入力するパスワードについて

管理コンソールでクライアント管理パスワードが設定されている場合は、アンインストール時に入力するパスワードはクライアント管理パスワードを入力してください。クライアント管理パスワードが設定されていない場合は、クライアント(CT)インストール時に設定したパスワードを入力してください。

5.2.1 ウィザード形式でアンインストールする

注意

Windows 8.1 64ビット版、Windows Server 2012以降の場合、アンインストール中にエラーメッセージが出力される場合があります。
Windows 8.1 64ビット版、Windows Server 2012以降では、アンインストール中に、自動登録のエラーが出力される場合があります。[OK]を選択してアンインストールを続行してください。

なお、管理サーバ、管理コンソールのアンインストール時にも同様のメッセージが表示される場合があります。

Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)を、ウィザード形式でアンインストールする方法について説明します。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. [コントロールパネル]-[プログラムと機能]を起動します。
3. “Systemwalker Desktop Keeper クライアント”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。
4. 削除確認画面で[はい]をクリックすると、パスワード入力画面が表示されるので、管理コンソールで設定したクライアント管理パスワード、または、クライアント(CT)インストール時に設定したパスワードを入力し、[次へ]ボタンをクリックします。
5. アンインストール処理が開始されます。正常に完了すると、[アンインストール完了]画面が表示されます。
完了後、OSを再起動する必要があります。以下のどちらかを選択し、[完了]ボタンをクリックします。
 - － [はい、今すぐコンピュータを再起動します。]
 - － [いいえ、後でコンピュータを再起動します。]

注意

Windows Server 2008、Windows 7以降の場合、再起動時にエラーメッセージが出力される場合があります

Windows Server 2008、Windows 7以降では、アンインストール後の再起動時に、以下のメッセージが出力される場合があります。アンインストールは正常に行われているので、操作を続行してください。

「Systemwalker Desktop Keeper クライアントのアンインストール中にエラーが発生しました。既にアンインストールされている可能性があります。
[プログラムと機能]の一覧から Systemwalker Desktop Keeper クライアントを削除しますか？」

管理コンソール、ログビューアのアンインストール時にも同様のメッセージが表示される場合があります。

5.2.2 サイレントアンインストールを実施する

注意

Windows 8.1 64ビット版、Windows Server 2012以降では、アンインストール中に、自動登録のエラーメッセージが出力される場合があります。[OK]を選択してアンインストールを続行してください。

なお、管理サーバ、管理コンソールのアンインストール時にも同様のメッセージが表示される場合があります。

Systemwalker Desktop Keeperのクライアント(CT)を、サイレントでアンインストールする方法について説明します。

なお、本機能は初版のクライアント(CT)をインストールしている環境で実行可能です。修正を適用したクライアント(CT)では実行できません。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. Systemwalker Desktop KeeperのDVD-ROMをPCにセットします。
3. Windowsの[ファイル名を指定して実行]を選択します。またはコマンドプロンプトを起動します。

4. Setup.exeコマンドを実行します。Setup.exeコマンドは、セットアップディスクの「win32¥DTKClient」フォルダにあります。インストール時に使用したものを再使用します。

記述形式

```
絶対パスを指定してSetup.exe /Silent "Password:パスワード,Reboot:フラグ"
```

- オプションに指定できるキーは[Password]と[Reboot]です。
- 「[キー]:[値]」,[「キー]:[値]」でそれぞれの項目間に空白は入りません。
- オプションは、大文字/小文字は区別しません。
- オプションが指定されていない場合、エラーメッセージを表示しアンインストールを終了します。

キーの意味は以下のとおりです。

- [Password]: 管理コンソールで設定したクライアント管理パスワード、または、クライアント(CT)インストール時に設定したパスワード
- [Reboot]:アンインストール実行後の処理を指定するフラグ
 - 0:再起動しません
 - 1:ダイアログを表示します(再起動するかどうかを選択します)
 - 2:強制的に再起動します

指定例

以下の状況を仮定します。

- Dドライブにセットアップディスクがセットされている
- Setup.exeコマンドがD:¥win32¥DTKClient配下にある
- クライアント状態表示・変更ユーティリティのパスワードはadminである
- アンインストール後は強制的に再起動する

```
D:¥win32¥DTKClient¥Setup.exe /Silent "Password:admin,Reboot:2"
```

5. ダイアログが表示された場合は、再起動するかしないかを選択します。

5.3 スマートデバイス(エージェント)(Andriod)をアンインストールする

Systemwalker Desktop Keeperのスマートデバイス(エージェント)(Android)を、アンインストールする方法について説明します。

1. スマートデバイスの設定画面を開き、[アプリ]をタップします。
2. [すべてのアプリ]画面で(Desktop Keeper Client)をタップし、アプリ情報画面を開きます。
3. アプリ情報画面で[アンインストール]をタップします。
4. アンインストールの確認画面が表示されるので、[OK]をタップします。
5. [アンインストールが完了しました。]のメッセージが表示されます。



注意

アンインストール前に実施しておくこと

スマートデバイスインストール時に“アンインストールを容易に実行できないようにするには”を設定した場合は、以下の操作を実施してアンインストールができるようにしてください。

1. [セキュリティ]を選択します。



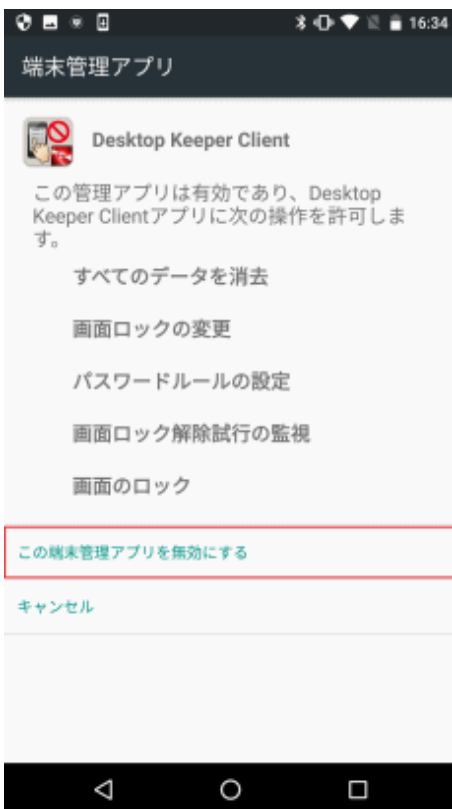
2. [端末管理アプリ]を選択します。



3. 端末管理アプリの一覧から[Desktop Keeper Client]を選択します。



4. 端末管理アプリを無効にする画面が表示されるので、[この端末管理アプリを無効にする]をタップします。



5. 解除用パスワード入力画面が表示されるので、クライアント管理パスワードが設定されている場合は、クライアント管理パスワードを入力し、[OK]をタップします。クライアント管理パスワードが設定されていない場合は、何も入力しないで、[OK]をタップします。

クライアント管理パスワードは、管理コンソールで設定します。詳細は、“運用ガイド管理者編”の“端末動作設定を行う”を参照してください。



5.4 スマートデバイス(エージェント)(iOS)をアンインストールする

Systemwalker Desktop Keeperのスマートデバイス(エージェント)(iOS)を、アンインストールする方法について説明します。

1. iOS端末から、[設定]-[一般]-[プロファイル]を選択して、登録されている以下のプロファイルを削除します。
 - Profile Service Enroll
 - CA証明書(サーバ)
 - CA証明書(クライアント)

5.5 Citrix XenApp監視機能をアンインストールする

Systemwalker Desktop KeeperのCitrix XenApp監視機能を、アンインストールする方法について説明します。

Citrix XenApp監視機能のアンインストールの手順は以下のとおりです。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログインします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. [コントロールパネル]-[プログラムの追加と削除] または、[アプリケーションの追加と削除]を起動します。
3. “Systemwalker Desktop Keeper - Citrix XenApp監視”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。
4. 削除確認画面で[はい]をクリックすると、パスワード入力画面が表示されるので、管理コンソールで設定したクライアント管理パスワード、または、Citrix XenApp監視機能インストール時に設定したパスワードを入力し、[次へ]ボタンをクリックします。
5. アンインストール処理が開始されます。正常に完了すると、[アンインストール完了]画面が表示されます。完了後、OSを再起動する必要があります。以下のどちらかを選択し、[完了]ボタンをクリックします。
 - [はい、今すぐコンピュータを再起動します。]

— [いいえ、後でコンピュータを再起動します。]

5.6 管理コンソールをアンインストールする

注意

Windows 8.1 64ビット版、Windows Server 2012以降では、アンインストール中に、自動登録のエラーメッセージが出力される場合があります。[OK]を選択してアンインストールを続行してください。
なお、管理サーバ、クライアント(CT)のアンインストール時にも同様のメッセージが表示される場合があります。

Systemwalker Desktop Keeperの管理コンソールを、アンインストールする方法について説明します。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了します。
2. [スタート]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)]、または[アプリ]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)]を起動します。
3. [インストール済みソフトウェア]タブで、ソフトウェア名“Systemwalker Desktop Keeper 管理コンソール”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。
4. [Systemwalker Desktop Keeper 管理コンソールのアンインストール]ダイアログが表示されるので、[アンインストール]ボタンをクリックします。
5. アンインストール処理完了後に、[終了]ボタンをクリックします。
6. OSを再起動します。

注意

"Systemwalker Desktop Keeper 管理コンソール"をコントロールパネルから削除した場合にも2以降の手順を実施してください。

注意

Windows 8.1、Windows Server 2012以降でクライアント(CT)が同居している環境で、管理コンソールをアンインストールした直後、オンラインマニュアルにアクセスできなくなる場合があります。
これはタイトルのオンラインマニュアルパスの反映タイミングによるもので、1度ログオフすることでオンラインマニュアルにアクセスできるようになります。

5.7 ログアナライザサーバをアンインストールする

Systemwalker Desktop Keeperのログアナライザサーバをアンインストールする方法について説明します。

注意

本項で説明する手順は、本バージョンにおける手順です。旧版をアンインストールする場合には、当該バージョンのマニュアルを参照してください。

管理サーバ/統合管理サーバ上のログアナライザサーバ情報を削除する

アンインストールするログアナライザサーバの情報を登録している管理サーバ/統合管理サーバ上で、ログアナライザサーバのログアナライザ設定ツールを使用して、該当のログアナライザサーバの情報を削除します。

1. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[ログアナライザ設定]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[ログアナライザ設定]を選択します。

2. 該当のログアナライザサーバ情報を削除し、[設定]ボタンをクリックします。

ログ転送スケジュール設定を削除する

OSに登録している、以下のタスクを削除します。

- アンインストールするログアナライザサーバへのデータ転送タスク(管理サーバ)
DTK_TRANS
- アンインストールするログアナライザサーバ上でのデータ移入タスク(ログアナライザサーバ)
DTK_DttoolEx

ログアナライザサーバのデータベースを削除する

Systemwalker Desktop Keeperのログアナライザサーバをアンインストールする前に、データベースを削除します。データベースの削除手順は以下のとおりです。

1. ログアナライザユーザー(ログアナライザサーバインストール時に設定したWindowsアカウント)でWindowsにログオンします。
2. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[ログアナライザ]-[運用環境保守ウィザード]、または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[運用環境保守ウィザード]を選択します。
3. [運用環境保守ウィザードへようこそ]画面が表示されるので、[次へ]ボタンをクリックします。
4. [処理の選択]画面が表示されるので、“実施する処理”に“運用環境の削除”を設定して、[次へ]ボタンをクリックしてください。
5. [設定内容の確認]画面が表示されるので、画面に表示されている内容に誤りがないか確認し、[次へ]ボタンをクリックしてください。
6. 実行確認画面が表示されるので、続行する場合は、[はい]ボタンをクリックしてください。
[処理の実行]画面が表示され、データベースの削除を開始します。
7. 処理が正常に完了すると、[処理完了]画面が表示されるので、[完了]ボタンをクリックしてください。



注意

データベースを削除しても、データベース格納先フォルダは残ります。不要な場合は、手動で削除してください。

ログアナライザサーバをアンインストールする

続いて、ログアナライザサーバをアンインストールします。ログアナライザサーバのアンインストール手順は、以下のとおりです。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了してください。
2. [スタート]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)]、または[アプリ]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)]を起動します。
3. [インストール済みソフトウェア]タブで、ソフトウェア名“Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバ”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。
4. [Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバのアンインストール]ダイアログが表示されるので、[アンインストール]ボタンをクリックします。
5. アンインストール処理完了後に、[終了]ボタンをクリックします。
6. OSを再起動します。

64ビット版の場合は、3および4において“Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバ (x64)”と表示されます。



注意

“Systemwalker Desktop Keeper ログアナライザサーバ”をコントロールパネルから削除した場合にも2以降の手順を実施してください。

インストールフォルダを削除する

以下のフォルダがある場合は必ず削除してください。

[ログアナライザサーバインストールフォルダ]¥NAVIDIC

下記注意事項に該当しない場合は、ログアナライザサーバインストールフォルダごと削除してください。

注意

ログアナライザサーバが導入されたあとから同一サーバに管理サーバを導入している環境で、データベース関連ファイルのインストール先をログアナライザサーバのインストールフォルダの配下に行っている場合、ログアナライザサーバのインストールフォルダは削除しないでください。管理サーバが動作できなくなります。

注意

アンインストール後のログアナライザユーザーについて

インストール時に新規作成したログアナライザユーザーは、ログアナライザサーバをアンインストールしても削除されません。ログアナライザユーザーを使用していないことを確認後、削除してください。

5.8 中継サーバをアンインストールする

Systemwalker Desktop Keeperの中継サーバを、アンインストールする方法について説明します。

注意

https通信環境で中継サーバを再インストールする場合

スマートデバイスと中継サーバ間をhttps通信している環境において、環境移行などの理由により中継サーバを再インストールする場合は、アンインストール前に以下のコマンドを実行して、サーバ証明書をバックアップしてください。また、認証局証明書および中間認証局証明書はあらかじめ保管しておいてください。

- ・ コマンドプロンプトを起動し、サーバ証明書の退避復元コマンドを実行します。

```
中継サーバインストールフォルダ¥bin¥SDSVKeyStore.exe -export [出力ファイル名]
```

例)

```
C:¥SWDTKSDSV¥bin>SDSVKeyStore -export C:¥temp¥keybackup.cer
```

また再インストール時は、“2.10.3.2 HTTPS通信を設定する”の「サーバ証明書の登録」は実施する必要はありません。

「認証局証明書(中間認証局証明書)の登録」であらかじめ保管した認証局証明書および中間認証局証明書を登録してください。また登録後は以下のコマンドを実行して、バックアップしたサーバ証明書をリストアしてください。

- ・ コマンドプロンプトを起動し、サーバ証明書の退避復元コマンドを実行します。

```
中継サーバインストールフォルダ¥bin¥SDSVKeyStore.exe -import [入力ファイル名]
```

例)

```
C:¥SWDTKSDSV¥bin>SDSVKeyStore -import C:¥temp¥keybackup.cer
```

SDSVKeyStoreコマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル”の“SDSVKeyStore.EXE (サーバ証明書の退避復元)”を参照してください。

中継サーバをアンインストールする

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。ほかのアプリケーションを使用している場合は、終了してください。

2. 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)で、以下の設定をします。
 - － Android端末の管理を無効化します。指定するオプションは、-Android.enabledです。
 - － iOS端末の管理を無効化します。指定するオプションは、-iOS.enabledです。
 - － Windows端末の管理を無効化します。指定するオプションは、-Windows.enabledです。
3. [スタート]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)],または[アプリ]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)]を起動します。
4. [インストール済みソフトウェア]タブで、ソフトウェア名“Systemwalker Desktop Keeper 中継サーバ”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。
5. [Systemwalker Desktop Keeper 中継サーバのアンインストール]ダイアログが表示されるので、[アンインストール]ボタンをクリックします。
6. アンインストール処理完了後に、[終了]ボタンをクリックします。
7. OSを再起動します。



注意

"Systemwalker Desktop Keeper 中継サーバ"をコントロールパネルから削除した場合にも手順3以降を実施してください。

インストールフォルダを削除する

中継サーバのアンインストール後、中継サーバのインストールフォルダが残ります。中継サーバインストールフォルダを手動で削除してください。

5.9 管理サーバ/統合管理サーバをアンインストールする

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバをアンインストールする方法について説明します。



注意

- ・ 管理サーバ/統合管理サーバにクライアント(CT)を導入している場合は、アンインストールの順序に注意が必要です。詳細については、“[管理サーバ/統合管理サーバにクライアント\(CT\)を導入している場合](#)”を参照してください。
- ・ Windows 8.1 64ビット版、Windows Server 2012以降では、アンインストール中に、自動登録のエラーメッセージが出力される場合があります。[OK]を選択してアンインストールを続行してください。
なお、管理コンソール、クライアント(CT)のアンインストール時にも同様のメッセージが表示される場合があります。

5.9.1 管理サーバ/統合管理サーバのデータベースの削除

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバをアンインストールする前に、データベースを削除します。データベースの削除手順は以下のとおりです。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了してください。
2. [スタート]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ]-[サーバ設定ツール],または[アプリ]-[Systemwalker Desktop Keeper]-[サーバ設定ツール]を選択すると、ログイン画面が表示されます。
3. 初期管理者のアカウントでログインします。初期管理者のアカウントは以下のとおりです。
 - － ユーザーID:secureadmin
 - － パスワード:管理サーバ/統合管理サーバインストール後に変更されたパスワード(デフォルトはsecureadminです。)

- サーバ設定ツールのメニューから[データベース構築・削除・情報表示]ボタンをクリックします。
→[データベース構築・削除・情報表示]画面が表示されます。

	データベース作成先	データベース使用量	ディスク空き容量		
運用データベース	C:\DTK\%OPEDB	42 MB	46360 MB	構築	削除
ログ閲覧データベース	C:\DTK\%REFDB		46360 MB	構築	削除
iOS管理データベース	C:\DTK\%MDMDB		46360 MB	構築	削除

機能説明
Systemwalker Desktop Keeperで使用するデータベースの構築・削除を行います。それぞれのデータベースについて、作成先を指定して構築、あるいは削除を行ってください。現在の状態は「データベース使用量」をご確認ください。

閉じる

項目名	説明
[データベース作成先]	データベースの作成先が表示されます。
[データベース使用量]	作成したデータベースの容量が表示されます。構築されていない場合は、空白となります。
[ディスク空き容量]	作成先ディスクの空き容量が表示されます。

- [データベース構築・削除・情報表示]画面にて、削除したいデータベースの[削除]ボタンをクリックします。
[データベースの削除]画面が表示されるので、[OK]ボタンをクリックします。データベースの削除を開始します。
- 処理が正常に完了すると、[データベース削除完了]画面が表示されるので、[OK]ボタンをクリックしてください。
運用データベース、ログ閲覧データベース、iOS管理データベースのどれかかが残っている場合は、再度手順1.から実施してください。

注意

データベース領域が削除されなかった場合について

[サーバ設定ツール]-[データベース構築・削除・情報表示]を使用して運用環境を削除しても、データベースの状態によっては、データベース領域が削除されない場合があります。その場合は、以下のフォルダを削除してください。

- <データベース格納先>%RDB

注意

- Systemwalker Desktop KeeperとSystemwalker Desktop Patrolが共存していて、両製品で管理していたiOS端末の管理をやめる場合は、両製品でiOS管理データベースの削除を行ってください。
- Systemwalker Desktop KeeperとSystemwalker Desktop Patrolが共存していて、両製品で管理していたiOS端末の管理を一方の製品だけでiOS端末の管理を行うように変更する場合は、以下の手順で削除を行ってください。
 - 中継サーバの設定変更コマンド(SDSVSetMS.EXE)を使用して、中継サーバと接続しているiOS管理データベースのホスト名を確認します。「iOSmgr.h」に表示されたiOS管理データベースのホスト名と一致するサーバでバックアップを行います。
 - 両製品でiOS管理データベースを削除します。
 - iOS端末の管理を行う製品でiOS管理データベースを構築します。
 - 手順3で構築したiOS管理データベースに手順1でバックアップしたデータをリストアします。

5.9.2 管理サーバ/統合管理サーバのアンインストール

続いて、管理サーバ/統合管理サーバをアンインストールします。管理サーバ/統合管理サーバのアンインストール手順は、以下のとおりです。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了してください。
2. 階層化サービスおよびサーバサービスを停止します。

Windowsのサービス画面を表示し、以下の各サービスを選択して、[操作]メニューから[停止]を選択します。なお、停止するまでに30秒から1分程度かかる場合があります。SWServerServiceを起動した直後、または日付が変更になったとき(午前0時)にデータベースの空き容量の確認が動作しますが、確認動作が終了するまでの約15分間、サービスが停止しないことがあります。しばらくしてから停止を確認してください。

- SWLevelControlService
- SWServerService

3. [スタート]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)], または[アプリ]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)]を起動します。
4. [インストール済みソフトウェア]タブで、ソフトウェア名“Systemwalker Desktop Keeper サーバ”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。
5. [Systemwalker Desktop Keeper サーバのアンインストール]ダイアログが表示されるので、[アンインストール]ボタンをクリックします。
6. アンインストール処理完了後に、[終了]ボタンをクリックします。
7. OSを再起動します。

64ビット版の場合は、4および5において“Systemwalker Desktop Keeper サーバ(x64)”と表示されます。



注意

“Systemwalker Desktop Keeper サーバ”をコントロールパネルから削除した場合にも3以降の手順を実施してください。

インストールフォルダを削除する

管理サーバ/統合管理サーバのアンインストール後、管理サーバ/統合管理サーバのインストールフォルダが残ります。管理サーバ/統合管理サーバインストールフォルダを手動で削除してください。



注意

管理サーバ/統合管理サーバをアンインストールしたサーバにログアナライザサーバがインストールされている場合は、絶対にSystemwalker Desktop Keeperのインストールフォルダを削除しないでください。削除した場合には、ログアナライザサーバが動作できなくなります。

5.10 レポート出カツールをアンインストールする

Systemwalker Desktop Keeperのレポート出カツールをアンインストールする方法について説明します。



注意

本項で説明する手順は、本バージョンにおける手順です。旧版をアンインストールする場合には、当該バージョンのマニュアルを参照してください。

レポート出カツールをアンインストールする

レポート出カツールをアンインストールする手順は以下のとおりです。

1. Administratorsグループに所属するユーザー、またはDomain Adminsグループに所属するユーザーでWindowsにログオンします。他のアプリケーションを使用している場合は、終了してください。

2. [スタート]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)],または[アプリ]-[Fujitsu]-[アンインストールと管理(ミドルウェア)]を起動します。
3. [インストール済みソフトウェア]タブで、ソフトウェア名“Systemwalker Desktop Keeper レポート出力ツール”を選択し、[削除]ボタンをクリックします。
4. [Systemwalker Desktop Keeper レポート出力ツールのアンインストール]ダイアログが表示されるので、[アンインストール]ボタンをクリックします。
5. アンインストール処理完了後に、[終了]ボタンをクリックします。
6. OSを再起動します。



"Systemwalker Desktop Keeper レポート出力ツール"をコントロールパネルから削除した場合にも2以降の手順を実施してください。

インストールフォルダを削除する

レポート出力ツールをアンインストールした後、レポート出力ツールのログが残ります。必要に応じて、手動で削除してください。

- %ALLUSERSPROFILE%¥Fujitsu¥Systemwalker Desktop Keeper¥LogAnalyzer
環境変数%ALLUSERPROFILE%は、通常以下のフォルダになります。

C:¥ProgramData



データベース管理システムをアンインストールしていない場合は削除しないでください

ログアナライザサーバのインストールフォルダの下にSystemwalker Desktop Keeperデータベース管理システムが残っている状態の場合は、絶対にログアナライザサーバのインストールフォルダを削除しないでください。削除した場合には、データベース管理システムが動作できなくなります。

付録A サーバのサイレントインストール

本付録では、Systemwalker Desktop Keeperのサーバのサイレントインストールで利用するファイル、コマンドおよびメッセージについて説明します。

A.1 管理サーバ/統合管理サーバのサイレントインストール

Systemwalker Desktop Keeperの管理サーバ/統合管理サーバのサイレントインストールで利用するファイル、コマンドおよびメッセージについて説明します。

A.1.1 インストールパラメーターCSVファイル

インストールパラメーターは、以下の形式でCSVファイルに指定します。

文字コード

文字コードは、Shift JISです。

フォーマット

```
installInfo, softwareName, [ソフトウェア名称]
installInfo, OS, [OS名]
installInfo, Version, [バージョン]
installInfo, Name, [ソフトウェアID]
parameters, [パラメーターのキー名], [パラメーターの値]
parameters, . . . , . . .
```



注意

- installInfoパラメーターは、サンプルの内容から変更しないでください。
- parametersパラメーターは、1つ以上指定してください。
- 「"」で囲む場合は、該当する行の各項目を「"」で囲んでください。
- パラメーターおよびキー名に空白を含めないでください。
- 「"」で囲まれている項目の前後に空白を含めないでください。

parametersパラメーター

parametersに設定可能なパラメーターは、以下のとおりです。

No.	分類	parametersパラメーター		説明
1	管理サーバインストール先	キー名	DtkSvInstPath	必須
		<type>型	string	管理サーバをインストールするディレクトリを指定してください。
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	C:¥Program Files (x86)¥Fujitsu ¥Systemwalker Desktop Keeper	85文字以下の、Windows禁則文字を除く半角英数記号で指定してください。 32ビット版OSにインストールする場合はデフォルト値は、以下に変更してください。 C:¥Program Files¥Fujitsu ¥Systemwalker Desktop Keeper フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。

No.	分類	parameters/パラメーター		説明
2	運用データベース作成先	キー名	DtkSvDBPath	必須 データベースの作成先を指定します。 データベース作成先フォルダは以下の条件を満たす必要があります。 ・ドライブのルートは指定できません。 ・全角文字、半角カナ、制御文字を含まないように指定してください。 ・パス長は96文字以内の半角文字で指定してください。 ・ネットワークドライブは指定できません。 ・NTFSでフォーマットされているフォルダを指定してください。 ・フォルダ名に「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」「&」「^」は指定できません。
		<type>型	string	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	C:¥DTK¥OPEDB	
3	自動バックアップ作成先	キー名	DtkSvAutoBackUpPath	必須 自動バックアップ先を指定します。 自動バックアップ先フォルダは以下の条件を満たす必要があります。 ・ドライブのルートは指定できません。 ・ネットワークドライブは指定できません。 ・パス長は189文字以内の半角文字で指定してください。 ・フォルダ名に「¥」「/」「:」「*」「?」「"」「<」「>」「 」「&」「^」は指定できません。
		<type>型	string	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	C:¥DTKBackup	

参考

インストールパラメーターCSVファイルのサンプルは、製品媒体(DVD-ROM)の以下のフォルダにあります。

<DVD-ROM>:¥citol¥SV¥sample_install_SWDTK.csv

A.1.2 パラメーター設定コマンド

パラメーターをカスタマイズする場合、パラメーター設定コマンドを利用してパラメーターを変更した応答ファイルを作成し、サイレントインストールに使用します。

コマンド名

<DVD-ROM>:¥citol¥SV¥dtk_instparam.exe

形式

```
dtk_instparam.exe -infile インストールパラメーターCSVファイルパス -outfile 応答ファイルパス
```

オプション

オプション	説明
-infile	インストールパラメーターCSVファイルを指定します。 ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。
-outfile	出力する応答ファイルを指定します。 ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。 指定したファイルが出力先に存在した場合、ファイルが置き換わります。

出力形式

復帰値が 0 の場合

正常終了です。

復帰値が 0 以外の場合

異常終了です。

コンソールに出力されるエラーメッセージをもとに対処してください。

実行例

インストールパラメーターCSVファイル“C:¥sample_install_SWDTK.csv”にパラメーターを指定して、応答ファイル“C:¥temp¥swdtk_sv_setup.iss”を作成します。

```
dtk_instparam.exe -infile C:¥sample_install_SWDTK.csv -outfile C:¥temp¥swdtk_sv_setup.iss
```

A.1.3 パラメーター設定コマンドの出力メッセージ

パラメーター設定コマンドが出力するメッセージについて説明します。

インストールパラメーターのうち環境依存の制約事項は、本コマンドではチェックされません。そのため、本コマンドでエラーが出力されなくても、インストール時にエラーが発生する場合があります。

System error.

原因

システムエラーが発生しました。

対処

富士通技術員に連絡してください。

Argument error: Usage: dtk_instparam -infile “input file path” -outfile “output file path”.

原因

必要な引数の形式が誤っています。

対処

コマンドの形式を確認してください。

Error: too long path specified(path must be less than 256 bytes).

原因

指定したファイルパスが長すぎます。

対処

ファイルパスを半角で255文字以下にしてください。

Error: file not exist.

原因

指定したファイルが存在しません。

対処

指定したファイルパスが正しいか確認してください。

Error: failed to open file.

原因

ファイルを開けませんでした。

対処

ファイルを使用中でないか、または、壊れていないか確認してください。

Error: failed to parse csv file.

原因

CSVファイルの処理に失敗しました。

対処

CSVファイルの形式が正しいか確認してください。

Error: Command Option is not correct.

原因

コマンドの引数の形式が誤っています。

対処

実行したコマンドの引数を確認してください。

Error: can't find out parameter from input file.

原因

-infileにて指定したファイルにパラメーターが入っていません。

対処

-infileに指定したファイルの内容を確認してください。

Error. the length of install parameters exceeds the defined size.

原因

指定しているパラメーターの長さが規定サイズを超えています。

対処

パラメーターの長さを確認してください。

Error. Invalid character is used for install parameters.

原因

使用できない文字種がパラメーターに使われています。

対処

パラメーターに指定している文字種を確認してください。

Success: complete to edit Installation file.

意味

インストールパラメーターファイルの編集に成功しました。

A.1.4 サイレントインストール用スクリプト

サイレントインストールに利用するスクリプトについて説明します。

スクリプト名

<DVD-ROM>:¥citol¥SV¥silentsetup.vbs

実行形式

応答ファイルを引数にして、cscriptで実行します。

```
cscript silentsetup.vbs [応答ファイル名] [-l ログ格納フォルダ]
```

オプション

オプション	説明
応答ファイル名 (省略可能)	セットアップ時に用いるパラメーターをデフォルト値から変更したい場合に指定します。ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。パス、ファイル名にはUNICODE文字を使用しないでください。省略した場合は、すべてのパラメーターにデフォルト値が使用されます。
-l ログ格納フォルダ (省略可能)	インストールログを採取したい場合に指定します。存在するフォルダを、パス長が半角で200文字(全角で100文字)以内の絶対パスで指定してください。パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。パス、ファイル名にはUNICODE文字を使用しないでください。-lとログ格納フォルダの間には必ず空白を指定してください。

出力形式

復帰値が 0 の場合

正常終了です。

復帰値が 0 以外の場合

異常終了です。

コンソールに出力されるエラーメッセージをもとに対処してください。

実行例

応答ファイルに“C:¥temp¥swdtk_sv_setup.iss”、ログ格納フォルダに“C:¥temp¥swdtk_sv_log”を指定して、サイレントインストールを実行します。

```
cscript silentsetup.vbs C:¥temp¥swdtk_sv_setup.iss -l C:¥temp¥swdtk_sv_log
```

実行に必要な権限/実行環境

- ・ インストールする環境に管理者権限をもつユーザーで行ってください。
- ・ Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、またはWindows Server 2019の環境において、コマンドプロンプトで作業を行う場合は、コマンドプロンプトを[管理者として実行]で開いてください。

A.1.5 サイレントインストール用スクリプトの出力メッセージ

サイレントインストール用スクリプトが出力するメッセージについて説明します。

管理者権限を持つアカウントで実行して下さい。

原因

管理者権限のないアカウントでログインした場合に表示されます。

対処

管理者権限を持つアカウントで実行してください。

インストールに失敗しました。ErrorCode:XXX

可変情報

XXX=

2: CIR実行失敗

3: InstallShield実行中のエラー

原因

サイレントインストールに失敗しています。

対処

インストール環境を確認してください。

また、以下のログファイルを確認してください。

%ALLUSERSPROFILE%\Fujitsu\Systemwalker Desktop Keeper\DTKServer_Install.log

A.2 Citrix XenApp監視機能のサイレントインストール

Systemwalker Desktop KeeperのCitrix XenApp監視機能のサイレントインストールで利用するファイル、コマンドおよびメッセージについて説明します。

A.2.1 インストールパラメーターCSVファイル

インストールパラメーターは、以下の形式でCSVファイルに指定します。

文字コード

文字コードは、Shift JISです。

フォーマット

```
installInfo,softwareName,[ソフトウェア名称]
installInfo,OS,[OS名]
installInfo,Version,[バージョン]
installInfo,Name,[ソフトウェアID]
parameters,[パラメーターのキー名],[パラメーターの値]
parameters, . . . , . . .
```




注意

- installInfoパラメーターは、サンプルの内容から変更しないでください。
- parametersパラメーターは、1つ以上指定してください。
- 「"」で囲む場合は、該当する行の各項目を「"」で囲んでください。
- パラメーターおよびキー名に空白を含めないでください。
- 「"」で囲まれている項目の前後に空白を含めないでください。

parameters/パラメーター

parametersに設定可能なパラメーターは、以下のとおりです。

No.	分類	parameters/パラメーター		説明
1	Citrix XenApp監視機能インストール先	キー名	DtkXAInstPath	必須 Citrix XenApp監視機能をインストールするディレクトリを指定してください。 長さは半角で85文字以下としてください。また、マルチバイト文字(空白、ひらがな、カタカナ、漢字など)、Windows禁則文字は指定できません。 32ビット版OSにインストールする場合は、以下に変更してください。 C:¥Program Files (x86)¥Fujitsu ¥Systemwalker Desktop Keeper ¥Client
		<type>型	string	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	C:¥Program Files (x86)¥Fujitsu ¥Systemwalker Desktop Keeper ¥Client	
2	ログファイル格納先	キー名	DtkXALogPath	必須 ログファイル格納先のディレクトリを指定してください。 Windowsのシステムドライブ配下のフォルダを設定してください。 長さは半角で85文字以下としてください。また、マルチバイト文字(空白、ひらがな、カタカナ、漢字など)、Windows禁則文字は指定できません。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	C:¥DTK¥_Extension	
3	接続する管理サーバのIPアドレス	キー名	DtkXASVAddr	必須 管理サーバのIPアドレスを指定してください。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	空文字列	
4	代替管理サーバのIPアドレス	キー名	DtkXASVAddr2	省略可能 代替管理サーバのIPアドレスを指定してください。 省略した場合は、管理サーバのIPアドレスが設定されます。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	空文字列	
5	受信用ポート番号	キー名	DtkXARecvPort	必須 独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、Citrix XenApp監視と管理サーバ間で通信するためのポート番号(Citrix XenApp監視側受信用)を指定してください。
		<type>型	Number	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	10010	
6	送信用ポート番号	キー名	DtkXASendPort	必須 独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、Citrix XenApp監視と管理サーバ間で通信するためのポート番号(Citrix XenApp監視機能の端末情報、ログ送信、ポリシー受信用)を指定してください。
		<type>型	Number	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	48443	

No.	分類	parameters/パラメーター		説明
7	送信用ポート番号	キー名	DtkXASendPort2	必須 独自通信方式(V15.1.1以前の通信方式)における、Citrix XenApp監視と管理サーバ間で通信するためのポート番号(Citrix XenApp監視機能の登録用)を指定してください。
		<type>型	Number	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	48081	
8	印刷監視方式	キー名	DtkXAPrintWatch	必須 印刷ログ取得のための、印刷監視方式を指定してください。 ・AllPrinter:この端末で設定されているすべてのプリンタでの印刷を監視する ・LocalPrinter:ローカルプリンタでの印刷のみを監視する
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	AllPrinter	
9	パスワード	キー名	DtkXAPassword	必須 クライアント状態表示・変更ユーティリティのパスワードを指定してください。 ここで設定するパスワードは、Citrix XenApp監視機能のアンインストールや保守コマンドの実行時に必要になります。 ・半角で32文字までの英数字および以下の記号以外が入力できます。 ・入力できない記号は、「&」「<」「>」「 」「¥」「 」「~」「 」「?」「:」「^」です。 ・全角および半角の空白は入力できません。 ・半角のカナは入力できません。 パスワードに関する情報のためデフォルト値はありません。必ず指定してください。  注意 クライアント(CT)端末登録時認証について クライアント(CT)端末登録時認証を行う場合、インストール時に入力するパスワードは、管理コンソールの端末動作設定画面で設定したクライアント管理パスワードと同じものを入力してください。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	なし	

参考

インストールパラメーターCSVファイルのサンプルは、製品媒体(DVD-ROM)の以下のフォルダにあります。

<DVD-ROM>:\%citool%\XA\sample_install_SWDTKXA.csv

A.2.2 パラメーター設定コマンド

パラメーターをカスタマイズする場合、パラメーター設定コマンドを利用してパラメーターを変更した応答ファイルを作成し、サイレントインストールに使用します。

コマンド名

<DVD-ROM>:¥citol¥XA¥dtkxa_instparam.exe

形式

```
dtkxa_instparam.exe -infile インストールパラメーターCSVファイルパス -outfile 応答ファイルパス
```

オプション

オプション	説明
-infile	インストールパラメーターCSVファイルを指定します。 ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。
-outfile	出力する応答ファイルを指定します。 ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。 指定したファイルが出力先に存在した場合、ファイルが置き換わります。

出力形式

復帰値が 0 の場合

正常終了です。

復帰値が 0 以外の場合

異常終了です。

コンソールに出力されるエラーメッセージをもとに対処してください。

実行例

インストールパラメーターCSVファイル“C:¥sample_install_SWDTKXA.csv”にパラメーターを指定して、応答ファイル“C:¥temp¥swdtk_xa_setup.iss”を作成します。

```
dtkxa_instparam.exe -infile C:¥sample_install_SWDTKXA.csv -outfile C:¥temp¥swdtk_xa_setup.iss
```

A.2.3 パラメーター設定コマンドの出力メッセージ

パラメーター設定コマンドが出力するメッセージについて説明します。

インストールパラメーターのうち環境依存の制約事項は、本コマンドではチェックされません。そのため、本コマンドでエラーが出力されなくても、インストール時にエラーが発生する場合があります。

System error.

原因

システムエラーが発生しました。

対処

富士通技術員に連絡してください。

Argument error: Usage: dtkxa_instparam -infile “input file path” -outfile “output file path”.

原因

必要な引数の形式が誤っています。

対処

コマンドの形式を確認してください。

Error: too long path specified(path must be less than 256 bytes).

原因

指定したファイルパスが長すぎます。

対処

ファイルパスを半角で255文字以下にしてください。

Error: file not exist.

原因

指定したファイルが存在しません。

対処

指定したファイルパスが正しいか確認してください。

Error: failed to open file.

原因

ファイルを開けませんでした。

対処

ファイルを使用中でないか、または、壊れていないか確認してください。

Error: failed to parse csv file.

原因

CSVファイルの処理に失敗しました。

対処

CSVファイルの形式が正しいか確認してください。

Error: failed to encrypt password.

原因

パスワードの暗号化に失敗しました。

対処

パスワードの指定形式が正しいか確認してください。

Error: Command Option is not correct.

原因

コマンドの引数の形式が誤っています。

対処

実行したコマンドの引数を確認してください。

Error: can't find out parameter from input file.

原因

-infileにて指定したファイルにパラメーターが入っていません。

対処

-infileに指定したファイルの内容を確認してください。

Error. the length of install parameters exceeds the defined size.

原因

指定しているパラメーターの長さが規定サイズを超えています。

対処

パラメーターの長さを確認してください。

Error. Invalid character is used for install parameters.

原因

使用できない文字種がパラメーターに使われています。

対処

パラメーターに指定している文字種を確認してください。

Success: complete to edit Installation file.

意味

インストールパラメーターファイルの編集に成功しました。

A.2.4 サイレントインストール用スクリプト

サイレントインストールに利用するスクリプトについて説明します。

スクリプト名

<DVD-ROM>:\%citool%\XA\%silentsetup.vbs

実行形式

応答ファイルを引数にして、cscriptで実行します。

cscript silentsetup.vbs 応答ファイル名 [-l ログ格納フォルダ]

オプション

オプション	説明
応答ファイル名 (必須)	ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。パス、ファイル名にはUNICODE文字を使用しないでください。
-l ログ格納フォルダ (省略可能)	インストールログを採取したい場合に指定します。存在するフォルダを、パス長が半角で200文字(全角で100文字)以内の絶対パスで指定してください。パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。パス、ファイル名にはUNICODE文字を使用しないでください。-lとログ格納フォルダの間には必ず空白を指定してください。



注意

Citrix XenApp監視機能のサイレントインストールではパスワードを指定する必要があるため、デフォルト設定の応答ファイルが用意されていません。必ず応答ファイルを作成して、指定してください。

出力形式

復帰値が 0 の場合

正常終了です。

復帰値が 0 以外の場合

異常終了です。

コンソールに出力されるエラーメッセージをもとに対処してください。

実行例

応答ファイルに“C:¥temp¥swdtk_xa_setup.iss”、ログ格納フォルダに“C:¥temp¥swdtk_xa_log”を指定して、サイレントインストールを実行します。

```
cscript silentsetup.vbs C:¥temp¥swdtk_xa_setup.iss -l C:¥temp¥swdtk_xa_log
```

実行に必要な権限/実行環境

- ・ インストールする環境に管理者権限をもつユーザーで行ってください。
- ・ Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、またはWindows Server 2019の環境において、コマンドプロンプトで作業を行う場合は、コマンドプロンプトを[管理者として実行]で開いてください。

A.2.5 サイレントインストール用スクリプトの出力メッセージ

サイレントインストール用スクリプトが出力するメッセージについて説明します。

管理者権限を持つアカウントで実行して下さい。

原因

管理者権限のないアカウントでログインした場合に表示されます。

対処

管理者権限を持つアカウントで実行してください。

インストールに失敗しました。ErrorCode:XXX

可変情報

XXX=

2: CIR実行失敗

3: InstallShield実行中のエラー

原因

サイレントインストールに失敗しています。

対処

インストール環境を確認してください。

また、以下のログファイルを確認してください。

%ALLUSERSPROFILE%¥Fujitsu¥Systemwalker Desktop Keeper¥DTKforXenApp_Install.log

A.3 ログアナライザサーバのサイレントインストール

Systemwalker Desktop Keeperのログアナライザサーバのサイレントインストールで利用するファイル、コマンドおよびメッセージについて説明します。

A.3.1 インストールパラメーターCSVファイル

インストールパラメーターは、以下の形式でCSVファイルに指定します。

文字コード

文字コードは、Shift JISです。

フォーマット

```
installInfo, softwareName, [ソフトウェア名称]
installInfo, OS, [OS名]
installInfo, Version, [バージョン]
installInfo, Name, [ソフトウェアID]
parameters, [パラメーターのキー名], [パラメーターの値]
parameters, . . . , . . .
```

注意

- installInfoパラメーターは、サンプルの内容から変更しないでください。
- parametersパラメーターは、1つ以上指定してください。
- 「"」で囲む場合は、該当する行の各項目を「"」で囲んでください。
- パラメーターおよびキー名に空白を含めないでください。
- 「"」で囲まれている項目の前後に空白を含めないでください。

parametersパラメーター

parametersに設定可能なパラメーターは、以下のとおりです。

No.	分類	parametersパラメーター		説明
1	ログアナライザサーバインストール先	キー名	DtkLaInstPath	必須 ログアナライザサーバをインストールするディレクトリを指定してください。 85文字以下の、Windows禁則文字を除く半角英数記号で指定してください。 32ビット版OSにインストールする場合は、以下に変更してください。 C:¥Program Files(x86)¥Fujitsu ¥Systemwalker Desktop Keeper ¥LogAnalyzer¥Server フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	C:¥Program Files(x86)¥Fujitsu ¥Systemwalker Desktop Keeper ¥LogAnalyzer¥Server	
2	データベースインストール先	キー名	DtkLaDBInstPath	管理サーバと非同居の場合は必須 データベース関連ファイルをインストールするディレクトリを指定してください。 96文字以下の、空白およびWindows禁則文字を除く半角英数記号で指定してください。 フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	C:¥DTKLADB	

No.	分類	parameters/パラメーター		説明
3	ポート番号1	キー名	DtkLaPort01	必須 5001～60000の数字を指定してください。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	30001	
4	ポート番号2	キー名	DtkLaPort02	必須 5001～60000の数字を指定してください。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	30002	
5	ポート番号3	キー名	DtkLaPort03	必須 5001～60000の数字を指定してください。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	30004	
6	ログアナライザユーザー	キー名	DtkLaUserID	必須 ログアナライザユーザーのIDを指定してください。 18文字以下の、半角英数字(先頭は必ず英字)で指定してください。 アカウントに関する情報のためデフォルト値はありません。必ず指定してください。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	なし	
7	ログアナライザユーザーのパスワード	キー名	DtkLaUserPW	必須 ログアナライザユーザーのパスワードを指定してください。 14文字以下の、空白を除く半角英数記号で指定してください。 アカウントに関する情報のためデフォルト値はありません。必ず指定してください。
		<type>型	String	
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	なし	

参考

インストールパラメーターCSVファイルのサンプルは、製品媒体(DVD-ROM)の以下のフォルダにあります。

<DVD-ROM>:\%citool%\LA\sample_install_SWDTLA.csv

A.3.2 パラメーター設定コマンド

パラメーターをカスタマイズする場合、パラメーター設定コマンドを利用してパラメーターを変更した応答ファイルを作成し、サイレントインストールに使用します。

コマンド名

<DVD-ROM>:\%citool%\LA\%dtkla_instparam.exe

形式

```
dtkla_instparam.exe -infile インストールパラメーターCSVファイルパス -outfile 応答ファイルパス
```

オプション

オプション	説明
-infile	インストールパラメーターCSVファイルを指定します。 ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。
-outfile	出力する応答ファイルを指定します。 ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。 指定したファイルが出力先に存在した場合、ファイルが置き換わります。

出力形式

復帰値が 0 の場合

正常終了です。

復帰値が 0 以外の場合

異常終了です。

コンソールに出力されるエラーメッセージをもとに対処してください。

実行例

インストールパラメーターCSVファイル“C:¥sample_install_SWDTLA.csv”にパラメーターを指定して、応答ファイル“C:¥temp¥swdtk_la_setup.iss”を作成します。

```
dtkla_instparam.exe -infile C:¥sample_install_SWDTLA.csv -outfile C:¥temp¥swdtk_la_setup.iss
```

A.3.3 パラメーター設定コマンドの出力メッセージ

パラメーター設定コマンドが出力するメッセージについて説明します。

インストールパラメーターのうち環境依存の制約事項は、本コマンドではチェックされません。そのため、本コマンドでエラーが出力されなくても、インストール時にエラーが発生する場合があります。

System error.

原因

システムエラーが発生しました。

対処

富士通技術員に連絡してください。

Argument error: Usage: dtkla_instparam -infile “input file path” -outfile “output file path”.

原因

必要な引数の形式が誤っています。

対処

コマンドの形式を確認してください。

Error: too long path specified(path must be less than 256 bytes).

原因

指定したファイルパスが長すぎます。

対処

ファイルパスを半角で255文字以下にしてください。

Error: file not exist.**原因**

指定したファイルが存在しません。

対処

指定したファイルパスが正しいか確認してください。

Error: failed to open file.**原因**

ファイルを開けませんでした。

対処

ファイルを使用中でないか、または、壊れていないか確認してください。

Error: failed to parse csv file.**原因**

CSVファイルの処理に失敗しました。

対処

CSVファイルの形式が正しいか確認してください。

Error: failed to encrypt password.**原因**

パスワードの暗号化に失敗しました。

対処

パスワードの指定形式が正しいか確認してください。

Error: can't find out parameter from input file.**原因**

-infileにて指定したファイルにパラメーターが入っていません。

対処

-infileに指定したファイルの内容を確認してください。

Error. DtkLaInstPath is invalid.**原因**

入力ファイルのDtkLaInstPathの指定内容が不正です。

対処

パラメーターに指定している内容を確認してください。

Error. DtkLaDBInstPath is invalid.**原因**

入力ファイルのDtkLaDBInstPathの指定内容が不正です。

対処

パラメーターに指定している内容を確認してください。

Error. DtkLaPort01/DtkLaPort02/DtkLaPort03 is invalid.**原因**

入力ファイルのDtkLaPort01/DtkLaPort02/DtkLaPort03のいずれかの指定内容が不正です。

対処

パラメーターに指定している内容を確認してください。

Error. DtkLaUserID is invalid.**原因**

入力ファイルのDtkLaUserIDの指定内容が不正です。

対処

パラメーターに指定している内容を確認してください。

Error. DtkLaUserPW is invalid.**原因**

入力ファイルのDtkLaUserPWの指定内容が不正です。

対処

パラメーターに指定している内容を確認してください。

Success: complete to edit Installation file.**意味**

インストールパラメーターファイルの編集に成功しました。

A.3.4 サイレントインストール用スクリプト

サイレントインストールに利用するスクリプトについて説明します。

スクリプト名

<DVD-ROM>:\\$citool\LA\%silentsetup.vbs

実行形式

応答ファイルを引数にして、cscriptで実行します。

<code>cscript silentsetup.vbs 応答ファイル名 [-l ログ格納フォルダ]</code>
--

オプション

オプション	説明
応答ファイル名 (必須)	ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。パス、ファイル名にはUNICODE文字を使用しないでください。
-l ログ格納フォルダ (省略可能)	インストールログを採取したい場合に指定します。存在するフォルダを、パス長が半角で200文字(全角で100文字)以内の絶対パスで指定してください。パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。パス、ファイル名にはUNICODE文字を使用しないでください。-lとログ格納フォルダの間には必ず空白を指定してください。



注意

ログアナライザサーバのサイレントインストールではパスワードを指定する必要があるため、デフォルト設定の応答ファイルが用意されていません。必ず応答ファイルを作成して、指定してください。

出力形式

復帰値が 0 の場合

正常終了です。

復帰値が 0 以外の場合

異常終了です。

コンソールに出力されるエラーメッセージをもとに対処してください。

実行例

応答ファイルに“C:¥temp¥swdtk_la_setup.iss”、ログ格納フォルダに“C:¥temp¥swdtk_la_log”を指定して、サイレントインストールを実行します。

```
cscript silentsetup.vbs C:¥temp¥swdtk_la_setup.iss -l C:¥temp¥swdtk_la_log
```

実行に必要な権限/実行環境

- ・ インストールする環境に管理者権限をもつユーザーで行ってください。
- ・ Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、またはWindows Server 2019の環境において、コマンドプロンプトで作業を行う場合は、コマンドプロンプトを[管理者として実行]で開いてください。

A.3.5 サイレントインストール用スクリプトの出力メッセージ

サイレントインストール用スクリプトが出力するメッセージについて説明します。

管理者権限を持つアカウントで実行して下さい。

原因

管理者権限のないアカウントでログインした場合に表示されます。

対処

管理者権限を持つアカウントで実行してください。

インストールに失敗しました。ErrorCode:XXX

可変情報

XXX=

2: CIR実行失敗

3: InstallShield実行中のエラー

原因

サイレントインストールに失敗しています。

対処

インストール環境を確認してください。

また、以下のログファイルを確認してください。

%WINDIR%¥dtlasvinst_message.log

A.4 中継サーバのサイレントインストール

Systemwalker Desktop Keeperの中継サーバのサイレントインストールで利用するファイル、コマンドおよびメッセージについて説明します。

A.4.1 インストールパラメーターCSVファイル

インストールパラメーターは、以下の形式でCSVファイルに指定します。

文字コード

文字コードは、Shift JISです。

フォーマット

```
install|Info, softwareName, [ソフトウェア名称]
install|Info, OS, [OS名]
install|Info, Version, [バージョン]
install|Info, Name, [ソフトウェアID]
parameters, [パラメーターのキー名], [パラメーターの値]
parameters, . . . , . . .
```



- installInfoパラメーターは、サンプルの内容から変更しないでください。
- parametersパラメーターは、1つ以上指定してください。
- 「|」で囲む場合は、該当する行の各項目を「|」で囲んでください。
- パラメーターおよびキー名に空白を含めないでください。
- 「|」で囲まれている項目の前後に空白を含めないでください。

parameters/パラメーター

parametersに設定可能なパラメーターは、以下のとおりです。

No.	分類	parameters/パラメーター		説明
1	中継サーバインストール先	キー名	DtkSdInstPath	必須
		<type>型	String	中継サーバをインストールするディレクトリを指定してください。
		値の変更可否	可	
		デフォルト値	C:¥Program Files (x86)¥Fujitsu ¥Systemwalker Desktop Keeper ¥SDSV	100文字以下の、Windows禁則文字を除く半角英数記号で指定してください。 32ビット版OSにインストールする場合は、以下に変更してください。 C:¥Program Files¥Fujitsu ¥Systemwalker Desktop Keeper ¥SDSV フォルダパスには半角の「,」「;」「#」が含まれないようにしてください。



インストールパラメーターCSVファイルのサンプルは、製品媒体(DVD-ROM)の以下のフォルダにあります。

<DVD-ROM>:%citool%SD%sample_install_SWDTKSD.csv

A.4.2 パラメーター設定コマンド

パラメーターをカスタマイズする場合、パラメーター設定コマンドを利用してパラメーターを変更した応答ファイルを作成し、サイレントインストールに使用します。

コマンド名

<DVD-ROM>:%citool%SD%dtksd_instparam.exe

形式

```
dtksd_instparam.exe -infile インストールパラメーターCSVファイルパス -outfile 応答ファイルパス
```

オプション

オプション	説明
-infile	インストールパラメーターCSVファイルを指定します。 ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。
-outfile	出力する応答ファイルを指定します。 ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「"」で囲んでください。 指定したファイルが出力先に存在した場合、ファイルが置き換わります。

出力形式

復帰値が 0 の場合

正常終了です。

復帰値が 0 以外の場合

異常終了です。

コンソールに出力されるエラーメッセージをもとに対処してください。

実行例

インストールパラメーターCSVファイル“C: %sample_install_SWDTKSD.csv”にパラメーターを指定して、応答ファイル“C:%temp%swdtk_sd_setup.iss”を作成します。

```
dtksd_instparam.exe -infile C:%sample_install_SWDTKSD.csv -outfile C:%temp%swdtk_sd_setup.iss
```

A.4.3 パラメーター設定コマンドの出力メッセージ

パラメーター設定コマンドが出力するメッセージについて説明します。

インストールパラメーターのうち環境依存の制約事項は、本コマンドではチェックされません。そのため、本コマンドでエラーが出力されなくても、インストール時にエラーが発生する場合があります。

System error.

原因

システムエラーが発生しました。

対処

富士通技術員に連絡してください。

Argument error: Usage: dtksd_instparam -infile “input file path” -outfile “output file path”.**原因**

必要な引数の形式が誤っています。

対処

コマンドの形式を確認してください。

Error: too long path specified(path must be less than 256 bytes).**原因**

指定したファイルパスが長すぎます。

対処

ファイルパスを半角で255文字以下にしてください。

Error: file not exist.**原因**

指定したファイルが存在しません。

対処

指定したファイルパスが正しいか確認してください。

Error: failed to open file.**原因**

ファイルを開けませんでした。

対処

ファイルを使用中でないか、または、壊れていないか確認してください。

Error: failed to parse csv file.**原因**

CSVファイルの処理に失敗しました。

対処

CSVファイルの形式が正しいか確認してください。

Error: can't find out parameter from input file.**原因**

-infileにて指定したファイルにパラメーターが入っていません。

対処

-infileに指定したファイルの内容を確認してください。

Error. DtkSdInstPath is invalid.**原因**

入力ファイルのDtkSdInstPathの指定内容が不正です。

対処

パラメーターに指定している内容を確認してください。

Success: complete to edit Installation file.

意味

インストールパラメーターファイルの編集に成功しました。

A.4.4 サイレントインストール用スクリプト

サイレントインストールに利用するスクリプトについて説明します。

スクリプト名

<DVD-ROM>:\\$citool\%SD%\silentsetup.vbs

実行形式

応答ファイルを引数にして、cscriptで実行します。

```
cscript silentsetup.vbs [応答ファイル名] [-l ログ格納フォルダ]
```

オプション

オプション	説明
応答ファイル名 (省略可能)	セットアップ時に用いるパラメーターをデフォルト値から変更したい場合に指定します。ファイルはパス長が半角で255文字(全角で127文字)以内の絶対パスで指定し、パスに空白を含む場合は「 」で囲んでください。パス、ファイル名にはUNICODE文字を使用しないでください。省略した場合は、すべてのパラメーターにデフォルト値が使用されます。
-l ログ格納フォルダ (省略可能)	インストールログを採取したい場合に指定します。存在するフォルダを、パス長が半角で200文字(全角で100文字)以内の絶対パスで指定してください。パスに空白を含む場合は「 」で囲んでください。パス、ファイル名にはUNICODE文字を使用しないでください。-lとログ格納フォルダの間には必ず空白を指定してください。

出力形式

復帰値が 0 の場合

正常終了です。

復帰値が 0 以外の場合

異常終了です。

コンソールに出力されるエラーメッセージをもとに対処してください。

実行例

応答ファイルに“C:\%temp%\swdtk_sd_setup.iss”、ログ格納フォルダに“C:\%temp%\swdtk_sd_log”を指定してサイレントインストールを実行します。

```
cscript silentsetup.vbs C:\%temp%\swdtk_sd_setup.iss -l C:\%temp%\swdtk_sd_log
```

実行に必要な権限/実行環境

- ・ インストールする環境に管理者権限をもつユーザーで行ってください。
- ・ Windows Server 2008、Windows Server 2012、Windows Server 2016、またはWindows Server 2019の環境において、コマンドプロンプトで作業を行う場合は、コマンドプロンプトを[管理者として実行]で開いてください。

A.4.5 サイレントインストール用スクリプトの出力メッセージ

サイレントインストール用スクリプトが出力するメッセージについて説明します。

管理者権限を持つアカウントで実行して下さい。

原因

管理者権限のないアカウントでログインした場合には表示されます。

対処

管理者権限を持つアカウントで実行してください。

インストールに失敗しました。ErrorCode:XXX

可変情報

XXX=

2: CIR実行失敗

3: InstallShield実行中のエラー

原因

サイレントインストールに失敗しています。

対処

インストール環境を確認してください。

また、以下のログファイルを確認してください。

%WINDIR%\%dtksdsvinst_message.log